

治療痛いからやだっ

JKSH

2005年11月8日

治療痛いからやだっ

目 次

治療痛いからやだっ

治療痛いからやだっ！！－舞依の場合	5
-------------------------	---

1. うららかな春の日
2. 紹介状
3. リラックス歯科外来
4. 治療見学
5. 初治療
6. 大暴れ
7. 大泣き
8. すっぱかし
9. 強制連行

歯科衛生士	137
-------------	-----

休日急患歯科診療所	187
-----------------	-----

キャンパス見学会	211
----------------	-----

泣くのは嫌、でも治療はもっと嫌	235
-----------------------	-----

カルテ	279
-----------	-----

治療痛いからやだっ

治療痛いからやだっ！！－舞依の場合

1. うららかな春の日

今日は4月27日。うららかな春の日の午後。桜はもう散ってしまっただが、木々の淡い緑は日に日に濃さを増してきている。風もどこかあまやかで、ときどき肌寒さを感じるが、4月の終わりなのにもう薫風といっていいようだ。町は穏やかに時を刻んでいる……。

だがこの町のいっかくに、そんな町の印象にそぐわないかのようになちょっとした騒動が起こっていた。

そこは、純姫女子学園から500mほどの距離にある奥田歯科医院の前である。純姫女子学園中学の制服を着た女の子が母親らしき人に手を引っぱられて奥田歯科医院の方向にやって来ていたが、女の子は足を突っ張って歯医者の方角に行くまいとしている。それでも母親はお構いなしに手を引っぱる。

奥田歯科医院の玄関先で、女の子はとうとうしゃがみ込んでしまった。歯医者に入るのをしゃがんで抵抗している。目にはいっぱい涙をため、泣いている。

「舞依、いい加減になさい！！ こっちに来なさい」

「嫌だっ！！ コワイ！！ コワイ！！」

「いいから、来なさい！！」

「やだっやだっやだっ！！ 歯医者さんやだっ！！」

「やだっやだっやだっ！！ 治療痛いからやだっ！！」

「もうっ！！ この子ったら！！ 歯医者さん行かないと、虫歯治らないでしょ！！」

「イヤだっ！！ イヤだっ！！ ママ、許してえー！！ 行きたくないっ！！ ウウッ」

女の子の名前は、近野舞依といい、純姫女子学園中等部の2年生である。目がぱっちりとしていて、ツインテールの髪型のよく似合う、なか

なかかわいい女の子である。スタイルもよく純姫の中等部の制服である紺のセーラー服、赤のリボンネクタイ、チェックのプリーツスカートや紺のソックスがよく似合う。ついで紹介をしておくと、手を引っぱり叱っているのが、舞依の母親の仁美である。舞依は仁美に似ているようだ。仁美も女性としてのかわいらしさがにじみ出ている。

その様子は奥田歯科医院の待合室からも入り口のドア越しによく見えた。

舞依と母の仁美のやりとりに気づいた治療の順番待ちのひとりが、受付につげに行く。受付の女性は予約表を確認してうなずくと、診察室の中に伝えにいった。そう舞依は今日午後2時に予約の入っている患者なのだ。時計は午後1時50分を指している。

奥田歯科医院の院長の奥田真希は、歯科衛生士の石原紗季と女性患者の治療中だった。ちょうど、別の女性患者の治療をもうひとりの歯科医師である真希の妹の奥田麻帆が終えたところだった。歯科衛生士の長澤かすみは後かたづけをしている。

受付の女性は、麻帆先生に声をかける。

「麻帆、今日の2時に予約の入っている近野舞依さん、いま玄関先にいるんだけど、どうもいやがって入るまいとしているみたいなのよ。お母さんも連れてこようとしてらっしゃるようなんだけど……」

「わかったわ、母さん。かすみちゃん、一緒に来てくれる？」

「はい、先生」

「母さんもお願い。姉さん、それじゃ舞依ちゃんを連れてくるわ」舞依は今日が初診で、真希先生が診ることになっている。

「麻帆、よろしく願いするわ。私、まだかかると思うから、麻帆が診てあげて」

「わかりました、姉さん」

麻帆先生、かすみ、真希先生と麻帆先生のお母さんで待合室を抜け、玄関に向かう。舞依は、仁美に手を引っぱられているが、しがみこんで

抵抗している。顔は涙と汗にまみれている。

「うわあああーん、やだっ！！ やだっ！！」

そこへ麻帆先生たちがやってきた。

「近野舞依ちゃんね？ こんにちは、奥田麻帆といいます。舞依ちゃん、どうしたの？」

「舞依ちゃん、こんにちは。私は長澤かすみといいます。どうしてそんなに泣いてるのかな？ お姉ちゃんに教えてくれる？」麻帆先生とかすみは笑顔で舞依に話しかける。なんとか舞依をリラックスさせて、治療に向かわせようとした。しかし、舞依は泣きやまず、ただ首を横に振るばかり……。この状態が10分ほど続いたとき、

「しかたないわね」と麻帆先生がつぶやき、舞依の母である仁美に「お母さん、今日は治療どうされます？ 次に延期しましょうか？」と問いかけた。仁美は、

「先生、どうぞ診てやってください。この子の歯は、このままではダメになってしまいますから……。お願いします」と麻帆先生に答えた。麻帆先生はしばらく考えてから、かすみと目配せすると、

「お母さん、舞依ちゃんを私と衛生士のかすみちゃんですっこして連れて行こうと思いますが……。お母さんもお手伝いしていただけます？」と仁美に聞いた。

「はい、先生お願いします」

麻帆先生は、しゃがんで抵抗している舞依の腰と膝関節に手をまわし、いきなり抱え上げた。かすみと母の仁美が、舞依の腕を押さえる。舞依は、

「わああああーん、やだやだやだっ！！ 助けてえー！！ ママー！！ ママー！！ やだあー！！ やだあー！！ コワイよー！！」と泣き叫び、手足をパタパタしてあらんかぎりの抵抗をするが、おとな三人に抱えられては、抵抗できない。

そのまま麻帆先生、かすみ、仁美に抱えられて待合室をとおり、診察室のドアを真希先生と麻帆先生のお母さんが開け、中に入る。空いてい

る右から2番目のピンクのユニットを倒し、舞依を寝かせる。舞依はなおも

「ああああーん、ああああーん、エッエッ、わああああーん、ヤッ！！ ヤッ！！」と手足をパタパタさせて抵抗する。紺のプリーツスカートは捲れて全開し、かわいい白パンツが丸見えの状態である。紺のハイソックスをはいた足はユニットにたたきつけられている。真希先生の治療を受けていた女性患者は今治療が終わり口をゆすいでいたが、何ごとかと目を丸くしている。麻帆先生は、舞依を抑えながら、真希先生に、

「姉さん、ベルトしてもいい？」と聞く。

「あまり、したくはないんだけど……。しかたないわね。紗季ちゃん、ベルトお願い」

「はい、先生」紗季は拘束具であるベルトを取りに行く。その間も、麻帆先生、かすみ、母の仁美に抑えられながらも、舞依はこの状況から逃れようと必死で抵抗する。

「舞依ちゃん、ごめんねー。ちょっといたいけどがまんしてねー」と真希先生と紗季が舞依にベルトをつけ、治療台に拘束する。

「はああーん、あん、あん、いやっいやっいやっ！！」舞依はなおも抵抗するが、ベルトの次はかすみの手で口を開けさせられ、麻帆先生に開口器をはめられる。

あいかわらず真希先生、紗季、母の仁美は舞依のからだを抑えつけており、舞依は徐々に身動きがとれなくなる。ライトが点灯される。やがて麻帆先生は、舞依の口の中にデンタルミラーと探針をいれ、舞依の歯を診はじめる。

「かすみちゃん、カルテお願いね」

「はい、先生」

「うーん。これは……」麻帆先生は、思わず絶句する。そう舞依は、まだ14歳なのに、ほとんどの歯が虫歯に罹ってしまっていた。「ひどいわねえ……」声が小さくなってしまった。

「お母さん、どうしてこうなる前にはやく歯医者さんに連れて行かなかったんですか？」

「すみません、先生。この子がどうしてもいやがるもので……。つい、甘やかして……」

「まあ、いまさらいってもしかたないわね……。かすみちゃん」麻帆先生は気を取り直して、舞依の歯式を呼び上げていく。「左上から、7番C2、6番C3、5番C2、4番C2、3番C1、2番は……C2ね。1番C1、右へいって1番C2、2番C2、3番斜線、4番C1、5番斜線、6番C2、7番C2ね。次は左下からね。7番C2、6ばん……」麻帆先生は探針でインレーと歯との境目をカツカツと探る。

「エッエッ、んんうー」舞依が泣きながら、顔をしかめる。

「うーん、インレーの下から二次虫歯になってるわ。6番C3かな。……この状態じゃレントゲンも撮れないし……」

「まあ、とりあえず続けましょう。5番C2、4番C1、3番から右の2番まで斜線、3番C1、4番C2、5番C2、6番……あらあら、これはちょっと……」舞依の右下6番は小学校3年の時に神経治療を受けた歯なのだが、5年生の時にアンレーが取れてそのまま放置してあったため、もう残根状態となっている。

「6番C4ね。7番C3。以上よ。うーん、これはどこから……。うーん」麻帆先生は、思案している。

「エッエッエッ、はあんん、はん」舞依は泣き続けている。

「お母さん、この状態じゃ、舞依ちゃん、どの歯も痛いと思いますけど、特に痛む歯って、お母さんにいわれてますか？」

「さあ……。舞依は、いまやわらかいものしか食べられないですし……」仁美は申し訳なさそうにいう。

「姉さん……」

「そうねー……」と真希先生は舞依の口の中を診ながら、「んー……、下左右の6番と右下の7番から始めたらどうかしら？ どれもはやく手をうたないとダメだけど、いまいった歯は強く痛み出すかもしれない

し……、それにこの状態じゃ噛めないし……」といった。

麻帆先生は、「そうね。姉さんのいうとおりだわ」といい、仁美に向かって、「お母さん、まず右下の6番から、奥から2番目の歯ですけど、治療します。で、できればその隣の一番奥の7番の治療も始めたいと思います」と話す。

「はい、よろしくお願いします」

「かすみちゃん、シンマお願い」麻帆先生はかすみに麻酔注射の指示を出す。

「はい、先生」かすみは麻酔液の入ったカートリッジを装着した注射器を麻帆先生に渡した。

舞依は麻酔注射を見て、目を見開き、「イヤっ、イヤっ、いやだあー。うわあああーん。やだっやだっ、やだよおー。ああああーん、あーん、あーん。やめてやめてっー！！ ゆるしてえー！！ ママー、ママー、怖いよおー！！」と大声で泣き叫ぶ。

「舞依ちゃん、ごめんねー。ちょっとチクッつてするけど、がまんしようねー」麻帆先生がやさしく舞依に諭す。

「舞依ちゃん、大丈夫だから、ねっ。ちょっとだけがまんしょ、ねっ。すぐ済むから」かすみも懸命に舞依を励ます。

「舞依、がまんしなさい。このままじゃ、歯がなくなっちゃうよ」母の仁美も舞依を諭す。

麻帆先生は、開口器で閉じられなくされている舞依の口の中に麻酔注射を挿入する。舞依の右下6番の歯茎に注射針が刺さる。

「ん、んっ、痛あーいつ、痛い、痛い、痛あーいつ、痛いよーっ！！ うわあああーん」

舞依の歯茎に薬液がゆっくりと注入される。そのあいだも舞依は泣いている。舞依のからだはベルトで拘束され、母の仁美と紗季に抑えられている。それでも舞依はあたまを動かして逃れようとするので、真希先生が確保している。麻帆先生はかすみからあと2本麻酔注射を受け取り、舞依の歯茎に注射した。舞依の顔は涙に濡れている。

麻酔が効くまで5分ほど待つ。

そのあいだ、麻帆先生はテーブルにあるバーチャージャーからバーを選び、エアタービンに装着されているハンドピースのドリルの先端につける。

かすみはバキュームを舞依の口に挿入する。麻帆先生は舞依の右の歯茎と頬の間にふくみ綿を入れ、治療のスペースを確保する。

「舞依ちゃん、ちょっと痛いかもしれないけど、がまんしようねー」と麻帆先生はやさしくいう。

「舞依ちゃあーん、痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」かすみもやさしく言葉をかける。泣き疲れた舞依の目からふたたび涙が溢れ出す。

「コワイ！ コワイ！」舞依の目は明らかに怯えている。

麻帆先生はデンタルミラーとタービンを持って、舞依の口に挿入する。ドリルが舞依のう蝕した右下の6歳臼歯にあてられ、虫歯を削り始める。

「あっあっ」

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュ、キュ、キュイイイーーン。キュイーン。キイーン。

コオー、コオオオー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポーーン。

「ふわあああああーん、あああああーん、あーん。痛いっ！！ 痛いっ！！ 痛いっ！！ うわああーん」ふたたび舞依は、泣き叫び、抑えつけられながらも、ひざを曲げようとし、紺のハイソックスをはいた足をパタパタする。またもやチェックのプリーツスカートは捲れ上がり、かわいい白パンツは丸見えになる。

「舞依ちゃん、足動かしちゃダメー。舞依ちゃん、パンツみえちゃてるよ、はずかしいなあ治療中は、おとなしくしようね」かすみは、舞依にやさしく注意する。が、舞依は治療の痛みでそれどころではない。

キイイユイーン。

「痛いー！」舞依の目から、涙ぽろぽろ～と流れた。

舞依はなんとかこの痛みから逃れようと、真希先生、紗季、仁美に抑

えられているにもかかわらず、あらぬ限りの抵抗をする。

「あっ！」真希先生の声があがる。舞依はあたまをおおきく動かしてしまった。ヘッドレストからあたまが逸れる。かすみの持つバキュームが舞依の口から外れる。

「危ない！」麻帆先生とかすみが叫ぶ。

キュウウウーーン。

タービンが止まった。舞依の虫歯を削っていたドリルがあやうく、舞依の頬を傷つけてしまうところだったが、麻帆先生が巧みにタービンを止めたおかげで、傷をつけることはなかった。

「あああああーん、エッ、エッ」舞依は泣きやまない。舞依が泣きやむのを待って、麻帆先生はやさしく聞く。

「舞依ちゃん、そんなに治療、嫌？」

「くすん」舞依はこくりと頷く。

「でもねー、舞依ちゃん。このままじゃ、舞依ちゃんの歯なくなっちゃうよ？」

舞依の目からまた涙が溢れ出す。舞依も、“このままじゃいけない、この虫歯だらけの歯を何とかしたい、治療しなきゃ……”と思っ
てはいるのだが、小さい頃受けた虫歯治療の痛さと怖さがトラウマとなっ
て、治療を受け入れられないのだ。麻帆先生は、真希先生、かすみ、紗季、それに仁美とひそひそと相談をして、

「……しかたないわねー。舞依ちゃん、今日の治療はおしまいにします。でも、削った歯をそのままにはしておけないから、もうちょっとがまんできるかな？」

「ヒック、ヒック、えっえっ、くすん」舞依は泣きながら頷く。

麻帆先生は、手早く舞依の6歳臼歯に処置を施す。シリンジでエアーをシュッシュッとかける。「ううんーん」舞依が声をあげる。次に患歯をヨードグリセリンで消毒し、ガーゼをヨードグリセリンに浸したものを詰め、セメントで仮封をした。かすみが、舞依の口から開口器を外した。ユニットが起き上がり、ライトが消される。同時に舞依のからだか

らベルトも外される。

「舞依ちゃん、お口ゆすいでいいわよ」舞依は、クチュクチュと口をゆすいだ。舞依の涙に濡れた頬をかすみやさしくタオルで拭く。舞依の頬には涙の跡が残っていたが、治療から解放されて泣きやんでいた。すこし落ち着いたようだ。

「舞依ちゃん、治療怖い？」

舞依は、「うん」と小さく返事をする。

「舞依ちゃん、前に歯の治療で怖い目にあったのかな？」麻帆先生が、やさしく聞くが、舞依は「……」と黙ったまま……。仁美が、「舞依、ちゃんとお答えしなさい」と促すが、口を開かない。

“話さなきゃ……。でも恥ずかしい……”

「お母さん」と麻帆先生は制し、「舞依ちゃん、いいたくなければ、いわなくていいのよ」といって、

「そのかわり、今度の治療、舞依ちゃん、ひとりで来てくれないかなあ……」と聞く。

舞依は、怯えたように目を見開く。

「……舞依ちゃん、舞依ちゃんもほんとは虫歯をなんとかしたいと思っているんじゃない？」

舞依は、小さく頷く。

「そう、じゃあ、ちょっとだけ勇気をだしてひとりで来てみない？ 舞依ちゃんが治療怖かったらすぐ止めるし……。明日、待ってるから……。何時でもいいわ。舞依ちゃんが来られなくても、先生、叱ったりしないから、ねっ」

「舞依ちゃん、そうしようよ、ねっ」真希先生、かすみ、紗季もやさしくいう。

“歯医者さんコワイ……。でも、麻帆先生や麻帆先生のお姉さんなら、ひょっとしたら、治療できるかもしれない……” 舞依は思っていたが、深く心に刻まれたトラウマはなかなか消えなかった……。そして歯科検診の日を思い出すのだった。

舞依の通う私立純姫女子学園は中等部、高等部、短大を擁するお嬢様学校である。

1週間前ほどの4月18日。この日は純姫女子学園の歯科検診の日である。今年は『よい歯の日』に歯科検診が行われる最初の年である。昨年までは6月4日の『虫歯予防デー』から始まる『歯の衛生週間』の間に行われていたのだが、生徒たちの歯の衛生の向上と虫歯予防、虫歯の早期発見、早期治療により一層の力を入れるため、時期を早めたのだ。

2時間目。授業は休みとなり、3時間目にかけて中等部全員が歯科検診を受ける。高等部は3時間目から4時間目にかけて歯科検診を受ける。これで中等部、高等部全員が検診を終えるというわけだ。歯科検診の会場の体育館に女生徒が次々集まってきた……。

“はあ〜。どうしよう……。コワイよ、コワイよ〜。もうすぐ順番来ちゃう……” 舞依はいまにも泣きそうな顔で、胸がドキドキしていた。クラスメイトも嫌な顔をして歯科検診を受けていたが、舞依の恐怖心はそれどころではなかった。歯医者の前を通るだけで、小さい頃受けた虫歯治療の怖さと痛さが思い出される。去年の秋、舞依の家と純姫女子学園を結ぶ通学路の途中、純姫女子学園から500mほどのところに奥田歯科医院が開業したが、舞依は、奥田歯科医院の前を通らなくて済むように、わざわざ遠回りして通学しているほどだった。それほど歯医者が嫌いだった。

「はい、次、近野舞依さんだね。……どうしたの？ はやく座って」 歯科医がデンタルミラーと探針を手に促す。

「はやく、かけなさい」 助手も急かす。

舞依は、恐怖のあまり、ひざがガクガクして突っ立ったままだった。

「うっ、ふん、ふん、くすん、エッ、エッ」とうとう舞依は泣き出してしまった。

「どうしたの？ 何にもしないよ……。診るだけだから」歯科医がやさしく促すが、舞依は怖くて座れない。

「舞依、何で泣くの？」「舞依、歯医者さん、何もしないって行ってるし……」「わたしも嫌だったけど、大丈夫だったよ」と口々にクラスメイトもざわめき出す。

「どうしたの？」担任の黒川恵梨子先生がさわぎを聞きつけ、やって来た。

「あっ、先生、舞依が、近野さんが泣き出しちゃったんです」「そうなんです」クラスメイトが口々に黒川先生にうったえる。

「近野さん……、舞依ちゃん、どうしたの？ どこか痛いの？」黒川先生がやさしく聞く。舞依は、“歯科検診が怖いなんて恥ずかしくていえない”と思っていた。黒川先生は、そんな舞依の表情をのぞき見て、すべてを察した。黒川先生は、受け持つ女生徒たちの1年のときの身体検査にひととおり目を通していたが、当然その中には1年のときの歯科検診の結果も含まれていて、近野舞依の歯の状態もよく知っていた。舞依の歯は虫歯だらけで、ボロボロだった。そして、歯科検診のいやなことも、虫歯治療の痛さも黒川先生はよくわかっていた。黒川先生も歯には苦勞のしどうしだったからだ。

黒川先生は保健の先生と相談して、あとで保健室で、歯科医に舞依を別に検診してもらうことにした。

全校生徒の歯科検診のあと……。保健室。

舞依はいすに腰掛けている。そばには黒川先生がいて、ふたたび泣き出しそうな舞依をやさしく気遣いながら見守っている。やがて、歯科医が助手とともに保健室にやって来た。保健の先生もいっしょだ。歯科医は舞依の前に座ると、

「近野さん、大丈夫だから。何もしないから……。診るだけ、診るだけだから」といって、口を開けるように促した。助手がライトを照らす。舞依はすでに半べそだったが、黒川先生が、

「舞依ちゃん、先生がついててあげるから、ねっ。大丈夫だから」と懸命に励ましてくれる。

舞依は、“口開けなきゃ、がんばんなきゃ”と思っているが、なかなか口を開けることができない。しばらく逡巡したのち、ようやく歯科医に向けて小さく口を開ける。歯科医はデンタルミラーと探針を舞依の口の中に入れ、デンタルミラーを使い大きく口をあけさせる。

「ほほうー。うーん。これは……」と歯科医はひとことうなり、やがて歯式を呼び上げる。助手は歯式を書き取ってゆく。

「左上から……。7番C2、6番C3、5番C2、4番C2、3番C1、2番C2、1番C1、右へって1番C1、2番C1、3番斜線、4番C1、5番斜線、6番C2、7番C2ね……」

舞依は、歯科医が歯式を呼び上げるたびに、“あん、ああん、虫歯だらけで恥ずかしい……”と耳たぶまで真っ赤にして、目に涙を浮かべている。

「次は左下ね。7番C2、6番C2。二次虫歯だね。つぎ、5番C2、4番C1、3番から右の2番まで斜線、3番C1、4番C2、5番C2、6番C4、7番C3。以上です」歯科医がデンタルミラーと探針を置き、舞依にいった。

「近野さん、どうして歯医者さん行かないの？ ほとんどの歯が虫歯になってるよ」

舞依は、黙ってうつむいている。涙をこらえているのだ。

「近野さん、歯科検診の結果を渡す際に、歯垢チェックとブラッシング指導を受けてもらうのが純姫女子の決まりだけど、近野さんの場合はすぐ歯医者に行って治療してもらわないと……。先生からも受診を勧めてください」と歯科医がいう。

「はい……」黒川先生は答えたが、自分の経験から舞依のつらさがわかるだけに、黒川先生もつらかった。

舞依は、当然のことだが、歯科検診の結果、『治療勧告書』を黒川先生

から渡された。『治療勧告書』にはおなじみの虫歯治療のお勧めの文章が書かれてあり、舞依の歯式がのっていたが、そのほかに歯科検診の評価のところには『今すぐ歯医者に行く必要有り』というハンコが押されていた。

黒川先生は、舞依を職員室に呼んでいた。歯科検診からすでに1週間がたっていた。舞依はブラッシング指導と歯垢チェックをいやがり、指導の翌日に、またもやひとりだけで保健の先生にブラッシング指導を受けたのだ。

「近野さん、……よっぽど歯医者さんが怖いよね……」

舞依はこくりと頷く。

「でも、近野さん、近野さんの歯はすぐに治療しなきゃいけないの。わかるでしょ？」

舞依は、しょんぼりとしている。

「近野さんが治療いやなのわかるけど……。先生、近野さんのお母さんに、近野さんが歯の治療に行ってもらおうよう、お願いしなくちゃならないの」

こうして、黒川先生から舞依の母親である仁美に電話が入り、舞依は母親の仁美に無理矢理歯医者に連れて行かれることになったのだった。

舞依は、仁美が会計を済ますのをソファでぼんやりと見ていた。そして、“麻帆先生と約束したけど、あしたひとりで来られるかなあ……。やっぱり、コワイ……”と明日のことを考え、また涙がにじみ出てくるのを感じていた。

2. 紹介状

翌日の朝。母の仁美は黒川先生に電話をしている。

「もしもし、純姫女子学園ですか……。中等部の黒川先生をお願いします……あつ、先生、おはようございます。いつもお世話になっております。近野舞依の母の仁美でございます。先生、早速なんですけど……。きのう、舞依を奥田歯科医院に連れて行ったんですが……。それが泣いていやがって治療にならず……。はい。それで、きのう奥田先生とひとりで先生のところへ行くという約束をしまして……。で、時間は決まっていらないんですけど、午前中に行かせようかと……。はい、それで午前はお休みをいただきたいんですが……。はい、無理いってすみません……。では、よろしくお願いいたします。ごめんくださいませ」

そこへ、2階から制服に着替えた舞依が降りてきた。

「舞依、いま学校に電話して、午前中お休みをもらったから……。午前中に歯医者さんに行きなさい」

「えっ、イヤ!!」

「イヤッじゃありません。きのう奥田先生と約束したんでしょ。行きなさい」

「でも……」

「でもじゃありません」

「ママー、私怖い……。ひとりじゃいけない……。ママ、ついてきて。お願い」

「ん、もう。しょうがないわねー」

しばらく、舞依は奥田歯科医院に行くことを抵抗していたが、結局、母の仁美に連れられて、ふたたび奥田歯科医院に向かった。

舞依と仁美が奥田歯科医院の自動ドアのマットを踏み、中にはいると、歯医者独特の消毒液の匂いがする。匂いを嗅いだけで、舞依の顔色が青ざめる。3人ほどの人が待っている。時折、歯を削るタービンの音がある。そのたび、舞依はぎくつとする。仁美が受付を済ませる。時計を見ると午前10時過ぎだ。ふたりはソファーにかけ。

舞依は、少し震えている。

すぐに診察室のドアが開き、紗季が顔を出した。

「近野さぁーん、近野舞依ちゃぁーん、診察室にお入り下さい」

「舞依、呼ばれたわよ」

「ママー、わたしコワイ……。お願い、ついてきて」舞依が懇願するように仁美を見る。

「もう、しょうがないわねー」とソファから舞依を立たせ、仁美がいっしょに診察室のドアのところについていくと、診察室の中に顔を向けていた紗季が、こちらに向き直り、

「お母さんは、待合室で待っててください……。舞依ちゃん、大丈夫よねー。ひとりで入れるよねー。きのう先生と約束したんだもんねー」という。

舞依はみるみる怯えたが、肩を落とし、こくりと頷いた。

「大丈夫です。おまかせください、お母さん。真希先生のご指示ですから……」と紗季は仁美の目をみてまっすぐにいう。

「はい、舞依をよろしくお願いします」仁美は紗季にあたまを下げた。

「はい、これ持って」仁美は舞依にハンドタオルを渡してくれた。

診察室にはいると、きのう舞依の治療を担当してくれた麻帆先生とかすみは女性の患者を治療している。舞依の嫌いな歯を削るタービンの音がキューーン、キューーンとひびいている。

「舞依ちゃん、ここへすわってくれる？」紗季がイエローの歯科ユニットを指差す。舞依は目に涙をいっぱいためて震えていたが、紗季にやさしく「大丈夫だよ」と励まされ、必死の思いでユニットに腰掛けた。紗季が、

「はぁーい、エプロンしようねー」と水色の歯科エプロンを舞依の胸元につける。

“コワイ！！ コワイ！！ もうおうち帰りたい……”と舞依は怖がっていた。舞依の周りには数々の治療器具が並んでいる。正面には无影灯、右側にはバキュームや衛生土用のシリンジ、注水器、うがいのコッ

プに洗口台。そこからはアームがのび、テーブルにつながっている。テーブルにはデンタルミラーや探針など基本4点セットとストッパーがのったトレイ、濃茶色、濃青色や濃緑色の薬の小瓶、タービンにつけるハンドピース、ドリルの先端につけるバーがたくさん並んでいるバーチャージャーが置いてあり、そのテーブルには長いホースをつけたエアタービンの類がたくさんかかっている。ユニットの横には麻酔カートリッジと注射器、舞依のものらしいカルテ、それにタオルがのっているワゴンがおいてある。

「舞依ちゃん、先生呼んでくるわね」紗季が真希先生を呼びに行った。
“やだっやだっ！！ あーん、治療受けたくないよ〜……。あーん” 舞依はもはや泣き出しそうだった。そのときスリッパの音が聞こえた。

「舞依ちゃん、こんにちわ。よく来てくれたわねー。えらい、えらい。今日は麻帆先生が他の患者さんを治療しているから、私が舞依ちゃんを診るわねー。私は、奥田真希といいます。麻帆の姉なの。よろしくね。で、こっちが舞依ちゃんの治療のお手伝いをしてくれる歯科衛生士の石原紗季ちゃん」

「舞依ちゃん、石原紗季です。真希先生はやさしいから、怖くないよ。治療、痛くないよ。私も一生懸命お手伝いするから、がんばろ、ねっ」紗季が舞依の不安を和らげるように、いっぱい笑顔をつくって微笑む。
「はい……。よろしくお願いします……」舞依は不安で声が震えている。

「大丈夫。心配しないで」真希先生が、にっこりとやさしくいう。「きのうはごめんね。ベルトで縛ったり、抑えつけて怖かったでしょう？ 今日、ゼッタイ舞依ちゃんが怖くないように治療するからね」

「じゃあ、きのうのところから治療しよっか。きのうの歯は削るのが途中になっちゃったから、今日もう少し削って、そのあと神経の治療をします」

神経の治療と聞いて、舞依の顔がますます曇る。小学校3年の時に麻

酔注射をいやがって麻酔なしに削られ、そのあと4人がかりで抑えつけられて、神経の治療を受けた記憶がよみがえる。

“神経の治療って……。いやっいやっ！！ 神経の治療はいやっ！！”
舞依の目にみるみる涙が溢れてくる。治療の開始は刻一刻と迫る。ユニットが倒れていく。恐怖でハンドタオルを強く握りしめている。

「紗季ちゃん、シンマお願い」真希先生が紗季に指示を出す。

「はい、先生」紗季は麻酔カートリッジを装着した注射器を真希先生に手渡す。真希先生がデンタルミラーと麻酔注射を構え、紗季はライトを点け、舞依の口に无影灯の光をあてる。

「舞依ちゃん、お口開けてアーン」真希先生が促す。

「舞依ちゃん、怖くないよー。大丈夫だから、はぁーい、ア～ンとお口開けようねー」紗季が笑顔で励ます。

しかし、舞依は、真希先生が手に持つデンタルミラーの銀色と麻酔注射の針がきらりと光るのを見て、恐怖心がわき上がり、小さい頃の歯科治療の記憶がよみがえってくる。

「どうしたの？ 痛くないからね～、大きくア～ンしようねー」紗季がやさしくいうのを聞いて、舞依は“がんばらなきゃ、がまんしなきゃ……”と思うのだが、涙は溢れだし、とうとう泣き出してしまった。

「ふん、ふん、エッ、エッ、ぐすん、くすん、わああああーん、ふええええーん」

「舞依ちゃん、どうしたの？」真希先生がデンタルミラーと注射器をトレイにおいて、舞依に尋ねるが、舞依は泣いて首を横に振るばかり……。麻帆先生、かすみも一瞬治療の手を止め、心配そうだ。

「ワァーン、ワァァァァーん」

「治療いやなの？ 先生、舞依ちゃんと約束したから絶対痛くしないよ」真希先生がやさしくいうが、舞依はシクシクと泣いている。

「舞依ちゃん、もしかして歯医者さんに、怖い思い出があるんじゃない？」と真希先生が、舞依に尋ねる。

舞依は、泣いたままこくりと頷く。

「……やっぱり……。舞依ちゃん、あっち行って、先生とお話ししようか？ 先生になぜ舞依ちゃんが歯医者さん怖いのか教えてくれないかなあ」真希先生が、やさしく舞依を諭す。舞依はしばらく逡巡してから、小さく頷いた。真希先生はユニットのペダルを踏んだ。歯科ユニットが起き上がる。

「紗季ちゃん、私、舞依ちゃんとお話しするわ。エプロン取ってあげて……。それから、待っている患者さんは悪いんだけど、麻帆にお願いできる？」真希先生は、隣のユニットにいる麻帆先生にいった。

「わかったわ、姉さん。ほかの患者さんは私が責任をもって診ます」麻帆先生が答える。

「ありがと」

紗季が、舞依から歯科エプロンを外してくれた。スリッパを整えてくれる。

「さっ、こっちよ」真希先生は、舞依を診療室の片隅にあるデスクの方に連れて行った。

デスクが2つ並んでいる。ひとつは麻帆先生のものだろう。デスクの上には書類や『歯科保存学概論』、『歯科用医薬品ハンドブック』、『歯科材料総覧』、『歯科症例アトラス』など難しそうで、舞依にとっては見るからにこわそうな本が並んでいる。電話が2つのデスクの間に1台ある。

真希先生は自分の椅子に腰掛け、麻帆先生のものであろう椅子を、舞依にすすめた。

「さあ、舞依ちゃん座って」

舞依は、しょんぼりと座った。“私、どうしても治療受けられない……。虫歯だらけの歯を治したいと思ってるのに……。でも、小さい頃の……” あたまの中で小さいときに受けた怖かった治療の思い出がぐるぐる回っていた。

「舞依ちゃん……」

真希先生の声に、舞依はハッとして顔を上げる。舞依の頬は、涙に濡れた跡でいっぱいだ。

「よかったら、舞依ちゃんが何で歯医者さん怖いのか、先生にわけ教えて……、ねっ」真希先生は優しさに満ちた目で、舞依の目をまっすぐに見ていう。

舞依は、“真希先生なら、舞依の歯医者さんコワイって気持ちわかってくれるかも……。でも……。いままで恥ずかしくて誰にもいえなかったんだし……。ううん、真希先生なら、きっと笑わずに聞いてくれる……。でも……”と心の中で葛藤していたが、逡巡しながらも決心し、ポツリポツリと、小さい頃受けた歯科治療を、小さな声で真希先生に話し始めた。

舞依が初めて歯医者に行ったのは、5歳の時だった。

舞依は、全部の歯が虫歯になってしまい、前歯はみそっ歯、奥歯も大きな穴が開き、痛くて痛くて泣き出してしまい、母の仁美に無理矢理歯科医院に連れて行かれたのだ。

舞依が連れて行かれた歯医者とは、とても怖く、5歳の舞依が泣き喚くを見て、レストレーナーで舞依のからだをぐるぐる巻きにし、その上ベルトで治療台に拘束した。そのときレストレーナーの被せ方が雑で制服のスカートを全開で縛られて、舞依が「パンツ見えてる。恥ずかしいからスカート戻して」といっているのに、歯医者は「治療がイヤだからってわがままいうんじゃない！！」と怒鳴りつけ、いやがる舞依の口に開口器を無理矢理取り付け、治療を行ったのだ。麻酔注射を何本も打ち、その痛さ、恥ずかしさに舞依は大泣きした。するとその歯医者は「うるさい！！泣くな！！だまれ！！」と舞依を叱りとばし、またもや無理矢理ドリルで舞依の虫歯を容赦なく削りだしたのだ。その歯医者は外から丸見えの構造で、舞依はスゴイ恥ずかしい格好で1時間くらい治療され、神経を削られた。舞依は神経の治療中の凄い痛みに、「痛い！痛い！！」と泣くと、歯医者は「もうすぐ終わる！我慢しろ！」と叱りとばす。舞依は神経の治療の痛さと恐怖で、おしっこを漏らしてしまい、

それを見た歯医者は、舞依のスカートとパンツを脱がせ、衛生士に後始末をさせたあと、なおもドリルで舞依の虫歯を削った。舞依は前にも増して泣いたが、その歯医者は「泣いたってダメだ！！今日は泣いたからって治療は止めないからな！！虫歯をつくったのは、おまえなんだから。誰が悪いかわかるか？なんで痛い治療されるかわかるか？全部お前がちゃんと歯磨きしないからだ！！泣くともっと痛くするぞ！！」と舞依をおどしたのだ。そして、治療が終わってから、舞依のおしりをおもいっきりひっぱたいた。このとき舞依の心に歯医者への恐怖感が植え付けられたのだ。

それ以来、舞依は幼稚園や小学校の歯科検診で虫歯が指摘されても、歯医者に行くのをいやがり、仁美もそんなにいやがるのならと、ついつい舞依を甘やかし、歯医者に連れて行かなかった。舞依は6歳臼歯など永久歯が生え始めていたが、乳歯の虫歯を放置している状態だったので、生えてきたばかりの弱い永久歯も虫歯に罹り、とうとう小学校3年の時に右下の6番が痛み出したのだ。舞依は、「痛い、痛いっ！！どうしよう……やだっやだっ！！歯医者さん行くのやだっ！！」と思っていたが、虫歯の痛みにながまんしきれなくなり、シクシクと泣いていたら、母の仁美に虫歯が痛むのを見つけられてしまい、まともや無理矢理歯医者に連れて行かれた。

仁美は、5歳の時とは違う歯医者に舞依を連れて行ったが、怖い歯医者に勇気を振り絞って行った舞依をさらに怖がらせるようなことを、その歯医者はおこなってしまった。

「舞依ちゃん、お口開けよー。痛くないから。はい、アーン」歯医者は麻酔注射を構えてやさしくいったが、舞依は5歳の時の麻酔注射の痛みと恐怖がよみがえり、口を開けられない。しばらく歯医者や歯科衛生士が舞依を説得するが、舞依は口を堅く閉じたままだった。歯医者はしかたないという表情をつくり、衛生士と頷きあって、舞依のからだをベルトで治療台に縛りつけた。さらにもうひとつの舞依の恐怖の的である開

口器を、衛生士に指示して無理矢理舞依の口を開かせ、つけさせた。そして、衛生士4人に舞依のからだを抑えつけるように指示し、舞依の痛む虫歯を、麻酔なしで容赦なくドリルで削ったのだ。その歯は神経の治療も行わなければならない、それでも麻酔注射をいやがる舞依に、今度は麻酔なしで神経の治療を行ったのだ。舞依はそのときの痛みと怖さが忘れられず、それからは虫歯が痛くても痛み止めを飲んでがまんし、二度と歯医者に行こうとはしなかった。

舞依が、泣きながら小学校に上がる前の5歳の時と小学校3年の頃に受けたつらい治療について、真希先生に話し終わると、真希先生は、「……舞依ちゃん、よく話してくれたわねー。さぞ、つらかったでしょうね。きのうは、先生たち、知らなかったからベルトで縛ったり、無理矢理開口器をつけたりして、ほんとにごめんね」と同情し、「舞依ちゃん、舞依ちゃんみたいな人のために、私の母校の大学の附属病院にリラックス歯科外来っていうのがあるのよ。そこにいって見ない？」といった。

舞依は、大学病院と聞いてまた怖くなったが、真希先生のやさしさに満ちた真剣な眼差しを見て、こっくりと頷いた。真希先生にひととおりトラウマを聞いてもらって、少し落ち着いたようだ。

「じゃあ、電話するわね」と真希先生は、デスクの上の受話器をあげた……。

「もしもし、皓歯大学ですか？……。こちら、奥田歯科医院の奥田真希ともうしますが……。歯学部附属病院のリラックス歯科外来部長の後藤先生、お願いします……。もしもし、リラックス歯科外来ですか？……。奥田歯科医院の奥田ともうしますが、後藤先生いらっしゃいますか？……。はい、後藤先生は研究室にいらっしゃるんですか……。はい、お願いできますか……。もしもし、歯科保存学講座

う蝕病理学教室ですか、後藤先生をお願いしたいんですが……。はい、奥田歯科医院の奥田真希ともうします……。あっ、教授ご無沙汰しています。真希です。

（もしもし、後藤ですが……。おおっ、真希君か。どうだ、元気にやっとなるか。たまには、麻帆君とふたりで研究室に顔見せろよー。いやあー……。学部生のころ、君たちは優秀だったから、研究室に残ってくれるかと思ってたんだがなあー……。あの、君と麻帆君の君たちふたりの研究論文『う蝕病理に関する仮説ーう蝕病原菌の活動性と口内環境』、あれはよかったなあ……。それで、今日はどうしたんだ？）

いま、うちに通ってる患者さんで、近野舞依ちゃんって中学2年の女の子がいるんですが……。小学校に上がる前の5歳の頃と小学校3年の頃に受けた治療がトラウマになって、歯科恐怖症になって治療が受けられないんです……。それで、先生に診てもらえないかと……。

（……そうか、そりゃいかなあー。ボクが診てあげたいところなんだがなあー……）

先生、お忙しいことは重々わかってるんですが……。なんとかお願いできないでしょうか？

（実は、今年から歯学部長も兼任ということになってねえー……。それで、他の人に連絡しておくから、真希君、その人あてに紹介状を書いてくれないか……）

先生、だれですか？

（今度のようなケースにピッタリの人だ。きみもよく知ってる人だよ。

佐和島君なんだ。今年、助教授になって小児歯科からリラックス歯科外来にきてくれた)

ホントですか！？ 佐和島君、いいえ、佐和島先生、助教授になられたんですか……。わあー。

(佐和島君でいいよ。まあ、学生時代きみと首席を争った優秀な奴だからなあー……。彼なら安心だろ？)

私なんか、佐和島先生の足元にもおよびませんでしたよ。そうですかー、佐和島先生なら安心してお任せできます。

(そうだろう？ じゃあ、早速佐和島君には伝えておくから……。佐和島君から真希君に直接連絡をいれてもらうから……。紹介状のほうはよろしく頼むぞ。じゃあな。たまには研究室に来てくれよ)

はい、先生。どうもありがとうございます。早速紹介状を書きます。では、ごめん下さい……」真希先生は、受話器をおいて、舞依に向き直った。

「舞依ちゃん、OKだって。後藤先生の紹介でね、佐和島先生、私の大学の同級生なんだけど、その人が診てくれるって。佐和島先生は小児歯科もやってるとってもやさしい先生よー。だから心配なくて大丈夫」真希先生は精一杯の笑顔で、大学病院と聞いて沈み勝ちの舞依の気持ちをほぐす。

真希先生は、レター用紙と封筒をデスクの上のレターケースの引き出しから取り出し、早速紹介状を書き始めた。封筒の表紙に『皓歯大学歯学部附属病院 リラックス歯科外来 佐和島助教授様』と書き、紹介状を封筒に入れた。とそこへ、電話のベルが……、

ピロピロピロッ
と鳴った。

真希先生は、受話器を取り上げ、
「はい、奥田歯科医院です」と会話を始めた。
「もしもし、あっ、佐和島先生、いや佐和島助教授！ 早速お電話あり
がとう！

（いやだなあー。やめてくれよ、助教授なんて。佐和島君でいいよ。同
級生なんだから……）

早速なんだけど……、後藤先生から聞いてくれた？

（ああ、聞いたよ。その子、そんなにひどい歯科恐怖症なの？）

ええ、そうなの。近野舞依ちゃんっていう、純姫女子学園中学の2年
生の子なんだけど、……」と真希先生は、いま、舞依から聞き出した
話を掻い摘んで、佐和島に話した。

「……っていうわけなの

（そうかあ……。その子、舞依ちゃん、大変な目にあってるんだね。
うーん。……いまの話、くわしく紹介状に書いといてくれよ）

わかったわ。カルテの写しも同封しておくから……

（ああ、頼むよ。……それで、予約の日なんだが……）

そっちはいつ開いてるの？

（そうだなあ……。連休が入ってるからなあ……。連休明けも……。結構埋まってるなあ……。１１日の午前１１時ころはどうだい？）

「ちょっと待ってね」と真希先生は、舞依に５月１１日の予約を取っていいか聞き、紗季に舞依の母の仁美を連れてくるようにいった。やがて、仁美がやって来た。

「あっ、お母さん、いま舞依ちゃんに歯医者さんが怖いわけをお聞きして……。舞依ちゃん、つらかったでしょう。お察しします。それで、私の母校の皓歯大学の附属病院にリラックス歯科外来というのがありまして、そこは舞依ちゃんのような歯科恐怖症の人を専門に診てくれるところなので、そこを受診したらどうかと……。いま、担当の佐和島先生と電話がつながってまして……。で、５月１１日の午前１１時ころが開いているようなのでどうかと」

「先生、お願いします。この子は、歯医者さんを怖がって、怖がって、治療を受けてくれないものですから……」

「わかりました。それでは予約を取りますね……。舞依ちゃん、１１時で予約を取るけど、いい？」

舞依は、こくりと頷いた。真希先生は、受話器に向かい、
「お待たせ……。午前１１時に予約したいんだけど……」。

（わかった。開いているから、取っとくよ。じゃあ、紹介状の方はよろしく）

「わかったわ。よろしくをお願いします」真希先生は電話を切り、舞依と母の仁美に

「舞依ちゃん、お母さん、５月１１日の午前１１時に予約が取れました。場所は……」と皓歯大学歯学部附属病院までの地図を書いてくれ、それと皓歯大附属病院リラックス歯科外来の電話番号のメモ、紹介状（中には舞依の『治療勧告書』とカルテも入っている）を渡してくれた。

こうして、舞依は皓歯大学歯学部附属病院リラックス歯科外来を受診することになった。

3. リラックス歯科外来

楽しい5月の連休が終わって3日が過ぎた。5月11日である。いよいよ今日から、舞依の皓大歯学部附属病院での治療が始まる。舞依はこの間、奥田歯科で皓大歯学部附属病院の予約をとってもらって以来、寝る時にいろいろ考えており、そのため自然と涙が出てきて、毎晩泣いていた。

キーン、コーン、カーン、コーン。午前10時20分。2時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「はい、今日はここまでね」黒川先生が教室のドアの外にいる舞依の母の仁美を横目で見ながら、「25ページの問題2は宿題にしますので、みんな予習してくること。いいわね」といった。

「ええーっ！」女生徒たちのブーイングが教室にこだました。

「起立、礼」

黒川先生は教壇を降り、舞依のところへやって来た。クラスメイトたちは英語の教科書を片付け、休み時間を利用してトイレに行ったり、友だちとおしゃべりしたり、次の時間の数学の予習をしたりしている。

「近野さん……、舞依ちゃん、お母さん迎えに来ていらっしゃるわ」

舞依は、「はい」と小さな返事をして、沈んだ表情で立ち上がる。黒川先生はそんな舞依を教室のうしろの方の隅に連れて行き、「舞依ちゃん、舞依ちゃんが歯医者さん怖いのよくわかるけど、がんばるのよ。いい」とやさしい目でまっすぐ舞依を見て諭す。その真剣な表情に、舞依は、“先生、私のこと真剣に心配してくれる。……治療コワイけど、がんばんなきゃ”と思ったが、はじめていく皓大歯学部附属病院がどんなところかとか、あのあと真希先生にもしも最悪のときは全身麻酔や手術

ということになるなどと聞いており、そのことやほかのことをあれこれ考えるので、“どうしよう……。コワイ”という気持ちが湧き上がり、自然と涙目になる。

「あらあら、そんな顔しないの」と黒川先生はつとめて明るい笑顔で舞依を励まし、「いいわ。先生、恥ずかしいけど、舞依ちゃんだけに、先生の秘密を教えてあげる……。そのかわりふたつ約束して、ひとつは舞依ちゃんがちゃんと歯の治療を受けること、もうひとつは先生の秘密は誰にも教えないこと。いい？」といった。舞依は「はい」とこくりと頷く。

すると黒川先生は、そおっと自分の口を開けて舞依に見せた。

「?!」舞依は声にならない声を出した。

背が高くスレンダーな美人で、髪はシャギー、いつもパンツルックで颯爽としている黒川先生は、舞依のあこがれの先生だ。さっぱりした気性も、上手な授業の教え方も、クラス、いや学校中で人気があった。英語を流ちょうに発音するとき、あるいは女生徒たちと楽しそうに話するとき、唇から零れる真っ白い歯はキレイで、歯にコンプレックスを持つ舞依にとっては眩しすぎるくらいだった。

黒川先生は口を閉じ、「ねっ」と舞依に目配せをする。

舞依がいま見た黒川先生の口の中は、奥歯のほとんどが銀歯でギラギラしていた。前歯も見せてもらったが、裏側がギラギラしている差し歯だった。

黒川先生は少し遠い目をして、「舞依ちゃん、私もね、小さい頃から虫歯が多くてね、歯には苦勞のしどうしだったわ。痛い治療も数知れず受けてきたの……。でもがまんして、治療を受けて虫歯を治したの……。見たでしょ、ね、先生、被せ物だらけでしょ。舞依ちゃんの怖い気持ちはよくわかるわ……。だから、舞依ちゃんもつらいだろうけど、がんばって、ねっ!」と舞依を励ましてくれる。

舞依は先生の心遣いをうれしく思って「はい。先生、私がんばります」と返事をして、黒川先生に送り出され、仁美のもとへ向かった。学校か

ら直接皓大歯学部附属病院に行くのである。が、やっぱり舞依のころのなかを怖いという気持ちが占めてくるのだった。

舞依は母の仁美に連れられ、皓歯大学歯学部附属病院に来ていた。午前10時45分を過ぎたところだ。皓歯大学のキャンパスに隣接して7階建ての建物が建っている。それが皓大歯学部附属病院だ。3階までが外来の診療室で、4階から最上階の7階までが入院棟である。なまえのとおり歯科に関する総合病院である。

歯学部附属病院の設置主体である皓歯大学は、歯学部と教育学部の2学部と、それぞれ大学院歯学研究科と教育学研究科の2研究科を擁するこの町の名門大学だ。その歴史は皓歯女子歯科医学専門学校に始まり、戦後、共学となると同時に皓歯大学歯学部となったものだ。その後教育学部を開設し、同時に教育学部には附属の幼稚園、小学校、中学校、高等学校が併設された。附属病院もまた皓歯女子歯科医学専門学校の開校時の附属歯科診療所にその起源を持つ、歴史ある病院である。

入り口の自動ドアを入ると、広い待合いのロビーになっており、正面に2階へいくエスカレーターが設置されている。左側には薬剤部、会計や銀行のキャッシュディスプレイ、緑電話などが並んでいる。右側は外来受付や入院受付があり、それに総合案内板が設置されている。

「舞依、ここで待っていてね」仁美は初診の受付用紙を書きあげると、舞依をソファに座らせ、外来受付に行った。

舞依は、「はぁ～。来ちゃった……。やっぱり、コワイ……。どうしよ、どうしよ。すごい不安でドキドキするよ～……。怖いよ～」と胸が早鐘を打つを感じながら、受付で保険証や受付用紙を出している母を見ていた。

「舞依、お待たせ。さっ、行きましょ」仁美は、舞依をソファから立たせる。舞依は不安そうな目をして、いまにも涙が落ちてきそうだ。

「大丈夫よ、舞依。真希先生も、リラックス歯科外来なら怖くないように治療してくれるって、いったじゃない。さっ」

舞依は、しかたなく頷くと、仁美と一緒に案内板のところへ行き、リラックス歯科外来の場所を確かめる。真希先生に聞いてきてはいるが、ねんをおしたのだ。

案内板を見ると、『むし歯外来』、『小児歯科外来』、『矯正歯科外来』、『歯科総合診療部』、『第1 歯科総合診療室』、『第2 歯科総合診療室』、『第3 歯科総合診療室』などとあり、診療科の横にフロア番号と、治療室の番号が案内されていた。舞依は、それらの診療科の文字をただで、すっかり怯えている。そんな舞依を懸命に仁美が勇気づけている。

「舞依、心配しないで……。真希先生のことばを信じるんでしょ？ そんなに怖がらないで」

舞依は母の励ましに涙をこらえて、“私、がんばんなきゃ……。がんばって虫歯治さなきゃ……”と必死の思いでいた。

「えーっと、『リラックス歯科外来』は……。あつた、3階ね。さつ、舞依、いきましょう」仁美は舞依の手を握り、エスカレーターにのった。

その日の診療時間前、リラックス歯科外来の佐和島助教授の治療室では、その日に予約が入っている患者の治療について打ち合わせが行われていた。舞依の治療についても、助教授の佐和島を中心に、歯科衛生士の川合恵梨香と戸田千咲、看護師の小松華子と平田成美が、綿密に舞依の治療計画を話していた。あれからもう一度、佐和島助教授が奥田歯科医院の奥田真希先生に電話をして、舞依のカルテと歯科恐怖症に至ったいきさつを送ってもらっていた。

佐和島助教授の治療室のスタッフは、佐和島助教授を含めて5人。歯科衛生士の川合恵梨香、戸田千咲は、皓歯大学歯学部附属歯科衛生士専門学校歯科衛生士科をさきおとしの3月に卒業してその年の4月から皓歯大学歯学部附属病院に勤めだし、去年の4月に開設されたばかりの皓歯大学歯学部口腔衛生保健学科の3年次編入試験に合格し、歯学部附属病院に勤務のかたわら歯学部口腔衛生保健学科で学んでいる。卒業後は来年の4月に開設が予定されている皓歯大学大学院歯学研究科口腔衛

生保健学専攻に進学するつもりであり、今回の近野舞依の治療に、張り切っている。また、看護師の小松華子、平田成美はともにとなり町の若葉台記念病院歯科口腔外科から、今年の4月に転任してきたばかりだが、前の病院でも歯科口腔外科に勤務していたこともあり、歯の治療を受ける患者の扱いには慣れている、といったところだった。

「ええ一っと、最終確認だけど……、近野舞依さんはかなりの歯科恐怖症ということなので、今日はレントゲン、それから薬の適合検査、血圧測定、カウンセリングをやります」佐和島先生がスタッフにいう。

「それから、最後に舞依さん本人とお母さんを交えて、今後の治療方針と計画について説明をしますので、よろしくお願いします」

「先生、今日は治療はなし、ですね」衛生士の川合恵梨香と戸田千咲が佐和島先生に聞く。

「そうです。カウンセリングは、川合くんと戸田くんが主体ですすめてくれますね？」

「はい」

「それから……、血圧測定、薬の適合検査は、小松さん、平田さん、お願いします」看護師の小松華子と平田成美に佐和島先生が頼む。

「はい」

「レントゲンは……」

「はい。私たちが準備します」恵梨香と千咲がいった。

「まあ、たぶんパノラマだけで済むと思うから、中央検査室の頭部レントゲンは必要ないでしょう……。あっ、それから、口腔内デジタル写真のほうもよろしくお願いします」

「はい」恵梨香と千咲が声を揃えていう。

「先生、適合検査は、アレルギーを主に行うよう中央検査室に依頼してよろしいですか」華子と成美が佐和島先生に確認する。

「はい、それですすめてください……。では、よろしく」

舞依と母の仁美がエスカレーターで3階まで上がり、『リラックス歯科外来』の前へやって来た。受付には事務服を着た若い女性が座っている。

仁美は、受付前のソファに舞依を座らせると、『リラックス歯科外来』の受付のカウンターに行き、初診総合受付でもらった診察予約票と真希先生に書いてもらった紹介状を差し出した。受付の女性は診察予約票を確認し、紹介状を受け取ると、問診票を仁美に渡した。

仁美が、舞依のところに戻ってきて、舞依に問診票を渡す。

「舞依、これを書くそうよ」

問診票は、一般的な歯科医院でもらうもので問われる項目以外に、『どういった治療が怖いですか』など、歯医者恐怖症に対応した質問もあった。舞依は、仁美に促され、励まされながら、『削る治療が怖い』『麻酔注射が怖い』などの項目に○をつけ、なんとか記入した。仁美はそれを受付に渡す。

受付の横に3つドアが並んでいる。それぞれリラックス歯科外来の診療室である。番号が1から3まで表示しており、その下に担当歯科医の名前が表示してある。2番のところに『佐和島』とあった。第2診療室が佐和島助教授の診療室のようだ。

舞依は、“はぁ～。受付済んじゃった……。どうしよう、順番来ちゃう……。もう逃げちゃいたいよ～。けど、ママいるし……。どんなところだろ……。どんな治療するんだろ……。コワイよー。はぁ～”と震えている。そんな舞依を仁美は心配そうに見つめている。

そのとき、第2診療室のドアのところの電子掲示板が、舞依のもつ診察予約票の番号を表示した。同時にスピーカーから女性の声で、

「近野舞依さん、近野舞依さん、第2診療室へどうぞ」と流れた。

「……ママ、やっぱりコワイ……」舞依の目は、もう涙が浮かんでいる。

「大丈夫よ、舞依。……わかったわ、ママもついてってあげる」

舞依は、依然涙目だったが、母の仁美に付き添われ、第2診療室のドアを開け、中に入ってしまった。

舞依と仁美が佐和島先生の治療室にはいると、左手のデスクにメガネをかけた理知的な青年が座っていた。メガネの奥は柔和な光をたたえたやさしい目があった。

「近野舞依さん、だね。こんにちわー。さっ、どうぞここに座って」と佐和島先生は、自分の前の患者用の丸椅子を指した。

「お母さんも、どうぞこちらへ」と佐和島先生は、自ら立ち、パイプ椅子をその横にセットした。

「失礼します」と仁美は腰掛けながら、「ほら、舞依も腰掛けて、ちゃんとごあいさつなさい」と突っ立ったままの舞依を促す。

舞依は丸椅子に座り、「こんにちわ」と小さくあいさつをする。

「こんにちわ、舞依ちゃん、あつ、先生、舞依ちゃんって呼んでいいかな？」佐和島先生が聞くと、舞依はこくりと小さく頷く。

「奥田歯科医院の奥田真希先生から、舞依ちゃんが歯医者さん怖いってこと、ひととおりは聞いているんだけど、よかったら、先生、舞依ちゃんから直接そのお話を聞きたいなあー」佐和島先生は、柔和な目をしてやさしい笑顔で舞依にいう。

舞依はちょっとドギマギして、仁美の方を見る。仁美は、

「舞依、ちゃんとお話なさい」と舞依を促す。デスクの上には、舞依のものらしいカルテ、真希先生からの紹介状、さっき記入した問診票が置いてある。

舞依は、ポツリポツリと小さな声で、佐和島先生に5歳の時と小学校3年の時に受けた治療のことを話した……。

舞依が話し終わると、

「そっか、舞依ちゃんが歯医者さん怖くなるのも無理ないね。お母さん、お察しします」と佐和島先生は、目尻に少し涙を浮かべている。スタッフの女性たちも真剣な表情で聞き入る人や少し涙目になっている人がいる。それを見た舞依は、「真希先生のいったとおりで。佐和島先生とこの助手のお姉さんとなら、舞依、治療受けられるかも……」と治療

室に入ったときよりも少し落ち着いた気持ちになっていた。

「……舞依ちゃん、お母さん、紹介が遅れて申し訳ありません。私がリラックス歯科外来の佐和島です。で、こちらにいるのがスタッフで、歯科衛生士の川合恵梨香さんと戸田千咲さん、看護師の小松華子さんと平田成美さん、です。今日から舞依ちゃんの治療を担当しますので、どうぞよろしくお願いします」

「川合恵梨香です」「戸田千咲です」「小松華子です」「平田成美です」「どうぞよろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそお世話になります。舞依の母の近野仁美でございます。よろしくお願いします。ほら、舞依もごあいさつして」

「……近野舞依です。お願いします……」舞依は治療という言葉聞いて、ふたたび気持ちが沈みがちになる。

「舞依ちゃん、お母さん、今日はですね、レントゲン、それから薬の適合検査、血圧測定、カウンセリングを行います。ですから、本格的な治療は次回以降ということになります……」佐和島先生が今日の治療と今後の治療方針について説明をはじめた……。

舞依は、佐和島先生の説明の中に真希先生が説明してくれた全身麻酔とか、手術とかのことばが挟まれるのを聞き、怖さが先に立ち、頭に入っていない。周りを見ると、佐和島先生の治療室には、ユニットが1台しかない。個室の治療室になっているようだ。当然、ユニットには舞依の一番嫌いなタービンがついていて、先端のドリルがこちらを見て威圧している。ユニットの横には大きなボンベのような物がある。ユニットにはライトがついていない。よく見ると、天井にテレビドラマで見るようなライトの部分がいくつもついた手術用の无影灯がついている。

“怖い……” 舞依は、この光景を見て心底思った。

「……で、次回からの治療ですが」と佐和島先生は、舞依の顔を見て、「舞依ちゃん、次から、勇気をちょっとだけ出してみようか。ひとりで来られるよね？」といった。

「舞依、大丈夫よね。ひとりでいけるよね」仁美が舞依に念を押す。

舞依は、ふたりからせまられ、思わず「うん」と返事をしてしまった。
「舞依ちゃん、えらいねー。お姉さんたちも応援してるから、がんばろうねー」衛生士の恵梨香、千咲、看護師の華子、成美が笑顔で舞依を励ます。

「では、今日はまず、レントゲンを撮ります。川合くん、戸田くん、お願いします」

「はい、先生。じゃあ、舞依ちゃん、こっち行こうか」と恵梨香と千咲が治療室の一角にあるレントゲン室に、舞依を連れて行く。

治療室の一角にあるレントゲン室にはいると、恵梨香が「ここに座ってー」といすに座らせる。

「これ噛んでね」とマウスピースのようなものを舞依に噛ませる。「ここをもって、じっとしててね」と恵梨香は舞依にレントゲン装置についている棒のようなものを握らせて、恵梨香自信はドアを開け、レントゲン室の外へ出る。

レントゲン室でひとりになった舞依に、マイクを通じて千咲が指示を出す。

「舞依ちゃん、レントゲンが撮影を始めるから、じっとしててねー」窓の外には佐和島先生の姿も見える。どうやらレントゲンの操作は佐和島先生がやってくれているようだ。

舞依の目の前をパノラマレントゲンがゆっくりと通過する。

「はい、お疲れさま」と恵梨香がドアを開けてくれる。「先生のところへ戻ってね」佐和島先生は操作が終わると同時にデスクに戻ったようだ。

舞依が、佐和島先生のところへ戻ってしばらくすると、千咲ができたレントゲン写真を持ってきた。佐和島先生がレントゲン写真をデスクの前の投影機にかけた。蛍光灯の青白い光に舞依の口腔が映し出される。

レントゲンを見ると、舞依の歯はところどころ白く映ってる詰め物が見えるが、大半の歯は黒い影があり、虫歯に侵されていることがよくわかる。舞依は、自分のレントゲンを見て、“はあっ”とため息をついた

い気分だった。

「舞依ちゃん、お母さん、舞依ちゃんの歯は治療にかなり長くの時間がかかると思います」

「……」舞依はうつむいて黙っているので、母の仁美が頷く。「はい」

「舞依ちゃんが歯科恐怖症なのはよくわかっていますが、このまま治療しないと抜歯して、入れ歯になってしまいます。でもいまなら、自分の歯を残せると思いますので、がんばりましょう」

舞依は、“えっ、そんな！！ 抜くなんて、いや！！ 入れ歯だなんて……、いやっ！！ 舞依、がんばんなきゃ”とうつむいて目に涙をためて思っていた。

「恐怖心を少しでも和らげるために、笑気ガスをつかって治療を行います。ほら、あちらにある……」と佐和島先生はユニットの横にあるボンベを指し、「……あれが笑気ガスです。笑気ガスを吸引してもらって、気持ちを落ち着かせた上で、治療を行います」といった。

「……それでも治療を受けられないときは」とためらいがちに仁美が佐和島先生に聞くと、

「さきほども少し説明したように、その場合は、麻酔科の先生に来てもらって、全身麻酔で治療することになるでしょう。いわば手術ですね」

「しゅ、じゅつ、ですか」仁美は息をのんだ。

「まあ、それは最悪の場合ですし、そこまでいくひとはまれですから、心配しなくていいですよ」佐和島先生はふたりを安心させようと、やさしい目で諭すようにいう。

「今日は治療はしませんし、あと、口腔内、口の中ですね、のデジタル写真を撮り、薬の適合検査、薬アレルギーがないかどうかですね、と血圧測定をやって、カウンセリングと今後の治療方針、治療計画について、話し合ひましょう」と佐和島先生は振り返り、「川合くん、戸田くん、口腔内デジタル写真をお願いします」と恵梨香と千咲に指示を出す。

「はい、先生」と恵梨香と千咲が、「舞依ちゃん、こっちきて」と舞依をユニットに連れて行く。

舞依はユニットを見て明らかに怯えた目をしている。

「舞依、どうしたの？　しっかりなさい！」仁美が励ます。

「舞依ちゃん、怖くないよ。今日は何もしないから。お口の写真撮るだけだよ」と佐和島先生も舞依を笑顔で励ます。

舞依はようようユニットにすわった。ユニットが倒される。舞依の目の前に、白い天井と大きな無影灯があった。“どうしよう……コワイ”

ユニットの両サイドから開口器を持った恵梨香とカメラを持った千咲が迫る。開口器を目にした舞依は、みるみる涙が溢れてくる。“コワイ！！コワイ！！”

「舞依ちゃん、舞依ちゃんが開口器怖いのはよく分かるよ」佐和島先生がユニットの横に来ていう。「でも、舞依ちゃんの歯の状態をちゃんと診断できるように、先生、写真を撮らなきゃならないんだよ。だから、ちょっとだけがまんしょ。ねっ」

「そうだよ、舞依ちゃん、写真撮るだけだから。だから、がんばろ！」恵梨香と千咲も笑顔で励ます。

舞依は、“がんばんなきゃ。治療して虫歯治さなきゃ……”と必死の思いで、口を開ける。開口器を見ないですむように、目を閉じた。涙が頬につたわる。

恵梨香が舞依の口に開口器をはめて、すぐさま舞依の涙をタオルで拭く。すかさず千咲がデジタルカメラで舞依の口腔内を撮影する。デジタルカメラはユニットのモニターにつながっていて、舞依の口腔がモニターにも写し出される。ほとんどの歯が虫歯に侵され、痛々しい。

「はあーい、舞依ちゃん、これで終わり！！　よくがんばったねー。えらい！！　えらい！！」恵梨香と千咲がほめてくれる。「舞依ちゃん、えらい！」華子と成美も笑顔でほめてくれる。

「舞依ちゃん、怖いのによくがまんしてくれたねー。先生、お礼をいうよ」佐和島先生も舞依をほめる。舞依はみんなにほめられて少し照れくさかった。そんな様子を仁美も笑顔で見ている。

「舞依ちゃん、先生に歯を、お口の中を診せてくれるかな？」今度は佐

和島先生がデンタルミラーと探針をもって、開口器を外してもらった舞依に迫る。舞依は、銀色に光るデンタルミラーと探針を見てまたもや恐怖心がわき上がってきたが、目を閉じ、思い切って口を開けた。

「舞依ちゃん、その調子だよ。戸田くん、カルテとってくれるかな」横で千咲がカルテを記録する。「左上から。7番C2、……、6番C4、7番C3。以上です」

「よくがんばったねー。お口の中診るのこれで終わりだよ」佐和島先生がにこにこしながら舞依にいった。

ユニットが起こされる。

そのあと、「じゃあ、舞依ちゃん、次は薬の適合検査と血圧測定をするね。小松さん、平田さん、お願いします……」と佐和島先生は、看護師の華子と成美に、適合検査と血圧測定の指示を出す。

「舞依ちゃん、腕出してね」と華子は舞依のセーラー服の腕をまくり、血圧測定を行った。

「舞依ちゃん、リラックスしようか。深呼吸して」

舞依は、今までの検査、また血圧を測るということで、ドキドキしていたが、華子の指示に従って、大きく深呼吸をした。

「測るね」舞依の腕を血圧計が締め付ける。110、66の脈拍62。

「もう一回、測るねー」華子がふたたび舞依の血圧を測る。115、65。脈拍は68。いずれも正常である。

「血圧は大丈夫みたいね」

華子の横で、血液のアンフルをとる瓶を用意していた成美が、「舞依ちゃん、今度は薬の適合検査のために、血を少し採るわね」と注射器を舞依に向かって構えた。

舞依が腕を出すと、チクッと針が刺さり、注射器にアンフル瓶が装着される。見る見る赤い血がアンフル瓶に溜まってゆく。

「もうちょっと、がまんしてね」とあと2本、血液のアンフルが採られた。

「平田さん、血液の方、中央検査室をお願いします」佐和島先生が指示

をする。

「はい、先生。アンプル瓶を送っておきます」成美が答える。

そのあと、舞依は母の仁美とともに、恵梨香と千咲、佐和島先生にカウンセリングを受けた。

「舞依ちゃん、お疲れさま。今日はもう終わりだよ」佐和島先生がいう。

「次は、月曜日の午前１０時に来てくれるかな？」

「はい」舞依は怖かったが、今日の検査などががんばれたことで、少し自信がでた。

「それじゃ、月曜日待ってるからね。治療、がんばろうね。お大事に」佐和島先生が優しい目でいつてくれる。

「舞依ちゃん、がんばろうね」「舞依ちゃん、バイバイ」スタッフが笑顔で送ってくれる。

「どうも、ありがとうございました。それでは月曜日、舞依をよろしくお願いします」仁美は深々と頭を下げ、舞依を連れ、ドアを開け、佐和島先生の診療室をあとにした。

治療前日の就寝前。

舞依は自分の部屋で、明日の１０時に受ける治療のことを考えていた。
”痛くないとイイなあ……”

『おとなでも歯医者さんの治療が怖くて、泣く人いるんだよ。だから、舞依ちゃんが怖くて泣いたって恥ずかしいことなんかじゃないよ。安心して』佐和島先生のやさしい言葉があたまのなかで甦る。

”……でも、中学生にもなって歯医者さんで泣くのって、すごく恥ずかしいし……。がんばらなきゃ。治療怖いけど、治療しないと虫歯治らないし……。うん、がんばろ！”

舞依はこころを奮い立たせると、ベッドに入った。

4. 治療見学

5月16日午前10時。舞依の予約の時間だ。舞依は勇気を振り絞って、初めてひとりで、すなわち母の付き添いなしで歯医者に来た。午前中治療なので、黒川先生に休みを許可してもらい、学校は午後からだ。

金曜日に今日の午前中の休みの許可のために、職員室へ行って黒川先生に会うと、黒川先生は快く許可してくれ、『舞依ちゃん、ファイト！』とガッツポーズで応援してくれた。舞依はちょっと赤くなった。“恥ずかしい。歯医者さんに行くくらいで、こんなに励まされるなんて……”

外来受付で再診の手続きをとり、エスカレーターで皓大歯学部附属病院の3階に上がる。

「舞依ちゃん、よくひとりで来てくれたね。えらい」佐和島先生、スタッフのみんながほめてくれる。

「早速だけど、舞依ちゃん、前回に薬の適合検査のために血液を採ってもらったよね」と佐和島先生は、舞依に向かっていう。

舞依は「はい」と小さく返事をした。

「特にアレルギーなどもないようだから、治療に使う薬に関しては心配ないよ」

「じゃあ、あっちの治療台にいこうか」佐和島先生が歯科ユニットを指した。

「舞依ちゃん、こっちよ」恵梨香と千咲が舞依をユニットに誘導していく。舞依は、ユニットを目にして緊張が高まるのを感じた。

舞依は治療台に寝かされた。天井には手術に使うのと同じ大きな无影灯がある。恵梨香が、緑色の歯科エプロンをつけてくれる。千咲はバキュームや治療器具の準備をしている。“怖い……”舞依は胸元につけられたエプロンを見て、いかにも手術という感じがして、胸がドキドキ

してきて恐怖の気持ちが沸き上がる。もう涙目だ。持ったハンドタオルをギュッと握る。

舞依の紺のセーラー服の右腕の袖がまくられる。華子と成美が血圧計を舞依の腕に巻き付け、

「舞依ちゃん、ちょっとリラックスしようか……。はい、深呼吸してー」と舞依に深呼吸を指示する。

「すー、はぁー」舞依はいわれたとおり深呼吸をした。すると、少しドキドキ感がなくなり、落ち着いてきた。すかさず華子と成美が血圧を測る。110、68。正常値を示している。脈拍は88。少しはやい。

「舞依ちゃん、もう一度深呼吸しようか。はい、大きく吸ってー」

ふたたび舞依が深呼吸をする。113、66。脈拍は66。正常だ。

ユニットの横にあるボンベからのびるホースに呼吸マスクが取り付けられる。恵梨香と千咲が呼吸マスクを持ち、

「舞依ちゃぁーん、ちょっとこれつけるねー。がまんしてねー」と舞依の鼻から口に呼吸マスクを取り付ける。佐和島先生がやってきて目盛りを見ながら、慎重にボンベのバルブをひねり、舞依に笑気ガスを吸引させる。舞依は笑気ガスを吸ううちに気持ちがスーッと落ち着いていくのを感じた。

“なんだろう、この気持ち……”

笑気ガスを吸ってからしばらくすると、佐和島先生、恵梨香と千咲、華子と成美が舞依の周りをずらっと囲み、治療を始めるにあたっての説明をはじめた。みんな一様にマスクをつけ、グローブをし、着衣は手術着のようにいかめしい。

「舞依ちゃん、今日は右下の5番、第二小臼歯っていうんだけど、その虫歯を治療するね。今日は初めての治療だし、治療は1本だけにして、舞依ちゃんが怖くないように治療するよ。……この前奥田先生が治療し始めたその隣の6番は充填物、歯の根まで埋めてある詰め物のことだけど、レントゲンと撮って見たら結構きっちり入っているので、治療は少し後でもいいと思う。まあ、いずれにしても土台を立てて被せ物をし

なきゃならないけどね。それから、……」

佐和島先生はていねいに説明をしているが、舞依は周りを囲われたことで怖くなり、内容がほとんど頭に入らず、覚えていない。

「始めよっか。はい、お口開けて」佐和島先生がやさしくいう。華子と成美がライトを操作して舞依の口にあてる。

「始めましょうね。舞依ちゃん、お口アーンしましょう」恵梨香と千咲もマスクをした顔で、やさしくいう。

舞依が怖々口を開けると、佐和島先生はデンタルミラーで舞依の右唇を引っ張りながら、ピンセットで麻酔液をしみこませた衛生綿をつまみ、舞依の右下5番の歯茎にトントんと塗った。次に佐和島先生はデンタルミラーと麻酔カートリッジを装着した注射器を持って、舞依の口に近づける。舞依は麻酔注射を目にすると、とたんに、

「ふふあああーん、わあああーん」と泣き出してしまった。

「どうしたの、舞依ちゃん、大丈夫だよ」

「舞依ちゃん、心配しなくていいよ」と恵梨香や千咲、華子や成美が慰めるが、舞依は泣きやまない。

「ああん、あん、ふえええーん、えん」

佐和島先生はじめ、スタッフは舞依の気持ちが落ち着くまで少し待つことにした。

「ふんあ、ふんあ、ふえっ、ふえっ」少し落ち着いてきたようだ。

佐和島先生は、「舞依ちゃんが怖いのはよく分かるよ〜……。でもねー、麻酔しないと、これからの治療がとんでもなく痛い治療になってしまうよ」とやさしくいう。

「ふん、ぐすん、くすん」舞依は、“わかってるんだけど……。でも、どうしても怖くて”と佐和島先生のことばに頷くことができず、首を横に振るばかり。

「先生、舞依ちゃんが納得するまで治療はしないよ。舞依ちゃん、今日は治療、いや？」

「くすん、くすん」舞依は泣きながら、こくりと頷く。ハンドタオルで

涙を拭く。

「わかった。今日は治療しないよ。……舞依ちゃん、それじゃあ今日は、小児歯科で治療を受けてる子供たちの様子を見に行かない？ 舞依ちゃんのように歯医者さんが怖い子供たちもいるんだよ」

舞依は、涙に濡れた目を佐和島先生に向けて、見開く。

「子供たち、治療がんばってるんだ。見てみないかい？」佐和島先生はすでにマスクをはずして、笑顔で舞依を見つめている。舞依は佐和島先生の笑顔につられて、思わずこくりと頷いた。

「よし、じゃあ行こうか」とユニットを起こしてくれ、緑色の歯科エプロンを外してくれた。

佐和島先生に連れられて、舞依は治療室から3階のフロアに出た。エスカレーターを使って2階へ下りる。

『小児歯科外来』と掲示された受付の横に5つドアが並んでいる。それぞれ小児歯科外来の診療室のようだ。1から5ま数字と担当歯科医の名前が表示してある。受付の前のソファーには子供たちが母親に付き添われて順番を待っている。小さい子は、怖がってる子や夢中になっておもちゃで遊んでいる子などいろいろだが、小学校の高学年くらいの子は緊張した面持ちで順番を待っている。

佐和島先生は受付の女性に「こんにちわ……」と声をかけた。下を向いて書類を整理していた女性は、顔をあげると、「あら、佐和島先生！今日はどんなご用ですか？」と聞いた。

「ちょっと、治療を見学したいんだけど……。いいかな？ 邪魔にならないようにするから」

「ちょっとお待ちいただけます？ 中で聞いてきますから」

「頼むよ」

受付の女性は、中に消え、しばらくするとあらわれ、「村上未希先生がはいって、いってます」と佐和島先生につげ、「こちらからお入り下さい」

と受付横のドアを開けてくれた。関係者専用のドアらしい。

「ありがとう。助かるよ。舞依ちゃん、行こうか」

「はい」舞依は小さく返事をして、佐和島先生について行く。受付の女性にはしっかりと見送ってくれる。

中へ入って、佐和島先生は2つ目の治療室のところで止まった。治療の途中、歯科材料を薬品棚から取り出している歯科衛生士をつかまえて、佐和島先生はなにやら話している。衛生士は手短に話すと、すぐ治療台の方へいってしまった。

佐和島先生は、舞依の方に向き直ると、

「ここが小児歯科の第2診療室。先生がこの3月まで勤めていたところだよ。いまはさっき受付の小池さんがいった村上未希先生っていう、女の先生、僕の後輩なんだけど、村上先生の治療室」と、優しい目と柔和な表情をしていった。

舞依は目の前で展開している治療風景に目を見張った。

「里奈ちゃん、注射がんばろうねー。はぁーい、すぐ済むよー。大丈夫だからねー」歯科衛生士が里奈という小学校2、3年生くらいの女の子を励ます。村上未希先生が女の子に麻酔注射を打っている。「うふん、ふん、ふん」里奈は半べその表情でがまんしている。舞依はさっき自分が麻酔注射を怖がって泣いたことを思い出し、ちょっと赤面した。

「大丈夫だよー。もうちょっとがんばろうねー」

じっと見ていると、そうこうするうちにも治療は次の段階に進んでいき、舞依がいちばん嫌いな「キューーン」って削る治療が始まった。村上未希先生はドリルを構えて、里奈の口の中に入れる。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

里奈は泣かないでがまんして、おとなしく治療を受けている。

「里奈ちゃん、えらいねー。さすが、小学校のお姉さんだねー。ジェット機さん、すぐ済むからねー。がまんしようねー」歯科衛生士が里奈に

呼びかける。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

舞依は、タービンの音に耳を塞ぎたくなる。里奈はときおり足をびくびくしたり、「ううっ」「ふん、ふん」と声を出してはいたが、泣かないで治療を受けている。

「里奈ちゃん、あともう少しだよ。もう少しで、ジェット機さん、里奈ちゃんの虫歯さんをやっつけちゃうよー。がんばろうねー」

キュイーン、キュイーン、キイーン、キイイーン。

舞依と並んで立っている佐和島先生は、

「さっきの衛生士の奥山さんの話だと、あの子も舞依ちゃんと同じくらい虫歯がひどいんだよ。あっ、ごめん。ひどいはい言過ぎだね。ごめん。……でも、泣かないでがんばって治療を受けている」と舞依の目を見ていう。さっき治療室に入ったとき、歯科衛生士とひそひそ話していたのは今治療を受けている里奈の歯の状態のことだったようだ。舞依の目を見つめる佐和島先生の目は、“舞依ちゃんも治療がんばろ”といっているかのようだ。

里奈は最後まで泣かないで治療を受けていた。舞依は、“あんなに小さい子でも、泣かないでがんばってるのに……”となんだか自分が情けなく恥ずかしく思えた。そして、佐和島先生の治療室に戻る途中、“泣いてもいいからちゃんと治療受けよう！！”と決心した。

結局、その日は、舞依は治療を受けずに学校へ戻った。

午後学校に戻ったところで、職員室に行き、黒川先生に会うと、先生は早速、

「舞依ちゃん、どうだった？」と聞いてきた。

舞依は、治療が怖くて泣き出して治療を受けられなかったこと、小児歯科で小学校2、3年くらいの女の子が泣かないでがんばって治療を受けていたのを見学したこと、などをポツリポツリとほほを染めながら、黒川先生に話した。

「そう……、いままで歯医者さん怖かったんだから、いきなり治療が受けられなくても無理ないわね」と黒川先生が慰めてくれる。

「せんせい……」とためらいがちに舞依は黒川先生を見ると、

「なあに？」とやさしく返事をしてくれる。

「わたし……、恥ずかしかった。自分が情けなかった。……小さい子が泣かないで治療がんばってるのに、それに引き替えわたしは、……って思ったんです。それで、決心したんです。……泣いてもいいから、治療受けようって」と勇気を振り絞って黒川先生に宣言する。

黒川先生は、にこにこしながら、

「えらいわー、舞依ちゃん。決心したんだから、きっとがんばれるわ。先生も応援してるから、ねっ」と励ましてくれる。舞依は、自分の決心が少し誇らしかった。“がんばろう、自分のために。応援してくれるみんなのために、がんばって虫歯治そう”とあらためて思った。

次の日の夜、舞依は自分の部屋のベッドで、大きくお口をアーンする練習をしていた。“明日学校終わってから歯医者さん行こう！！ 多分泣いちゃうと思うけど、私ががんばってみよう！！”と決心をあらたにしていた。

5. 初治療

5月18日。水曜日の午後3時30分。舞依は学校が終わってから、皓大歯学部附属病院に来ていた。

いよいよ治療を受けることになる。舞依は、この前は麻酔注射が登場したとたんに怖くて泣き出し、治療を受けられなかったが、小児歯科で小さい子が治療をがんばっているのを見て、今度こそちゃんと治療を受けようと思っている。口を大きく開ける練習もしてきた。

再来受付を済ませ、エスカレーターで3階に上がる。『リラックス歯科

外来』の受付に診察予約票を出す。受付の女性は確認して舞依に返してくれる。ソファに座ろうとすると、待つほどもなく、第2診療室の電子掲示板が、舞依のもつ診察予約票の番号を表示する。スピーカーから女性の声が流れる。

「近野舞依さん、近野舞依さん、第2診療室へお入り下さい」

舞依は決心して覚悟を決めてやって来たのだが、いざ名前が呼ばれると、怖くて入れない。そのことを察したのか、第2診療室のドアが開き、衛生士の川合恵梨香と戸田千咲が顔を見せた。

「舞依ちゃん、がんばってきてくれたんだー。えらいねー」ふたりは笑顔で舞依をほめる。ソファのそばに突っ立ったままの舞依のところへやってくると、

「さあ、いっしょに行こっか」と舞依を促す。

舞依は、“タベ練習したんだし、がんばんなきゃ。ううん、きっとがんばれる！”と自分を励まし、恵梨香と千咲に連れられて、第2診療室のドアの中に入っていった。

「舞依ちゃん、よく来てくれたねー。せんせい、お礼いうよ」佐和島先生がデスクのいすから立ち上がり、にこにこしながら、歓迎してくれる。

みんなにほめられて舞依はちょっと照れくさい。

「ここ、すわって」佐和島先生が、患者用の丸椅子を勧めてくれる。

「舞依ちゃん、こんにちわ。今日もよろしくね」看護師の小松華子と平田成美が微笑みながら、あいさつをしてくれる。

「こんにちわ」舞依はみんなにあいさつをしながら座った。すると、佐和島先生は早速今日の治療の説明を始めた。

「舞依ちゃん、今日はこの前いった右下の5番の虫歯を治療するね。まず、麻酔注射をするね。注射のときは、舞依ちゃんが痛くないように表面麻酔をしてから注射を打つね。それから削っていくから」説明の途中に治療、注射や削るという言葉聞いて舞依の表情が暗くなりかけたのを見ていた佐和島先生は、「大丈夫。舞依ちゃんが痛くないように、先

生、治療するから。がんばろうね」と励ました。

「じゃあ、舞依ちゃん、あっちに座ろうか」と恵梨香と千咲がユニットに案内する。

「あっ、スクールバッグはそこのカゴに入れておいて」恵梨香がいま座っていた丸椅子のとなりにあるカゴを指した。カゴにスクールバッグを入れ、中からハンドタオルを取り出す。

舞依は、おそるおそるユニットに座った。頭の上には、無数のライトをつけた无影灯があり、いくつもの目玉がこちらを睨んでいるような気になる。目の前にはテーブルの上ののった、見るからに痛そうな数々の治療器具と舞依の最も嫌いなドリルが並んでいる。からだの左側にはうがい用のコップと衛生士の使うバキュームやシリンジの類。周りでは舞依の治療のために、スタッフが準備に余念がない。

「はい、舞依ちゃん、ちょっとごめんねー。エプロンつけるからねー」と千咲が緑色のエプロンを舞依の胸元につける。

“どうしよう……。もう始まっちゃうよ〜” ちゃんと治療を受けようと決心してきたが、いざユニットに座り、治療を目前にすると、恐怖心が起こってくる。

「舞依ちゃん、腕まくるねー」華子と成美が血圧計の準備をして、舞依の血圧を測る。117、68。脈拍は80で、少しはやい。

「舞依ちゃん、ちょっと深呼吸しようか」華子と成美に促されて、舞依は深呼吸をする。ふたたび測る。115、66の67。正常値になった。

「準備できたようだね」佐和島先生がスタッフに呼びかける声が、背中の方から聞こえる。

やがてスリッパの音がしたかと思うと、舞依の横でやんだ。

「舞依ちゃん、それじゃ治療始めるね」マスクとグローブをつけ、手術着のような着衣に身を包んだ佐和島先生が、歯科医用のいすに座った。恵梨香は治療器具を佐和島先生にすぐに渡せる位置に、千咲は舞依の左側でバキュームが操作できる位置に、華子と成美は笑気ガスの用意ができる位置に、それぞれついた。

舞依はすでに涙目だが、しかたなく小さな声で「はい」と返事をする。

ユニットが倒され、ライトが点灯される。千咲がライトの焦点を舞依の口にあわせる。

「川合くん、シンマ」と佐和島先生は、恵梨香に指示を出すと、

「はい、先生」とこれもマスク、グローブをつけた恵梨香が、すかさず麻酔カートリッジを装着した注射器を、佐和島先生に手渡す。

まず麻酔注射の前に表面麻酔をしようとピンセットに麻酔液に浸した衛生綿を構えた佐和島先生が、

「舞依ちゃん、お口大きく開けようか。アーン」と舞依を促す。

だが舞依は、さっき恵梨香から佐和島先生に手渡される麻酔注射の銀色に鋭く光る針を見たたん、

「ヤダヤダッ」

「ふ、ふん、ふん、うわあああーん」

と泣き出してしまった。

「舞依ちゃん、大丈夫だよ。佐和島先生、痛くしないよ」と千咲がいうが舞依は泣きやまない。

「えっ、えっ、くすん」

「舞依ちゃん、注射怖い？」佐和島先生が舞依にやさしく聞く。舞依はこくりと頷く。「でもね、この前もいったように麻酔しないと、これからの治療がとんでもなく痛い治療になってしまうんだ」

“わかってるんだけど……。でもどうしても怖い……”

「じゃあ、リラックスする笑気ガス、しよっか」

舞依は、しばらくの沈黙のあと、小さく頷いた。

「よし。いい子だね、舞依ちゃんは」とメガネの奥の柔和な目で佐和島先生はいい、「小松さん、平田さん、笑気ガスお願いします」と華子と成美に指示を出した。

「はい」

華子と成美はユニットの横にあるボンベからのびるホースに呼吸マスクを取り付けると、

「舞依ちゃん、これつけるから、ちょっとがまんしてねー」と舞依の鼻から口に呼吸マスクを取り付ける。佐和島先生が許容吸引量を見ながら、ポンベのバルブをひねり、前回と同じく舞依に笑気ガスを吸引させた。舞依は笑気ガスを吸ううちに気持ちがスーッと落ち着いてきた。

“あっ、この前と同じ。なんで落ち着くんだろ……”

笑気ガスが効いたとみた佐和島先生が、
「舞依ちゃん、お口開けよ」と舞依にいうと、舞依は自然に「アーン」と口を開けた。

“あれっ！？　なんでお口開けられるんだろ……。不思議……”

「いいよ。舞依ちゃん、その調子」と佐和島先生は舞依を励ましながら、舞依の右下の歯茎に表面麻酔をする。表面麻酔が効くまでしばらく待って、次に麻酔注射を舞依の口の中に入れると、表面麻酔をした歯茎に刺し、麻酔の薬液を注入する。

舞依は、注射針が刺さったとき、「チクッ」というよりも、「グサ〜ッ」という感じがして、

「ううっ、ふん、ふん」と声を上げる。

「大丈夫だよー。もうすこしがまんしようねー」

歯茎に薬液が注入される圧迫感がズーンと重く広がる。麻酔注射を打たれている間、舞依の足はプルプルと震え、舞依の目から涙がボロボロ〜と零れた。

「もう少しよー、舞依ちゃん。がんばろうねー」

麻酔の薬液はすべて注入された。

「舞依ちゃん、よくがんばったねー。えらい」佐和島先生が舞依をほめる。舞依は少し照れくさい。「お口ゆすぐうか。麻酔が効くまで少し待つからね」とユニットを起こしてくれる。

クチュクチュと口をゆすぐが、麻酔が効いてきたせいか、うまくゆすげず口から水が漏れる。

舞依が口をゆすぎ終わると、ふたたびユニットが倒れた。しばらく待つ。その間、佐和島先生はバーチャージャーからバーを選び、エアター

ビンのハンドピースの先端に装着している。舞依はドリルを見るのが怖いので、なるべく見ないで済むように目を背ける。

「お口開けてアーン」と佐和島先生は、ふくみ綿をピンセットでつまみ、舞依の右の歯茎と頬の間にふくませ、治療のスペースをつくった。

「じゃあ、始めるね。痛かったら、左手あげて教えてね」佐和島先生は、タービンとデンタルミラーを構えて、舞依にいった。

「舞依ちゃん、痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」と恵梨香と千咲が声を揃えていう。

舞依は、“コワイよ～。始まっちゃう……”と半べそで思ったが、勇気を振り絞って口を開けた。

千咲のパキュームが挿入される。

コオー、コオオオー。

続いて佐和島先生の持つタービンが舞依の口に入り、舞依の右下5番のう蝕した歯にあてがわれる。“ふんっ。いやだよ～”舞依は涙が目尻に溜まり、いまにも溢れそうになっている。

佐和島先生がユニットのペダルを踏んだ。エアタービンが回転し、舞依の虫歯をドリルが削り始める。

キューーン、キュイン、キュイン、キュ、キュ、キュイ、キュイイイイーーン。

キイーン、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーーン。

コオオオー、コオー、コオー、コオオオー。

「ふわあああーん、あん、あん、ふえーん、えん、えん」

舞依はドリルが回転を始めたとたん、泣き出してしまった。

“コワイよ、コワイよ！！「キューーン」って削る器械！！あの音！！あの形！！ヤダヤダ！！”

“えん、えん、痛いっ！！痛いっ！！痛いよう～。……え～ん、ズキズキするう～。虫歯をほったらかしにしていた舞依は悪い子ですう～……。これからは毎日ちゃんと歯磨きするから、もう許してください

あーい。ズキンッ！ズキンッ！って痛いよう〜”

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「あぁーん、あん、あん、えっ、えっ、ひはい、ひはいほー。ふえんふえひー」

「そうだねー、痛いねー、舞依ちゃん。でももうちょっとがまんしようか」

「舞依ちゃん、あともう少しだよ、だからかんばろ」

「ほんと、あともう少しだから。ねっ、がまんしよ」恵梨香と千咲が交互に励ます。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー、コオオオオー、コオー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュポポポオー。

「えっ、えっ、ふえーん、えん、ひはいつ、ひはいつ！！」

「がんばって、舞依ちゃん！」

キイーン、キューン、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「えっ、えっ、ひはい、ひはい、ふえんふえひ、ひはいつ！！ ほう、ひゃひゅへへー！！ えっ、えっ」

コオオオオー、コオー。ジュポポポオー。

キュウウウーーン。

舞依ががまんできずに左手をあげようとした瞬間、ひときわ大きな音をたてて、タービンが回転を止める。

「舞依ちゃん、よくがんばったねー。お口ゆすごうか」

ユニットが起こされる。ひっくひっく、舞依は泣きながら口をゆすが、麻酔が効いているせいか水が漏れてうまくゆすげない。恵梨香がタオルで涙を拭いてくれる。

「舞依ちゃん、よくがまんしたねー、えらいよー」恵梨香と千咲、華子と成美もほめてくれる。

“痛かったあ〜。もう終わりかな？　終わりだったらいいのに……。
ううん、きっと終わりよね。だってこんなにがんばったんだもん” 舞依は思っていたが、口をゆすぐ舞依の背中の方では、佐和島先生がドリルの先端をさっきよりも鋭いものに取り替えていた。

舞依が口をゆすぎ終え、正面を向くと、ふたたびユニットが倒され、佐和島先生がまたタービンとデンタルミラーを構えている。左を見ると、千咲もバキュームの準備を整えている。

「はい、舞依ちゃん、もう一度アーンしようか」

「舞依ちゃん、痛くないから、もう一度お口大きくア〜ン」千咲が促す。

“えっ、あんなに削ったのに、まだ削るの！？” また目から涙が溢れそうになる。“もう、やだっ！！” そう思ったが、ユニットから逃れるすべはない。しかたなく口を開ける。ふたたびタービンが舞依の口に挿入され、虫歯を削り出す。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

コオー、コオオオー。

「ひはいっ！！　ひはいっ！！　ひはいほー。　ひゃひゅへへー！！
えっ、えっ」

「舞依ちゃん、がんばって！！　ほんとにあともう少しだから」千咲と恵梨香が励ます。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。

コオオオー、コオー。ジュポポポー。

「えっ、えっ」

“痛いっ！！　痛いっ！！　佐和島先生、助けてー！！　お願い、もう許してえー！！”

「もう少しだよ、もう終わるよ、舞依ちゃん」佐和島先生がタービンで舞依の虫歯を削りながら、励ました。

キュイーン、キイーン。チュイーン、イン。

コオー、コオオオー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポー。

キュウウウーーン。

ようやくタービンが回転を止めた。ユニットの元の位置に戻される。
「舞依ちゃん、えらかったよー。今日削るのはもう終わり！！ お口ゆすごうか」佐和島先生がユニットを起こしてくれる。

舞依はまたヒックヒックと泣きながら、口をゆすいだ。恵梨香がタオルで涙を拭いてくれる。舞依が口をゆすぎ終わると、ユニットが倒される。

“えっ、なに！？ まだ何かされるの！？”舞依は不安が募る。

「舞依ちゃん、いま削った歯にお薬を塗って、仮の詰め物をするよ。お口を開けて」佐和島先生がいう。

「大丈夫だからねー。お口大きく開けようねー」千咲がバキュームを構えながらいう。

舞依は目に不安な気持ちを浮かべていたが、目を閉じふと口を開ける。佐和島先生は削った右下5番の歯にシリンジでエアーをシュッとかけた。
「ううっ」すこし染みた。

「はい、お口開けててねー。大丈夫だからー」すかさず、恵梨香が声をかける。

佐和島先生は、ピンセットで衛生綿をヨードグリセリンの液に浸し、舞依の虫歯を削った穴を丹念に消毒する。

「ふううん」

「はい、すこしがまんしょうねー」

次に佐和島先生は、ピンセットでガーゼをつまみヨードグリセリンに浸すと、もう一度舞依の虫歯を削ってキレイに形成された凹型の穴を消毒する。

「川合くん、ネオダイン」

「はい、先生」

恵梨香はワゴンのトレイに用意してあったネオダインを持ち、佐和島先生に渡した。佐和島先生は恵梨香からネオダインを受け取ると、ストッパーで舞依の虫歯の削った穴に塗薬して歯髄を保護し、そのあとセメントで仮封をした。

「はい、これで今日は全部終わり！！ 舞依ちゃん、よくがまんしてくれたね〜。先生、お礼をいうよ」佐和島先生がほめてくれる。

「よく頑張ったね〜えらかったね！！」と恵梨香や千咲、華子と成美も口々に舞依をほめてくれる。

舞依はみんなにほめられて、嬉しいやら恥ずかしいやらの気持ちになっていたが、“できた！！ 私がんばれた。うん！！ 自分でも頑張ったって思う！！”と思っていた。

ユニットが起こされ、舞依は口をクチュクチュとゆすぐ。まだ麻酔が効いているので、うまくゆすげない。

「舞依ちゃん、お口ゆすぎながら聞いて。次は右下7番の大きい虫歯を治療するよ。ちょっと治療が大変になるかもしれないけど、今日がんばれたんだから、つぎもがんばれるよね」

と佐和島先生がいうと、舞依は“ちょっと怖い……けど、頑張ろう”と思った。

「それから、今日治療したところはギリギリで神経を残せると思う。いま神経を保護するお薬を詰めてあるからね。次のとき状態が良かったら型取りをして、インレー、銀歯のことだけど、それを詰めるための準備をしようね」佐和島先生がやさしい目でいう。「……次回は来週月曜日の午後2時に来てくれるかな」

舞依が口をゆすぎ終わると、千咲が、

「エプロンはずすねー」といって、舞依の胸元から緑色の歯科エプロンを外してくれた。

ようやく、舞依は治療から解放された。舞依は、今日の治療をがんばれたことで、少し自信がついていた。そして、きっと次もがんばれると思った。

「舞依ちゃん、待ってるからね。つぎもがんばろうね」「舞依ちゃん、お大事にね」佐和島先生、スタッフのみんなに見送られた。

舞依は「ありがとうございました」と小さくお礼をいって頭を下げると、『リラックス歯科外来』第2診療室のドアを開け、出ていった。

「ただいまー」舞依が家の玄関を開け、中に入ってくる。

「おかえり。どうだった？ 泣かなかった？」仁美がエプロンで手を拭きながら出てきた。「やっぱり、泣いたの？」舞依の頬についた僅かな涙のあとを見つけ、心配そうに仁美が聞いた。

「うん。泣いちゃった。でも、がまんしてがんばったから、佐和島先生や助手のお姉さんにほめられた」

「そう、よかった。ママ、ちょっと安心しちゃった。……舞依、どこ治療したの？ ママに見せて」

舞依は仁美に向け、そおっと口を開ける。右下の5番に白い仮封がされてあった。この前奥田歯科医院で治療の途中で終わっている右下の6番と並んでの白い仮封である。

舞依は口を閉じながら、「痛かったけど、がまんしたよ。今日治療したところは、状態がよかったら、型をとって、次、銀歯にするって」といった。

「そう、よかったじゃない。治療完了第1号ね」

「うん、次は、その奥のちょっと染みてる右下の奥歯を治療するって」

「そう、じゃあ、次もがんばんなきゃね。さあ、手洗ってらっしゃい。ごはんにしますからね」

「はい」舞依は返事をして、化粧室にいった。

6. 大暴れ

5月23日。月曜日の昼休み。お弁当を食べ終えた舞依が職員室の黒川先生のところに行き、午後からの休みを許可してもらっていた。そう、舞依は、今日の午後、皓大歯学部附属病院の佐和島先生の治療を受けに行かなければならない。

舞依は、この前の治療で痛くてもがんばれたことを黒川先生に話して

いた。

「そう、よかったわねー、舞依ちゃん。ちゃんと治療がんばれたんだー。
やればできるじゃない」

「えへへ〜。はい」

笑顔で黒川先生に返事をする。舞依はこのあいだの治療でがんばれたこともあり、少し自信がついた。

「その調子で、がんばって虫歯治してね。先生、応援してるからっ」と黒川先生は午後からの休みの許可をくれた。

「ありがとうございます。先生、私、治療がんばってきます。失礼します」

舞依は、黒川先生にお礼とおじぎをして、職員室から出て、純姫女子学園から皓大歯学部附属病院に向かった。

「近野舞依さん、近野舞依さん、第2診療室にお入り下さい」

スピーカーから女性の声で、舞依に呼び出しがかかる。前回の治療でがんばれたことで少し自信のついた舞依は、“この前がんばれたんだから、きっと今日も大丈夫っ”と自らに暗示をかけ、ソファから立ち上がり、第2診療室のドアを開けて中へ入っていった。

「舞依ちゃん、こんにちわ」佐和島先生はじめ、スタッフのみんながニコニコしながら、舞依を迎えてくれる。

「こんにちわ」舞依はスクールバッグをもったまま、ペコリとお辞儀をして佐和島先生の前の患者用の丸椅子に座った。

「今日は、まずこの前治療した歯の状態を診て、よかったら詰め物をするための型取りをするね。それから、右下7番の大きい虫歯を治療するよ。神経までいってる虫歯の治療だから、ちょっと治療が大変になるかもしれないけど、先生と、ここにいるみんなといっしょにがんばろうね」と佐和島先生はいった。

「はい」舞依は返事をした。

「ところで、今日治療する歯、染みたり、痛くなったりしていなかった？」

この歯は、半年くらい前から、甘いものや冷たいものが染み、最近ではチクチクと痛みがあったが、舞依は正直に答えるのが恥ずかしく、「いいえ」と嘘の返事を小さな声でした。

「そう。痛みがないならいいけど、このまま放置するとすぐにでも痛みが出そうな歯なので、この歯から治療しようと思うんだ。……で、治療中痛みが出るといけないので、麻酔注射を打たなきゃならないんだけど……、どう、この前で少しは慣れた？ ……今日も、最初にリラックスするために笑気ガスはするからね」

舞依は、麻酔注射と聞いて怖かったが、その思いを振り払い、“ううん、この前がんばれたんだし、きっと今日もがんばれる！”とこころの中で念じ、佐和島先生に、

「……私、麻酔注射がんばってみます」といった。

「そうか！ うんうん、えらい！！ いい子だ、ほんとにいい子だ、舞依ちゃんは」「舞依ちゃん、すごいねー」口々にみんながほめてくれるので、やっぱり舞依はちょっと照れくさい。

「今日、ドキドキしてないかい？」と佐和島先生は、舞依の腕を取り脈拍をとる。71と少し速い程度である。

「うん、この調子なら大丈夫だ。じゃあ、治療台の方に行こうか」

舞依がハンドタオルを持って治療台に座ると、早速、恵梨香が緑色の歯科エプロンを舞依の胸元につけてくれる。それを見た舞依は、ちょっと緊張が高まったが、恵梨香が微笑みながら、

「舞依ちゃん、リラックス、リラックス」と励ます。バキュームや治療器具を準備している千咲も笑顔で頷く。

舞依は、“大丈夫、きっと大丈夫！ 先生も助手のお姉さんもやさしいから、大丈夫”と自分にいい聞かせる。

すべての準備が整い、それぞれ所定の位置にスタッフがついた。歯科

医用のいすには佐和島先生。その横のワゴンのところには恵梨香。ユニットの左側にはバキュームを操作する千咲。そして、笑気ガスのボンベと緊急用の血圧計を用意して、ユニットの周りにいる華子と成美。

「舞依ちゃん、血圧測るねー。まず、深呼吸してー」華子が指示する。

舞依がスー、ハァーと深呼吸している間に、成美が舞依のセーラー服の腕を捲り、血圧計をセットする。114、65。脈拍が68。今日も正常値にある。

その結果を見た佐和島先生が、大丈夫と見て取り、

「じゃ、治療始めるね。いす倒れるからねー」と歯科ユニットのペダルを踏み込む。ユニットが倒れる。

“はあ～、いよいよだあ～。……がんばれるかなあ～……。ううん、きつとがんばれる！”治療を前にふたたび緊張が高まってきた舞依は気持ちを落ち着かせようと、必死で自分にいい聞かせていた。

「まず、今日も笑気ガスを吸引してね」佐和島先生の声を合図に、華子と成美がマスクを舞依の口につける。佐和島先生が目盛りを見ながら慎重にバルブをひねる。シューッと音がする。笑気ガスを吸った舞依はまたしても気持ちが落ち着き、リラックスしていくのがわかった。

“なんで、笑気ガス吸うと、リラックスできるんだろ……。不思議……”

大きな无影灯が点灯され、舞依の口に当てられる。

「舞依ちゃん、お口開けようか」

「舞依ちゃん、お口大きく開けよっ。アーン」

“ドキドキするう～、お願いっ、痛くありませんようにっ！！”と舞依は思いながら、目を閉じ口を開けた。

佐和島先生が、デンタルミラーとピンセットを持ち、右下5番を仮封しているセメントを取り除き、汚物入れに捨てた。デンタルミラーで慎重に歯の状態を診ている。状態はいいようだ。

「大丈夫そうだよ、舞依ちゃん。うん、この分だとこの歯の神経は取らなくてもいいよ。うん、保護できる」

佐和島先生は、マスクをした顔でメガネの奥を柔和に微笑ませ、舞依にいう。

“えっ、ほんと！？　うれしい！！” 舞依は、痛い神経の治療をしなくて済むと聞いて、うれしかった。思わず笑みがもれる。

「よかったね、舞依ちゃん！」 千咲と恵梨香たちも喜んでくれる。

「じゃあ、型取りをしよう。次の治療でインレーを詰めることができるよ」と佐和島先生は、シリンジを持ち右下5番の削った穴にシューとエアーをかける。そして恵梨香から渡されたピンク色の印象材をのせた型を舞依の右の下顎と上顎に噛ませる。

「しばらく、じっとしててね」 ライトがいったん消される。

“やっと、ひとつ虫歯が治るよね……。よかったあ。……でも、まだ1本かあ……。はあ〜” 舞依は虫歯が治ることがうれしかったが、よく考えるとまだ1本目だと思い、ため息が出た。突然ライトが点き、まぶしくて舞依は思わず目を細める。

「もう、いいよ」と佐和島先生が、舞依の口から印象型を取り出す。舞依の削られた歯の型もよくわかる。

「お口ゆすごうか」 ユニットが起こされる。舞依は洗口台のコップを手に取り、クチュクチュと口をゆすぐ。舞依が口をゆすぎ終わると、ふたたびユニットが倒される。

佐和島先生はシリンジでもう一度舞依の歯にシュッシュッとエアーをかけた。ピンセットでガーゼをヨードグリセリンに浸し、舞依の歯を消毒する。

「川合くん、ネオダインをください」

「はい、先生」

恵梨香はネオダインを佐和島先生に渡した。佐和島先生はネオダインを受け取り、ストッパーで舞依の虫歯の削った穴に塗薬して歯髄を保護する。ふたたび舞依の歯は、セメントで仮封された。

「舞依ちゃん、よくがんばったね。この歯は次に詰めるだけだ」

「じゃ、次の同じ右の歯のいちばん奥歯だね。しっかり治療しようね」

と佐和島先生は、次の歯の治療にかかる。

「大丈夫だよー、舞依ちゃん。」といいながら、佐和島先生は舞依の右下のいちばん奥の歯茎に麻酔液に浸した衛生綿をピンセットでつまみ、トントんと表面麻酔をする。表面麻酔が効くまでしばらく待つ。

舞依は、右側の歯茎の表面がだんだん痺れてくるのを感じていた。

「川合くん、シンマ」

表面麻酔が効いたと見た佐和島先生は、続いて恵梨香に麻酔注射の指示を出す。

「はい、先生」

恵梨香の手から麻酔のカートリッジを装着された注射器が佐和島先生に渡される。

麻酔注射を受け取った佐和島先生は、デンタルミラーで舞依の唇の右側をひろげながら、

「そのまま、アーンしててねー」と麻酔注射を舞依の口の中に挿入し、舞依の右下のいちばん奥の歯茎に針を刺す。注射器を持つ佐和島先生の右手の親指がゆっくりと動き、舞依の歯茎に薬液が注入される。

「ふふんっ、ううっ」

舞依は、チクッとした痛みとそのあとのズーンとした麻酔液が入る痛みを感じて、思わず声を出し、目に涙が溜まったが、前回の治療のときの麻酔のようにグサ〜ッとした感じは受けなかった。

「はい、大丈夫よー。少しがまんしてねー」千咲が励ます。

やがて、薬液がすべて注入されると、次の麻酔注射が恵梨香から佐和島先生に手渡される。それを目にした舞依は、“え〜っ、まだ打つの〜”と半べそだったが、佐和島先生はまたもや舞依の口に麻酔注射を挿入して、舞依の歯茎に注射針を通して麻酔液を注入する。

「もう1本、打つよー。がんばってねー」

2本目の麻酔の薬液も無事注入された。

「舞依ちゃん、よくがまんしたねー。麻酔が効くまで少し休憩。お口ゆ

すごうか」

佐和島先生がユニットを起こしてくれる。舞依は口をクチュクチュとゆすぐが、麻酔が効いてきたためか水が口から漏れてうまくゆすげない。

“やだ、恥ずかしい！”

舞依はいままでの歯科治療よりも余裕が出てきていた。口をゆすぐ際に麻酔で痺れて水が漏れるのを恥ずかしいと感じる感情などは、いままでの舞依にはなかったことだ。

「もう効いたかなー」と佐和島先生は舞依の口を開けさせる。デンタルミラーの柄で右下7番をコンコンと叩く。「響く？」

舞依はプルプルと首を横に振る。

「効いたみたいだね。……それじゃあ、削っていくから」と舞依の口を開けさせ、ピンセットでふくみ綿をつまみ、いちばん奥の歯茎と頬の間にはさみ、治療のスペースをつくった。

次に佐和島先生はバーチャージャーからバーを選び出した。そして選んだバーをドリルの先端に装着している。

舞依はその光景をまじまじと見つめていたが、途中で怖くなり、視線をライトの方に戻した。“見たら、やっぱりコワイ……。痛くないかなあ……”

いつのまにか、舞依の目の前に佐和島先生のマスクをかけた顔があった。デンタルミラーとエアタービンを構えて、佐和島先生が、

「はい、お口大きく開けようね。アーン」と促す。

「舞依ちゃん、痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」バキュームを構えた千咲が、恵梨香とともに舞依を励ます。

「痛かったら、左手挙げて教えてね。すぐ治療止めるから」

“どうしよう……。また、怖くなってきちゃった……。ううん、この前がんばれたんだもん！ 大丈夫、大丈夫！ リラックス、リラックス！ 痛くありませんように！！”

舞依は、目をきつく閉じ口を開けた。千咲の持つバキュームが舞依の口に挿入される。佐和島先生のデンタルミラーが舞依の右頬をひっぱり

治療のスペースを確保すると、タービンが舞依の口の中に挿入される。

ドリルがう蝕した舞依の右下7番にあてられ、回転を始める。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュッ。

キュ、キュ、キュイイイーーン、キュイーン、キィーン。

キィーーン、キュイ、キュイ、キュイイイーン。

コオオオー、コオー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポー。

「いいよ、舞依ちゃん。その調子でお口開けててね」

「舞依ちゃん、痛くないからねー。すぐ済むからねー」

だが削り始めて1分ほどが過ぎた頃、舞依は削る振動とともに、徐々に痛みを感じ始めていた。そしてさらに1分が過ぎる頃、キーンとした下顎を突き抜けるような痛みを感じ、思わず声を出し、身を振った。

「ふふうーん、あっ、あっ、ひはいっ！！ ひはいっ！！」

舞依は左手を挙げる。

キュイイイーン。

タービンが大きな音を立てて止まった。

「舞依ちゃん、痛かった？」佐和島先生がやさしい目で舞依に聞く。

舞依は涙目でこくりとちいさく頷く。

「そっか。じゃあ、もう1本麻酔を打とうね。がまんしてね」

「川合くん、もう一度シンマお願いします」

「はい、先生」恵梨香が麻酔のカートリッジを注射器に装着して、佐和島先生に手渡す。

「ちょっと、チクッとするよー」

舞依の口に麻酔注射が挿入され、舞依の右下の歯茎に注射針が刺さる。

佐和島先生は、ゆっくりと薬液を舞依の歯茎に注入する。

「ふうん、うっ、うっ」

「はい、大丈夫だよー。ちょっとがまんしてねー」佐和島先生が舞依を励ます。やがて、麻酔液がすべて歯茎に注入された。

「麻酔が効くまで、しばらく待つね」

麻酔が効くのを待つ間、舞依は“舞依、麻酔注射、怖くて痛いのを、がまんしてるのに……、なんで麻酔効いてくれないの！？　お願い、今度こそ痛くありませんように！！”と思っていた。

「効いたかな？」佐和島先生がまたデンタルミラーの柄でコンコンと舞依の歯を叩く。舞依は右頬全体が痺れたようで、叩かれても何も感じない。

「効いたようだね」

佐和島先生はドリルの先端のバーを取り替えた。舞依は、それを目にすると、さっきのよりも尖っているような感じがした。

「はい、もう一度アーン」

「お口大きく開けようねー。ア〜ン」千咲が促し、舞依の左手を軽く握る。

舞依が口を開けると、千咲のバキューム、佐和島先生の持つタービンが挿入され、舞依の右下7番の虫歯を削り出す。

キィーイーーン、キュイ、キュイ、キュイイーイーーン。

コォー、コォォォー。ジュポポポォー。

キュ、キュ、キュイイーイーーン、チュイーーン。

コォォォー、コォー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポォー。

虫歯を削る治療が再開されて、30秒が過ぎた頃、またもやキーンとした鋭い痛みが舞依を襲った。舞依は痛みに脚をくの字に曲げる。

「ふん、ふん、あつ、ううっ、ひあいつ！！　ひはいひよ、へんへひー。ひゃひゅへへー！！　ほへはいつ、ひゃひゅへへー！！」

舞依はもはや半べそだった。千咲が握っていた左手を振りほどき、ふたたび左手を挙げる。

キュウウウーイーーン。

タービンが止まる。

「もう1本、麻酔打とうか？」佐和島先生が舞依に聞いた。

舞依は目にいっぱい涙をためながら、頷いた。

恵梨香からみたび麻酔注射が佐和島先生に渡され、舞依の歯茎に注入

される。休憩の後、タービンが舞依の口に挿入され、虫歯を削り出す。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コォー、コォォォー。ジュポポポォー。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

削りだして、いくら時間も過ぎないうちに、舞依を痛みが襲う。舞依は削る痛さに、泣き出してしまった。

「ふわあああーん、あん、あん、ふえーん、えん、えん」

“コワイよ！！ コワイよ！！ ヤダヤダ！！”

“えん、えん、痛いっ！！ 痛いっ！！ 痛いよう〜。もうやだっやだっやだっ！！ ……え〜ん、ズキズキするう〜。もう許してえー”

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「ああーん、あん、あん、えっ、えっ、ひはい、ひはいほー。ふえんふえひー」

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コォー、コォォォー、コォォォー、コォー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュポポポォー。

「えっ、えっ、ふえーん、えん、ひはいつ、ひはいつ！！」

キュイイイイーン。

みたびタービンが止まる。

「舞依ちゃん、だいぶ痛い？」佐和島先生が聞く。舞依は千咲にタオルで涙を拭いてもらいながら、小さく頷く。

「削って見たら、中で虫歯が大きく深く広がってて、神経が炎症を起こしかけてるから、痛いんだ」と佐和島先生は舞依に説明しながら、

「ねえ、舞依ちゃん。この虫歯はこれからまだだいぶ削って行かなきゃならないんだ。……で、これはちょっとつらいかもしれないけど、神経に直接……、虫歯の穴に直接麻酔注射をしようと思うんだ。そうすれば、あとの治療はずいぶん楽になると思うんだけど……」

“そんなんっ、コワイ！！” 舞依は怯えた目を見開いた。

「舞依ちゃんが怖いのはわかるよ。でも、この歯を今日このまま閉じてしまったら、痛み出すのはほぼ間違いないと思うんだ。……だから、つらいのはわかるけど、舞依ちゃん、がんばってみよ」

「そうよ、舞依ちゃん、この前がんばれたんだから、大丈夫よ。ねっ！　だから、先生のいうとおりにしよ」恵梨香と千咲、華子と成美が舞依を笑顔で励ます。

舞依は、“どうしよう～……”と泣きたくなかったが、この状況から逃れるすべを思いつけず、涙目でこくりと頷いてしまった。

「よし、いい子だ、舞依ちゃんは。先生、舞依ちゃんができるだけ痛くならないようにがんばるからね」と舞依に話しかけてから、恵梨香の方に目配せした。恵梨香は千咲と麻酔注射の準備をする。

「もう一回、マスクつけようね」と華子と成美が笑気ガスのマスクを舞依の鼻と口につける。佐和島先生がふたたび慎重に操作する。笑気ガスが舞依の鼻へ口へ吸引される。

“ああっ、なんだろ、この気持ち……”舞依は笑気ガスを吸引することでふたたび少しリラックスした。

「じゃあ、始めるよ。舞依ちゃん、痛いと思うけど、がまんしてね」

「舞依ちゃん、がんばろうね。私たちもついてるから」舞依の周りを囲いながら、千咲と恵梨香、華子と成美も口々に舞依を励ました。

「舞依ちゃん、この麻酔注射は少し危険が伴うと思うんだ。だからイヤだと思うけど、開口器をつけさせてくれないかなあ……」佐和島先生がいう。

“そんなあ！？　やだっ”舞依は、笑気ガスでリラックスしたにもかかわらず、開口器ということばを耳にして、目にじわっと涙が溜まる。

「先生、舞依ちゃんが怖いのは十分分かるんだ」と佐和島先生は、「ただ、万一麻酔注射の途中に舞依ちゃんが動いてしまったら、注射の針で口の中とかを傷つけないとも限らないんだ。だから、……ねっ、開口器しよ？　そのかわり麻酔注射が終わったら、開口器は必ず外すよ。先生、舞依ちゃんに約束する」と誠実でやさしい目をしていった。

舞依は、“コワイよ〜”と思ったが、佐和島先生に説得されて、つい頷いてしまった。

「舞依ちゃん、ありがとう！」と佐和島先生は、「大丈夫、先生、できるだけ舞依ちゃんが痛くないように治療するから！」といい、恵梨香に「川合くん、アングルワイダーをお願いします」と指示した。

恵梨香がワゴンのトレイから開口器を手に取り、「大きくお口開けようね。ア〜ン」と舞依に向かってくる。舞依が怖々口を開けると、千咲が舞依の口の両端を抑え、「ちょっとがまんしてね、舞依ちゃん」といった。恵梨香が千咲を抑えている舞依の口に開口器を装着する。

舞依に開口器が装着されると、佐和島先生がデンタルミラーと麻酔カートリッジの装着された注射器を持って、「舞依ちゃん、いくよ。肩の力を抜いてー。リラックスしてー」と舞依を促した。

“コワイ！ コワイ！！ どうしよう〜……。ああん、助けてー、ママー！！ ……ぐすん、どうか痛くありませんように！！” 開口器をつけられ、口を開けさせられたままの舞依は祈るような気持ちで目を閉じた。スタッフが不測の事態に備えて、舞依をいつでも抑えつけられるように構える。

舞依の口の中に麻酔注射が入り、針先がさっきまで切削治療をされていた舞依の右下7番の虫歯の穴に吸い込まれるように入っていく。佐和島先生は、舞依の虫歯に侵された神経にめがけて、慎重に注射針を刺し、麻酔液を注入し始めた。

「！？ ひはぁーいっ！！ ひはいっ！！ ひはいっ！！」

「イダーイー、イダーイー！！」

舞依は、針先が虫歯の神経にふれ、少し麻酔の薬液が注入された瞬間、大声をあげ、からだを振り、足をパタパタして大暴れしだした。薬液が虫歯に侵された神経に浸透し、歯の中がひきちぎられるように感じた。気絶するくらいに痛い。

「危ない！！ みんな抑えて！！」恵梨香がスタッフ全員に指示を出した。恵梨香も千咲も華子も成美も、みんな舞依のからだを抑えつける。

「うわあああーん、あんあん、ひはいつ、ひはいひよおー！！ えっ、えっ、ひはいつ、ひはいつ、ほふ、ひやひゅへへー！！ あんあん」
「イダアイヨオ～イダアイヨオ～！！」

「舞依ちゃん、もうちょっとのがまんよ。だから、お願いおとなしくして、ねっ」

「あーん、あん、わあああーん、ひやひゅへへー！！ ひひゃっ！！ ひひゃっ！！ へんへひ、ほへはい！！ えーん、ひはいひよほおー！！ えっ、えっ」

“痛いっ痛いっ痛いっ！！ 許してえー！！ やだっ！！ やだっ！！ お願い、佐和島先生もう止めてー！！ ちゃんと毎日歯磨きするからっー！！ もう許してえー！！” 舞依はとめどなく涙が流れ、開口器を詰められた口からは唾液を流し、脂汗を額に滲ませて、なおも身を振り、抵抗している。スタッフの女性4人の力では抑えきれないほどだ。もはや舞依のスカートは全開で捲れ上がり、舞依のかわいい白パンツは丸見えになっている。

佐和島先生のもつ麻酔注射のカートリッジの中の薬液はまだ半分くらいしか減っていない。

「先生！！ これ以上は……」と恵梨香は佐和島先生を見て、「先生、ベルトの許可をお願いします」と懇願する。

佐和島先生は、いったん麻酔注射の針を舞依の虫歯の穴から抜き、「うーん、舞依ちゃんにはトラウマがあるから、ほんとはしたくないんだけど……、しかたないな」と舞依が大暴れしているのを見て、決断した。「戸田くん、川合くん、ベルトを……」

「はいっ」千咲がすばやくベルトをとってきて、恵梨香、華子と成美とともに協力して、舞依のからだを治療台にベルトで固定してしまった。

佐和島先生が、ふたたび舞依の虫歯の穴に麻酔注射を入れ、慎重に、そしてすばやく舞依の虫歯に侵された神経に薬液を注入する。

「わあああーん、あんあん、うわああああーん、えっ、えっ」

「あーん、あんあん、うわああああーん、えっ、えっ」

「舞依ちゃん、ごめんよー。もうちょっとだからね」

ようやく麻酔液が、舞依の虫歯の神経にすべて注入された。

「舞依ちゃん、つらかったねー。よくがんばったねー」

ヒックヒック泣いている舞依に佐和島先生、スタッフのみんなが慰める。舞依の涙に濡れたほほをやさしく千咲がタオルで拭き取る。麻酔が効いてくるまでしばらく待つ。

「ベルトで固定してごめんね、舞依ちゃん。でも舞依ちゃんが暴れちゃったから、治療を安全に進めるためなんだ。ゆるしてね」と佐和島先生は、「そのかわり、さっきの約束通りアングルワイダーは外すね」といって、舞依の口から開口器を外してくれた。

佐和島先生はすぐに次の治療に取りかかる。タービンのドリルの先端に新たなバーを取り付けた。デンタルミラーを持ち、

「舞依ちゃん、大丈夫だから、お口開けて」と舞依に口を開けさせる。

舞依は、“もういやっ！！　こんな痛い思いするなんて……”と涙目で思った。が、恵梨香や千咲などのスタッフのみんなは「舞依ちゃん、あともう少しがんばろ」「いままでがんばれたんだから、今度もがんばれるよ」「がんばって、虫歯治そうよ」とやさしい目で舞依を口々に励ます。舞依はしかたなく怖々ながらも口を開けた。

佐和島先生は、デンタルミラーの柄で舞依の歯を叩き、麻酔が効いているかを確認めた。そして、今度はデンタルミラーのほかに、タービンを持つ。左側の千咲はバキュームを構えている。

「今度こそ痛くないよ、舞依ちゃん。お口開けよ。アーン」

「舞依ちゃん、ほんと、今度こそ痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

舞依は本当にもう治療されるのがイヤだった。しかし、ベルトで治療台に固定されこの状況から逃れることもできない。それにもし口を開けなかったら、舞依が嫌いな開口器をまた詰められるかもしれない、と思って、嫌々ながらも口を開けた。

「いい子だね、舞依ちゃん」

舞依の口に、千咲のパキュームが入る。

コォー、コォォォー。

次に佐和島先生の持つデンタルミラーとタービンが入り、ふたたび舞依のう蝕した右下7番の歯にあてられ、ドリルが虫歯に侵された部分を抉り始める。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キイイーン、キイーン、キイイーン。

コォー、コォォォー。ジュッ、ジュ、ジュポポポポォォォー。

キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

麻酔注射を直接虫歯の穴に打ったことが功を奏したのか、舞依はそんなに痛みを感じずに済んだ。が、さきほどの麻酔注射のことがあったので、痛いのもコワイのも通り越して、舞依はひたすら大泣きしている。

「うわぁぁーん、あんあん、えっ、えっ、わぁぁぁーん」

「ぐすん、くすん、えっ、えっ、うわぁぁー」

「舞依ちゃん、ほんと大丈夫だよ。だから、そんなに泣かないで、ねっ」
佐和島先生、スタッフのみんなが舞依を必死でなだめるが、舞依は泣きやまない。

キュイーン、キュキュキュキュ、キュイイイイーン。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーン、チュイーン、チュイイーン。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

コォー、コォォォォー。

「えっ、えっ、くすん、うわぁぁぁーん、あんあん」

キュイイイイーン。

タービンが止まる。

「舞依ちゃん、お口ゆすごうか」ユニットが起こされる。舞依はヒックヒックとしゃくり上げながら、口をゆすぐが麻酔で痺れた唇は舞依の意思に反して、ふくんだ水が漏れる。千咲が舞依の涙をタオルで拭いてくれる。

“痛かった～。……これだけ、痛い思いをしたんだし、それにずいぶん削ったし、もう削るの終わりよね……” と思いながら、佐和島先生を見ると、またしてもドリルの先を交換している。舞依の目にまた涙がじわっと溢れる。持っていたハンドタオルで涙を拭いた。

佐和島先生は舞依が口をゆすぎ終えたのを見ると、ユニットを倒した。ライトが舞依の口にあてられる。

千咲がバキュームを構える。佐和島先生はタービンとデンタルミラーを構え、

「痛くないからね、もうすぐ終わりだからね」と舞依が口を開けるように促す。

舞依は心底いやだったが、しかたなく口を開ける。千咲の持つバキュームと佐和島先生も持つタービンが舞依の口の中に入り、容赦なく虫歯を削り出す。

キューーン、キューン、チュイイイーン。

キューーン、キューーン、キュイ、キュイ、キュイイイーン。

コオオオオー、コオー。ジュ、ジュ、ジュポポポポー。

「ふうん、ふんふん、えっ、えう、あんあん、イダアイヨオ～」

「大丈夫だよー、舞依ちゃん、もうちょつとがまんしようねー」千咲と恵梨香が励ます。

キューーン、キュイキュイ、キュイイイーン。

「あん、あん、えっ、えっ、ふうーん」

キイイイイーーン。

タービンが止まり、舞依の口からバキュームとタービンが出された。

「お口ゆすいでいいよ」

ユニットが起こされた。舞依はクチュクチュと口をゆすぐ。洗口台に口を向けながら、“舞依、これだけがまんしたんだもん！ 今度こそ、削るの終わりだよ？ ううん、きっとそう。きっと終わりよ” と思いながら、口をゆすぎ終え、ユニットの正面を向いた。舞依の視線に佐和島先生の姿が映ると、佐和島先生はバーチャージャークから新しいバーを

選び、ドリルの先端に装着している。

“えっ！？　なんで！？　まだ削るの。……お願い！！　もう許してえ〜”

「舞依ちゃん、お口開けよ。痛くないからね、もうすぐ終わりだからね」

「舞依ちゃん、痛くないからねえ〜大きくアーンしようね〜」

こうして、舞依の虫歯を削る治療は、佐和島先生が何度も何度もドリルの先を交換して約1時間ほど続いた。舞依の顔は涙でグチャグチャだ。

「はい、舞依ちゃん、削るのはもう終わり！！　あと、歯の中にお薬を詰めるから、もう少しがまんしてね」

佐和島先生は、舞依の削ってきれいに形成された歯の穴に、シリンジでエアーをシュッとかけた。次にピンセットで衛生綿をヨードグリセリンの液に浸し、舞依の虫歯を削った穴を丹念に消毒する。

「ふううん」

「はい、もうちょっとがまんしてねー」

佐和島先生は、ピンセットでガーゼをつまみヨードグリセリンに浸すと、もう一度舞依の虫歯を消毒する。次いで恵梨香に指示を出す。

「川合くん、カルビタール」

「はい、先生」

恵梨香はカルビタールを佐和島先生に渡す。佐和島先生はカルビタールをストッパーで舞依の虫歯の削った穴に塗薬した。

「ううっ」

舞依は、削った歯が強烈に染み、思わず声をあげ、ベルトで固定されたからだが大変と動いた。

「舞依ちゃん、大丈夫だよー」千咲が声をかける。

佐和島先生は、舞依の歯にガーゼを詰め、セメントで仮封した。

「舞依ちゃん、お疲れ！！　今日の治療はこれでおしまい！　よーく、お口ゆすいでね」と佐和島先生がいいながら、ユニットを起こしてくれる。千咲と恵梨香がベルトを外してくれる。

舞依は口をゆすぐが、麻酔のせいであいかわらずうまくゆすげない。

「舞依ちゃん、そのまま聞いてくれるかな。今日の治療は、ちょっと大変になっちゃって、ごめんね。先生、舞依ちゃんがこわいのわかってるから、本当はベルトで固定したくなかったんだけど、治療を安全にすすめるためにしたんだ。ほんとにごめん！！」

“先生のうそつき！！ 舞依、ほんとに痛かったっ！！ 怖かったっ！！” また涙が溢れてくる。

「……削ってみたら、舞依ちゃんの虫歯、思った以上に広く深く広がってて、こんな治療になっちゃったけど……。今日の治療では神経は取り切れていないんだ。これ以上は舞依ちゃんのからだが治療の負担に耐えられないと思ったから……。それで神経を殺すお薬を詰めてあるんだ。次の治療ではすべて神経を取れると思う……。今日は痛み止めと炎症を抑えるお薬を処方しておくから、帰りに薬局によってお薬をもらってね」

「次は、今週の金曜日に、今日と同じ時間、午後2時に来てくれるかな。……もし、今日治療したところが痛むようだったら、そのときは電話してね。すぐに診てあげるから」

「……はい」 憂鬱そうな顔で、舞依は答えた。

「じゃあ、待ってるから。お大事にね」

千咲が舞依の胸元から歯科エプロンを外してくれる。

「舞依ちゃん、お疲れさま。よくがんばったね」

「はい。……ありがとうございました」 舞依は小さくおじぎをした。そしてユニットから立ち上がろうとした。が、過酷な治療のせいか、舞依のからだはふらついた。

「大丈夫！？」あわてて、佐和島先生、千咲、恵梨香が舞依にかけより、支えてくれる。

「……大丈夫です」

「舞依ちゃん、今日のはやく寝て、十分にからだを休めてね」

舞依は「はい」と頷くと、第2診療室から出ていった。

ようやく過酷な治療が終わった。

疲れたからだを引きずり、舞依は皓大歯学部附属病院の前にある調剤薬局のなでしこ薬局によった。女性ばかり4名の薬剤師がいる。

「いらっしゃいませー。お薬の処方ですか？」栄倉友里という名札をつけた若い薬剤師がほほえみながらむかえてくれた。口元から白い歯が見えた。歯にコンプレックスのある舞依にはその白さがまぶしい。

舞依は涙の跡のあるほほのまま小さく頷いて、友里に、佐和島先生の処方した処方箋を渡した。

友里は、処方箋を受け取り、内容に目を通してながら、

「近野舞依ちゃん、ね。だいぶ、疲れているみたいねー。治療、痛かった？」

舞依は、薬剤師のやさしいことばに、また涙が溢れてくる。あわてて、スクールバッグからハンドタオルを取り出し、涙を拭いた。

「あらあら、ごめんなさい。すぐ処方しますから、そこのソファーにかけて待っててね」

友里は調剤室に入っていき、薬品棚から処方箋に従って、薬を処方する。

“はあ〜。……痛かった……。ぐすん、……もう歯医者さんいやだよ”

麻酔はまだ効いているので、右頬は全体が痺れたままだ。しばらくすると、処方を終えた友里が調剤室から出てきた。薬と薬袋、それに小さなノートのようなものがのった透明のプラスチック製のトレイを手に持っている。

「お待たせしました」

舞依はソファーからよろよろと立ち上がり、友里いるカウンターの方に行こうとするが、ふらついてしまい、ソファーに手をつきからだを支える。

「あっ、無理しなくていいのよ。ソファに座ってて。私がそっちへ行くから……」と友里はあわてて声をかけ、薬ののったトレイをもったまま、ふたたびソファにかけた舞依のところへやってきた。

「舞依ちゃん、佐和島先生の治療受けてるのね。佐和島先生、やさしいでしょ？」

「はい、……でも、今日の治療は痛かった……」舞依はまたじわーっと目に涙が浮かんでくる。

「あらあら、もう泣かないの、ねっ。ここは治療室じゃないんだし……。安心して、ねっ。……今日はどんな治療受けたの？ よかったら、お姉さんに教えて」

友里が舞依にやさしく聞いた。

「くすん、……虫歯の穴に直接麻酔注射されて……、大暴れしたら、ベルトで治療台に固定されて……、そのあと、1時間も虫歯削られて……」

「……それはつらかったわねー。よくがまんしたわねー」

「……でも、私が悪いんです。歯医者さんの治療が怖くて、虫歯ほったらかしにしてたんだし……、くすん」

「わかるわー。お姉さんも虫歯治療、苦手だもの……。治療痛いよね」

舞依は友里のことばに、友里の顔を見た。友里はいたずらっぽい顔でウインクすると、そっと口を開けて、その中を見せてくれた。

「！？」舞依は目を見張った。友里の口の中を見るとほとんどの歯に治療痕があり、きれいでうらやましく思った真っ白な友里の前歯は差し歯だった。奥歯にもインレーやクラウンがたくさん入っている。

「ねっ、私もこのとおりなの。だから舞依ちゃんの気持ちよくわかるつもりよ」

と口を閉じた友里は、すぐにまじめな顔になり、

「舞依ちゃん、こっちが痛み止めのお薬ね。痛み出したら飲んでね。ただし、1回飲んだら6時間は間隔を開けてね。6錠でてます。それからこっちは炎症止めのお薬ね。これは朝、昼、夕方とお食事のあとに飲ん

でね。5日分です。あとこれは、お薬手帳ね。今日処方されたお薬のことが書いてあります。今後、お薬を処方の際にこちらの手帳に書いて行きますから、病院を受診するときは持ってきてくださいね」といった。

「はい。……ありがとうございます」

舞依は、財布からお金を出して、会計を済ませる。

「舞依ちゃん、今日はお風呂も止めて、はやいめにからだを横にして休めた方がいいわ。……もう少しここで休んでらっしゃい。中に私たちの仮眠用のベッドがあるから」

舞依は友里のことばに甘えて、体調が整うまでしばらくベッドで休ましてもらった。

午後5時過ぎ……。舞依は友里の「お大事に」ということばをあとに、なでしこ薬局を出て、家に帰る途中だった。その道すがら麻酔の効果が切れて、今日削って治療をした右奥の下7番の歯がズキンズキンと痛み出した。目から涙がポロポロ〜と零れ出す。

「えっ、えっ、しく、しく」

通行している人が見ているにもかかわらず、泣いてしまった。スクールバッグからハンドタオルを取り出す。痛み出した歯の側である右頬と口をハンドタオルでおさえ、左手で涙を拭う。

“えっ、えっ、痛いっ！！ 痛いよう！！ ママー、たすけてー。痛くて痛くて、がまんできなあい！！ えっ、えっ、ぐすん”

叫びたいような気持ちをがまんして、とぼとぼと歩いた。

7. 大泣き

月曜日に佐和島先生の治療を受け帰宅したあと、舞依はなでしこ薬局でもらった痛み止めの薬を飲んだ。

痛み止めの薬を飲んだあと、しばらくは薬が効いて楽になるのだが、2～3時間もすればまた痛み出す、の繰り返しで、とうとう37度の微熱が出てしまった。

翌日も舞依の体調はすぐれず、母の仁美に電話をしてもらい、学校を休んだ。

キーン、コーン、カーン、コーン。

“舞依ちゃん、今日、お休みだったわねー” 6時間目が終わり、職員室に戻った黒川恵梨子先生は自分の席に着きながら、近野舞依のことを心配していた。

“……昨日の治療、どうだったのかしら。昨日の午前中は、初めての治療がうまくいったって、舞依ちゃんよろこんでたのに……。そうだ！ お見舞いにいってみよう！”

そう決めると、黒川先生はいそいそと机の上をかたづけ、「お先に！」と目を丸くする同僚を後目に大急ぎで職員室を出ていった。

校門を出て、純姫の女生徒のお気に入りの『90P』に向かう。このクレープやケーキは純姫の女生徒のみならず、黒川先生も大ファンだった。ケーキのショーウィンドウを見るが目移りする。

“どれにしようかしら……。舞依ちゃん、どれが好きかしら……”
選んでいる最中にハッと気づく。

“いけない！ 私ったら。舞依ちゃん、今、歯の治療中なんだから、甘い物は厳禁よね。自分が好きなものだから、つい……”

「お決まりですか？」お店の人が聞いてきたが、
「すみません。また今度にします」とあわてて答え、『90P』をあとにする。

結局、舞依の家に行く途中にあるフラワーショップによって花束を買い、舞依の家に向かった。

舞依は、パジャマ姿でベッドに寝ていた。まだ昨日治療した歯が疼く。痛み止めは2～3時間しか効かない。痛むたびに舞依の頬は涙に濡れる。だが、昨日に比べるとだいぶ痛みはましになり、熱はもう下がった。

玄関の方で、母の仁美と誰かが話している気配がする。

やがて、トントンと階段を上がる足音がふたつ聞こえてきて、舞依の部屋のドアがガチャッと開いた。

仁美が顔を出し、

「舞依、黒川先生がお見舞いに来てくださったわよ。きれいな花束まで持ってきていただいたのよ。起きてごあいさつなさい」といった。

「いいのよ、舞依ちゃん。そのままベッドに横になっていて」と花束を持った黒川先生が部屋に入ってきた。

「どうぞ、ごゆっくりしてってください。舞依もよろこびますから。何か冷たいものでももってきますね」と仁美は黒川先生から渡された花束を持って部屋を出ていこうとする。黒川先生は、

「お母さん、どうぞおかまいなく」と仁美の背中にいった。

黒川先生は舞依に向き直ると、

「舞依ちゃん、熱が出たんだって？ 大丈夫？」とやさしく聞いた。

舞依はパジャマの袖で涙を拭うと、

「大丈夫です。明日は学校行きます」と健気にいう。

黒川先生は、

「無理しなくていいのよ。体調が悪いときはしっかり休んでね。……舞依ちゃん、きのうの治療どうだったの？ 痛かったの？」といった。

舞依は黒川先生のやさしいことばにじわ～っと涙が滲んだが、ぽつりぽつりと昨日受けた治療について、すべて黒川先生に話した。

「……そう、つらい治療だったのね。よくがんばったわ、舞依ちゃん」

「せんせい……、私、また痛い治療かと思うと、すごいユウツです、もう歯医者さんヤダよ～。えっ、えっ」

「舞依ちゃんの気持ち、先生、よくわかるわ。でもがんばって通わな

いと、虫歯治らないでしょ？　ねっ、もう泣かないの」と黒川先生はやさしく舞依を諭す。

舞依は泣きながら、こくりと頷く。

ガチャッ。

母の仁美が、お盆に『90P』のザッハトルテケーキとアイスティー、それから黒川先生がもってきてくれた花束を花瓶に生けたもの、をのせて部屋に入ってくる。お盆をテーブルの上におきながら、

「何もなくて、つまらないものですが……、召し上がってください」と黒川先生に勧めた。花瓶は舞依の勉強机におく。

「もう帰りますので、ほんとにおかまいなく……。そうですか、では遠慮なく……」

舞依も黒川先生がお見舞いに来てくれたのが嬉しかったのか、「せんせい、ゆっくりしていって」というので、黒川先生も好物の『90P』のケーキということもあり、つつい長居をした。

舞依は、黒川先生がお見舞いに来てくれたことで少し元気が出たようだ。それで先生が帰る際には、玄関まで出てきてもう一度「明日は学校へ行きます」と約束した。

翌水曜日、舞依は純姫に登校した。

朝のホームルームの時間、舞依の顔を見て、黒川先生はホッとした。しかし舞依の顔は腫れぼったい。

2時間目、黒川先生の英語の授業である。

「……She said "I have a bad toothache."……」

黒川先生は女生徒に教科書を音読させながら、“今日のページ、舞依ちゃんには刺激が強すぎるかも……”と思って、舞依の方を見る。するとどうだろう、舞依は泣いている。気づいた隣の席の女生徒が「舞依、どうしたの？」と心配そうに声をかけている。教室がざわめきだした。

「はい、みんな静かに！」と黒川先生は注意をして、舞依のところに歩いていく。

「舞依ちゃん、どうしたの？ どこか痛むの？」

「くすん、くすん」舞依は泣いたまま、こくりと頷く。どうやら月曜日に治療した歯がまた疼きだしたようだ。

「みなさん、先生は近野さんを保健室に連れて行きますから、先生が戻るまで、各自教科書を自習してるように。いいですね？」

「はあーい」女生徒は自習と聞いて、みんなうれしそうな顔をしている。

「さっ、舞依ちゃん、保健室に行きましょう」

黒川先生は、舞依を教室から保健室に連れて行った。

舞依は保健室で、保健の先生から痛み止めの薬をもらい、それを飲んでベッドに横になっていた。落ち着いたのか軽い寝息をたてている。時間はすでに午前11時30分を過ぎている。

黒川先生は保健の先生に舞依を見守ってもらい、保健室の電話から舞依の母の仁美に電話した。

「……あっ、もしもし、近野さんのお宅ですか……。舞依ちゃんの担任の黒川恵梨子です。……お母さまですか。早速なんです、舞依ちゃん、治療している歯が痛み出しちゃって……。はい、はい。……それで、いま、保健室で休んでもらっているんですが……。はい、保健の先生に痛み止めの薬をいただいて、それを飲んでもらいました。……で、お母さま、よろしければ、私が舞依ちゃんがいま通っている皓歯大学の佐和島先生に連絡をして、今日、午後からでも診てもらうようお願いしようかと……。はい、はい。……では、よろしいですね？ では、皓歯大学の番号は……。はい、はい。……はい、では早速連絡しますので」

仁美から皓歯大学の佐和島先生の番号を聞き、メモを取る。そして電話をし終えた黒川先生は、ベッドに寝ている舞依のところにやってきた。舞依を見るともう起きていたようだ。黒川先生は、

「舞依ちゃん、お母さまのお許しをもらったから、先生が佐和島先生に連絡するわね。いい？」といった。

舞依は、力なく頷く。 “くすん、ズキンズキンッして痛いよお〜。
助けてえー！”

黒川先生は、早速皓歯大学に電話した。

「あつ、皓歯大学歯学部附属病院ですか。 リラックス歯科外来の佐和島先生をお願いします。……もしもし、リラックス歯科外来ですか？ 私、純姫女子学園中等部の教師で、近野舞依さんの担任をしております黒川と申します。いつもお世話になっております。佐和島先生は……、はい、はい。そうですか診察中ですか。……はい、はい。実は、そちらで治療していただいている近野舞依さんのことなんですが、月曜日に治療していただいた歯が痛み出しまして……。はい、はい……。先生に聞いていただけるんですか。はい、待っております。……、もしもし、はい、はい。……えっ、診ていただけるんですね……。はい、ありがとうございます。では、午後2時にそちらに行けばいいんですね……。はい、よろしくお願いします」

黒川先生はふたたび舞依のベッドにやってくると、

「舞依ちゃん、佐和島先生、午後2時に診てくれるって。診察券持っている？ そう。じゃあ、これから早退して行ってらっしゃい。いいわね」と舞依の目を見つめながらいう。「早退の届けとかは、先生、しとくから」

舞依は、 “また痛い治療かと思うと、すごいユウツ……。歯医者さんヤダよ〜” と思ったが、麻酔が切れてからの治療の時以上の痛みをがまんすることができず、この痛みから逃れたくて、早退して、いやいやながら皓大歯学部附属病院の佐和島先生のところへ向かった。

5月25日午後2時。舞依は緑色の歯科エプロンを胸元につけられ、佐和島先生の第2診療室の歯科治療ユニットに座っていた。

「痛み出しちゃった？」と佐和島先生は、「うーん、やっぱりこの前、すべて神経を取っとくべきだったかなあ〜。でもあれ以上は、舞依ちゃん、治療の負担に耐えられそうもなかったし……」と思案するようにいった。

「まあとにかく、まだ神経が残ってるから、今日は麻酔をして削り、そのあと神経を全部取ってしまうよ。そしたら少しは楽になると思うから……。今日の体調はどう？ さっきはこの前の治療のあと熱が37度でたっていったけど」

「はい、もう熱は下がりました」舞依は憂鬱そうに小さな声で答えた。

「どれどれ」佐和島先生は、舞依の脈を取り、おでこに手を当てた。

「うん、大丈夫みたいだね。でも念のため、体温と血圧を測っておこう。

小松さん、平田さん」

「はい」と華子と成美が舞依のセーラー服の袖を捲り、血圧計を取りつける。

「舞依ちゃん、深呼吸しよ」

舞依がスー、ハァーと深呼吸する。成美が血圧計を操作して、舞依の血圧を測定する。113、66。脈拍が67。正常値の範囲内だ。さらに舞依の脇に体温計を挟ませる。体温は36度5分で平熱だった。

「舞依ちゃん、これつけますよー」

次に、華子が舞依の口に笑気ガスのマスクを取りつけた。この前と同じように、佐和島先生が笑気ガスのボンベのバルブをひねって、慎重に笑気ガスを舞依に吸引させる。舞依の不安そうだった表情が少し落ち着いた色に変わったのを見ると、佐和島先生は治療の準備に取りかかる。スタッフも所定の位置についた。いつもと違い恵梨香がバキュームを操作するのか、舞依の左側にいる。千咲は佐和島先生の横の治療用具などがのったワゴンのところにいる。あたまの上にある无影灯がいくつもついた大きなライトが点灯される。

“はぁ～。いよいよだぁ～。始まっちゃう……。コワイよぉ～” 舞依は思った。

ユニットの歯科医用のいすに座った佐和島先生が、

「舞依ちゃん、お口開けようねー」と、デンタルミラーを持ち、ピンセットで麻酔液に浸した衛生綿をつまみ、舞依の口に近づける。

舞依は、“はぁ～、コワイよ～” と思いながら、目を閉じ口を開けた。

舞依の口の中に、佐和島先生が持つピンセットが入り、右下のいちばん奥の歯茎に表面麻酔がされた。

麻酔液が歯茎から舌の方に漏れ出てきた。“苦ぁーい！”舞依の口の中に麻酔液の苦みが広がる。と同時に、麻酔を塗った右側の歯茎がだんだんと痺れ出す。

「戸田くん、シンマ」

表面麻酔をしてしばらく待った後に、佐和島先生は千咲に麻酔注射の指示を出した。

「はい、先生」

千咲から麻酔のカートリッジを装着された注射器が佐和島先生に手渡された。佐和島先生は、千咲から受け取った麻酔注射とデンタルミラーを持って、舞依に口を開けるように促す。「お口アーンしよ」

「舞依ちゃぁーん、怖くないよ～。お口開けようね～痛くないからね～。ア～ン」千咲が舞依に声をかける。

舞依はこの前に受けた治療が思い出され、目に涙がふるふると溜まった。“神様、お願い！！ 今日の治療、どうか痛くありませんように！！”

佐和島先生は、舞依が目を閉じて口を開けたのを見て、舞依の口腔内に注射器を挿入し、右側の歯茎に麻酔注射の針を刺した。舞依が痛くないように極力慎重に針を刺しているのも、本当はチクッとするくらいしか感じないはずだが、怖さが先に立っている舞依にとっては、グサッという感じがして、からだが硬直する。

「んんんっ」

「大丈夫だよー。もう少し力抜いてー」

「舞依ちゃん、リラックス、リラックス」佐和島先生、千咲、恵梨香が交互に呼びかける。

“ふんふん、コワイよ～、せんせ～”

ゆっくりと舞依の歯茎に麻酔液が注入される。舞依は右の歯茎に麻酔液が押し入ってくるようなズーンとした圧迫感を感じていた。薬液がす

べて歯茎に注入され、カートリッジは空になる。やがて舞依は針が歯茎から抜かれる感覚を覚えた。舞依はユニットが起こされ、口をゆすがせてもらえると思ったが、佐和島先生はデンタルミラーで舞依の唇をひろげたままにしている。いぶかしく思い、舞依が薄目を開けると、

「戸田くん、もう1本お願いします」という佐和島先生の声がし、「はい、先生」と千咲が答え、また麻酔カートリッジを装着した注射器が千咲の手から佐和島先生に渡される。

“えっ！？ まだ打つの！？” 舞依はまた涙が出そうになる。

容赦なく2本目の注射針も舞依の右の歯茎に刺さる。痺れつつある歯茎に薬液が注入される圧迫感のみが強い。やがて麻酔による痺れ感は唇から右頬全体をおおってくる。

「舞依ちゃん、麻酔は終わり！ お口ゆすごうか」佐和島先生がユニットを起こしてくれる。

舞依は少し目尻に溢れた涙を持っているハンドタオルで拭くと、クチュクチュと口をゆすぐ。麻酔が効いてきたせいで、唇の端から水が漏れ、うまくゆすぐことができない。

舞依が口をゆすぎ終えるのを見て、佐和島先生はふたたびユニットを倒す。

「麻酔が効くまで、少し待とうね」いったん、あたまの上のライトが消される。そのままの姿勢でしばらく待つ。5分くらい経ったろうか、佐和島先生が舞依の方に向き直り、

「もう、いいかなー」と口を開けるようにいった。ライトが点灯され、舞依の口に焦点があわされる。

舞依が口を開けると、佐和島先生はデンタルミラーの柄で右下7番の歯をコンコンと叩き、

「どう？ 感じる？」

と聞いた。

麻酔が効いたためか、何も感じない。舞依はプルプルと首を横に振った。

「効いたみたいだね。じゃあ、さっきもいったようにもう少し削って、そのあと神経を取ってしまうね。はい、もう一度アーン」

佐和島先生は、次にピンセットを巧みに使って、舞依の歯からセメントの仮封と中のガーゼを取り、汚物入れに捨てる。次にピンセットでふくみ綿をつまみ、舞依の右の歯茎と頬の間に入れ、治療のスペースを確保する。舞依はさっきから口の中にだいぶ唾液が溜まってきていた。佐和島先生は、恵梨香に目配せをする。すると、待ってたとばかりに恵梨香の持つバキュームが舞依の口に挿入され、唾液が吸入される。

コオー、コオオオオー。ジュ、ジュ、ジュポッ。

「舞依ちゃん、ちから抜こうねー」恵梨香がバキュームを操作しながらいう。

大きな口を開けてバキュームを口の中に入れられたまま、視線を佐和島先生の方にやると、先生はエアタービンにハンドピースをつけ、ドリルの先端につけるバーをバーチャージャーから選んでいる。

それを見た舞依は、
“ああ～また神経削られる～……。また今日も痛いんだろうなあ～。くすん。はあー、いやだなあー、はあ”とまた半べそをかき、涙目になる。
「大丈夫よ。最初のときの治療はがんばれたじゃない。それにきちんと麻酔したんだし、今日は痛くないと思うよ」恵梨香が励ましてくれる。
舞依が怖くないように、胸の前でハンドタオルを握りしめている舞依の手に、恵梨香の左手がそっと重なる。

舞依は、「はい……」と目で頷くが、やさしいことばに涙が溢れそうになる。千咲がタオルで舞依の涙を拭いてくれる。

いよいよ今日の本格的な治療が始まる。佐和島先生がドリルを構えて舞依の口にドリルを近づけてくる。

「舞依ちゃん、大きくお口開けてー。はい、アーン」

千咲が「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」と佐和島先生にシンクロするように、優しい言葉で、舞依に声をかける。

「痛かったら、左手あげて教えてねー」

“ぐすん。もうダメ……” 舞依はやさしいことばをかけられ、さらに治療が始まる怖さに、涙が溢れてしまう。

舞依がおそろおそろ口を開けると、恵梨香の持つバキュームがふたたび挿入された。次に佐和島先生がデンタルミラーで舞依の唇の端をひっぱり治療のスペースをつくった上で、タービンが挿入され、舞依の右下7番のう蝕した歯にドリルがあてられる。と同時に、佐和島先生は治療ユニットのペダルを踏み込んだ。タービンが回転を始め、動力がドリルの先端のバーにつたわる。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キィ、キィ、キュイ、キュイイイーン。チュイーン。

コオオオー、コオー。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「そうそう、舞依ちゃん、痛くないよねー」

「その調子だよ、舞依ちゃん！」 恵梨香と千咲が交互に舞依を励ます。

だが、ものの1分もしないうちに、切削の治療で刺激を受けた神経は、強い痛みとなって舞依を襲った。

「んんんんっー」

キュイーン、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。

「あががががー」

「痛いー！」

「がんばって～もう少しだからね～」と千咲が励まし、

「舞依ちゃん、もう少しだからがまんしよ」と恵梨香がいうが、

「はあん、はん、はん、イダァーイ、イダァーイ！！」

「うわあああーん、イダアイヨォ～イダアイヨォ～！！」

と舞依は制服のスカートから伸びた白いハイソックスをパタパタさせ、治療の痛みから逃れようとする。周りにスタンバイしていた成美と華子があわてて舞依を抑えにかかる。歯科エプロン越しに舞依の息遣いが激

しくなる。

汗と唾液と涙にまみれた舞依の泣き顔が無影灯に照らされ、非情にも治療室にひときわ印象的に浮きあがる。舞依は自分の手に重なっている恵梨香の手を振りほどき、左手をあげた。

“えっ、えっ、凄い痛い！！　凄く痛いよお～！！　もう許してえー！！”

キィー――ン。

タービンが止まった。

「舞依ちゃん、ごめん。痛かったみたいだね。うーん、削ったことで神経が刺激されたみたいだねー。もう1本麻酔しようか……。戸田くん、もう1本シンマ」

佐和島先生は千咲から麻酔カートリッジが装着された注射器を受け取り、舞依の口に挿入する。

「ちょっと、チクッとするよ～」といいながら、舞依の歯茎に注射針を刺し、麻酔液を注入する。舞依は針が刺さった瞬間、「ううっ」といって、ビクッとからだを動かしたが、薬液がゆっくり入っていく間はおとなしくがまんしていた。

「いい子だー。ちょっとがまんしようねー」

麻酔液がすべて注入されると、麻酔の効果が現れるまで、しばらく待つ。その間に千咲が舞依の涙をタオルで拭ってくれた。麻酔が効いた頃を見計らって、佐和島先生はデンタルミラーの柄で舞依の歯をコンコンと叩いて麻酔が効いたかを確認する。やがて、ふたたびタービンを構えた佐和島先生が、

「舞依ちゃん、もう一度大きくアーンしよ」と舞依に口を開けることを促す。

「舞依ちゃん、今度は痛くないからお口アーン」「もう少しのがまんだからねー。大きく開けようねー。アーン」恵梨香と千咲が励ます。

舞依はいやいやながら、口を開ける。恵梨香のバキュームが挿入された。

コオー、コオオオー。

次に佐和島先生がタービンを舞依の口に挿入して、ふたたび舞依の右下7番の虫歯にあて、ドリルを回転させる。

キュイーン、キュイイーン、キイイユイーン、キイイユイーン。

「うん、ふーん、んっ、んっ」

コオオオオー、コオー。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

「はい、がまんしてえー」恵梨香がバキュームを使いながら、舞依にいう。

「ううーん、くすん、えっ、えっ、わあああーん」

舞依は次々と襲ってくる切削治療の痛み、ふたたび泣きはじめ、身を振り、足をパタパタし出した。制服のスカートは捲れ上がり、舞依のかわいい白パンツは丸見えになっている。大泣き大暴れである。

“先生、イダァーイ！！、イダァイヨォ～！！ 痛いっ痛いっ痛いっ！！ 毎日歯磨きするからっ！！ もう許してえー！！ 痛あーい！！”

舞依はこの痛みから逃れようと、さらにはからだを動かし、ヘッドレストのあたまを振り始めた。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

「舞依ちゃん、痛いのはわかるよー。でも、もうちょっとがまんしようねー」と佐和島先生は動き続ける舞依の口腔内を傷つけないように巧みにタービンを使いながら、スタッフに目配せをする。スタッフのみんなは頷くと、

「舞依ちゃあーん、ちょっとごめんねー」とバキュームを操作する恵梨香をのぞき、千咲は両手を閉じそうになる舞依の口の口に持っていき、左手で下顎を抑え、右手を下唇にかけ、舞依の口が閉じられないようにする。成美はバタつく舞依の両足を抑え、華子は身を振ろうとする舞依の胴体を抑えつける。

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キーン、キュイーン。

キューーン、キューーン、キュイ、キュイ、キューイイイイー
ン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュポポポポー
ー。

「うわああーん、痛いっ！！ 痛いよおー！！ えっ、えっ、えー
ん、えーん」

“痛いっ痛いっ痛いっ！！ もうほんとに許してえー！！”

キュウウーーン。

タービンがひときわ高い音をたて、ようやく止まった。

「舞依ちゃん、よくがんばったねー。ほんとによくがまんしたよー。え
らいよー。削るのはもう終わりだよ。お口ゆすごうか」佐和島先生がター
ビンをテーブルの元の位置に戻し、ユニットを起こしながら、舞依を
ほめる。

「ほんとよくがんばったねー」「えらい、えらい」「痛いのに、がまん
できたじゃない」恵梨香、千咲、成美、華子のスタッフも口々にほめる。

舞依はえっ、えっと泣きながら、口をゆすぐ。麻酔が効いているせい
でうまくゆすげず、口から水が漏れる。涙に濡れた頬を持っているハン
ドタオルで拭く。

“先生のうそつき！！ 痛くないっていったのに、凄いつ、痛いっ！！”
舞依はヒックヒックとしゃくり上げながら思った。

口をゆすぎ終わると、またまたユニットが倒される。舞依の目の前に
佐和島先生の顔と手があった。その手にはリーマが握られている。舞依
はリーマを目にすると、“ああー、あの針みたいな器具……、神経削
るのだ” と思い、また涙が溢れてくる。

「舞依ちゃん、今度はこの器具でまだ残ってる虫歯菌に侵された神経を
取っちゃうからね。麻酔が効いてるから痛くないと思うけど、もし痛か
ったら、左手あげて教えてね。はい、じゃあー、お口開けよ。アーン」
と佐和島先生はリーマを構えている。

「もう少しで、今日の治療終わりだよー。だから、もうちょつとがんば

ろ、ねっ。すぐ終わるから、大きく開けよっ。はい、ア〜ン」恵梨香と千咲が再三舞依を励ます。

舞依が暴れたときはさっきのようにいつでも抑えつけられるように、華子と成美は周りにスタンバイしている。

「ぐすん」

この場からなんとか逃げ出したいと舞依は思ったが、ユニットに固められ、スタッフに周りを囲われてる状況ではどうしようもない。目にいっぱい涙をため、いやいやながら口を開ける。

佐和島先生のリーマが舞依の口の中に挿入され、削ってキレイに凹型に形成された右下7番の歯の虫歯菌に侵された神経をグリグリと絡め取る。

「！？」

グリグリ、ゴシゴシ。

「んっ、うううーん、んっ、んっ」

「もう少しで、キレイに掃除できるよー。がんばろうねー」

「舞依ちゃん、もうちょっとがまんしようねー」佐和島先生、恵梨香が励ます。

だが、歯の根の方にリーマが入っていくと、また痛みが舞依を襲う。

「ふん、ふん、ううーんっ、ひはいっ！！ ひはいっ！！ えっ、えっ、あああーん、えっ、えっ」

「戸田くん、ファイル」佐和島先生が千咲からファイル、またリーマ、と受け取り、神経の治療を進めていく。

グリグリ。

リーマやファイルが奥に入っていくほどに、痛みが舞依を苦しめる。舞依は痛みには耐えかね、脚をくの字に曲げ、膝をあわせ、身を振り、さらには足をパタパタし出した。また制服のプリーツスカートが捲れている。

「うわああーん、わーん、うわーん。ほふ、ひゅひゅひへー！！ ひはい、ひはいひょー！！ ひゃひゅひえへー！！ えっ、えっ、ひっく、

ひっく」

またもや大泣き大暴れである。ふたたびスタッフが舞依の身体を抑えつけにかかる。

「ほんと、もうちょっとだから」

佐和島先生はリーマに絡め取られた舞依の歯の神経をガーゼに拭き取りながら、さらに舞依の虫歯の治療を続けた……。

ようやく、舞依の右下7番の虫歯菌に侵された神経が取り除かれた。

佐和島先生はリーマをトレイにおいた。

「舞依ちゃん、歯に空気かけるよー。アーンして」と佐和島先生は、次にシリンジを手に持ち、舞依の歯にエアーをかける。

シュッー。

舞依はビクッとしたが、染みたりしなかったので少し安心する。

テーブルの上を触っていた佐和島先生は、ピンセットで衛生綿をつまむと、濃青色の小瓶に入れ、ヨードグリセリンに浸す。その衛生綿を舞依の削った虫歯の穴に塗薬する。強烈に染み、思わず声をあげる。

「うっ、ふんっ」

“ううーん、染みるっー！！”

「はい、大丈夫、大丈夫」千咲が励ます。

佐和島先生は、今度は衛生綿を濃緑色の小瓶のホルマリントリクレゾールに浸し、舞依の歯の根管を消毒した。そして最後に濃青色の小瓶のヨードグリセリンにガーゼを浸すと、ピンセットでそれを舞依の歯に詰め、セメントで仮封をした。

「はいっ、これで終わり！！ 舞依ちゃん、今日の治療、終わりだよ。よくがんばった。いい子だね。えらい、えらい」と佐和島先生が舞依をほめた。

「えらいよー、舞依ちゃん」「がんばったね」スタッフも笑顔でほめてくれる。

しかしながら、舞依は2回続けての過酷な治療にしばらくは放心状態

だった。ふと足元を見ると、制服のプリーツスカートが捲れていて、かわいい白パンツは丸見えである。あわててスカートの乱れを直す。

ユニットが起こされた。口をゆすぎながら、舞依は、“すごい恥ずかしい格好で治療されてて……。もう歯医者さん行きたくない……”と思っていた。

口をゆすぐ舞依に、佐和島先生が、
「今回は、この前治療した右下の5番に銀歯を詰めるね。それから、今日治療したところをもう一度掃除するね……。で、まだまだたくさん虫歯があるから、もう1本治療しよう」といいながら、ワゴンの上にある舞依のカルテとレントゲンを見て、「左上の6番がC3で痛み出しそうだから、この歯を治療するね」といった。

“えっ、3本も治療するの……。舞依、もうやだよ”と舞依は、また涙がじわっと滲んでくる。

「あらあら、治療がんばれたのに、そんな顔しちゃおかしいぞ。舞依ちゃん、笑顔、笑顔。次もがんばれるから」恵梨香と千咲が戯けた表情で舞依を気遣う。

舞依は、そのやさしさに涙が頬を伝う。千咲がタオルで涙を拭いてくれる。

「じゃあ、舞依ちゃん、次回は金曜日の午後2時にきてくれるかな。それから念のために痛み止めと炎症止めのお薬を次回の治療までの分を処方しておくね」と佐和島先生は処方箋を渡してくれる。

「はい」

「待ってるからねー」スタッフが声を揃えていった。

千咲が舞依の胸元から歯科エプロンを外してくれた。靴も揃えてくれる。

舞依はユニットから降りながら、“今日の治療もすごく痛かった……”と今更ながらに思っていた。それにも増して、治療が終わったらスカートが捲れていて、すごい恥ずかしい格好で治療されてたことが思い出され、舞依は頬が赤くなり、ふたたび思うのだった。“もう歯

医者さん行きたくない……”

「5月27日、午後2時に来てね。待ってるよ。お大事に」佐和島先生と千咲、恵梨香、華子、成美に見送られながら、診療室のドアを開け、「ありがとうございました……」と振り返りおじぎをして、診察室から出た。

皓大歯学部附属病院を出て、なでしこ薬局で薬をもらった、その帰り道……。

舞依は奥田歯科医院の前を通りかかる。「あら、舞依ちゃん！」という声がして、かすみに呼び止められる。ふと玄関のドアを見ると、涙のあとのある小学校5年生くらいの女の子が出てきた。かすみが玄関まで送ってきたようだ。

“あの子、痛い治療を受けたんだ。私といっしょ……”

かすみは舞依に近づいてきて、「舞依ちゃん、治療進んでる？ 佐和島先生、やさしく治療してくれる？」と聞いた。

舞依はかすみにやさしく声をかけられたことで、胸が詰まり涙が滲んでくる。

「あらっ！？ どうしたの、舞依ちゃん。……治療、つらいの？」

舞依はこくりと頷く。“真希先生なら、舞依の痛くてコワイ思い、わかってくれるかも……”

そんな気持ちをみすかすように、

「ちょうど、いまの女の子で、患者さんめずらしく途切れたのよ。真希先生に会っていく？」とかすみが聞いてくれたので、舞依は奥田歯科医院の中に入り、真希先生に会った。

この前と同じデスクで、舞依は真希先生と向かい合っている。

「舞依ちゃん、久しぶりねー。元気だった？ でも、少し成長したわねー。前は、歯医者さんに入るどころか前通るのも、いやがってたんだも

んね。えらいよー」

舞依の気持ちをほぐしてくれるように真希先生は戯けていった。

「治療、進んでる？ 佐和島先生の治療はどう？」

舞依は皓大歯学部附属病院で受けている治療のことをぼつりぼつりと真希先生に話した。

「そう、だいぶつらい治療になってるようね……。でもね、舞依ちゃん。早めに治療に行かなかったからこんな痛いおもいしたということは忘れないでね？ 怖いから行かないのではなく痛くなるまえに行くことなのよ。ほんとに怖いのは治療より虫歯なのよ……。舞依ちゃんが小さい頃のトラウマがあって歯医者さんに行けなかったのはよくわかってるけど……」

舞依はうつむいて真希先生の話を聞きながら、“だから私は今歯医者さんで痛くてコワイ思いしてるんだ……。”と思っていた。

急に何か慌ただしい気配がして、ふとみると、さっきから舞依の話を周りで聞いていた麻帆先生とかすみ、それに紗季は、ピンクのユニットに患者を受け入れる準備をしている。

そのとき待合室の方から、「コワイ！ コワイ！ やだっ！！ やだっ！！」という声が聞こえてきたかと思うと、いきなり診察室のドアが開き、

「いやっ！！ いやっ！！ 許してえー、お姉ちゃあーん！！」と叫ぶ声とともに、純姫女子高校の制服を着た女生徒がお姉さんらしき人に手を引っぱられながら、入ってきた。

「陽子！ だめじゃないの！ この前学校の歯科検診で虫歯がみつかったんでしょ！ 最近ズキズキ痛みだしてるっていったじゃない！ 隠してもダメ！」

「やだっ！！ 歯医者さん、だいつ嫌い！！」

「なにいつてんの！ もう高2でしょ！ わがままいわないで！」

「だって、だって、これって歯医者さんに神経まで治療されちゃうもん。前も一度だけ神経まで治療されて痛くて、痛くて涙ポロポロ……。だ

から、やだっ！！」

「それは、陽子が虫歯をほったらかしにしてるから、自分が悪いんですよ！！」女子高生の姉が叱る。

「大丈夫よー。痛くないから……。だから、こっちに行きましょ、ねっ」と麻帆先生、かすみ、紗季が懸命に慰める。

「私も応援に行くわね」と真希先生も騒ぎの方へいった。

それを見た舞依は、なにを思ったのか、女子高生の方へ行き、
「せんばい、……」と話しかけ、自分のいまの治療について話だし、最後に自分の口の中を見せて「早く治療受けてください、私みたいにならないうちに……」といった。

あらん限りの抵抗をしていた女子高生だったが、舞依の話を黙って聞いておとなしくなり、やがてスタッフに勧められるままユニットにこしかけた。

女子高生の姉は、舞依に深々とあたまを下げ、「ありがとうございます」といった。

真希先生も「舞依ちゃん、えらいよー」とほめてくれた。

おとなしくユニットにすわった女子高生だったが、やっぱり治療が怖くて、最初は「あっあっ」と声を出して、そのたび「大丈夫だよー。痛くないよー」とかすみに励まされていたが、麻帆先生が女子高生の虫歯を治療しようとタービンを口に入れた瞬間、またしても「コワイ！ コワイ！ ドリルコワイ！！」と半泣きで嫌がって、身をよじって逃げようとした。

「大丈夫！！ 痛くないから」

「すぐ終わるよ」と麻帆先生、かすみ、紗季に交互になだめられて、ようやく女子高生は口を開ける。

キューン、キューーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。

「はあっ、はあっ、ふうん、ふん、痛いつ！！ 痛いつ！！ ふん、ふん」

「痛いー！」

キィィユーン、キィィユーン。

「痛くない、痛くない、すぐ終わるからねー」

「ふん、ふん、うわああーん、痛いイダーイ！！ イダイヨォ～、えっ、えっ」

キュィーン

「もう少し痛くない痛くない！ もうすぐ終わるからね～我慢しようね～」 「がんばって～もう少しだからね～」 麻帆先生、かすみが励ます。

「陽子！ 少しはがまんなさい！！ 虫歯つくっちゃったのはあなたでしょ！！」 女子高生の姉が叱っている。

女子高生は虫歯を削られ始めると、泣いて足をパタパタして、治療から逃れようと抵抗している。制服のスカートは凄いことになっていた。結局、女子高生は1時間くらい治療されて、涙ぼろぼろになっていた……。

舞依は、真希先生に話を聞いてもらって少し気分が落ち着いた。女子高生の治療を横目に見ながら、“はあ～……。私もさっき治療を受けてたときは、あんな格好だったんだろうな……” と思い、診察室を出て、家路についた。

8. すっぽかし

金曜日。舞依は午後から治療のために皓大歯学部附属病院に行かなければならない。そのために黒川先生から休みの許可ももらっている。だが、授業を受けていてもこの前の痛かった治療のことが頭をよぎり、内容がさっぱり入らない。

“どうしよう……。怖いよう” 自然と涙が浮かんでくる。

舞依は午後1時に学校を出たが、治療が怖くて皓大歯学部附属病院に

足が向かない。ふと気がつくと、駅前にあるショッピングセンターに来ていた。

“どこをどう歩いてきたんだろう……。”腕時計を見ると、午後2時30分を示している。

舞依は、ショッピングセンターにあるCDショップや本屋、若者向けのカジュアルファッションのコーナーなどを、ぶらぶらとあてもなく見て過ごし、午後4時頃、家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり、どうだった治療？」仁美が聞く。

「うん、うん。……まあまあだった」舞依は、ちょっとドギマギしながら答える。

「泣かなかったの？」

「うん……。なんとか」

「そう、よかったわね」

「ママ、私、部屋に行って勉強するね。歯医者さん通うためによくお休みもらってるから、勉強遅れるといけないし……」

「そうね。じゃあ、ごはんできたら呼ぶからね」

“ママに嘘ついちゃった……。でも、治療怖くて痛いんだもん”舞依は、後ろめたさを感じながら、2階の自分の部屋に上がっていった。

月曜日の朝。小鳥がすがすがしい朝の訪れにさえずっている。

舞依の家では、朝のあわただしさが充満している。

「それじゃ、いってきます」と舞依のパパは朝食もそこそこに会社に出かけていった。

「いってらっしゃい」仁美はパパを見送ると、2階に向かって、「舞依、もう起きなさい。起きて支度しないと遅刻するわよ」と声をかける。

トゥルルルル、トゥルルルル。電話が鳴った。

「はい、いまです」と仁美はひとりでいって、受話器をあげる。

「はい、近野でございます。あつ、先生！　いつも舞依がお世話になっております。はい、ありがとうございます。

（もしもし、近野さんのお宅でしょうか？　皓齒大学の佐和島ですが……。いえいえ、こちらこそ……。

で、先生、今日はなにか……。

（いえ、たいしたことではないんですが……。先週の金曜日、舞依ちゃん、治療の日だったんですが、いらっしゃらなかったもので……。もしかして、体調でも悪いんじゃないかなー、と思いまして……）

えっ、ええ、……。実は少し風邪をひきまして……。それで治療を休ませまして……。連絡を忘れてしまって、先生、申し訳ありません。

（いえいえ、そんなこと気になさらないで下さい。……。もしよかったら、今日午前中に治療、どうですか？）

えっ、あ、先生、よろしいんですか……。

（はい、僕の方は、全然かまいませんので……。午前11時でどうですか？）

はい、こちらはもう何時でも……。はい、そうですかー。では、11時によろしくお願いします。ごめんくださいませ」

仁美は電話を切った。そのとき、トントンと足音がして、2階から純姫女子中学の制服に着替えた舞依が降りてきた。仁美は怖い顔をして、「舞依、ちょっと来なさい」といった。

舞依は、“しまった！！”と思い、母の目をまともに見ることができ

ない。しょんぼりと肩を落とし、キッチンのテーブルを挟んで仁美の正面に座る。テーブルの上の朝食がこの場の雰囲気にとぐわない。

「舞依、どうして金曜日、佐和島先生のところに行かなかったの？ ママ、てっきり舞依が治療受けてきたものとばかり、思ってたわよ。なんで歯医者さん行かなかったか、ちゃんと説明しなさい」

「……だって」

「だってじゃ、ありません。ほんとにもう。どうして……、どうして歯医者さん行かなかったの？」

舞依は、母の剣幕に半べそになりながら、

「……だって……、だって、佐和島先生、治療痛いんだもん。痛くて痛くて、治療いやなんだもん。治療されて、舞依が痛いっ痛いっていても、『もうすこしだからね』とか『がまんしようね』って、治療止めてくれないんだもん！ それで怖くなって……」

「それは、ちゃんと歯磨きしなかった舞依のせいでしょ。舞依がもっとはやく歯医者さんで虫歯を治療してたら、怖くて痛い目にあわないで済んだんでしょ」

「それに……、このままほうっておいたら、ほんとに歯を抜くことになって入れ歯になっちゃうわよ。それでもいい？」

「だって……」

「だってじゃありません！ とにかく、今日11時に佐和島先生に予約取ったから、ママといっしょに歯医者さん行くのよ」

「えっ、そんな！！ やだっ！！」

「ダメ！！ いやといっても、舞依が治療受けるまで、ママ許しませんからね」と仁美は、舞依の担任の黒川先生に電話して、午前中休みをもらい、舞依を皓大歯学部附属病院に無理矢理連れて行った。

「舞依ちゃん、かぜひいたんだって？ 大丈夫？」佐和島先生は、舞依の目をのぞきこみ、心配そうにいう。

「は、はい……。もう、大丈夫……で、えす」舞依は少しどぎまぎ

しながら、答える。まともに佐和島先生の目を見られない。今日は母の仁美もいっしょに治療室にいる。初診で舞依について来たとき以来である。

「もう顔色も悪くないし、舞依ちゃん、治療がんばれるよね」衛生士の恵梨香がにっこり微笑みながらいう。

「そうだよ。舞依ちゃん、治療がんばって、きれいな歯にしようね」同じく衛生士の千咲が励ます。

「はい……」舞依は、またこの前みたいに痛い治療を受けなければならないのかと思うと、憂鬱そうな表情になり、自然と返事が小さくなってしまう。

母の仁美が、「先生、実は……」と申し訳なさそうに、舞依がこの前の治療をずる休みしたことを告白した。

佐和島先生は、最初は目を見張ったが、そのうち落ち着いてふんふんと仁美の話を聞いていた。そして、

「お母さん、それは無理はないですよ。舞依ちゃん、歯医者さん恐怖症なんですから。だから、あまり叱らないでください」といった。それから、舞依の方を向き、

「舞依ちゃん、ごめんね。怖い思いさせて……。先生できるだけ、舞依ちゃんに怖い思いさせないようにしようと思ってるから。だから、治療はちゃんと来て欲しいんだ。怖かったら、遠慮なくいつてね」とやさしく話した。

舞依は佐和島先生の話に黙って聞いていたが、やがて小さな声で「……でも、いつも治療怖くて痛くて、泣いてばかりで恥ずかしい……」といった。すると、

「そんなことないよ。舞依ちゃんが歯医者さん怖いのは、よくわかってるから、怖かったら私たちにでも遠慮なくいつたらいいいんだよ。舞依ちゃんが治療怖くて泣いたって、誰にもわからないんだから……。だから、恥ずかしいことなんてないんだよ」スタッフも口々に励ましてくれる。

舞依が金曜日の治療をサボったにもかかわらず、叱りもせず笑顔で接して励まし気遣ってくれる佐和島先生や恵梨香、千咲、華子、成美を見て、舞依は恥ずかしく、そしてスタッフのやさしさに触れ、涙が滲む。

「あらあら、泣かないの、舞依ちゃん。これからが始まりだよ」恵梨香がいう。「じゃあ、あっち行こっか」

恵梨香と千咲が舞依をおなじみの歯科ユニットに案内する。舞依はユニットを見ると、またまた胸がドキドキしてきた。思わずつぶやく。「コワイ……」

「うん、わかるよ」と千咲が舞依を見て、「舞依ちゃん、深呼吸しようか」といった。

スー、ハア。

舞依はいわれたとおり深呼吸をすると、少し気持ちが落ち着いてきた。ユニットに腰掛ける。

舞依がユニットに腰掛けると、すぐに華子と成美が舞依のセーラー服の腕を捲り、血圧を測った。115、68。脈拍が66。深呼吸のおかげか、正常値の範囲内である。その次に華子と成美は舞依の口に笑気ガスのマスクをつける。佐和島先生が笑気ガスのバルブを慎重に開き、舞依に吸引させる。

“……あぁ” 舞依は笑気ガスによって、少しリラックスできた。すかさず、千咲が緑色の歯科エプロンを舞依の胸元につける。“あぁ～。また治療始まる～。削られる……”

佐和島先生が歯科医用の椅子に座り、ペダルを操作し、ユニットを倒す。いくつもの无影灯が組み込まれたライトが点灯される。母の仁美はユニットのそばに立って、舞依を見ている。

「舞依ちゃん、お口開けようか」佐和島先生は、ピンセットとデンタルミラーを構え、舞依に口を開けるように促した。

“あぁっ、始まっちゃう……。コワイのに、なんでリラックスできるんだろう……” 舞依はこころの中では怖いのに、佐和島先生のことに反応し、口を開けた。

「はいアーン。いい子だ」

佐和島先生は、ピンセットで右下5番を仮封しているセメントを取り除き、汚物入れに捨てた。デンタルミラーで歯の状態を診た。

「うん、大丈夫だ。状態はいいよ。この分なら、インレーを詰められるよ。いったん、お口ゆすごうか」

ユニットが起こされ、舞依は口をゆすぐ。

ふたたびユニットが倒れ、佐和島先生は、

「はい、もう一度ア〜ンしよう」と舞依に口を開けさせ、「川合くん、バキューム」と今日も舞依の右側で歯科治療補助についている恵梨香にバキュームを指示した。

コォー、コォォー。ジュ、ジュッ、ジュジュ。

舞依の口の中から唾液が吸引される。“ううっ”舞依は頬などが引っぱられる感じがした。

佐和島先生はシリンジを手に持ち、舞依の歯にエアーをシュッシュッとかけ、歯を乾かした。そして佐和島先生は、舞依の右下の5番の歯にピンセットでインレーをのせ調整した。一度インレーを舞依の口から取り出し、トレイに置くと、今度は右下5番の歯に接着レジンを塗り、ふたたびインレーを詰め、指で押さえた。

インレーを装着された舞依は削った歯の上からギュッと押さえられ、不快感を感じ声を出した。

「ううっ」

「大丈夫だよー。はい、ギュッと噛んでー」と佐和島先生は、舞依のインレーを装着した歯の上にふくみ綿を置き、噛ませた。

「インレーがくつつくまでちょっと待とうね」

舞依はふくみ綿を噛みしめながら、しばらくじっとしていた。

「もういいかなー」佐和島先生は、再び舞依に口を開けさせた。ピンセットでふくみ綿を取り出し、歯についた綿くずもとってくれる。噛み合わせをみるための紙を何度か噛ませ、タービンで高さを調整する。

ウィィーン、ウィィーン。

「うっ」

「ちょっと、がまんしよう」

舞依は痛くはなかったが、口の中にタービンが入る不快感を感じていた。

「はい、これで銀歯を詰めたよ。この歯は治療完了だね。噛み合わせの違和感はないかい？」

舞依はカチカチと噛んでみて、

「はい、大丈夫です……」とはにかんで答えた。とりあえず1本虫歯が治ったことが嬉しいのである。

「おめでとうー。まだ1本だけど、よかったじゃないー」「がんばったかいがあったね」恵梨香、千咲、華子、成美も我がことのように喜んでくれる。

「舞依、よかったわね」母の仁美も微笑みながらいつてくれた。

「じゃあ、お口をゆすいで、次の歯にかかろうか」と佐和島先生は、舞依に口をゆすがせたあと、右下7番の状態を診るため、7番の歯の仮封を取り、前回詰めたヨードグリセリンに浸したガーゼともども汚物入れに捨てる。デンタルミラーで丹念に削った歯の中を診る。

「うーん、もう1度お薬を詰めよう」

佐和島先生は、

「舞依ちゃん、空気かけるよー」とシリンジで、舞依の歯にエアーをかける。

シュッー。

舞依は、少し染みたのか顔をしかめた。

「大丈夫だよー」千咲と恵梨香が声をかける。

佐和島先生は、ヨードグリセリンに浸した衛生綿を舞依の右下7番の削った虫歯の穴に塗薬する。舞依はまたもや歯に染みて、思わず声をあげる。

「ううっ、ふんっ、ふん」

“染みるっー！！”

「はい、もうちょっとがまんしようねー」恵梨香が励ます。

次に佐和島先生は、ホルマリントリクレゾールに浸した衛生綿で舞依の歯の根管を消毒する。そしてヨードグリセリンに浸したガーゼを、ピンセットで舞依の歯に詰め、もう一度セメントで仮封をした。

「舞依ちゃん、この歯はまだ状態がよくないから、今日はもう一度お薬を詰めたよ。次は根の掃除、できると思う」

“えっー！ この歯、まだ治療しなきゃいけないの？ この前の治療あんなにつらい目をしてがんばったのに……” 舞依は、あんなに痛い思いをした右下7番の歯の治療がまだまだ続くと聞いて、また憂鬱になった。

「お口ゆすいで、次の治療に行こうか。次は左上の6番、6歳臼歯だよ。C3でだいぶ虫歯が進行してそうだから、麻酔をして削っていくよ」

「せんせい……」

「んっ、なに、舞依ちゃん」

「……」

「なあに、舞依ちゃん。聞きたいことあったら、さっきもいったように遠慮なく先生に聞けばいいんだよ」恵梨香と千咲がいう。

「……つぎ治療する歯、神経の治療しないとダメですか……」舞依は目に涙をためて聞く。

「舞依、そこまで虫歯をほうっておいてなにいつてるの！」母の仁美がたしなめる。まだ舞依が治療をサボったことを怒ってるのだ。

「まあ、お母さん、落ち着いて」と佐和島先生は仁美に声をかけてから、舞依に向き直り、「そうだね……。削ってみて、今日銀歯を詰めた右下の5番のように神経が保護できるようだったら、お薬を詰めて神経を保護してインレーを詰めるなりで治療するつもりだけれど……。この歯は、神経の治療なしはちょっと難しいかもしれないなあ……。でも神経の治療するにしても、舞依ちゃんができるだけ痛くないように、治療するつもりだよ」といった。

“ああ～また神経削られる～” 舞依はまた涙の粒が目に浮かんでくる。

「くすん」ハンドタオルで、涙を拭く。

「舞依ちゃん、泣かないで。いっしょにがんばろ」恵梨香がいった。

こくと舞依が頷く。

「椅子、起こすよー。お口ゆすいでね」

といいながら、佐和島先生はユニットを起こす。舞依はまたクチュクチュと口をゆすいだ。その間、佐和島先生は、バーチャージャーから左上6番の虫歯を治療するためのバーを選び、ドリルの先端にバーを装着している。恵梨香はバキュームの準備をしている。さらに千咲はワゴンで注射器と麻酔カートリッジの準備に余念がない。

舞依が口をゆすぎ終わると、ユニットが倒され、

「まず表面麻酔しようか」と佐和島先生は麻酔液に浸した衛生綿をピンセットに持ち、デンタルミラーとともに舞依の口に近づける。口を開けた舞依の左上の歯茎にトントンと麻酔液を塗る。少し麻酔液が舌の上に滴り落ちる。“にがぁ～いっ”舞依は、顔をしかめた。じわじわと表面麻酔が効き、左側の歯茎と頬が痺れてくる。

表面麻酔が効いたとみた佐和島先生は、デンタルミラーと千咲から渡された浸潤麻酔の麻酔液が入った麻酔カートリッジを装着した注射器を構え、

「舞依ちゃん、麻酔注射するよー。ちょっとチクッとするかもしれないけど、がんばろうね。はいア～ン」といった。

舞依が目を閉じ小さく口を開けると、佐和島先生はデンタルミラーで舞依の左の唇を上方向へ引っ張りスペースをつくる。麻酔注射を口の中に挿入し、左の歯茎にゆっくりと刺した。舞依が痛がらないように、怖がらないように、一番細い針を選んで慎重に刺したのだが、舞依は怖い気持ちが先に立っているため、

“ううっ、……くすん、痛っ、痛いっ！ やっぱ痛いよう～” と思い、半べそをかいている。佐和島先生はていねいに針を刺しているので、実際はチクッとするくらいなのだが、舞依にとってはグサッと突き刺さるように感じているのだ。

「はい、そのままじっとしていてねー。いま麻酔の薬をいれてるよー」
と佐和島先生は、ゆっくりと注射器の麻酔液を注入してゆく。舞依は左上の歯茎にズーンとした思い痛みが広がっていくのを感じていた。

「ふんっ、ふうん」

「すぐ終わるよー、がまんしようねー」千咲が舞依に声をかける。

佐和島先生の持つ麻酔注射のカートリッジの中の麻酔液がすべて注入された。ゆっくりと注射針が歯茎から抜かれる。舞依は注射が終わり口をゆすがせてもらえると思い、うっすらと目を開ける。だが佐和島先生のデンタルミラーはあいかわらず舞依の唇を広げたままで、さらには千咲から佐和島先生にもう1本の麻酔注射が渡されている。

“えっ！ まだ注射するの！？” またもや涙がじわ〜と溢れてくる。

「舞依ちゃん、削る治療が痛くないように、もう1本注射するねー」と佐和島先生は2本目の麻酔注射をする。舞依は目に涙をためながらがまんした。

「麻酔が効くまでちょっと休憩しようかー。お口ゆすごうね」

佐和島先生はユニットを起こしてくれた。舞依は口をゆすぐが麻酔が左頬全体に効き始め、痺れてきたので、水が口から漏れうまくゆすげない。それでもなんとかゆすぎ終えると、ふたたびユニットが倒される。

5分ほどが過ぎると、佐和島先生が、

「お口開けようね。アーン」とデンタルミラーを舞依の口に入れ、デンタルミラーの柄で左上6番を叩き、「痛い？」と聞いた。麻酔が効いたのか、感覚がない。舞依はぷるぷると首を横に振った。

「効いたみたいだね。じゃあ、削っていくね」

佐和島先生のそのことばを合図に、恵梨香が、

「舞依ちゃん、お口おつきく開けてー。はいア〜ン」とバキュームを構えていった。

佐和島先生は、ピンセットでふくみ綿をつまむと、デンタルミラーで舞依の左の唇を広げ、左上の歯茎と頬の間にふくみ綿をふくませ、治療のスペースをつくった。

“始まっちゃう〜。コワイよ〜。また治療痛いのかな、泣いちゃうのかな……。中学生なのに泣いちゃったら恥ずかしい……” あたまの中で色々なことが渦巻いている。

時々口を開けると、恵梨香のバキュームが挿入された。

コオー、コオオオー。

佐和島先生は、テーブルの上のバーチャージャーからバーを選び、ドリルの先端に装着している。治療が怖い舞依には、この前の治療よりも尖ったバーがつけられたように思える。“あんなに尖ってる……。コワイよ〜”

「舞依ちゃん、麻酔が効いているから痛くないと思うけど、痛かったら左手あげて行ってね」

「痛くないからね〜。おっきくア〜ンしててねー」 恵梨香がいう。

舞依は、佐和島先生が構えたタービンが銀色にひかるのを目にすると、恐怖心が湧き起こり、“ああ、あの銀色の色といい、あの形！！ ああ、コワイよお〜……”、“ああ、どうしよう！！ キュイーンって、あの音、思い出しちゃう……。コワイヨォ〜” ところどころで葛藤が起こり、バキュームを挿入されたまま、目を見開き、

「やら！！ やら！！ コワイ！！ コワイ！！ ドリルコワイ！！」とヘッドレストから後ずさりしようとする。

「舞依！！ わがままいうんじゃないありません！！ 虫歯つくった舞依が悪いんでしょ！！」 母の仁美が舞依を叱りつける。

「まあ、まあ、お母さん」と佐和島先生は仁美をなだめつつ、タービンをテーブルの元の位置に戻し、舞依を方に向いて、「舞依ちゃん、笑気ガスでリラックスしようか」と笑顔でいった。

華子と成美が笑気ガスの準備をする。ふたたび佐和島先生がバルブを操作して、今度はごく少量の笑気ガスを舞依に吸引させた。

“ああーっ、なんだろうこの気持ち……。なんで落ちるつけるんだろー” 舞依は、マスクから笑気ガスを吸引しながら思った。

「舞依ちゃん、リラックスできた？」佐和島先生が舞依に聞く。

舞依は小さく頷いた。

「そっか、じゃあ大丈夫だね」

「舞依ちゃん、しっかり治していこうね」「痛くないよー。すぐ済むからね」恵梨香と千咲が励ます。

今度は、舞依は素直に口を開いた。恵梨香のバキュームが挿入される。

コオオオー、コオー。

佐和島先生は、デンタルミラーで舞依の左の唇を引っぱり、タービンを舞依のう蝕した左上6番の歯にあてる。ユニットペダルを踏み、ドリルを回転させる。ドリルが治療のため舞依の虫歯を抉り始める。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュイ、キュイ、キュイイイーン。チュイーン。

「舞依ちゃん、その調子、その調子。ちから抜いてねー」恵梨香がバキュームを操作しながらいう。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュッ、ジュ、ジュポポポポー。

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイーーン。

削り始めて1分が経ったか経たないかの頃、舞依を強い痛みが襲った。舞依の手があがる。

「痛い、イダァーイ！！」

「もう少しで済むよ～。痛くない、痛くない。もうすぐ終わるからね～。我慢しようね～」恵梨香が励ます。

「ふん、ふうん、えっ、えっ、イダァーイ！！ イダァイヨォ～！！」

舞依は削る痛みにはじけはじめ、この痛みから逃れようと、身を振り足をくの字に曲げ、ついには足をパタパタしだした。制服のプリーツスカートが捲り上がる。

「舞依！　しっかりなさい！！　少しはがまんなさい！！　恥ずかしい……、パンツが見えてるじゃないの！！」と母の仁美はユニットの

上の舞依のからだを抑えつけた。

「先生、動かないように、私が抑えてますから……」

「うわああーん、イダァイ！！ イダァーイ！！ イダァイヨォ～！！」

キュイイイーン、キュウウウーン。

タービンがひときわ高く音を立て、ドリルが回転を止めた。

「舞依ちゃん、だいぶ痛い？」佐和島先生が聞くと、舞依は涙に濡れた顔でこくりと頷く。千咲がタオルで舞依の涙を拭いてくれる。

「もう1本、麻酔しようか」

舞依は麻酔注射も怖かったが、これ以上削る痛みには耐えられないと思ったので、嫌々ながらも頷いた。

「戸田くん、シンマ」

佐和島先生は千咲に指示を出し、千咲は「はい、先生」と返事をし、麻酔のカートリッジを薬品ケースから取り出し、注射器に装着した。舞依が痛くないように、さきほどと同じ一番細い針の装着されている注射器だ。

みたび麻酔注射が舞依の左上の歯茎に刺さる。前の麻酔が効いているため痛みはないが、またも広がる歯茎へのズーンとした圧迫感……。

「ふ、ふうん、ふん」

「大丈夫だよー。もう少しで全部入るから」「がまんしようねー」恵梨香と千咲が舞依に声をかける。麻酔が効くまでしばらく待って、切削治療が再開される。そのあいだも仁美は舞依のからだを抑えている。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュ、ジュッ。ジュポッ。

キュン、キュン、キュ、キュ、キュイ、キュウイイイーン。

キュイ、キュイ、キイイーン。チュイーン。

「ふん、ふん、ふうん、ふん、イダァイ！！ イダァーイ！！ イダァイヨォ～！！」

「あつ、あん、あつ、うわああーん、エッ、エッ、痛いつ！！ 痛

いよお～！！ もう許してえー！！」

「うん、ちょっと痛いねー。いま深いところを削っているから……。もうちょっとだけがまんしてくれるかな」と佐和島先生は手を休めずにいう。

「ほんと、もうちょっとだよ。がんばろ、舞依ちゃん」恵梨香が励ます。
「舞依、がまんしなさい」仁美が舞依のからだを抑えたままいう。抑えつけられているため、治療から逃れようとするしぐさ、すなわち足をパタパタ動かしたりすることもできない。

キュウウウーーン。

タービンを止め、佐和島先生はバーを交換している。タービンが止まると、舞依は“もう終わりかな……”と治療台が起こされ、エプロンを外され帰れるんじゃないかなと淡い期待をするのだが、バキュームは口から出されず、ユニットが起き上がる気配はいつこうにない。

「はい、もうちょっとだからねー。がんばろうねー」と佐和島先生はバーを付け替えたタービンを舞依の口の中に入れ、また削る治療を再開する。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュウン、キュン、キュウイーン、キイイーーン。

コオオオー、コオー。ジュポー。

「うーん、うん、くすん、ああーん」

「イダァィ！！ イダァーイ！！」

「エーン、エン、イダァイヨオ～！！ イダァイヨオ～！！」

「もう少し、もう少しがまんしよ、舞依ちゃん」

キュイイイイーーン。

切削音を長く残し、ドリルがいったん止まった。舞依は涙に濡れた顔で“！？ やつと終わり！？”と思ったが、佐和島先生は、

「舞依ちゃん、もう少し、先生の方に顔、向けてくれるかな」といって、舞依の顔を佐和島先生の方へ向けさせた。からだは仁美に抑えつけられ

たままだが、治療の痛みを逃れようと、無意識のうちに徐々に顔を佐和島先生のいる右側と反対の方向に向けていたようだ。

佐和島先生の手で、左側に向けさせられた舞依の口にタービンが入り、また削る治療が始まる。

キュ、キュ、キュイイイーン。

コォー、コォォー。ジュポポポー。

キュン、キュン、キュ、キュ、キュイ、キュウイイイーン。

「あん、あん、痛いよー！！ 痛いよー！！」

“もう許してえー！！ 舞依、これからちゃんと毎日歯磨きするからっー！！” 舞依は泣きながら思っていた。

「うん、ごめんね。ちょっと深いからねー。ほんとにもう少しなんだよ、舞依ちゃん」

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュウーン、キュン、キュン、キュウイイイーン。

「えっ、えっ、痛いつ！！ 痛いよおー！！」

コォー、コォォー。ジュポッ。

キューン、キュ、キュイ、キイイイーン。

「舞依ちゃん、もう少し、お口を大きく開けてくれるかな」佐和島先生はドリルを操作する手を止めずに、舞依に指示を出した。今度は削る治療の痛みに、口を小さく閉じようとしていたようだ。バキュームを操作する恵梨香が千咲に目配せをする。千咲はワゴンのそばから佐和島先生の左側に立つと、舞依の顎に手を添え、下の前歯と唇に指をかけ、切削治療のあいだ舞依の口が閉じられないようにした。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「あん、あん、イダァイ！！ イダァーイ！！ イダァイヨォ〜！！」

汗と唾液と涙にまみれた舞依の泣き顔が無影灯に照らされ、ひときわ印象的に浮きあがる。

「うわぁーん、ああぁーん、エッ、エッ、くすん。イダァイヨォ〜！！」

舞依は痛みにかまみでできず、絶えず身を振り、からだを動かそうとする。その力は中学生とは思えないほどで、抑えている仁美を驚かせるほどのものだった。

そのあとも、佐和島先生は何度かドリルの先端のバーを交換して、舞依の虫歯を削る治療がまだ続いた……。

「舞依ちゃん、よくがんばったね！！ 削る治療はもう終わりだよ。お口ゆすごうか」

「えっ、えっ、くすん、ぐすん」舞依は、治療のあいだ泣きっぱなしだった。その顔は、汗と涙と唾液にまみれ憔悴しきっている。千咲がタオルで顔を拭いてくれた。

「ヒック、ヒック」まだしゃくり上げている。

ユニットが起こされると、ハンドタオルでまず涙を拭く。治療の痛みが鮮明に甦り涙の粒が溢れてくるのだ。それから口をゆすぐが、長い間口を開けたままにしていたことと、まだ麻酔が効いているのでうまくゆすげず、水が口から漏れる。

そんな舞依を、スタッフは「舞依ちゃん、えらいよ」「舞依ちゃん、よくがんばったねー」と笑顔で口々にほめる。

母の仁美もほほえみながら、「舞依、よくがまんしたわね。それでこそママの子よ。ママ、うれしい」と舞依をほめた。さっきは叱っていたとしてもやっぱり我が子は愛おしい。ハンカチで舞依の涙を拭いてやる。

舞依はもう泣きやんでいたが、みんなにほめられてちょっぴり照れくさい。

“……中学生なのに、治療中泣きっぱなしで、恥ずかしい……”

舞依が口をゆすぎ終わると、ユニットが倒れる。

「さあ、舞依ちゃん、あともう少し。いま削った歯にお薬を詰めるからね」と佐和島先生は舞依にいったあと、千咲に向かって「戸田くん、ペリオドンをお願いします」と指示を出した。

千咲は「はい、先生」と返事をする、ワゴンの上のトレイで準備を

する。

佐和島先生は、タービンをシリンジの持ち替えると、エアーを舞依の歯にふきつける。

シュツ、シューツ。

舞依は少し顔をしかめた。佐和島先生は、千咲がトレイに準備したペリオドンの薬瓶をうけとると、綿を巻きつけたブローチをペリオドンの薬瓶に浸し、ブローチを舞依の虫歯の削った穴に詰める。

「舞依ちゃん、ちょっと、染みるからねー。がまんしようねー」

「ふうん、ふんふん、ううっ、んんっ」

“い、痛いっ！！ 先生、痛いよ～！！ うううーん、染みるうー！！” 舞依は、いま詰められた薬が強烈に歯に染み、からだを振った。

「舞依ちゃあーん、もうちょっとで済むよー。がんばろうねー」 恵梨香と千咲が声をかける。

「ふふん、ふんふん、ううーん、ふん、んんっ」

つぎに佐和島先生は、ストッパーを使ってセメントで舞依の歯を仮封し、ふくみ綿を取り除いた。

「はい、舞依ちゃん、今日はこれで終わり！！ よくがまんしたね。お口ゆすごうね」 佐和島先生がペダルを操作し、ユニットを起こしてくれる。

「ほんと、舞依ちゃん、よくがんばったよ。えらい！ えらいよ！」 恵梨香と千咲、それに華子と成美がほめてくれる。舞依は、治療が終わった安堵感でまた涙が目に滲んでくる。

「あらあら、もう泣かないの」 千咲がタオルで涙を拭いてくれる。舞依は水を含み、クチュクチュと口をゆすぎだす。麻酔による唇のしびれはまだ続いている。

舞依が口をゆすぐ背中に向かって、佐和島先生は、

「舞依ちゃん、そのまま聞いてね」といって、母の仁美の方を向き、

「お母さんも聞いてください」といった。そしてふたたび舞依の方を向くと、「今日治療した歯は、削ってみたら、診断のとおりで虫歯がそうと

う深く進行していたんだ。それで神経も炎症を起こしかけているし、だから、つらい治療になっちゃったんだ。舞依ちゃんに痛くしないっていったのに、痛くなっちゃったね。先生あやまるよ、ごめんね」といった。

「くすん」舞依は鼻を吸り、「いいえ」と小さく返事をする。

“先生のうそつき！！……でも、こんなになるまで虫菌をほおっておいた私が悪いんだし……、こんなになる前にちゃんと治療受けてれば、こんな痛い思いしなくて済んだのに……”

“中学生にもなって、歯医者さん泣きっぱなし……。恥ずかしい”

「……それでね、やっぱりこの歯は神経の治療しないとダメなんだ……」

“はあ～、やっぱり神経の治療になるんだあ～……。くすん” また涙が滲みそうになる。

「……今日は神経の治療まで行ってないんだ。だいぶ削るのも長くなっただし、それで、神経を殺すお薬を詰めて終わりにしたんだ」

「はい」

「……詰めたのは強い薬だから今日も痛むかもしれないし、この前のように痛み止めの薬と炎症を抑える薬を処方しとくね。痛み止めの薬はこの前のよりも強いものを処方しとくから、1回飲んだら必ず6時間以上は間隔を開けて欲しい。それから炎症を抑える薬は、次の治療まで毎食後1錠ずつ必ず飲んでね。わかった？」

と佐和島先生は、ワゴンの上で書き上げた処方箋を渡してくれる。

「はい」舞依は小さく返事をする。

「舞依、先生にもっとはっきりお返事なさい」仁美が注意する。

「まあまあ、お母さん」と佐和島先生は仁美をたしなめてから、舞依に「次は、ええっと……、そうだなあ、今週の金曜日の午前10時にきてくれるかな。ああ、もう6月だね。舞依ちゃんが治療に来てくれるようになってから1ヶ月近くになるんだね……」といった。

「はい」

舞依は佐和島先生のことばを聞いて、“もう1ヶ月……。ううん、まだ1ヶ月かな。治療、いつまで続くんだろ……”と憂鬱な気持ちでいた。

「次の治療は、右下の7番の根の掃除といま削った左上6番の神経を取る治療をするね」と佐和島先生は舞依にいい、仁美の方を見ると、「お母さん、舞依ちゃん治療中の歯が多くなってきたので、あまり堅いものは食べさせないように気をつけてくださいね」といった。

仁美は、「はい、わかりました。気をつけます」と頷いた。

「じゃあ、舞依ちゃん、次も待ってるからねー」スタッフがこの前と同じように、にこやかに声を揃えていった。

千咲が舞依の胸元から緑色の歯科エプロンを外してくれる。揃えてくれた靴を履き、フロアーに立った。

「ほら、舞依、先生とみなさんにちゃんとお礼をいいなさい」仁美が舞依にいう。

「……ありがとうございました」舞依は頭を下げ、小さくお礼をいった。

まだ治療した歯が疼く。

「お大事にねー」「金曜日に会おうねー」スタッフは口々に舞依に話しかけ、手を振りながら見送ってくれた。

治療室のドアを開けて、母の仁美と廊下に出る。

こうしてこの日の舞依の治療は終わった。

なでしこ薬局の中……。時計はすでに午後0時20分を指している。舞依は、佐和島先生にかれこれ1時間近くの治療を施されていた。

舞依は、治療で疲れたからだをソファに預けている。

仁美は、薬剤師の栄倉友里から舞依の薬を受け取りながら、今日の舞依の治療について話している。

「……ほんと、誰に似たんだか……。私も主人も歯は丈夫な方なん

ですが……」

「……そうでしたか。舞依ちゃん、今日もつらい治療だったんですね。ほんと歯の治療は痛いすもんね……。私も経験あります……」と友里は同情の目でチラッとソファに座って待っている舞依を見る。

「えっ、そうなんですか……。そんなに痛いんですか。私、あまり痛い経験をしたことがないもので……」

仁美がいうと、

「お母さん、失礼ですが虫歯治療を受けたことがない……？」と友里は仁美をいぶかしげに見る。

「いえ、虫歯を治療したことはありますけど、削って詰めただけで、舞依のように神経の治療を受けたことはないんです……」

実は仁美はあんがい歯が丈夫だ。上下左右の6番、7番を治療してあるが、虫歯の治療を受けたのはそれだけである。いずれの歯も有随歯でインレーが詰めてある。

「そうでしたか……。でも、お母さん。ほんとに神経の治療は痛いんですよ。だから舞依ちゃんの歯医者さんが怖いって気持ち、わかってあげてくださいね。叱らないであげてください。……こういっては失礼ですが、お子さんの虫歯は、もちろんお子さん自身の責任ですが……、お母さん、お父さんの責任でもあるんですよ。これからは、ちゃんとお子さんの歯を見てあげてくださいね」

「はい、……その点は、反省してます……。あの子が歯医者さんをいやがるもので、つつい治療を先延ばしにしまって……」

舞依は、ぼんやりとふたりの会話を聞くとともにしに聞いていた。

「舞依ちゃん！」

午前中歯医者に行くために休み、いま登校してきて廊下を教室に向かって歩いている舞依の後ろ姿を見つけて、黒川先生は声をかけた。

振り返った舞依は、憂鬱そうだ。こころなしか目が赤く、頬に泣いた

あともある。

黒川先生は舞依のところへ小走りに駆け寄り、
「6時間目終わってから、私のところへ来て。いいわね」と耳打ちし、
5時間目の担当教室に向かっていった。

キーン、コーン、カーン、コーン。

6時間目のチャイムが鳴り、今日の授業が終わった。舞依は教科書などをスクールバッグに入れ、帰り支度を整えると、いわれたとおり黒川先生に会うため、職員室に向かった。

ガラッ。

「失礼します」一礼をして、舞依は職員室に入り、黒川先生の座っている席へいった。

舞依が黒川先生の前に立つと、黒川先生はパイプイスを勧めて、
「舞依ちゃん、今日の治療どうだった？ やっぱりつらい？」と聞いた。

舞依はいすに座ってから、しばらくうつむいたまま黙っていたが、小さな声で、先週の金曜日に治療が怖くてサボってしまったこと、今日は怖いのに無理矢理母に連れて行かれたこと、治療の間母にずっと抑えられたこと、中学生なのに治療中ずっと泣きっぱなしで恥ずかしかったこと……を黒川先生に話した。

「そう……。大変だったわね、舞依ちゃん。舞依ちゃんは、前に歯医者さんで怖い目にあってるから、行けなくても仕方ないわ。私も経験あるけど、無理矢理連れてかれると、よけい怖くなるもんね。でもね……。前にもいったと思うけど……。治療で泣いたって誰にもわからないから……。治療しないと虫歯治らないし……。治療つらいだろうけど、がんばって……。ね。先生は、これくらいしかいえませんが……。ごめんね」

「せんせい……。ありがとうございます……。今は何とも言えないです、自分の意志では歯医者さん行けないです……。当分は母に連れて行かれる事に……。」”なります”の語尾が小さく消えてしまった。それほど、舞依

は元気がない。

黒川先生は痛々しい目をして舞依を見ていた。

9. 強制連行

いつのまにか衣替えの季節を迎えた。母の仁美に手を引かれ、皓大歯学部附属病院に連れて行かれる舞依が身にまとっている制服も、白のセーラー服、赤のリボンネクタイ、チェックのプリーツスカートや白のハイソックスの夏服に変わっている。

月曜日に母の仁美に叱られて無理矢理虫歯治療に連れて行かれた日から4日たった、金曜日の6月3日。午前8時30分である。

「舞依、はやく支度なさい！」と仁美が2階に声をかける。

今日も舞依は午前中、学校を休んで、皓大歯学部附属病院の佐和島先生の治療を受けに行く。

舞依は部屋にいた。「はあ〜い」と返事をするが、ぐずぐずと支度している。

“はあ、また治療痛いんだろうなあ〜。……はあ〜、いやだなあ〜。歯医者さん、行きたくないよ……” 舞依はさっきから憂鬱な表情で、あたまの中で治療のことを思って、同じことを何度も何度も考えていた。

カチャッと部屋のドアが開き、仁美が顔を出し、「何してるの！ 歯医者さん、行くわよ！」と舞依を急かした。

「ママー、歯医者さん行かないとダメ？ 私、今日は歯医者さんお休みしたい……」

「何いってるの。虫歯ほうっておくと、ほんとに歯がなくなっちゃうわよ。ぐずぐずしてないで、ほら、行くわよ」と、仁美は、ようやく支度の終わった舞依の手を引っぱり、無理矢理歯医者さんに連れて行った。

舞依は、仁美とともに佐和島先生の治療室にいた。

血圧が113、69、脈拍が67とすでに測定も終わり、笑気ガスの吸引も済んだ。舞依の胸元には緑色の歯科エプロンもつけられており、佐和島先生はじめ、スタッフもそれぞれの位置についている。今日のバキューム操作は千咲の担当で、恵梨香はワゴンのところで佐和島先生の診療補助を行うようだ。すでにライトは点灯されている。仁美は心配そうに歯科ユニットの近くで舞依を見ている。

華子と成美が佐和島先生のところへワゴンにのせた器械を運んできた。

器械が到着したのをみて、佐和島先生は舞依に口を開けさせる。

「おおきくお口開けようねー。はい、アーン」

「舞依ちゃん、怖くないよー。大丈夫だからねー。お口ア〜ン」恵梨香と千咲が交互に舞依に声を掛けた。

“はぁ〜……、やだなぁ〜……。今日も始まっちゃう。……痛いかなぁ。神様！！ どうか痛くありませんように！！” 祈るような気持ちで、今日の治療に痛みがないことを願い、舞依は口を開ける。

いつものように麻酔液を浸した衛生綿で、舞依の歯茎に表面麻酔が塗られる。じんわりと痺れてくる。次に、恵梨香から佐和島先生の手には麻酔カートリッジを装着した注射器が渡され、舞依の右下の歯茎に注入される。

「ううっ、うんっ」

「大丈夫だよー。がまんしようねー」

若い舞依の口腔内はすぐに唾液が溢れてくる。千咲がバキュームを挿入し、唾液を吸引する。

コォー、コォォォー。ジュポポポォー。

“ふふん、ふうん、ふん。舌が……” バキュームの強い吸引力で舌が引っぱられそうになる。

続いてもう1本……。

「ふんふん」

「すぐ済むからねー」と恵梨香が舞依に声を掛けるが、舞依は麻酔注射の痛みをこらえるのに必死である。涙目になりながら、なんとかがまんをする。麻酔が効くまでしばらく待つ。

佐和島先生はピンセットの柄でコンコンと打診をして、麻酔が効いたのを確かめると、舞依の右下7番の仮封のセメントをピンセットとエキスカベーターで取り除き、詰めてあったガーゼともども汚物入れに捨てた。そして佐和島先生は、恵梨香からリーマを受け取りながら、

「舞依ちゃん、今日はまず右下7番の歯の掃除をするよ」

と舞依にいった。

“くすん。また神経、削られる……” 舞依はやっぱり不安でしかたない。

「はい、お口開けよう。アーン」と佐和島先生が促すので、舞依は怖々口を開ける。舞依の口の中へ佐和島先生の持つリーマが入ってきた。削られてポツカリと穴の開いた右下7番の歯の中へリーマを入れ、根管治療を始める。

グリグリ、ゴシゴシ。

コリコリ、ゴシゴシ。

と歯の根が掃除される。舞依は脂汗を浮かべながらがまんしていたが、削った歯の穴の奥の方にリーマがとどくと、凄く痛く涙目になり、思わず声をあげる。

「んんー、んあ、ふうん、ふん」

「そうだね、痛いねー、もうちょっとがまんしてねー」

「もうすぐ終わるよー。がまんしようねー」

佐和島先生、恵梨香と千咲は治療の手を止めずに、舞依を励ますが、舞依はすでに半べそだった。涙の溜まる目を千咲の立っている方向にやる。仁美がその横で舞依を見守っているのだ。“ママー、痛いよう……、助けてえー。先生に治療やめるようにいって！！ もう、治療いやだっ！！”

仁美は、舞依の目からの『もう、治療いやだっ』というサインに気づいたが、『もうすぐ済むからがまんしなさい』と目で返す。

“ママー、なんで！？　なんで、先生にいつてくれないの！？” 涙目で舞依は思った。

「ふうん、ふん、ふん」

ようやくグリグリという感触がなくなり、根の治療が終わった。佐和島先生は、根管治療をした舞依の歯にシリンジでエアーをふきかける。

シューツ。

「ううっ」

「はい、大丈夫だよー」

佐和島先生は、今度は華子と成美に指示を出す。

「根管長を測ります」

「はい」 声をそろえて返事をする、華子と成美はさきほど運んできた器械をワゴンごと佐和島先生の手元へと持ってくる。根管長測定器だった。小型の液晶モニタからコードがのび、コードの先端にはハンドピースがついていて、そこには長い針のようなものがついている。

“なに！？　なにこれ！！　なにされるの！？” 舞依は、はじめて見る器械に不安感が募った。

「心配しなくていいよ、舞依ちゃん」と舞依の不安を見て取った佐和島先生は、「これはね、根管長測定器っていつてね、歯の根の長さを測る器械なんだよ。これから、これを使って舞依ちゃんの歯の根の深さを測るんだ。でね、いま舞依ちゃんのこの歯は神経を取っちゃったから、中ががらんどうなんだ。それで、治療の最終段階で根にガッタパーチャっていうゴムのようなものを詰めるんだけど、その前の準備のためにこの器械で根の深さを測るんだよ」といった。

「お口開けててねー」と佐和島先生は根管長測定器のハンドピースを握り、根管治療をした舞依の歯の中に入れた。液晶モニタに舞依の右下7番の歯の根尖部が表示された。佐和島先生は根管長を確かめると、カルテに記入した。

そのあと生理食塩水を注入して洗浄し、点滴針で吸引した。キャナクリンを用いて消毒する。次にヨードグリセリンに浸したガーゼを詰めて、ふたたびセメントで仮封をした。

「舞依ちゃん、よくがんばったねー。一度お口ゆすごうか」

ユニットが起こされる。舞依はクチュクチュと口をゆすが、麻酔の効果で唇や頬が痺れておりうまくゆすげない。

“今日はこれで終わりかな。エプロン、外してくれるかなー”と辺りを見るが、いっこうにエプロンを外してくれる気配はない。

そのあいだ、恵梨香は次の治療に使う麻酔注射の準備をワゴンの上のトレイで、佐和島先生はテーブルの上のバーチャージャーから切削治療に使うバーを選び、ハンドピースの先端のドリルに装着している。千咲はもうバキュームを構える体勢に入っている。

ふたたびユニットが倒された。

「はい、お口大きく開けてねー」

「大丈夫だよ～、痛くないからね～」

“あんなにがんばったのに、まだ治療するの！？ はあ～、もうやだっ！！”と舞依は思ったが、この状況から逃れるすべはない。

「舞依ちゃん、次の治療のために、もう一度麻酔をするよ」と佐和島先生は、今度は舞依の左上6番を治療するために、左上の歯茎に表面麻酔をする。表面麻酔が効いてから、舞依は麻酔注射をまた2本打たれた。注射針が刺さるたび、身を堅くして耐える。

千咲と恵梨香は「力入れないでー。リラックスして」「がんばってー。怖くないからねー」と舞依を励ますが、舞依はやっぱり肩に力が入り、涙目になる。

麻酔が十分に効くまで5分ほど待った。麻酔が効いたのを打診で確かめると、

「はい、仮の詰め物を取るよー」といって、佐和島先生は、舞依の左上6番のセメントと中に詰めてあった綿を取り除き汚物入れに捨てた。仮封を取った左上6番をホルマリントリクレゾールで消毒し、シリンジで

エアーをかけ乾かす。次に左上の歯茎と頬のあいだに治療スペースをつくるためのふくみ綿を含ませる。

「舞依ちゃん、今度はこの間削った左上6番の神経の治療をするね」佐和島先生はいう。

“もう、やだっ。くすん” 舞依はもう治療は終わりにして欲しかったが、ドリルを構えている佐和島先生、バキュームを構えている千咲、ワゴンの横で診療補助をしている恵梨香、そして華子と成美に囲まれていてはどうすることもできず、嫌々ながら口を開けた。

千咲がバキュームを舞依の口に挿入する。

コオオオー、コオー。

佐和島先生がバーを装着したドリルを舞依の口腔内に挿入し、仮封を取り除いた左上6番の歯を削り始める。

「舞依ちゃん痛くないからねっ！ もし痛かったら左手あげてね、治療すぐやめるからね！」

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオオオー、コオー。

キュン、キュン、キュイイーン、キュ、キュイ、キュイーン。

「ふん、ふん、んああ」

「大丈夫、大丈夫。痛くない、痛くない。もうちょっとがまんしようね～」

『舞依ちゃん、舞依ちゃんが治療つらいのは、先生よくわかるの。先生も経験者だし……。だから、つらくても治療がんばって、虫歯治してね！ 先生、応援してるから』黒川先生の声が舞依のあたまの中で聞こえてきた。舞依は歯医者さんで怖くて怖くて仕方ない時に、黒川先生の優しい言葉を思い出してがんばっているのだ。

“黒川先生、舞依、がまんしてるよー。がんばってるよー”

治療後に、いつも学校でいう舞依の泣き事に、優しく応援してくれる黒川先生に、舞依は感謝していた。

“黒川先生が歯医者さんなら良かったのに……。そしたら私泣かない

で治療がんばれるのに〜”なんて、舞依は涙を浮かべたまま口を開け、佐和島先生の治療を受けながら思っていた。

しかし、続く切削の痛みは舞依のがまんの限界に徐々に近づいてきた。

キュイ、キィイ、キュイイイイーーン。キーン。

「痛い！！ 痛い！！」

ついにがまんの限界を超えて、舞依は泣き出し、足をパタパタし出した。

「エッ、エッ、うわあああーん」

“痛いよー。痛いよー。キーンって機械で削るの、やっ！！ やっ！！
えっ、えっ”

「舞依、しっかりしなさい！ もう中学生でしょ！ 少しはがまんしなさい！」仁美が舞依を叱ると、華子と成美が「まあまあ、お母さん。舞依ちゃん、歯医者さん怖いのに、がんばってるって思いますよ。だから、あまり叱らないで」となだめる。

“私だったら、つい……。この前も、先生たちにたしなめられたのに……”仁美は我が子かわいさの発言とはいえ、反省する。

「わあああーん、エッエッ」

キュウウウーーン。

佐和島先生が、タービンを止めた。

「舞依ちゃん、痛い？」

「くすん、ヒック、ヒック、……はい」舞依は涙に濡れた目でこくりと頷く。ハンドタオルで涙を拭いた。

「もう1本麻酔しようか」と佐和島先生は、「川合くん、シンマ」といって、恵梨香から麻酔注射を受け取った。みたび麻酔注射が舞依の歯茎に刺さる。ゆっくりと麻酔液が歯茎に注入される。またもやズーンとした圧迫感を舞依はあじわった。

「ふんふん、ううっ」

「ちょっとがまんしようねー」注射針を舞依の歯茎に刺し薬液を注入しながら、佐和島先生が舞依を励ます。やがてすべての麻酔液が注入され

終わると、麻酔が効くまで切削治療をしばらく待った。

治療が再開される。

「もうちょっとだから、がんばろうねー」恵梨香と千咲がいう。

「はい、お口アーン」タービンを構えて佐和島先生が、舞依に口を開けるように促す。

“ああまたキューーンってされる……”

“ぐすん。また削るの……？ はあ～痛いんだろうなあ……。麻酔注射でもとっても痛い思いしてるのに……。今度こそ麻酔が効きますように！！ 痛くありませんように！！ 神様、お願い！！”

怖い思いをがまんしながら、舞依は口を開ける。

千咲のパキュームと佐和島先生のタービンが舞依の口に挿入される。タービンの先端、ドリルがふたたび左上6番の歯にあてられ、虫歯を削り始める。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

キュウウウーーン、キューーン、キイイイーン。

キュウン、キュウウン。チュイーン。

コオオオー、コオー。

キュ、キュ、キューイイイーーン、キューイ、キューイ、キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

「ふんふん、ふうん、ふん、あつ、あつ」

「痛くない、痛くない。がんばろうねー」「すぐ終わるから、もうちょっとがまんしようねー」千咲と恵梨香が舞依に声を掛けるが、舞依はまた虫歯を削る痛みで苦しんでいた。眉間にしわを寄せ、白いハイソックスをはいた足をパタパタする。スカートが捲り上がり、かわいい白パンツが見えそうになる。

「ふんふん、んんっ、ひはい！！ ひはい！！ エッ、エッ、ひやひゅへへー！！ あん、あん、うわああーん」

“痛いっ痛いっ！！ 痛くないことなんかないよ！！ 痛いよお～！！ お願い、もう止めて、もう許してえ！！”

「舞依！ パンツみえちゃてるわよ！ほんとにはずかしい……。治療中は、おとなしくしないとダメじゃないの！！」母の仁美が叱る。

また泣き出した舞依の思いとはうらはらに、まだしばらく痛い切削治療が続き、舞依が痛みをうったえる度に麻酔注射が打たれ、切削治療が続く……。

「はい、よくがんばったね、舞依ちゃん。お口ゆすいでねー」ふくみ綿が取り除かれ、ユニットが起き上がる。

舞依が洗口台のコップを手に取り、クチュクチュと口をゆすぐ。

“これだけがんばったんだもん！ きっと治療は終わりよね……”と思いつつ、洗口台からユニットの正面を向く。

ところが口をゆすぎ終わった舞依が見た光景は、佐和島先生が今度はエンジンリーマをコントラアングルハンドピースに装着しているところだった。それを目の当たりにして、“なにっ！？ あの機械！？ 凄い長い針みたいなの付けてる……。見ただけで痛くされるってわかる……”とまた目に涙が滲んでくる。

ふくみ綿がまた左上の歯茎と頬のあいだに挟まれた。

佐和島先生がエンジンリーマを構えて、

「舞依ちゃん、この器械でね、神経を取る治療をするよ。もし痛かったら、左手上げてね」といった。

「はい、舞依ちゃん、大きくお口開けよ。ア～ン」

「痛くないからねえ～大きくア～ンしようね～」千咲と恵梨香が舞依に口を開けるように促す。

怖々口を開けたところへ、まず千咲のバキュームが挿入された。そして佐和島先生が持つエンジンリーマの長い針が、舞依の歯に挿入される。

キーン、キーン、キーン。

キーン、キーンー。

ウィーン、ウィーン。

コォー、コォォォー。

「ふんふん、ふうーん、ふんふん」

「いま、根の中を削ってるからねー。もうちょっとがんばろうねー」

「そうだよ、もう少しだよー。がまんしようねー」 佐和島先生と千咲が舞依に交互に声をかける。

「はあん、はん、あん、んあっ」

キーン、キーンーん。

ウィーン、ウィーン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュッ。

ウィィィーん。

エンジンリーマが止まり、舞依の口から出された。舞依は“やっと、終わり？ いす起こして、お口ゆすがしてくれるのかな……” と思っただが、千咲のバキュームが口から出される気配はない。口の中で相変わらずバキュームがコオーと音を立てている。薄目を開けて佐和島先生を見ると、エンジンリーマを交換している。

“はあ～、まだ終わりじゃないんだ……。くすん” また目尻に大粒の涙が溜まる。持っているハンドタオルで涙を拭う。

「はい、そのまま大きくお口開けててねー」と佐和島先生は交換し終えたエンジンリーマを舞依の口の中に入れ、ふたたび左上の6番の歯に挿入する。先ほどは近心根の神経を治療していたが、今度は遠心根の治療である。

キーン、キーンーん。

ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン、キーン。

コオー、コオオオー。ジュポポポー。

虫歯を削った穴の遠心根の深いところにエンジンリーマの針がとどくと、舞依は奥の方が凄く痛く涙目になり、半べそになる。

「ううん、ううーん、ひはいっ！！ ひはいっ！！」

キーン、キーン、キーン。

ウィーン、ウィーン。

「もうすぐ終わりだよ。がんばろうね」「すぐおわるからね～がまんしようね～」恵梨香と千咲が励ますが、ますます痛みは激しくなり、舞依はまた泣き声をあげた。

「うわあああーん、あああーん、あんあん、ひはいつひはいつひはいーっ！！ エッ、エッ。ひはあーいつ！！ ほうひゅひゅひへー！！ ひっく、ひっく」

“痛い！！ 痛い！！”と舞依は泣いている。

ウィィィーん。

佐和島先生がエンジンリーマを止めてくれた。

舞依はエンジンリーマが止まったことで、“エッ、エッ、痛かったよ～。今度こそ、……治療終わったっ。 終わりよね”と思っていた。

佐和島先生は、「そっか、舞依ちゃん、だいぶ痛い？ いま、奥の方を削ってたんだけど、がまんできなかった？」と舞依に聞いた。

「ヒック、ヒック」としゃくり上げながら、舞依は「はい」と小さく返事をした。

「じゃあ、もう一度だけ麻酔しよっか」

“えっー！！ まだ終わりじゃないの！？ もうやだよ……” また涙が溢れ出す。もう治療から逃げ出したかったが、逃れるすべはなく、嫌々ながら、佐和島先生のことばに仕方なくこくりと頷く。

舞依の歯茎に、今日何本目だろうか……、麻酔注射が打たれる。

「大丈夫だよー。すぐ麻酔が効いてくるからねー。もうちょつとがまんねー」麻酔液を注入されるあいだ、恵梨香と千咲が舞依に声をかけ続ける。やがて薬液が麻酔カートリッジからすべてなくなり空になると、歯茎から静かに針が抜かれた。

しばらく待ってから、エンジンリーマによる神経の治療が再開される。

キーン、キィーん。

キーン、キーン、キーン。

ウィーン、ウィーン。

コオオォー、コォー。

「舞依ちゃんががんばって、いたくない、いたくない、もうすぐおわるよ」
佐和島先生がまた注射をして、また舞依の虫歯の神経をキーンと機械で削り続けた……。舞依はそのあいだ、ずっと泣きっぱなしだった。

「はい、今日削るのはこれで終わり！！　よくがんばったねー、舞依ちゃん！！　えらいよ。いつものことながら、えらいよー、舞依ちゃん。いい子だ」

佐和島先生がほめながら、エンジンリーマを口から出してくれた。千咲もバキュームを舞依の口の中からユニットの左の元の位置に戻した。

「舞依ちゃん、つらいのにながまんして、えらいよー」「えらい、えらい」
「よく頑張ったね～えらかったね！！」「大人でも歯医者さんの治療怖くて泣く人居んだから、舞依ちゃん、がんばってがまんして、えらい！！」
惠梨香と千咲、成美と華子が口々にほめる。

今日は抑えもせず、ユニットのそばで見守っていた母の仁美も「舞依、よくがまんしたね、がんばったね」と微笑みながらほめてくれる。

舞依は、今日も過酷な治療に放心状態だったが、みんなの声を聞きながら、ハンドタオルで涙を拭く。削る治療が終わったことでもう泣いてはいなかった。プリーツスカートはやはりずり上がって少し捲れているが、パンツが見えるほどではなかった。スカートの裾を直す。

“やっぱり、今日も泣いちゃった……。中学生なのに……。恥ずかしい”

「じゃあ、お口ゆすいで、もうひとがんばり、薬を詰めて終わりにしようね」と佐和島先生はユニットを起こして、舞依に口をゆすがせる。

口をゆすぎ終え、舞依の座るユニットがふたたび倒されると、佐和島先生は、

「はい、アーン」

と舞依に口を開けるように促す。

舞依はもう今日は麻酔注射もキーンと削る治療もないんだと思うと、少しホッとしていた。素直に口を開ける。

「そう、いい子だね」

佐和島先生はシリンジを持つと、舞依の左上6番の歯にエアーをシューッとかけた。舞依は歯の根の奥が少し染み、思わず、「つつっ」と眉間にしわを寄せ、顔をしかめる。

「大丈夫だよー」千咲が声をかける。

次に、佐和島先生は、ヨードグリセリンに浸した衛生綿を神経を削っていた舞依の虫歯の穴に塗薬する。舞依はまたまた歯の奥の方が染みて、思わず声をあげる。

「ううっ、ふんっ、ふん」

“染みるっー！！”

「すぐ済むよー、もうちょつとがまんしようねー」また千咲が励ます。

佐和島先生は、ホルマリントリクレゾールに浸した衛生綿で舞依の歯の根管を丹念に消毒した。最後にヨードグリセリンに浸したガーゼを、ピンセットで舞依の歯に詰め、セメントで仮封をして、今日の左上6番の歯の治療を終了した。

「舞依ちゃんががんばったね、えらかったよ」

佐和島先生が舞依をほめながら、ユニットを起こしてくれる。

「よーく、お口ゆすいでね」

佐和島先生の声の背中に聞きながら、舞依は左手のハンドタオルで涙を拭き、右手でコップを持ちクチュクチュと口をゆすいだ。口をゆすいでいる途中、痛かった治療が思い出され、またしゃくり上げてくる。

“くすん、エッ、エッ、……。痛かった〜っ、ヒック、ヒック”

「舞依ちゃんががんばったね、えらかったね」「えらかったよ〜」またスタッフがほめてくれる。

「舞依ちゃん、今日は2本治療したけど、右下の7番、一番奥の歯だけど、根の掃除をしたんだけど、だいぶよくなってたよ。次回も、根にガッタパーチャを詰めるために、根管治療を続けるよ。それから、いま治療していたばかりの左上の6番は、神経を取ってお薬が詰めてあるんだ。この歯も、根の掃除、根管治療をするね。舞依ちゃん、今日も念の

ために、痛み止めの薬と炎症を抑える薬を処方しとくね。痛み止めの薬はこの前もいったように、1回飲んだら必ず6時間以上は間隔を開けてね。それから炎症を抑える薬は、また毎食後1錠ずつ必ず飲んでね」と佐和島先生は舞依にいて、続けて、「……そうだなあ～、まだまだ虫歯が沢山あるからねえ……、そうだねえ、舞依ちゃんの体調がよければ、奥田先生が治療し始めた右下の6番の治療を始めよっか……」と話しかけたが、舞依の顔がいかにも“えっ～、3本も治療するの……。ぐすん”と泣き顔になりかけたのを気遣ってか、最後の方はひとりごとのようになった。

佐和島先生は気を取り直して、「舞依ちゃん、今日みたいに先生と一緒にがんばろうね」といい、次いで仁美の方を向き、「お母さん、この前もいいましたが、食べ物についてあまり堅いものは食べさせないように気をつけてあげてくださいね」と再度注意を促した。

「はい」

「では、次は月曜日、6月5日だね。午前10時に来てくれるかな？」舞依の目を見て、佐和島先生はいう。

「はい……」

舞依は痛い治療がまた待っているかと思うと、つつい返事が小さくなってしまう。

「舞依、先生にちゃんとお返事なさい」仁美が注意する。

「大丈夫だよねー、ちゃんと来られるよねー」微笑みながら、恵梨香、千咲たちが舞依を見る。

「じゃあ、今日の治療はこれでおしまい！ 舞依ちゃん、お大事にね」佐和島先生が歯科医用のいすから立ち上がる。

「エプロン外すねー」

と千咲が舞依の胸元の緑色の歯科エプロンを外し、恵梨香が靴を揃えてくれる。靴を履き、歯科ユニットから立ち上がると、舞依は仁美とともに、「ありがとうございました」とお礼をいった。

ふと見ると、診療室の時計は午前11時を5分ほど過ぎている。今日

も舞依の治療は1時間くらいかかったようだ。

「お大事にねー」「月曜日、待ってるからねー」

いつものようにスタッフの声に見送られながら、ドアを開けて第2診療室の外へ出た。

そのあとでしこ薬局で、佐和島先生の処方箋を出し、痛み止めの薬と炎症を抑える薬を薬剤師の栄倉友里に処方してもらい家路についた。

舞依はようやく神経の治療が終わり、純姫女子学園に登校してきた。教室へ向かう廊下を歩いていると、黒川先生が肩をポンと叩き、「舞依ちゃん、痛くなかった？　がんばれた？」とやさしく微笑みながら、声をかけてくれた。

黒川先生の実顔を見ると、舞依は涙が溢れてきた。

「せんせい……、わたし……」“痛かった”が声にならない。

「あらあら、……舞依ちゃん、ここはもう歯医者さんじゃないんだから……。ね、もう泣かないで」

「はい」

舞依は今日の治療の一部始終を黒川先生に話した。

「そう……。つらいわね、舞依ちゃん……。先生慰めるしかできないけど……。できれば、代わってあげたいほどだけど……。でも、いまが一番つらい時期だと思うから、ここをがんばってのりきれば……。ねっ。きっとキレイに治って、笑顔になれるから」

やさしく諭す黒川先生に、小さく頷く舞依だった。

月曜日の朝。もう気配は初夏である。

「舞依、はやく！　10時から治療でしょ。行くわよ！」玄関先でくつを履いた仁美は、廊下を玄関にむかってのろのろと歩いている純姫女子中学の夏の制服姿の舞依にいった。

「ママー、歯医者さん行かないとダメ？ 治療痛いし……、中学生なのにずっと泣きっぱなしだし……。もうやだよ……」

舞依はすでに半べそである。先週の月曜日の、ドリルで削らてる間母の仁美にずっと抑えられて泣きっぱなしだった治療を思い出してしまっている。

「ダメ！！ ちゃんと治さないと、ほんとに入れ歯になっちゃうわよ！ さっ、行きましょ」

また今日も、舞依は仁美に手を引かれ無理矢理皓大歯学部附属病院に、大嫌いな歯医者に連れて行かれる。舞依の歯医者恐怖症は、歯科治療嫌いはまだまだ治らない……。

歯科衛生士

キューーン、キーン、キュ、キュ、キュイ、キューーン。

キーン、キュイ、キュイ、キュイイーーン。

「ふん、ふん、痛いつ！ 痛いつ！ もう許してえー！！ ふんふん、くすん」

「はぁーい、痛くない、痛くない、もうちょっとがまんしようねー。すぐ済むからねー」裕子先生、育子ちゃんの虫歯削りながら、励ましてる。私も声かけしなくっちゃ。

「育子ちゃん、もうすこしだよー。がんばろうねー」

「んんっ、んあっ、ふううーん、ふうん、ふん」

ふーっ、なんとかお口開けて治療受けてくれてるわね。さっきはどうなることかと思った。だって、育子ちゃんたら歯科エプロンつけただけで大泣きするんだもん。

キュ、キュ、キュイイーーン。

育子ちゃん、さっきはどうだったかというと…………。

私は、今年の春となり町にある皓歯大学歯学部附属歯科衛生士専門学校を卒業して、歯科衛生士国家試験に合格したばかりの市川理央。4月からここ『みどりヶ丘デンタルクリニック』に勤めはじめた新人なので、まだまだ失敗が多いけど、先生や先輩のサポートのおかげで、なんとか仕事をこなしている。でも、いつかは先輩たちのような立派な歯科衛生士になって、患者さんに喜ばれるようになりたいと思ってるんだ。それにこれはみんなには秘密だけど、理央、みどりヶ丘デンタルクリニックに勤め先を決めたのは、地元っていう以外に、もうひとつ理由があるんだぁ〜。…………ここのナース服、パステルピンクで、まあいい襟元は白でかわいいの！ それにナース服につけるパステルグリーンの花模様のエプロンや白いナースキャップも清潔そうですき！ ナースシューズも

ナース服とお揃いのピンクでとってもキュートなの！先輩たちも優しいし、はぁ、ここの歯科医院に就職決めてよかったぁ〜。……でもナース服ってポリエステル繊維が含まれてるから、ブラが傷んじょうことがあるのよねえ〜。

はっ！ そんなことより、今日もみどりヶ丘デンタルクリニックは、朝から患者さんの予約で大忙し。あっ、大塚愛の『プラネタリウム』♪だ。いい詞曲よね〜。そういえば、もう秋かぁ〜。空も高くなっちゃったし……。『虫歯予防デー』からの『歯の衛生週間』に、近くにあるみどりヶ丘中学校と女子高の桜葉高校（おうようこうこう）の歯科検診があつてからは、ずーっとみどりヶ丘中学と桜葉高校の女生徒たちでいっぱい。夏休み終わってもまだまだ女生徒の患者さん、途切れないなぁ〜。

そろそろ、学校が終わる時間だから、はりきって準備しなくっちゃー。

……準備できたわー。次の患者さん、呼ばなくっちゃあー。

「小峰さあーん、小峰育子ちゃあーん、診察室へお入りくださあーい」

あれ？ あっ、あの子だ。……お母さんかしら、育子ちゃんを説得してるけど、ソファから床にしゃがみ込んで抵抗してるわ。

「育子、わがままいわないで！！ ほら、先生にちゃんと診てもらいなさい！！」

「イヤっ！！ コワイ！！ コワイ！！」

あらあら、歯医者さんが苦手なのね。よしッ、育子ちゃんのところまで行って、診察室に連れて入ろう！

「育子ちゃん、どうしたの？ 何にも怖くないよ。だから、お姉さんといっしょに診察室に行こ」

「ほら、育子。助手のお姉さんが迎えに来てくださったわよ！ 治療室に行つて、ちゃんと治療受けてきなさい！」

お母さん、助手じゃなくて、歯科衛生士なんですけど……。まぁ、いいつか。

「育子ちゃん、育子ちゃんを診てくれる真山裕子先生はやさしいから、治療痛くないよ」

「やっ！ やっ！ やだっー！！ くすん、くすん」

泣き出しちゃった……。どうしょ……。まだまだだなあ〜、私って。あっ、騒ぎを聞きつけて、センパイたちがやって来ちゃった。

「どうしたの？」「泣かないで」「治療、怖くないよ」口々にセンパイたちも説得するけど、育子ちゃん、首を横に振るばかりだわ。

「お母さん、今日の育子ちゃんの治療、どうされます？」チーフの浅野さんがお母さんに聞いたの。

「この子ずーっと歯医者さん行っなくて……。お願いします。治療してください……」

「分かりました」浅野さん、私の方を向いて

「いい、理央ちゃん。育子ちゃんを抱っこして運ぶわよ」というなり、浅野さんはじめ新垣さん、斉藤さんの先輩たち3人がいきなり育子ちゃんを抱っこしちゃった。あっ！先輩たち診察室のドアの方へ向かっているっ！

「あん、あん、いや！ いや！ 許してえー！！ 助けてー！！ ママ、ママ！！」

「理央ちゃん、何してるの！ はやく治療室のドア、開けなさい！！」

「は、はい！ チーフ！」

私は、治療予定の歯科ユニットに誘導できるように、アームのついたテーブルを大きく開けて、動線を確保したの。

「いやっ！！ やっ！！ ヤダっ！！ ヤダっ！！ 治療受けたくない！！ おうち帰る！！」

「やだっやだっやだっ！！ 治療台座りたくない！！ ふえーん、えん。いやあ〜」

そのとき、隣のユニットに座っている小学校5〜6年くらいの女の子の声が小さく聞こえてきたの。

『中学生くらいかな？ 私よかお姉さんなのに歯医者さんで泣くなんて恥ずかしいなあ〜』

歯の治療の苦手な人は、ホントに歯医者さんがコワイのよ……人の気も知らないで……。そういう子はあとで治療痛くて泣いても知らないよ。

育子ちゃんが先輩たちにユニットに座らされたわ。育子ちゃん、足パタパタして抵抗してる。浅野さんが上体を抑え、新垣さんと斉藤さんが足を抑えてる。

あっ、また隣のユニットの女の子、なにかいってる。

『あの中学生のお姉さん……、歯医者さんのお姉さん達に無理矢理治療するイスに座らされてる……』

ちょっとコワイような顔してるねー。あの子も歯医者さんが苦手なのかな？

「はん、はん、いやっ！！ いやっ！！ コワイよ、コワイよ、くすん、ああーん」、

「育子ちゃん、大丈夫、大丈夫だって。裕子先生はぜったい怖くないように治療してくれるから。大丈夫だよ。お姉さんを信じてくれないかなあ〜」

私は、必死で育子ちゃんをなだめたの。

「ねっ、育子ちゃん。私とっしょに深呼吸しよ。気持ち、落ち着くよ。はい、いち、に、スーハー」

スーハー。

よかった。深呼吸してくれて。すこし気分が落ち着いたみたい。

「どう、少しは気分が楽になった？」

うれしい！ 育子ちゃん、

「うん」と小さく頷いてくれた。

「育子ちゃん、エプロンつけるねー」

「ううっ、ふんふん、うわああーん」

ヤダ。育子ちゃん、歯科エプロン見たら、また泣き出しちゃった。

「どうしたの？ 大丈夫だよ。だから、ねっ！ 泣かないで。ホント大丈夫だよ。裕子先生やさしく治療してくれるよ」

もう1回、なだめなくっちゃー。

「ふえ、ふえ、ふふん、えっ、えっ、ぐすん」

よかった。育子ちゃん、なんとか泣きながらもこっくりと頷いてくれたわー。

「じゃあ、裕子先生呼んでくるから」

私、裕子先生を呼びに行ったときに、先生に育子ちゃんが歯医者さん怖いこと話すと、

「わかったわ。わたしにまかせて」といつてくれた。

「さっ、行きましょ」

「育子ちゃん。せんせいに育子ちゃんが歯医者さん怖いわけ話してくれないかな〜」

「ヒック、ヒック」

育子ちゃん、コクンと頷いて、ポツポツと話し始めた。

「ぐすん、ヒックヒック。前に歯医者さんで痛くて恥ずかしい目に遭って……。小学生3年生の頃、『診るだけだからねっ』って歯医者さんに言われて素直にお口開けたら、お口固定する器具はめられて、いきなり麻酔注射されてドリルで削られたんです……。くすん、ぐすん。うう。エッ、エッ。……。そのドリルが半端でなく痛くて『痛いっ！痛いっ！！』って先生に言っても『もうすぐ終わるからね〜』って情け容赦なく削られて……。ヒック。……。ワンワン泣いちゃったんですう。……。治療、怖いし、痛いし、歯医者さんで涙だしたりベソかいたりするのって凄く恥ずかしいし……。それで、次の治療から行けなくなっちゃって……。えっえっ」

育子ちゃん、裕子先生に話し聞いてもらって、すこし落ち着いたわ。

「……そう。育子ちゃん、怖い目にあっただね」

育子ちゃん、ヒドイ目にあっただね。あつ、裕子先生、目が潤んでる。どうしよう、私ももらい泣きしそう……。

“ぐすん。裕子先生スゴイ優しい……。今までの歯医者さんでの怖かった事聞いてくれて、安心した……”

「育子ちゃん、大丈夫よ。先生にまかせて」

育子ちゃん、涙目で不安そうな顔だけど……。

「理央ちゃん、カルテお願いね」

「はい、先生」

カルテだわ。しっかりつけなくっちゃー。

「左上から行きます。7番C2、6番〇、5番斜線、4番C1、3番から2番斜線、1番C2、右上へいって1番C2、2番から4番斜線、5番C2、6番〇、7番C2。左下へいって7番C2、6番C2、5番C1、4番から右下3番まで斜線、4番〇、5番斜線、6番……」

裕子先生、デンタルミラーで丹念に診て、探針で虫歯の穴を探ってる。

「ふん、ふん、んんっ、ううつ」

育子ちゃん、痛いのかな？ 不快そうに眉間に皺を作ってかなり我慢してる。

「育子ちゃん、この歯いつからこんな状態？ だいぶ虫歯が進んでるわ」

「ひょうはっほうはんへんははへふ」

探針とデンタルミラー入ったままだから、返事を変ねー。小学校3年生からですっていつてるのね。

「そう。治療途中で行かなくなっちゃって放置したっていうのがこの歯ね。うーん、6番C3かな、ひょっとするとC4かも。それから7番C

2。以上です」

「何本？」

「いち、に、さん……、処置歯3本に、未処置歯、C1が2本、C2が7本、C3が1本で……、全部で10本です」

「虫歯10本かぁ……、育子ちゃん、虫歯多いよ。育子ちゃんが歯医者さんコワイのよーくわかったけど、虫歯は治さないと進行するばかりだし、ちゃんと治療しないとダメよ。時間かかると思うけど、がんばって虫歯治していこうね」

「ぐすん、……はい……」

「じゃあ、まずはお口全体のレントゲン写真を撮るから。理央ちゃん、お願い」

「はい、先生。育子ちゃん、こっちへ来てくれる」

育子ちゃんをレントゲン室へ連れて行って、と。

「育子ちゃん、この椅子に座ってね……。これ噛んでくれる？」

育子ちゃん、怖々だけど、素直に従ってくれてる。頭部をこう設定して、固定させて……。バーを持たせて。よし、撮影準備は完了したわ。

「育子ちゃん、じっとしていてね。先生、準備できました」

ドアを閉めて、裕子先生を呼んだ。

「はい」

裕子先生が、回転パノラマ撮影装置を操作してる。育子ちゃんの顔のお口の前をゆっくり装置が動いてる……。あっ、動き終えたわ。

「理央ちゃん、現像お願いね」

「はい、先生」

育子ちゃんが治療台に戻ってくれるように指示しなくちゃ。ドアを開けて、

「育子ちゃん、お疲れさま。治療台に戻ってね」って声をかけた。

育子ちゃん、ゆっくりと戻ってくれてる。よし。さっ、いまの写真を自動現像機にかけて、と。フィルムの挿入口部のローラーに軽くくわえ込ませて……。順調に通過してるようね。……できた。歯列と断層

域は……、うん、大丈夫ね。均等な影像になってるわ。早速、裕子先生のところへ持って行かなくっちゃ。

「先生、レントゲン写真です。できあがりました」

「ありがと」

裕子先生がユニットの投影機に育子ちゃんのパノラマレントゲン写真をかけたわ。蛍光灯の青白い光が育子ちゃんの口腔内を写し出した……。う〜ん、育子ちゃんの虫歯、とくに治療途中でほおったままの右下6番はかなり虫歯が進行してるわ……。

「育子ちゃん。今日は、育子ちゃんが痛がってる右下の6歳臼歯、前に治療が途中でほおったままになってる虫歯を治療するわね」

「ね、育子ちゃん、見て。ここが神経で、上からの虫歯の穴とつながってるでしょう。わかる？」

裕子先生が、レントゲン写真を育子ちゃんに示しながら治療の説明してる。育子ちゃん、コクンと頷いてる。

「でね、神経が炎症を起こしているの。だからね、この歯は虫歯を削ったあと、神経を取らないといけないの。麻酔をして治療ってことになるから、ちょっとつらい治療になるかもしれないけど、がんばろうね」

“えっ、神経取っちゃうの！？ 神経取るって、とっても痛いって、友だちがいったけど……。やだっ！！ コワイ！！ どうしよう……。ぐすん”

育子ちゃん、神経取るって聞いて涙目になっちゃった。励まさなくっちゃ。

「大丈夫だよ、育子ちゃん。裕子先生は治療上手だから、あっという間

に終わっちゃうよ。大丈夫。麻酔もするんだし、痛くないよ。だから、がんばろうね」

タオルで、育子ちゃんの涙をやさしく拭いてあげたら、育子ちゃん、小さく「ありがとう。くすん、わたし、がんばりますう」って答えてくれた。よかった～。

「痛くないように治療するため、麻酔をするわね」

「理央ちゃん、シンマ」

あっ、先生から指示だ。さっ、私も診療補助しなくっちゃー。

麻酔カートリッジを注射器に装着してー、と。先生に渡す。早速、裕子先生、育子ちゃんに麻酔注射をしてる。育子ちゃん、痛そうな顔してる。半べそだあ。励まさなくっちゃ。

「大丈夫だよー。あとすこしで麻酔のお薬、全部入るよー」

やっと、全部入った。ふうー。育子ちゃん、がんばったなあ～。

「理央ちゃん、もう1本打つわ」

えっ！ そっか、虫歯が進行してるから、もう1本打たないと治療が辛いものになっちゃうのねー。

麻酔注射が終わって、育子ちゃん、お口ゆすいでる。その間、裕子先生がテーブルを引き寄せた。タービンにコントラ型のハンドピースをつけて、バーチャージャーからダイヤモンドポイントを選んで、ハンドピースにつけてるわ。

「育子ちゃん、お口開けて。はい、ア～ン」

裕子先生、ロール型の綿で簡易防湿したわ。

さっ、私も次の診療補助ね。

ハロゲン・ライトは育子ちゃんのお口の中に焦点をあわせる……。このくらいかな。

それから……、バキュームとスリーウェイシリンジを構えて、育子ちゃんにお口開けるのを促したんだけど、育子ちゃん、怯えたような目をして、もう半泣きだわ。優しい言葉かけなくっちゃー。笑顔、笑顔。

にっこりとして、

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」っていったの。

育子ちゃん、怖々だけど、お口開けてくれた。先生が今日治療するっていつてる右下の6歳臼歯、おっきい穴が開いてるわねー。治療途中でほおったままにしていたからよけいヒドくなっちゃったのね。穴の色は薄褐色たわ。急性う蝕みたい。だいぶ、虫歯が進行してるわねー。育子ちゃん、痛かっただろうなあ～。よくここまで我慢したわね～。私だったら、痛くてここまで我慢できないわあ～。

「痛かったら、左手あげて教えてね」

裕子先生、タービンを構えてペダルを踏んだわ。キューーンって音がなりだしたわ。いつ聞いても痛そうな音ねー。歯科衛生士だけど、私もこの音苦手だなー。あつ、育子ちゃん、泣き出しちゃった。

“やだっやだっ！！ ドリル、コワイ！！ ヤダヨォー！！ コワイ！！ コワイ！！ わーん、えっえっ”

「うふっ、ふん、んんっ、んんん、ふえ、ふえ、ふえーん、えーん、えん」「わああーん」

泣き出しちゃった。なだめなきや。

「大丈夫だよ、育子ちゃん、すぐ済むから。ちょっとだけ我慢しようね」

「そうだよ。先生のいうとおりだよ、ねっ。ちょっとだけがまんしょ」

「ぐすん、エッ、エッ、くすん、くすん」

育子ちゃん、大泣きながら首を縦にコクンと振ってくれた。

あつ、裕子先生の持つデンタルミラーとタービンが育子ちゃんのお口の中に入る！ 育子ちゃんの右下6番のう蝕した歯にタービンがあてられたわ。裕子先生、育子ちゃんの虫歯を削り始めた。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュイ、キュイ、キュイーン。

唾液が溢れてきた。バキューム操作しなきゃ。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュ、ジュポ。ジュッ、ジュジュッ、ジュポポポポー。

キュ、キュ、キュイイイーン。

「あっ、あっ、うわあああーん、あん、あん。ひはいっ！！ ひはいっ！！」

育子ちゃん、治療が始まったらもっと大泣きしちゃった……。

「育子ちゃん、がんばって。痛くない、痛くない」

……育子ちゃん、左手あげてるんだけど、裕子先生タービン止めないわ。そうね、いま止めると中途半端になっちゃうのよねー。育子ちゃん、つらいかもしれないけどもうちょっとがまんしてねー。

「はい、動いちゃダメよー。育子ちゃん、もうちょっとだから、がまんしてー」

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

「育子ちゃん、痛くないよー、もうすこしで終わるよー」

「はあん、はんはん、わああーん、エッ、エッ、ぐすん」

いま、真山裕子先生が治療している小峰育子ちゃんは、みどりヶ丘中学の2年生なの。ショートヘアのかわいい子で、制服がよく似合ってる。白のハイソックス履いてるねー。上着は治療で汚れるといけないから、脱いでもらって、ハンガーにかけてある。スカートは紺のプリーツでかわいいのなんだ。紺のベストは上着とお揃い。丸襟で半袖の白のブラウスもかわいいし。いいなあ、私も学生の頃、こんなの着たかったー。

キーン、キィーン、チュイーン。

「育子ちゃん、もう少しお口開けてー」

「お顔、こっちへ向けてくれるかなー」

「んんっ、んん、ううーん」

お母さんの話だと、育子ちゃんが小学校3年生のとき、歯医者さんに虫歯を治療しに行って治療が痛くて大泣きしちゃって、それで痛さと怖さと恥ずかしさで治療がいやで中途半端で行くのを止めたんだって。それ以来歯科検診で虫歯が見つかったとしても歯医者さんに行かなかったんだって。今日は、その小学校3年生のときの治療の途中でほおったままの虫歯が痛みだしちゃって泣いてたのをママに見つけられて、無理矢理みどりヶ丘デンタルクリニックに連れて来られたの。裕子先生が診ると、小さくない虫歯がほかにもたくさんあるし、歯垢も多いし、治療が終わったら、みっちりブラッシング指導しなきゃ。

「おえ」

あっ、いけない！

「ごめんねー、育子ちゃん。ちょっと奥に入っちゃったね」

いけない、いけない。考え事してたら、バキュームが喉の方に入っちゃった。裕子先生が横目で見てる。先生にあたまさげとこおー。

ちゃんと、集中して唾液を取らないと……。やっぱり若いってすごいわねー。すぐに唾液が口腔内に溢れるわー。

コォー、コォォォー。ジュ、ジュ、ジュッ。

キュイーン、キーン、キュ、キュ、キュイ、キュイーン。

「ふん、ふん、痛いつ！ 痛いつ！ もう許してえー！！ ふんふん、くすん」

育子ちゃん、足パタパタしちゃって……。やだ……。制服のスカートが捲れて白パンツが丸見えじゃない。育子ちゃん、他の患者さんに見えるよ、恥ずかしいよう……。注意しなきゃ。

「育子ちゃん、足動かさないでー。恥ずかしいよー、パンツみえちゃてるよ。他の患者さんに見えちゃうよー。はずかしいなあ治療中は、おとなしくしようね」

「むんっ、うんっ、はぁーん、うわぁーん、エッ、エッ」

「イダァーイ、イダァーイ！！」「イダァイヨォ〜イダァイヨォ〜！！」

また泣き出しちゃった。どうしよう。制服のスカートから伸びた白い

ハイソックスをパタパタさせ、治療の痛みから逃れ様として、足動かすの止めてくれないわ。

「理央ちゃん、しっかり！」

せんぱいの浅野さん、新垣さん来てくれた。

「私たちが抑えてるから」

「はい。ありがとうございます。せんぱい」

あら？ 隣のユニットの女の子、こっち見てまたひとりごと……。エプロンつけたまま、コップを持ってうがししてるけど、治療終わったのかな？

『あんなに沢山の歯医者さんのお姉さん達に抑えてられて治療されるなんて……。私、治療終わったけど、あの中学生のお姉さん、まだ泣きながら治療されてる……。私も怖くなっちゃう……。沢山キューンって治療されてるみたい……。痛そうだなあ』

キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュイ、キュイ、キュイーン。

“キューン！！って削るの、ホントに痛い……。ドリルで削るの痛いから、ホントにもうイヤッ！！ あ痛っ！！ 痛いつ痛いつ！！ 痛っ！！ もう許してえー”

育子ちゃん、痛がっちゃって、かわいいー。裕子先生が削っている育子ちゃんの虫歯、ずいぶん深いわね。治療の途中でほっとくなんてー……。ホントに歯医者さんが苦手なんだあー。涙目になってるうー。あつ、育子ちゃん、左手あげたわ。いったん削るの、終わったわ。

キュウウウーーン。

「育子ちゃん、一度お口ゆすごうか」

育子ちゃん「くすん、くすん」って、ハンドタオルでお口おさえたま

ま、しばらくじっーとしてるー。よっぽど痛かったのね。大きい虫歯だったからねー。あっ、目尻を拭いてるわ。まあ、目が真っ赤。タオルで拭いてあげなくっちゃ。

「育子ちゃん、がんばったねー。そんなに泣かないで。さっ、こっち向いて」

育子ちゃんの涙を拭いてあげたけど、ほんとかわいいの！ クチュクチュってお口をゆすぐしぐさもかわいいし、抱きしめたいくらい！

また、ユニットが倒れ始めたわ。育子ちゃんのあたまがヘッドレストに収まるようにサポートして、ライトを育子ちゃんのお口によくあたるように調整して……。

「はい、もう一度ア～ンしよっか」

「育子ちゃん、あともうちよっとがんばろ。すぐ終わるから。大きくア～ンして」

育子ちゃん、不安そうな目をして、怖々お口を開けたわ。バキュームを入れて……。

コオオオー、コオー。

裕子先生のタービンとデンタルミラーがお口の中にはいる。あら、ドリルの先端のバー、さっきのより尖ってる。タングステンカーバイドね。そっかあ、さっき育子ちゃんのうがいのとき、先生バーチャージャーから違うバーをタービンにつけてたけど、育子ちゃんの虫歯、だいぶひどいからね。これから軟化象牙質を削るのね。神経に近くなるから、育子ちゃん、ちょっとつらいかもしれないけど、がんばって！！ あっ、裕子先生の切削が始まった。

キュイーン、キュイーン、キュツ、キュ、キュイツ、キュイ、キュイイイーン。

“はあーん、はんはん、痛いよおー、痛いよおー！！ もう許してえー！！ これからはちゃんと歯磨きして虫歯つくらないようにするから

ー！！　お願い、もう止めてえー！！　うわあーん、うわあああーん”

キュイーン、キイーン、キュ、キュ、キュイ、キュイーン。

キイーン、キュイ、キュイ、キュイイーン。

コオオオー、コオー。ジュツ、ジュジュ。

「ふん、ふん、痛いっ！　痛いっ！　もう許してえー！！　ふんふん、くすん」

「はあーい、痛くない、痛くない、もうちょつとがまんしようねー。すぐ済むからねー」裕子先生、育子ちゃんの虫歯削りながら、励ましてる。私も声かけしなくっちゃ。

「育子ちゃん、もうすこしだよー。がんばろうねー」

「んんっ、んあっ、ふうううーん、ふうん、ふん」

ふーっ、なんとかお口開けて治療受けてくれてるわね。さっきはどうなることかと思った。だって、育子ちゃんたら歯科エプロンつけただけで大泣きするんだもん。

キュ、キュ、キュイイイーン。

キュウウウーーン。

タービンが止まった。

「どう？　痛い？」裕子先生、育子ちゃんに聞いている。

育子ちゃん、涙に濡れた顔で、首をコクンと縦に振り「痛い……です」と小さい声でいってる。裕子先生、私に目配せしてる。もう一度浸潤麻酔をするつもりね。

「理央ちゃん、もう一度麻酔するわ。シンマ用意して」

「はい」

ほらね。注射器に麻酔カートリッジを装着して、裕子先生に渡して……。 「はい？　ああ、もう1本シンマの用意ですね」

もうひとつ麻酔液のカートリッジを装着して……と。あら、育子ちゃん、裕子先生がシンマ構えるの見て、凄い動揺してる。「大丈夫……いいです……」だって。

「ダメよ。削るの痛いんでしょ」

あっ、裕子先生、強引に育子ちゃんの歯茎に注射針を刺しちゃった……。育子ちゃん、うめきながら泣いてる。はっ、次の渡さなきゃ。

「うふ、うふ、ふん、ふん、ぐすん、えっ、えっ」

もう1本の麻酔注射が打たれたわ……。

「はい、育子ちゃん、もう少しだから、お口開けようね。アーン」

また、削るのが再開される。私も声をかけなきゃ。

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

育子ちゃん、目に大粒の涙をためて、半泣きだわ。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

キュ、キュ、キューイイイーーン。

コオー、コオオオー。ジュポ、ジュ、ジュ、ジュポポポポー。

育子ちゃん、またキューーンとされて、それからまたまたキューーンとされてるけど、かなり痛そうだわ。励まさなきゃ。

「ふうん、ふんふん、あっ、あっ、ひはい！！ ひはい！！ ひゅひゅひへー！！ わああーん」

「だいじょうぶよー。もうすぐ終わるよー。育子ちゃん、がんばろうねー」

キュウウウーーン。

やっと育子ちゃんの虫歯を削るのが終わったわ。裕子先生が操作して、ユニットがゆっくりと起き上がり始めたわ。

「育子ちゃん、お口ゆすいでいいわよ」

育子ちゃん、ハンドタオルでお口をおおって、しばらくじっとしてる。あら、あら、涙と汗、それに唾液で顔がぐちゃぐちゃよ。タオルで拭

いてあげなくっちゃー。育子ちゃん、クチュクチュとお口ゆすいでる。

「理央ちゃん、ラバーダムを用意して」

「はい、先生」

ラバーダムパンチで、右下6番のところへ穴を開けて……。

パチッ。

裕子先生の指示で、ラバーダムを育子ちゃんのお口に被せて、ラバーダムパンチで開けた穴から患歯を出して、クランプをかけて固定して……、と。これでよし！

「なに、これっ！？」って顔で、育子ちゃん、目を見張っちゃった。

「心配しなくていいのよ、育子ちゃん。これはラバーダムって言ってね、これで治療する歯を覆ってね、バイキンから歯を守るのよ」と裕子先生が説明してる。その間にラバーダムをフレームで押さえた。育子ちゃんのお口がラバーダムで覆われちゃった。

排唾管をお口に入れて……、育子ちゃん、唾液が溢れてる。やっぱり若いんだー。

「理央ちゃん、リーマボックス」

「はい、先生」

いよいよ、抜髄が始まるわー。育子ちゃん、がんばろうね！

「育子ちゃん、がんばってねー。もう少しだから」

裕子先生、まず細い目のリーマを手にして、ラバーダムに覆われた育子ちゃんの右下6番の患歯に大きく開いたう窩に入れた。

グリグリ、グリグリ、と音でもするかのように、リーマを回転させて育子ちゃんの虫歯に侵された歯髄を絡め取っていくわ。私は裕子先生をサポートして、リーマで絡め取られた歯髄をガーゼで拭き取り、先生の指示によって、次から次へとリーマやファイルを渡していくの。

「ふうん、ふんふん、ひはい！！ ひはい！！ あっあっ」

“痛っ！！ 痛いっ！！ 痛いっ！！ もうこれからは虫歯ほっとかな

いから！！ もう許してえー！！ くすん、ぐすんぐすん、痛いっ痛いよお～！！”

「はあーい、大丈夫よー。もうちょっとがまんしてねー」

歯髄がすべて取られたあとは、育子ちゃんの患歯の根管の虫歯で侵された象牙質を掻き取るために、裕子先生だんだん太い目のリーマやファイルを示すの。

育子ちゃんの根管治療が進むに連れ、根管がきれいに形成されていくわ。

裕子先生、集中してる。額にうっすらと汗もかいてる。根管の治療はほんとに気をつかう。

「ルートキャナルシリンジを。ネオクリナーとオキシドールを用意してね」

「わかりました、先生」

「抜髄が終わったから、もう大丈夫よね。じゃあ、理央ちゃん、私たち行くね」

「はい、せんばい。ありがとうございました」

せんばいの浅野さん、新垣さん、次の診療補助に戻ったわ。でも抑えてもらって、ほんと助かったあー。

裕子先生、今度は、育子ちゃんの根管を化学的に洗浄するのね。まず次亜塩素酸ナトリウム溶液のネオクリナーを入れて……、それから3%過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用意して……。さっ、裕子先生に渡そっ。

裕子先生、ネオクリナーとオキシドールのルートキャナルシリンジで交互洗浄をはじめたわ。

「生理食塩水とエンドラチューブを」

「はい」

さらに育子ちゃんの根管を洗浄するために、裕子先生、生理食塩水を根管に注入しては点滴針で吸引を繰り返したの。あっ、今度は超音波洗浄器ね。やっぱり、育子ちゃんくらいの年齢の根管治療って、時間かかるわねー。6歳臼歯だからもう根は完成してると思うけど、なんてってもまだ幼弱永久歯だからね。裕子先生、慎重に治療を進めてるわ。

「理央ちゃん、ペーパーポイント。太い号数ね」

「はい、先生」

これからは根管を清潔に乾燥させるのね。裕子先生、根管用のピンセットでペーパーポイントをつまんで、育子ちゃんの右下6番の根管に挿入して、乾燥させてる。

「理央ちゃん、ブローチ綿花。これも太めに巻いたものを」

「はい、先生」

根の治療が始まる前にあらかじめ綿花をブローチに巻いたもの、いろんな太さのものを作っておいたんだけど、それを裕子先生に手渡した。私、学生の頃からブローチ綿花作るのが得意なんだー。歯科衛生士学校の先生によくほめられた。ちょっと自慢一つ。

裕子先生、ブローチ綿花を育子ちゃんの根管に入れてさらに根管を乾燥させたわ。

「ビタペックスお願い」

「はい」

いよいよ最終段階ね。裕子先生、ビタペックスの注入部を育子ちゃんの根管に入れ、慎重に水酸化カルシウム・ヨードホルム製剤を注入してる。ピンセットで滅菌小綿球をつまんだわ。育子ちゃんの根管の中の水分を吸収させてるのね。

「理央ちゃん、酸化亜鉛ユージノールセメントで仮封するわ。ネオダインを用意してね」

「わかりました、先生」

紙練板に粉末を出して、液をその横に落として……。プラスチック

製のスパチュラで練和して、と。ちょっと仮封にしては柔らかいかも……。もう少し粉末を入れて。硬化を速くするためにアルコールも1～2滴。あっ、裕子先生、新しい滅菌小綿球を根管の中に入れたわ。もう仮封する一歩手前ね。急がなきゃ。

私が練和している間に、裕子先生、ストッパーをバーナーで加熱して、シャーレからテンポラリーストッピングをストッパーにくっつけ、育子ちゃんの右下6番の窩洞に詰めてる。

よし、できた！

「ありがと」

「ううん、ふん、ふん」

「育子ちゃん、もうちょっとで終わるよー。もう少しがまんしてねー」

「ふうん、あん、あん、んんっ」

「がんばろうねー」

だいぶ長いことお口を開けたままだから、育子ちゃん少し苦しそうねー。がんばってね、もう少しで終わるから！

裕子先生、紙練板の上のネオダインをストッパーで取り、育子ちゃんの右下6番の歯に詰めて、仮封をしたわ。形を整えてる。がんばったね、よくがまんしたね、育子ちゃん！

クランプとフレームをとって、ラバーダムシートを唇頬側に引っぱって……。ハサミで歯間部を切る。はい、ラバーダムがとれた。排唾管を育子ちゃんのお口から出して……。

裕子先生、がペダルを踏んでユニットを起こす。

「育子ちゃん、今日は終わり！ お疲れさま。よくがんばったねー」

「えらいよ、よくがまんしたねー、育子ちゃん」

「ヒック、ヒック」

「えらいよー、育子ちゃん。だからもう泣かないで、ねっ。よくがんばったねー」

あらあら、育子ちゃん、お顔が汗と唾液と涙でぐちゃぐちゃになっている。タオルで拭いてあげなくっちゃ。

「お口ゆすぎながらでいいから聞いてね。育子ちゃん、今日の治療はつらいものになっちゃってゴメンね。でも育子ちゃんが虫歯を長い間ほおっておいたから、治療が痛いよ。今日治療した歯は、相当深く虫歯が進行していたわ。虫歯ができちゃったら、すぐに治療しなきゃダメよ。まっ、それよりも虫歯をつくらない方が大事だから、今度の治療がすべて済んだら理央ちゃんにブラッシングを指導してもらうからね。いい？」

「はい……、くすん」

「育子ちゃん、私がちゃんと歯磨きの仕方教えるからね」

「……で、次回の治療なんだけど、4日後の金曜日の午後3時でいいかな？」

「……はい……」

育子ちゃん、今日の治療を思い出したのかな？ また涙目になってる。
「大丈夫よ。裕子先生と私がついてるじゃない！ 育子ちゃんは何も心配しないで、虫歯の治療を受ければいいのよ」

怖々だけど、コクンと首を縦に振ってくれた。

育子ちゃん、お口ゆすぎ終わったわ。

「育子ちゃん、エプロン外すよー」

胸元から、水色の歯科エプロンを外して……。

「ありがとうございました……」

「いいのよ。お大事に」

「育子ちゃん、お大事にね。次回の治療もいっしょにがんばろうね」

ペコリと小さくお辞儀して、治療室を出ていくわ。まだ頬を赤く泣き腫らしたまま……。

“……歯医者さんって、中学校2年生以来だし……”

“はあ〜。こわいよお〜。順番来ちゃいそうだなあ……。虫歯、ずいぶんほおっておいたし……。痛いんだろうなあ〜。はあ……”

“あっ、ドア開いた……”

“さっき入っていったみどりヶ丘中学の女の子だ……。あんなに目に涙を溜めて……。頬が赤く泣き腫れてる……。痛そうに頬を手で押さえてるう……。私も痛くされるのかなぁ～……。どうしよう、コワイよお～”

うん、マスクつけると気が引き締まるわ。うちのクリニックって、夏はディスポの不織布マスクで、他の季節はエバーマスクなの。

えーっと、今度私が受け持つ患者さんは……。大浦玲奈、ちゃんね。桜葉高校の2年生かぁ……。桜葉高校って、国立大学にもたくさん合格者を出す名門高校なのよねー。私もあたまがよければなー、受験しなかったんだけど……。

はっ、そんなことより、準備、準備と……。まずは滅菌装置から、デンタルミラー、探針、ピンセット、エキスカバーターの基本4点セットとストッパーをトレイに用意して……。それから、薬品棚から麻酔のカートリッジをとって……。次は、これも滅菌真空パックしたハンドピースと注射器、コップ、それからタオルと……。あとは玲奈ちゃんのカルテ、『治療勧告書』、問診票を用意して……。ワゴンにのせる。よし、ユニットに持っていこー。

ユニットの注水器にコップをおいて……。シリンジも新しいものを取りつけて、おっと、基本4点セットとストッパーがのったトレイはテーブルの上に、ハンドピースもテーブルの上において……。準備完了ね。よし、玲奈ちゃんを呼んでこよう！

“あっ、ドアから衛生士さん、私の名前呼んでるう……。どうしよう、順番来ちゃった……。はぁ～、いやだよお～”

カチャ。

「大浦さあーん、大浦玲奈ちゃあーん、診察室にお入りくださいーい」

「は、はい」

あっ、あの子ね。お母さんといっしょだわ。そういえば玲奈ちゃん、お母さんが予約の電話入れてきたんだっけ。それでお母さんに連れて来られたってわけね。うふ、緊張しちゃってかわいい。ホントかわいい子ね。セミロングの髪も、桜葉高校の校章のエンブレム入りの白のブラウスも、胸元の青と緑のリボンや紺のプリーツスカート、紺のソックスもよく似合ってるわー。

「玲奈、順番よ。早く行きなさい」

「……」

お母さんが玲奈ちゃんを促してるけど、玲奈ちゃん不安そうな顔でなかなか立ち上がらないわ。あらあら、卵型の可愛い顔が不安でいっぱいだわー。よしっ！ あそこまで行って励ましながら、ユニットに案内しようーとっ。

「玲奈！」

あらあら、お母さん、玲奈ちゃんを叱ってるわ。

“どうしよう、どうしよう……。治療痛いのかなあ～……。衛生士のお姉さんに聞いてみようかなあ～……。はあ～、怖いよう”

「玲奈ちゃん、どうしたの？」

「あっ、あの、治療痛くないですか？」

「この子ったら、ほんとにもう……。ちゃんと治療受けなさい！」

お母さん、まあ抑えて、抑えて。この子も歯医者さんが苦手なんだー。

高校生っていっても、まだまだ子供よねー、歯医者さんが怖いなんて。かわいいー。あ、そっか、まだ17歳だもんねー。1年ほど前までは中学生だったんだから、無理もないか。

「玲奈ちゃん、大丈夫よ。玲奈ちゃんを診てくれる真山裕子先生は、とってもやさしいから、治療痛くないよ。麻酔もするし……。だから診察室、いこ、ねっ！」

「はい」

小さく返事しちゃって、かわいい。ちょっと、震えちゃってる。

「さっ、こっちよ。スクールバッグは中におくところがあるから、持ってきて」

パタン。

「玲奈ちゃん、この治療台に座って。あと、スクールバッグはそのカゴに入れて」

玲奈ちゃん、ハンドタオル取り出したわ。握りしめちゃって、緊張してるのねー。リラックスさせてあげなきゃ。

「そんな緊張しないで。だいじょうぶよ」

「玲奈ちゃん、エプロンつけるね」

「あっ、はい」

玲奈ちゃんの胸元に、水色の歯科エプロンをつけて……。と。

「あっ、あの」

「なあに？」

「あ、あの……。私、去年も歯科検診で虫歯見つかったんですけど、受診してないんです……。今年も歯科検診ですぐに歯医者さんに行くことって言われて、夏休み明けまでに治療証明書を提出しなくちゃならなくなったんですけど……。私、歯医者さん怖くてママにもだまって、『治療勧告書』無視してたんです……。夏休み終わって治療証明書を出さないでいたら、私が歯科受診してないのを担任の先生からママに電話されて……。それで、ママに私が虫歯あるのに長い間歯医者さん

行ってないのがバレちゃって……、ママに怒られて……。今日ママに無理矢理連れて来られたんです……。ホントに治療痛くないですか？ 私……、ホントに治療怖いんです」

「それに……」

「それに、なあに？ 思ってることあったら、全部いっていいのよ」

「小学校3年生のとき、ほとんど全部の歯が虫歯になって、歯医者さんに怒られて……。超大泣きしながら治療されたから恥ずかしい……。神経の治療で小3なのにおもらししちゃって……。恥ずくて恥ずかしくて……。中学2年生のときも神経の治療中、痛くて凄い痛くて、私が『痛い！痛い！！』って言ってるのに、歯医者さんは『もうすぐ終わる！我慢しろ！』って治療やめてくれなくて……。足バタバタして我慢してたけど、あまりに痛くて、私また歯医者さんで泣いちゃって……。中学生なのに、歯医者さんで涙だしたりベソかいたりするのって凄い恥ずかしかった……。あと、3歳の時、無理矢理治療されてすごく痛い思いして怖かった……。虫歯ってだけで恥ずかしいって思っちゃうのに、さらに歯医者さんを嫌がっているなんて、恥ずかしいし……。でも、歯医者さん怖いし、治療痛いから、ないたら恥ずかしいし……」

「そう。つらい目にあったんだね、玲奈ちゃん。よく話してくれたね。私、ちゃんと裕子先生にお伝えするから」

玲奈ちゃん、半べそで告白してくれた。目が潤んじゃう……。このことは裕子先生に十分お話ししなくっちゃ。

「でも、裕子先生はやさしいから、治療怖くないよ。大丈夫。安心して、ねっ。私も玲奈ちゃんが治療怖くないように、一生懸命お手伝いするから」

まだ、玲奈ちゃん不安そうだな。

涙目で、緊張してる。よし、もっと玲奈ちゃんをリラックスさせてあげなくっちゃー。

「玲奈ちゃん、そんなに緊張しなくて大丈夫。いまの歯の治療は、麻酔があるから全然痛くない、平気だよー。だから玲奈ちゃんは、何も心配

しなくていいんだよ。安心して、ねっ」

玲奈ちゃん、なんとか頷いてくれたわ。

「じゃあ、裕子先生、呼んでくるからねー」

ディスポーザブルの薄い黄色いゴムのラテックスグローブをはめて、
と。これつけると、いよいよ治療が始まるうーって感じよね。

「理央ちゃん、カルテを」

「はい、先生」

「左上から。7番○、6番○、5番○、4番から2番斜線、1番○、右上
いって1番まゝ、ちょっと待って……」

カツ、カツ。

裕子先生、玲奈ちゃんの右上の1番と2番の歯を探針で探ってるわ。

「ふうん、ふんふん」

「大丈夫よー。ちょっとがまんしてー。うーん、1番C2ね。にばあ……
2番もC2ね。この2本ともレジンが詰めてある境目から虫歯になっちゃ
ってるわ。3番斜線、4番○、5番斜線、6番○、7番C2。左下へ
いって7番○、6番、あっ、インレーが取れちゃってるのね。あー、こ
れはひどいわねー。痛くなかった？」

「は、はひ」

お口にデンタルミラー入ったままだから、玲奈ちゃん、返事が変にな
っちゃってる。

「ほんとに？」

裕子先生、疑わしそうにしてる。あっ、スリーウェイシリンジを持っ
て、玲奈ちゃんに歯にエアーをかけた！

シュッー。

「あ、あん。ふん、ううつ」

玲奈ちゃん、虫歯が染みたみたい。

「染みてるじゃない。ホントは痛かったんじゃないの？」

玲奈ちゃん、うそがバレちゃって涙目でコクンと首を縦に振ったわ。

「ダメよー、玲奈ちゃん。嘘ついちゃ。6番は……、シーに……、いえC3ね。5番C2、4番から右下の4番まで斜線、5番C1、6番○、7番○。以上です」

「虫歯、何本？」

「いち、に、さん……、処置歯が9本、未処置歯が、C1が1本、C2が2本、二次虫歯でC2が2本、C3が1本で、全部で6本虫歯ですね」

「玲奈ちゃん、歯磨きしてる？ 二次虫歯になっちゃてるのが3本もあるよ。詰め物が取れたら、ほおっておかないですぐに歯医者さんに行かなきゃダメよ。わかった？ ほかに3本虫歯があるし、がんばって治療しないとね」

「はい……」

玲奈ちゃん、しょんぼりと返事してる。

「まっ、なちゃったものは仕方ないし、ちゃんと治療すればいいんだから。ねっ、そんなにしょんぼりしないで」

よかった、玲奈ちゃん、こっち見て頷いてくれた。

「玲奈ちゃん。まずレントゲン写真を撮って、玲奈ちゃんのお口の状態を詳しく診るわね。理央ちゃん、レントゲン室に案内してあげて」

「先生、パノラマですね」

「ええ、お願い」

「玲奈ちゃん、こっち来てくれる？」

「さあ、ここに座ってね」

玲奈ちゃん、座ってくれたわ。まだ不安そうな顔ねー。

「大丈夫よ。心配しないで」

玲奈ちゃんのお顔をセットして、バーを持ってもらって。準備できたわ。

「玲奈ちゃん、このまま動かないでね」

パタン。

「先生、お願いします」

「玲奈ちゃん、じっとしててね」

裕子先生が操作ボタンを押すと、玲奈ちゃんのお口の周りをユニットがゆっくりと回転してる。順調に動いているわ。これなら、撮影、問題なしね。

「理央ちゃん、あと現像よろしくね」

「はい、先生」

「玲奈ちゃん、治療台に戻って、待っててね」って、ドアを開けて、声をかけた。

玲奈ちゃん、治療台に戻っていつてくれてるわ。早速、現像ね。フィルムを自動現像機にかけて……。挿入口のローラーに軽くくわえさせると……。吸い込まれたわ。……。よし、完成！うん、今度も上出来、上出来。歯列と断層域もきれいに映ってる。裕子先生のところへ持って行こー。

「先生、玲奈ちゃんのパノラマレントゲン写真です」

「はい。理央ちゃん、ありがと。どれどれ」

裕子先生がユニットの投影機に玲奈ちゃんのパノラマレントゲン写真をはさんだ。玲奈ちゃんの口腔内が蛍光灯の青白い光で写し出される……。

玲奈ちゃんのお口の中、やっぱりレントゲン写真で見ても処置歯と虫歯がいっぱいね。さっきの視診と同じね。あたり前だけど……。虫歯を示す黒い影や詰め物の白い像がたくさん映ってる……。あっ、これかな？ さっき玲奈ちゃんがいった神経の治療って……。左上の6番と右下の7番に大きな白い詰め物と根管充填が白く映ってる。根管治療の痕だわ。

「うーん、きょうはさっき染みたインレーが取れちゃってる左下の6番、6歳臼歯ね、を治療するわ。それからできればその隣の5番を治療するわ。……見て、玲奈ちゃん。ねっ、この6番は虫歯の穴と神経がつか

がってるのがわかるでしょ？ だからこの歯は神経の治療をしないといけないの。5番の方は比較的進行してないから、神経はとらなくても大丈夫だと思うわ」

“……また神経の治療しないといけないの？ くすん、いやだよお〜”

あらあら、玲奈ちゃん、また涙目になっちゃった。

「大丈夫よー、玲奈ちゃん。ちゃんと麻酔して治療するから」

「ぐすん、はい……」

「理央ちゃん、シンマ用意して」

「はい」

麻酔のカートリッジをアルコール綿で消毒して、カートリッジ式の注射器のピストン部を十分に引いて、カートリッジを後部からセットして、と。それからピストン部を押し当てて、ディスポーザブル注射針の接続部のキャップを外して……接続。OK、完了ね！

「先生、シンマです」

「はい、ありがと。玲奈ちゃん、大きくお口開けようか。ねっ。アーン」

「玲奈ちゃん、怖くないよー。すぐ済むから、おつきくあ〜ん」

玲奈ちゃん、半べそだけど目を閉じて大きくお口開けてくれたわ。よしよし。裕子先生がデンタルミラーで玲奈ちゃんの左唇を押し広げてスペースを確保したわ。

裕子先生が持つ麻酔注射の注射針が玲奈ちゃんの左下の歯茎に刺さったわ。玲奈ちゃん、痛そうね。顔しかめてる。

「ふん、ううつ、んんっ」

「はい、だいじょうぶよー。もうちょつとがまんしようかー」

「玲奈ちゃん、もう少しで麻酔のお薬全部入るよー。もうすぐ終わりだよー」

麻酔薬、全部玲奈ちゃんの歯茎に入ったわ。

「理央ちゃん、もう1本シンマお願い」

「はい、先生」

そっか、玲奈ちゃんの虫歯、結構大きいからもう1本麻酔しないと、削るのが痛くなっちゃうのね。麻酔カートリッジを注射器に装着して……、注射針をつけて。裕子先生に渡して。

「もう一回我慢しようね〜」

ふたたび玲奈ちゃんの歯茎に注射針が刺さる……。

「ううっ、うーん」

「がまんしてー。もうすぐ入るから」

「ふうん、んんっ」

「はい、もう少しよー、もう少し」

やっと麻酔注射が終わったわ。でもこれからが本番よ、玲奈ちゃん。がんばって！

麻酔終わって、玲奈ちゃんお口ゆすいでる。お水がお口の横から漏れそうね。段々麻酔が効いてきてるのね。この調子なら、麻酔がちゃんと効いて削るの痛くないわよ、玲奈ちゃん。

「玲奈ちゃん、アーン」

裕子先生、ピンセットでロールワッテをつまんだわ。それから、玲奈ちゃんのお口にふくませて、治療のスペースの確保とふくみ綿で簡易防湿をしたんだー。

裕子先生、虫歯を削る治療の準備にかかった。

私も、次のステップにいかなくっちゃ。ハロゲン・ライトがしっかり玲奈ちゃんのお口の中を照らすように、焦点をあわせて、と。こんなもんかな。それから……。

「怖くないよー。シリンジとバキューム入れるねー。お口アーンしよ。はあーい、あ〜ん」

怖々だけど、玲奈ちゃんお口開けてくれた。

コオー、コオオオー。

裕子先生、バーチャージャーからハンドピースにつけるバーを選んでるわ。最初はダイヤモンドポイント、選ぶんじゃないかな……。あっ、やっぱり。でも、あれって先端が尖ってていつみても痛そうね……。虫歯ないのにわたしまで痛くなっちゃうみたい。……。たしかないわね、虫歯治療したし。でも1年前か。あれから検診受けてないし……。ないと思う……。自信なくなっちゃった……。わたしも今度裕子先生に診てもらおうかなあ。

はっ、裕子先生、デンタルミラーとコントラ型のタービンを構えたわ。

「じゃあ、削っていくわね。痛かったら、左手上げてね」

「玲奈ちゃん、大丈夫よー。痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

「はい、玲奈ちゃん、お口大きく開けて。あ～ん」

“あっあっ、ドリル入ってくる！！ やだっ！！ やだっ！！ コワイ、コワイよお～”

「コワイ！コワイ！」

「やら！！ やら！！ コワイ！！ ドリル、コワイ！！ やらよお～」

「キィーンって削る器具、コワイ！！」

玲奈ちゃんたら、削るのが怖いよね。半泣きで嫌がってるわ。

「大丈夫よー。玲奈ちゃん、さっきがんばって麻酔したでしょ。だから痛くないから、お口アーンしよ、ねっ」

裕子先生、一生懸命、玲奈ちゃんをなだめてるわ。よーし、私もがんばって玲奈ちゃんをなだめよーと。玲奈ちゃんの治療がスムーズに進められるよう、裕子先生の診療を補助しなくっちゃ。

「ほんと、だいじょうぶだから。玲奈ちゃん、削るのなんて、あっとい

う間に終わっちゃうよ。それに裕子先生もいってるとおり、麻酔したからホント痛くないよ。だから、ねっ。痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

玲奈ちゃん、鼻を吸って、ようやく首をコクンと縦に振ってくれた。

きょうは、さっきの小峰育子ちゃんといい、いまの大浦玲奈ちゃんといい、ふたりも歯医者さん嫌いの女の子の担当になるなんて……。歯医者さん恐怖症の女の子にばかり当たる日ね……。でも……。不思議と、虫歯のヒドイ子って、中学生から高校生の女の子なのよね……。それも我慢に我慢のすえ、親御さんに連れてこられるのよねえ……。たいていは幼稚園か小学生の頃の強制的な治療が原因で歯医者さん嫌いになっちゃうみたい……。はっ、そんなことより、仕事仕事。

裕子先生と私になだめられて、玲奈ちゃん、ようようお口を開けてくれたわ。じゃあ、もう一度私のバキュームを挿入して……。あっ、裕子先生がデンタルミラーを入れたわ。次に私のスリーウェイシリンジを入れて……。いよいよ、裕子先生のドリルが玲奈ちゃんのお口に入ってたわ。

玲奈ちゃん、目を見開いてまた怖がってるわ。励ましてあげなくっちゃ。

「大丈夫よー。すぐ済むからねー」

キューン、キュウウーーン。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。

「はい、大丈夫よー。がんばってー」

キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュイイイーーン。

コオオオーー、コオーー。ジュ、ジュ、ジュポポポー。

「ふん、ふん、ふうん、んんっ」

「はい、もう少しよー、がんばってー」
「もうちょっとお口開けよー」
「顔をせんせいの方に向けてねー」
「あっ、あっ、うん、うん、うう、んんっ」
 キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。
「ふん、ふん、あっ、あっ、ああん、あん、くすん、エッ、エッ」
「ひはい！！ ひはい！！ ひはいよ！！ ひはいよお～」
「大丈夫、痛くない、痛くない、もうちょつとがまんしよ」
 キューイ、キュ、キュキュ、キューーン、キューーン。
「はあん、はあっ、あっ」
「イダーイー、イダーイー！！」

“あ痛っ！ 痛いっ！！ 痛いっ！！ 痛いっ痛いっ痛いっ！！ 痛いよお～！！ これからは毎日歯磨きするからっ！！ 先生、もう許してえー！！ 痛あーい！！”

 キュー～ン、キュー～ン
 キューーン、キューーン、キューーン。
 コオー、コオオオー。ジュポ、ジュポ、ジュポポポポオーー。
「イダーアイヨオ～イダーアイヨオ～！！」
「がんばって～もう少しだからね～」
 玲奈ちゃん、だいぶつらそうね。でも裕子先生は、玲奈ちゃんの虫歯を治そうと、がんばってるんだし……。たぶんあと少しで虫歯を削り取ることができるんだと思う……。がんばって、玲奈ちゃん！
「痛いー！」
「はああん、あん、あん。ドリルコワイ！！」
 玲奈ちゃん、左手上げたわ。

「痛いイダーイ！！」

まだ裕子先生、削るの止めないなあ〜。玲奈ちゃんの虫歯、深いからねー。声かけて、もう少しがんばって我慢してもらおうー。

「もう少し痛くない痛くない！もうすぐ終わるからね〜我慢しようね〜」

「はあん、はん、うわああーん、ひはいっ！！ ひはいよお〜」

玲奈ちゃん、また泣き出しちゃった…………。

キュウウーーン。

裕子先生、タービン止めた…………。玲奈ちゃんを覗き込んだわ。

「玲奈ちゃん、だいぶ痛い？」

「…………痛い…………ですう」

「そうね。思ったよりも深いからね。ちょっと炎症も進んでるようだし…………。これから抜髄もしなくちゃいけないし、もう一度麻酔するわ」

「理央ちゃん、もう一度シンマ用意して」

「はい、先生」

最初の2本だけじゃ、麻酔が効きづらかったのね。これからの歯内療法にも備えての麻酔ね。あっ、玲奈ちゃん、また涙目になってきてる…………。

“えっ！？ また麻酔注射するの？ 麻酔イヤっ！！ 麻酔コワイ！！
ぐすん、くすん、もうやだよ…………”

「大丈夫…………いいです…………」玲奈ちゃん、凄く動揺してるわ。

「ダメよ。痛がってたじゃない。麻酔すると少しは楽になるから」

「玲奈ちゃん、お口開けようねー。はい、アーン」

玲奈ちゃんたら、震えてるわ。応援してあげなきゃ。

「玲奈ちゃあーん、大丈夫だよ。裕子先生、やさしいから怖くないよ。
だから、お口開けよ。ね」

「ちょっと、チクッとするけど、大丈夫よー」裕子先生も励ましてる。

玲奈ちゃん、こわごわお口開けたわ。裕子先生の麻酔注射が玲奈ちゃん
の右下の歯茎に刺さったわ。玲奈ちゃん、「あっ、あっ」って声出してる。
「うん、ふん、ふうん」顔しかめて、うめきながら泣いてる。うふ、
顔しかめててもかわいいわねー。

「もう一回我慢しようね〜」

玲奈ちゃん、涙ぽろぽろ〜って流しちゃった。タオルで拭いてあげな
くっちゃ。

「麻酔が効くまで、ちょっと休憩ね。お口ゆすいでいいわよ」

ライトを消す……と。玲奈ちゃん、がまんできて少しホッとしてる
みたい。ゆっくりとお口ゆすいでる。

「もう効いたかなー」玲奈ちゃんのカルテを書いていた裕子先生、玲奈
ちゃんの方に向き直ったわ。デンタルミラーを持って、玲奈ちゃんに口
を開けるようにいってるわ。

「玲奈ちゃん、お口開けよ」

ライトを点けて、玲奈ちゃんのお口にあわせて……。裕子先生、デ
ンタルミラーの柄で玲奈ちゃんの右下6番の歯を叩いて、麻酔が効いて
いるか確かめてる。……それにしても相当ひどい虫歯ね。最初見た目
はそうでもないと思ってたのに……。インレーが取れて、1年くらい
そのままにしてあったって、玲奈ちゃんいってたし……。穴も大きく
て深いし、見るからに痛そうね。

「理央ちゃん、バキュームお願い」

「はい、先生。玲奈ちゃん、ちょっとお口開けてー」玲奈ちゃんのお口
にバキュームを入れて、唾液を吸い取る……と。

コォー、コォォォー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーー。

玲奈ちゃん、赤くなってる。

裕子先生は……、あっ、虫歯を削るの再開ね。バーを選んでも。タングステンカーバイドだわ。なんだか、さっきの育子ちゃんの治療のときよりも、もっと先端が鋭いみたい。玲奈ちゃんの虫歯相当ヒドいから、このくらいドリルじゃないとダメなのね。玲奈ちゃん、ちょっと痛いかもしれないけど、がんばって！！ 理央もいっしょうけんめいお手伝いするから。

「はい、お口大きく開けようねー。ア〜ン」裕子先生がデンタルミラーとタービンを持って、玲奈ちゃんを促してる。私も玲奈ちゃんを応援しなきゃ。

「痛くないからねえ〜大きくアーンしようね〜」

いよいよタービンが玲奈ちゃんのお口に近づいたわ。あら、玲奈ちゃんまたタービンを怖がってる……。

「コワイ！ コワイ！」って半泣きで嫌がって、抵抗してるわ。安心させなきゃ。

「玲奈ちゃん、大丈夫だよ。すぐ終わるよ」

「玲奈ちゃん、先生痛くないように治療してくれるよ。それにもう一度麻酔もしたし、大丈夫！ 先生を信じて」

「ふえ、えっ、えっ」

泣きながら、なんとかお口を開けてくれたわ。ふうー。玲奈ちゃん、ホントに歯医者さんが苦手なのね。わかるわー、さっきの話だと強制的な治療ばかり受けてきたんだもの。でも今回の治療でなんとか、歯医者さんに慣れさせなきゃねー。

バキュームを入れて……、と。

コオオオー、コオー。

裕子先生が、玲奈ちゃんのお口の中にタービンを入れたわ。先端がタングステンカーバイドバーの鋭いものに替わったタービンが玲奈ちゃんのお蝕した左下6番の歯にあてられたわ！！ あっ！ ペダルを操作して、玲奈ちゃんの虫歯を削りだしたっ。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

「ふん、ふん、ふうん、ふん、あっあっ、ふうん、んん」
「大丈夫よー、玲奈ちゃん。ちょっとがまんしてー」
「ふん、ふん、ひはいっ！！ ひはいっ！！ えっ、えっ」
「玲奈ちゃん、動いちゃダメッ！　じっとしてて」
「ふふあーん、ふふあん、ふあん、えっ、えっ」
「ダメダメ、じっとして。すぐ済むから。動いちゃ危ないよ」
「ひは一っ！！　ひはっ！！　もほ、ひゅひゅひへー！！　えっ、えっ。
ひは一いっ！！」
「がんばって～もう少しだからね～」
「ふあああーん、あん、うわああーん、わん、わん、エッ、エッ、
ヒック、ヒック、ぐすん、くすん」

“あっ、あっ。歯医者さんや衛生士さんにいくら「がんばって～もう少しだからね～」って言われてたって……、痛いものは痛い！！　麻酔したのにドリルでキィィュイーンってのが、凄い痛い！！　なんで麻酔効かないの！？　あん、あん、うん、ううんっ、エッ、エッ”
“恥ずかしいし痛いし！！　歯医者さんやだっ”

キュイーン、キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイイーーン。
玲奈ちゃんたら、ほんとに怖がりなのねー。削りだしてから、動きっぱなし。削られている時の泣き方も半端じゃないし……。バキュームしながら、からだ抑えるのってむずかしいわー。
次、うがいのとき、先輩に応援頼まなきゃ。
玲奈ちゃん、足パタパタし出したわー。あらあら、スカート凄い事になっちゃってる。紺のプリーツスカートが捲れ上がってるうー。困っちゃったなー。かわいい白パンツが丸見えじゃない。玲奈ちゃんに注意しなきゃ。

「玲奈ちゃん、足パタパタしないでー。恥ずかしいんだー。パンツみえちゃてる、はずかしいなあ治療中は、おとなしくしようね」

「うっ、うんうん、ううん、ふん、ふん、えっ、えっ、うわあああーん、あんあん、うえーん、えんえん」

半泣きで、凄い痛そうな顔してるわ。眉間に皺を作ってかなり我慢してるー。困ったわ、動くのやめてくれないし。

あら？ 隣の診察台の男の人、こっち見てる。玲奈ちゃん暴れてるから、玲奈ちゃんのパンツが見えてるの知ってて見てるのかしら？ やだあ〜、女の子の恥ずかしいとこ、見ちゃダメッ！ 私がジッとあっち見たら、赤くなって目をそらしたわ。よかったあ。

あっ、先輩来てくれた。麻生早耶さんだわ。お姉さんの麻生早咲さんはこのクリニックの歯科医師のひとり。来てくれて助かったあ〜。

「理央ちゃん、手伝うわ。高井院長先生の診療、いま終わったから」

麻生さん、玲奈ちゃんのスカートを戻して玲奈ちゃんのからだを抑えながら、私にいつてくれた。

「理央ちゃん、バキュームとスリーウェイシリンジをしっかりと。ちゃんと裕子先生をサポートするのよ。からだは私が抑えてるから」

「はい、麻生センパイ！ ありがとうございます」

院長先生の高井美穂子先生の診療終わったんだ。院長先生も桜葉高校の女生徒さんの治療だったわね。桜葉高校の女子高生やみどりヶ丘中学の女子中学生の患者さん多いわねー。

キュイ、キュイ、キィィユイーン。

キュ、キュ、キューン、キュイイーン。

キィイーン。

「がんばって〜もう少しだからね〜」

キュウウウーーン。

「一度、お口ゆすいで」

「エッ、エッ、ヒック、ヒック、くすん」

ユニットが起き上がったわ。玲奈ちゃん、ハンドタオルで頬を押さえたままじっとしてる。痛かったのねー。あらあらお顔が汗と唾液と涙でぐちゃぐちゃだわ。

「理央ちゃん、涙拭いてあげて。じゃあ、私、次の患者さんのサポートにいくから」

「センパイ、ありがとうございました！」

麻生さんいっちゃった。次はお姉さんの早咲先生の診療補助につくみたいね。……裕子先生、電気エンジンタービンを持って、バーをラウンドバーに交換してる。まだしばらく削らないといけないのね。だいじょうぶかなあ〜、玲奈ちゃん足パタパタしないかなあ。

「玲奈ちゃん、よくがんばったねー。さっ、お顔拭こっ！」

「エッ、エッ、……はい、ヒック」

玲奈ちゃん、お口をゆすいでるけど、お水が漏れちゃうわ。……ねー、麻酔って唇とかはちゃんと効いてるのにねー、なんで削る虫歯には効きにくいのかなあ〜。

あっ！ 玲奈ちゃん、ゆすぎ終わって裕子先生がバー交換してるの見ちゃった！ まずいかなあ〜。……やっぱり……、また涙目になっちゃった。

“終わりかなあ？ ……せんせい、ドリル交換してる……。もう逃げ出したい〜。涙ぼろぼろあふれちゃう……。くすん、ぐすん。こんなに痛い、もうヤダよっ！！ 泣くの恥ずかしいよう……”

「だいじょうぶ！ 玲奈ちゃん、もう少しがんばろ。私がついてるから」

もう一度、タオルで涙を拭いてあげて、玲奈ちゃんを励ました。

「それから、治療中は動くと危ないから、じっとしててね」

ユニットが倒れていくわ。ライトを玲奈ちゃんのお口に焦点が合うよ

うに調整して……。

「玲奈ちゃん、もうちょっとで終わるから。はい、アーン」

「大丈夫だよ。大きくお口開けようねー。あ〜ん」

いやいやながらなんだけど、玲奈ちゃんお口開けた。バキュームとスリーウェイシリンジをお口に入れて……。裕子先生が、デンタルミラーで玲奈ちゃんの唇を広げて、タービンを玲奈ちゃんの虫歯にあてがつたわ。ペダルを踏んで、スイッチが入っちゃった。

キュイ、キュイ、キュイイイーン。

キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュ。

ウィーン、ウィーン。

ウィーン、ウィーン。

「ふうん、ふんふん、ううん、んんっ」

玲奈ちゃん、今度も涙目で半べそかいて、足の指は曲がってユニットに強く押しつけてるけど、なんとか足はパタパタしないでいてくれるわ……。ゴメンね。痛いだろうけど、もう少しがまんしてね。

キュウウウーーン。

「はぁーい、削るの終わったわ、玲奈ちゃん。お口ゆすいで」

「ははぁん、ヒック、ヒック」

裕子先生、玲奈ちゃんのお口からタービンを出したわ。ユニットが起き上がってく。やっと削るのが、終わったわ。それにしても深い虫歯だったわねー。これから歯内療法ね。

“エッ、エッ、ぐすん。私が痛い！痛い！っていつてるのに、散々削られた……。どれくらい治療されたのかなぁ……。くすん、1時間も……。こんなに長い治療されたの初めて。もうスカートも上着もシワクチャ〜。くすん”

涙で顔が濡れてる。タオルで拭いてあげようっ、と。

「玲奈ちゃん、よくがんばったねー。あと神経の治療だけだよー。もうちょっとで終わるから、がんばろうね」

「……はい……」

「玲奈ちゃん、いまの虫歯、だいぶ深く広く進行してたから、削るのが長くなっちゃってゴメンね。あとこの歯は神経の治療しないといけないし、まだもうちょっと時間かかるから、5番は次回に治療するわ」

そうね、玲奈ちゃんいまの切削治療だけでだいぶ疲れちゃってるみたいだし。裕子先生も玲奈ちゃんのからだのこと考えて左下5番は次のときに治療することにしたのね。まっ、玲奈ちゃん沢山虫歯があるし、治療には時間がかかりそうだから、順番に1本ずつ治療していけばいいわよね。

「理央ちゃん、ラバーダム準備して」

「はい、先生」

ラバーダムパンチで、左下6番のところへ穴を開ける……。

パチッ。

ラバーダムを玲奈ちゃんのお口に被せて、ラバーダムパンチで開けた穴から患歯を出す、と。裕子先生がラバーダムを押えててくれるわ。クランプをかけて固定して……。これでできた！

「なに、なにっ！？」って玲奈ちゃん、不安そうな顔。きっと玲奈ちゃんもラバーダムが初めてなのねー。育子ちゃんもそうだったけど。

「安心して、玲奈ちゃん。これはラバーダムって言って、治療する歯を覆って、細菌から他の歯を守るの。いま治療してる歯は歯髄が細菌感染してるから、治療の途中に他の歯を細菌感染させたりとか、歯茎に感染を起こさせないためにラバーダムするの。それに患歯を治療しやすくするためでもあるのよ」

裕子先生、玲奈ちゃんに説明してる。ラバーダムをフレームで押さえ

て……。玲奈ちゃんのお口全体がラバーダムで覆われ、患歯の左下6番だけがでている状態になったわ。

排唾管を玲奈ちゃんのお口に入れて……。と。これで準備OKね！

「理央ちゃん、クレンザー」

「はい、先生」

裕子先生にブローチホルダーに装着した抜髄針を手渡して……。裕子先生、玲奈ちゃんの左下6番の窩洞の中にクレンザーを入れて、グリッと回転させた！

「はあん、ううっ」

「はぁーい、大丈夫大丈夫！ 少しがまんしてねー」

裕子先生がクレンザーを取り出すと、虫歯菌に感染した玲奈ちゃんの歯髄が絡め取られているわ。感染してるから充血して赤黒くなって色が悪いわね。ガーゼで拭き取って、と。あっ、また裕子先生クレンザーを玲奈ちゃんの口腔内に入れた。いまのは近心根だったから、次は遠心根かなあ。やっぱり……。

「あっ、ああ、ひ、ひはいっ！！ ひはいっ！！」

「もうちょっとで終わるよー。がまんしようねー」

“痛っ！！ 痛いよっ！！ もう許してえー！！ これからは甘いもの、食べ過ぎないから。食べたらちゃんと歯磨きするからー！！ 毎日歯磨きするからー！！ せんせい、もうやめてえー！！ 痛いつ痛いつ痛いつー！！ 痛ぁーい！！”

「動かないでー。じっとしててねー」

また玲奈ちゃん、膝がピクン！ピクン！！足がピクン！ピクン！って、してるわ。

「ふふん、ふん、ふん、ふうん、あん、あん」

「もう少しがんばってねー。もう終わるから」

裕子先生、ようやく玲奈ちゃんの病的な歯髄を全部取り終えたみたい。

「理央ちゃん、リーマボックスお願い」

「はい、先生」

裕子先生、細い目のリーマから太い目のリーマへと順番に使って、それからファイルも使って玲奈ちゃんの根管を開拓していった。グリグリと音がしてきそう……。玲奈ちゃん、顔しかめて痛そう。また膝曲げちゃって、足の指はユニットに強く押しつけられてる。制服のプリーツスカートが膝からずり落ちて、太ももが丸見えになっちゃてる。パンツが見えそう。困っちゃったなー。

「ふうん、あん、んんっ、ああっ」

「もう少しがまんしてー。玲奈ちゃん、膝立てちゃダメだよー。パンツ見えちゃうよー」

あっ、膝戻してくれた。よかったー。でも、足の指は曲げたままだけど……。

やっと裕子先生、リーマとファイルの操作が終わったみたい。

「理央ちゃん、ルートキャナルシリンジの用意ね。ネオクリーナーとオキシドールを入れてね」

「わかりました、先生」

2本のルートキャナルシリンジに、それぞれ次亜塩素酸ナトリウム溶液のネオクリーナーと、それから3%過酸化水素水を入れて用意して……。うん、OKね。裕子先生に渡して、と。

裕子先生は、私が準備したネオクリーナーのルートキャナルシリンジとオキシドールのルートキャナルシリンジを交互に使って、玲奈ちゃんの根管を洗浄したわ。発砲させて玲奈ちゃんの歯の根管内を化学的に清掃してるの。次亜塩素酸ナトリウム溶液はアルカリ性が強いから、過酸化水素水で中和してるの。

「はあ、はあ、んんっ、んんあ、はあ」

「はあーい、もう少し、もう少しだよ。がんばろねー」裕子先生がルー

トキヤナルシリンジを操作しながら、玲奈ちゃんに声をかけたの。私も声かけしなくっちゃ。

「玲奈ちゃん、あと少しで終わるよ。がまんしようねー」

「理央ちゃん、生理食塩水をちょうだい」

「はい、先生」

裕子先生、生理食塩水を注入して、玲奈ちゃんの根管を洗浄しては点滴針で吸引を繰り返してる。丹念に玲奈ちゃんの歯の根管内を清掃してる。玲奈ちゃんの左下6番から虫歯に侵された部分を徹底的に除去して、きれいにしないとね。裕子先生、今度は超音波洗浄器で洗浄してる……。

「ブローチ綿花、お願い」

「はい」

裕子先生にブローチ綿栓を渡すと、濃青色の小瓶に入ったヨードグリセリンの溶液につけて、玲奈ちゃんの根管の中に入れて根管を消毒したわ。

「ふうん、ふんふん、あっあっ、ふうーん、あんあん」

“あんあん、染むうー、染みるうー、あん”

玲奈ちゃん、ヨードグリセリンが染みたみたい。眉間に皺をよせて顔しかめてるわー。

「玲奈ちゃん、大丈夫よー。もうちょっとがまんしようねー」

「理央ちゃん、ペーパーポイントちょうだい」

「はい、先生」

ブローチにペーパーポイントをつけて渡すと、裕子先生、玲奈ちゃんの根管に挿入して根管内を乾燥させてる。

「もう一度、ブローチ綿花を。太めに巻いたものね」

今度は、ペーパーポイントブローチ綿栓で玲奈ちゃんの根管を乾燥させてるわ。

「これでよし、と。理央ちゃん、ビタペックス用意して」

「わかりました、先生」

裕子先生はビタペックスを手にとると、ゆっくりと水酸化カルシウム・ヨードホルム製剤のビタペックスを玲奈ちゃんの根管に注入していったの。ビタペックスはシリンジタイプで扱いやすいから、裕子先生お気に入りみたい。育子ちゃんの治療にも使ってたし。院長先生だとレンツロ使うから、水酸化カルシウムと生理食塩水を練和しなきゃならないのよねー。あっ、滅菌小綿球で水分を吸収させてる。いよいよ仮封が近いわ。準備しなくっちゃ。

「理央ちゃん、グラスアイオノマーセメントをお願いね」

「はい、先生」

玲奈ちゃんの根管治療、かなり長い期間になるのかなあ〜。裕子先生、暫間修復するみたい。

練板に粉末を出して、液をその横に落とす。よし。液剤の容器は滴下口の周囲を濡らしたガーゼで拭き取って密栓する、と。OKね。それから、プラスチックパチュラで練和して……。グラスアイオノマーセメントはだいたい20秒で練和しなきゃいけないのよね。

裕子先生、滅菌小綿球をピンセットでつまんで、玲奈ちゃんの根管内に挿入してる。あっ、ストッパーをバーナーで加熱した。シャーレからテンポラリーストッピングをストッパーにくっつけ、玲奈ちゃんの左下6番の窩洞に詰めてる。薬剤を緊密に仮封するのね。

「理央ちゃん、どう？」

「先生、準備できてます」

裕子先生、練板上のグラスアイオノマーセメントをストッパーで取り、玲奈ちゃんの左下6番の歯を仮封をしたわ。

「あふっ、ううっ」

「はい、がんばってー。もう少しで終わるよー。もうちょつとがまんし

てねー、玲奈ちゃん」

裕子先生、最後に形整えてる。

「ふうー。終わったわ、玲奈ちゃん。よくがんばったねー。お口ゆすいでいいわよ」

「玲奈ちゃん、お疲れさま！ きょうの治療は終わりだよ」

玲奈ちゃんのお口から、クランプとフレームをとる。ラバーダムシートを唇頬側に引っぱりハサミで歯間部を切って、ラバーダムがとる、と。それから排唾管を玲奈ちゃんのお口から出す……。

ユニットが起き上がり始めたわ。

もう泣いてはいないけど、玲奈ちゃん、頬の涙のあとが痛々しいわ。タオルで顔拭いてあげなくっちゃ。

「えらいよ、玲奈ちゃん。よくがまんしたよ」

「……はい……、ありがとうございました」

玲奈ちゃん、裕子先生と私にお礼をいつてくれたんだけど、声も小さいし……、疲れちゃったのね……。無理もないか、歯医者さん苦手なのにつらい治療だったもんね。

玲奈ちゃん、お口クチュクチュとゆすいでる。

「玲奈ちゃん、今日は2本の虫歯を治療するつもりだったけど、思った以上に左下の6番に虫歯が進行してたから、6番を集中して治療したの。ちょっと炎症がきつかったからつらいものになっちゃったわね。ゴメンね」

「……いいえ」

「うん。でもね、玲奈ちゃん。玲奈ちゃんが歯医者さん怖いのがわかるけど、詰め物が取れたまま、長いことそのままにしておいたらダメよ。詰め物が取れたっていうことは、詰め物の下から虫歯が進行してるってことなの。歯医者さんが苦手ならなおさら早くに虫歯は治さないとダメよ。虫歯が小さいうちに治療すれば、治療は痛くないんだから。わかった？」

「はい……」

「じゃ、次の治療だけど……、4日後の金曜日のお……、午後4時

はどう？」

「……その日はちょっと……」

「用事があるのね。そう。じゃ、土曜日の午前10時は？」

「……」

玲奈ちゃん、治療を先延ばしにしようって魂胆なのね。不安そうな顔してる。

「玲奈ちゃん、今日みたいな治療いやでしょ？ 先生もいってるように、虫歯は小さいうちに治療すればすぐに済むし、痛くないんだよ。裕子先生と私が一生懸命がんばって玲奈ちゃんの虫歯を治療するから、玲奈ちゃんは安心して。ねっ！」

「……はい」

玲奈ちゃん、なんとか頷いてくれた。

「土曜日の午前10時で決まりね。玲奈ちゃん、待ってるから」

「はあーい、玲奈ちゃん、エプロン外すねー」

玲奈ちゃんの胸元から水色の歯科エプロンを外した。

「せんせい……、ありがとうございました……」

「はい。お大事にね」

「玲奈ちゃん、お大事にね」

ペコリとお辞儀をして、スクールバッグを手にして治療室から出ていったわ。痛そうに頬をハンドタオルで押さえて……。元気なかったなあ。そりゃ当然よねー、きょうの治療はつらいものだったもの。でも、サボらないでちゃんと通院してね、玲奈ちゃん。でないと、歯がなくなっちゃうよ。

「先生」

「なあに？」

「今日、先生がされた育子ちゃんと玲奈ちゃんの歯内療法は、アペキソゲーネシスですか？ それともアペシフィケーションですか？」

「熱心ねー、理央ちゃんは」

「はい、まだまだ未熟ですから勉強しなくっちゃ、と思って」

「そおう。えらいわよ、理央ちゃん。……私が今日した処置は、育子ちゃんも玲奈ちゃんもアペシフィケーション。ふたりとも歯髄炎が歯冠部歯髄を越えちゃってて根部歯髄まで及んでいたから、残念だけど抜髄したの。歯髄を取っちゃうと歯が弱くなるから、ほんとに断髄法を使って、根部歯髄の残せるアペキシゲネシスで処置できたらな、って思ったんだけどね」

「そうですか。ありがとうございます！ 勉強になりました」

私は、先生に頭を下げてお礼をいったの。

「いいのよ。私、こう見えても幼弱永久歯のことはくわしいのよ。皓歯大のときは『小児歯科外来』で、幼弱永久歯のう蝕治療を研究テーマにしていたのよ。私にわかることだったら、何でも聞いてね」

「はい、よろしくお願いします！」

へえー、裕子先生って大学病院のとき小児歯科だったんだ。

ふうー。それにしてもふたり連続で歯医者さん恐怖症の患者さん相手だと、疲れちゃうなー。しかもふたりとも虫歯がひどくて歯内療法が必要だったしー。裕子先生もふたり続けての歯内療法でだいぶお疲れなんじゃないかな、歯内療法は集中力がすごくいるから……。ほんとに疲れちゃうなー。……ダメダメ、理央、こんなこと考えちゃ。育子ちゃんも玲奈ちゃんもホントに歯医者さんが怖いんだから……。怖いのにがんばって来てくれて、今日、治療受けてくれたんだから……。うん、私がかんばって、育子ちゃんにも玲奈ちゃんにも虫歯っていう状態が怖いってこと、治療しないと歯が腐ってきちゃうってこと、歯医者さんが怖いところではなくて味方だってこと、伝えなきゃね……。そして歯医者さんを好きになってもらわなくっちゃ！

さっ、次の患者さんの準備準備。次は……。長谷部有美ちゃん、み

どりヶ丘小学校の6年生ね。あら？ この子も『治療勧告書』だと結構虫歯が多いのね。4本あるわ。なんか、この子も夏休み明けの初診だし、歯医者さん恐怖症っぽいな……。えーっと、書いてもらった問診票は……、お母さんが書いてるわ。ますます無理矢理歯医者さんに連れてこられたっぽい。うーん、染みたり痛んだりする歯があるのね。よし！有美ちゃんの治療のサポートもがんばらなくっちゃ！

休日急患歯科診療所

日曜日の午前10時。ここ、みどりヶ丘中学のグラウンドでは、純姫女子学園中学との試合が間近にせまっているテニス部が1時間ほど前から、朝出の練習をしている。レギュラーはコートで練習試合、控えはその脇で素振りの練習を熱心に行っている。

数学担任でテニス部の顧問である仲未華子先生が練習を見守っている。「いち、に一、さん。いち、に一、さん。……」

2年生の清水里依紗は、きれいな黒髪をポニーテールにくくり、目のぱっちりとしたかわいい女の子である。スタイルもよく白のスコートがよく似合う。里依紗はテニス部の準レギュラーで、次の試合ではシングル戦にエントリーしている。素振りに余念がない。

だが、さっきから右の奥歯がズキズキ痛みだしてきて、ラケットの素振りに集中できなくなっていた。里依紗は、小さい頃受けた虫歯治療が原因で、大の歯医者嫌いだった。歯科検診で虫歯を指摘されてもここ何年と歯医者に行っていない。いまズキズキし出した歯も1ヶ月くらい前から染みたり、チクチクと痛んだりしていたのだが、歯医者に行くくらいならがまんした方がマシと思って、痛み止めの薬を飲んで我慢していたのだ。

“う～んんっ。痛いっ！！ どうしよう……。でも歯医者さんは怖いし、いやっ！！　なんで、こんなときに痛み出すのよ！！　あいたたた……”

里依紗は、痛みのあまりふと気が遠くなり、ラケットを持ったままその場に倒れ込んでしまった。

「清水さん、どうしたの？　大丈夫！！」

「里依紗！！」「里依紗！！」

先生や友だちの声が遠くから聞こえる。

「ちょっと、誰か救急車、救急車！！」

ここは、皓歯大学歯学部附属病院の『むし歯外来』である。『みどりヶ丘デンタルクリニック』の歯科医師である真山裕子と歯科衛生士である市川理央がいる。

なぜここに二人がいるのかというと、今日の日曜日に休日急患の当番歯科医の順番があたったからだ。『みどりヶ丘デンタルクリニック』のある町と皓歯大学附属病院のある町の歯科医師は、同じ〇〇地区歯科医師会に属していて、休日急患の当番が順番に当たることになっている。この〇〇地区では、皓歯大学附属病院の好意で『むし歯外来』の一室を貸してもらって、休日急患歯科診療所を開いている。休日はそこに当番歯科医が詰めるということになっている。病院の救急搬送口に『〇〇地区歯科医師会休日急患歯科診療所』と看板も上がっている。

「ふああああ〜。先生、暇ですね」あくびをしながら、理央が裕子先生にいう。

「こらこら、あくびなんかしてちゃダメ。暇なのは、急患の患者さんがいないってことだから、いいことなのよ。そんな贅沢いっちゃダメ」と裕子先生は微笑みながら、理央を諭す。

「そうでした。以後気をつけます」理央は裕子先生に謝るが、ふたりとも目は笑っている。

いっぽうこちら、みどりヶ丘中学校のグラウンドに到着した救急車の中では、里依紗が寝台に寝かされ、救急隊員の応急措置を受けている。

「里依紗ちゃん、しっかりね。若葉台病院に連れて行ってあげるから。がんばるのよ」気を失っている里依紗に仲先生が声をかけて励ましている。

応急措置を受けた里依紗を、すぐさま若葉台記念病院に搬送するべく、救急車は走り出した。

パーポー、パーポー。

救急車が走り出してしばらくすると、救急隊員の適切な措置のおかげか、里依紗は気がついた。

「せんせ…………い」

「気がついた？ もう少しの辛抱よ。若葉台記念病院に連れて行ってあげるから」

「せんせい、違うんですう…………」里依紗は、恥ずかしそうにほほを赤らめている。

「なにが？」

「わ、わたし…………、歯が…………、歯が痛いんです…………」

「えっ、そうなの！？」

救急隊員は目を丸くしている。「すみません」仲先生は恐縮して救急隊員に謝りながら、「休日急患歯科診療所にお問い合わせできますか？」といった。

救急車は、急遽コースを替え、皓大歯学部附属病院に休日に開設されている『〇〇地区歯科医師会休日急患歯科診療所』へと向かうことになった。

皓大歯学部附属病院が近づいてきた。里依紗は、寝台に寝かされているため、休日急患歯科診療所としか聞いていない。もし行く場所を目にしていたら、里依紗は行くのを抵抗しただろう。なぜなら里依紗は、皓大歯学部附属病院に、小さい頃受けた歯科治療でのトラウマがあるからだ。ただでさえ嫌いな歯医者に行かなければならないのに、よりもよってトラウマの原因となっている皓大歯学部附属病院に行かなくてはならないとは…………。

ウウー。

救急車が、皓歯大学歯学部附属病院についた。救急搬送口につけ、寝台に寝ている里依紗を救急隊員が慎重に下ろす。

「いやっ！！ いやっ！！ コワイ！！ コワイ！！」

里依紗は、救急車から降ろされたとたん、休日急患歯科診療所が皓大歯学部附属病院と知って、中に入るのを嫌がり、抵抗しだした。救急隊員2人とテニス部の顧問の仲先生は、しかたなく寝台の里依紗を抑えつ

けて、無理矢理休日急患歯科診療所に連れてきたのだ。

「いやっ！！ たすけてえー！！ 歯、抜かれちゃうっ！！ コワイよ、コワイよお～！！」

「毎日歯磨きするからー、許してえー！！」

「先生！！ 急患です。お願いします」

〇〇地区歯科医師会休日急患歯科診療所の時計が午前10時30分過ぎを指した頃、休日急患歯科診療所は急に慌ただしくなった。救急車で患者が運ばれてきたからである。普通、歯科の場合は、救急車で搬送されてくるということは滅多にない。理央ははじめての当番で当然だが、何回か当番歯科医をしている裕子先生もはじめての経験である。

テニスの白いスコート姿の中学生くらいの女の子が運ばれてきた。

女の子は、寝台で足をパタパタして抵抗している。つきそいの学校の先生だろうか、抵抗する女の子を抑えつけている。先生は、

「すみません、先生。すぐ診ていただけますか」と裕子先生に向かっていう。「みどりヶ丘中学の仲未華子といいます。テニス部の顧問をやっています。この子は2年生の清水里依紗さん、です。クラブ活動の最中に歯が痛み出し、倒れちゃったんです。お願いします」

仲先生と救急隊員とで、無理矢理里依紗をユニットに座らせる。3人で抑えつけるが、里依紗は足をパタパタして暴れ、なおも抵抗する。スコートは捲れ白のアンダースコートが丸見えになっている。

「やっ、やっ、いやっ！！ やだっやだっやだっ！！」

「仲先生、とおっしゃいましたね。この状態では治療はちょっと……」

「でも、里依紗ちゃんは歯が痛くて、倒れるほどだったんです。お願いします、診てやってください」里依紗を抑えつけながら、仲先生も必死だった。

「……わかりました。理央ちゃん、アレを……」裕子先生は理央に目でコンタクトする。

「はい、先生」

理央は、裕子先生のサインを理解すると、早速、里依紗を治療台に拘束するためのベルトを持ってきた。

「はっ、はっ、やっ！！ やっ！！ 許してえー！！ 助けてえー！！」

大暴れする里依紗を、仲先生と救急隊員が抑えつけるなか、裕子先生と理央が治療台にベルトで固定した。ベルトで固定された里依紗は、なお抵抗していたが、もうユニットからは逃れられない。すかさず、理央が里依紗の胸元に水色の歯科エプロンをつける。

「やっ！！ やっ！！ うわあああーん、許してえー」

とうとう里依紗は泣き出してしまった。裕子先生たちは、里依紗が泣きやむまでしばらく待つことにした。その間に任務を終えた救急隊員たちは帰っていった。

「えーん、えーん、ふえーん」

「エッ、エッ、ヒック、ヒック」

ようやく泣き疲れたのか、里依紗は徐々に泣き声が小さくなってきた。それを見た裕子先生は、里依紗にやさしく話しかけた。

「里依紗ちゃん。あつ、清水さん、私、里依紗ちゃんって呼んでいい？」

里依紗はこくと小さく頷く。

「里依紗ちゃん、ひょっとして歯医者さんに怖い思いをしたことがあるのかな？ もしよかったら、私に教えてくれないかなあ」

「里依紗ちゃん、裕子先生はとってもやさしいから、なんでも正直に話したらいいよ。恥ずかしいことなんてないんだから」と理央も微笑みながら、里依紗にいう。

仲先生も、「里依紗ちゃん、先生もああおっしやってるんだし……。怖い思いしたことあるんでしょ？ さっき『歯、抜かれちゃうっ』とかいってたし……」

里依紗は図星を指されて恥ずかしかったが、裕子先生、理央、仲先生、みんなやさしい目で里依紗を見守っていてくれるのを見て、怖かった歯医者の思い出をポツリポツリと裕子先生に話した……。

里依紗は、小学校に上がる時に全部の歯が虫歯になってしまった。それで、母親に近所の歯医者に無理矢理連れて行かれたが、その歯医者は「なんでこんなになるまでほっといたんだ！！」といきなり里依紗を怒鳴った。怒られたこと、それからネットで縛られて開口器を詰められいきなり麻酔を注射されて虫歯を削られたこと、の怖さと痛さで里依紗は大泣きしてしまった。それであらん限りの抵抗をして大暴れをした。そのため歯医者はここでは治療出来ないとさじをなげてしまい、それで里依紗は皓歯大学歯学部附属病院を紹介されて、そこに送られた。皓歯大学附属病院では里依紗の虫歯があまりにひどいため、手術ということになってしまった。里依紗は裸にされてオムツを履かされ、さらには体を縛られ、鼻に管が付いた器具を付けられた。口は器具で無理矢理開けさせられて、何本も何本も麻酔注射をされて殆どの歯を抜かれてしまった。里依紗は手術中痛くてコワくて、ず〜っと泣きっぱなしだった……。

裕子先生が話を聞いてくれ、優しい目でうんうんとうなずいてくれる。里依紗は少し気持ちが落ち着き、興奮がおさまった。

「そう……、たいへんだったね」「怖かったんだね」裕子先生と理央がいつてくれる。仲先生もころなし目が潤んでいるようだ。「でも、同じ大学病院の中でもここは手術室じゃないから……、だから安心して、ねっ」

こくんと頷く。恐怖心が少し取り除かれたことで緊張がゆるんだが、今度はまた歯が痛み出した。

「ぐすん。痛いっ！ 痛いようー。くすん、しくしく」

「あらあら、大変。ねっ、里依紗ちゃん、治療しないと、また虫歯痛くなっちゃうよ」裕子先生と理央がやさしく諭す。「だから、治療しよ。ねっ」

里依紗は、泣きながらこくんと頷いた。

裕子先生と理央は、里依紗からベルトを外してくれる。「ごめんね、里依紗ちゃん」

「まず、お口全体を診せてねー」と裕子先生はデンタルミラーと探針を持ち、里依紗に迫ってきた。

「里依紗ちゃん、大きくアーンしよ」理央もカルテを持ちながら、里依紗に開口を促す。

里依紗は、こわごわ口を開けた。

「うーん、里依紗ちゃん、だいぶ虫歯になっちゃってるわねー」里依紗の口の中は、ところどころに銀色に光るインレーや白いレジンの詰め物があるが、虫歯を放置したままで、薄茶色や濃茶色に変色した歯が多い。

“……虫歯だらけで恥ずかしい……”里依紗は口を開けたまま、頬を赤く染めた。

「理央ちゃん、カルテお願いね」

「はい、先生」

裕子先生はデンタルミラーと探針を里依紗の口に入れ、歯式を呼び上げ出す。「左上から。7番C2、6番〇、5番斜線、4番……」裕子先生は探針で、里依紗の左上4番をカリカリとひっかく。インレーと歯質の間が薄茶色に変色している。歯をひっかかれる不快感で痛みを感じ、里依紗は眉をひそめる。「ふうん、ふん」

「うーん、二次虫歯になっちゃてるわ。C2ね。3番から1番まで斜線、右にいて1番C2、2番C1、3番4番斜線、5番C2、6番〇、7番斜線」裕子先生は慎重に歯を診ながら、下顎を診察する。

「次、左下へいって、7番C2、6番〇、5番から右3番まで斜線、4番C2、5番斜線、6番、あっ、これも詰め物のところから虫歯になっちゃってるわ。染みたりしなかった？」右下6番もインレーの縁が変色している。遠心面の着色が強いようだ。

「はひ」この歯は春先から甘い物や冷たい物が染みていたが、里依紗は“はい”と小さな嘘で答える。裕子先生はシリンジでエアーをかける。染

みてキーンとした鋭い痛みが走る。里依紗は顔をしかめた。

「んんっ」

「ちょっと、染みるみたいね。二次虫歯ね、うーん、C 2、かな……。あー、これねー、痛むのは……、そうね、虫歯の穴は小さいんだけど……、たぶん中で大きく広がってるわね」里依紗の痛む右下の7番は、咬合面から近心面、遠心面、頬側、舌側へと濃茶色に着色していた。見たところはそれくらいで、ひどい虫歯には見えないが、咬合面の近心面寄りと遠心面寄りに小さく穴が開いており、その部分だけは薄褐色に変色している。それを診た裕子先生は、里依紗の右下7番は急性う蝕で、穴の下で大きく深く広がり、象牙質は軟化して崩壊し、歯髄炎を起こしていると判断した。よりの確に診断するため、この部分だけレントゲンを撮ることにする。「……あとで、レントゲン撮って見てみようね。とりあえず、7番C 3ね。以上です。理央ちゃん、何本虫歯あった？」

「いち、に、さん……。先生、9本です」理央がカルテに記したカリエスのCの記号を見ながら数えて、裕子先生に答える。

「ちょっと、虫歯が多いわね。それにどれも急性化してそうだな……。最後はつぶやきになる。

「今日は、里依紗ちゃんの痛がってる右下の奥歯を治療するわね」といいながら、裕子先生はユニットを起こし、理央に声をかけた。「右下のレントゲンを撮るわ。理央ちゃん」

「はい、先生。里依紗ちゃん、こっちにきてくれるかな」と理央は里依紗をレントゲン室に誘導する。

スコートに歯科エプロンをつけたままという格好でレントゲン室に入り、いすにすわった。アームのついたX線カメラ装置が里依紗の右頬に向けてセットされる。

「お口開けてねー。大丈夫だよア〜ン」理央が里依紗に口を開けるようにいった。里依紗が怖々口を開けると、理央が里依紗の口腔内にフィルムを挿入し、右頬側に固定した。それからX線のヘッドを動かし、フィルムの中心にX線を照射できるように調整する。

「里依紗ちゃん、動いちゃダメだよー。じっとしててね」と理央がレントゲン室から出ると、すぐにスピーカーを通じて裕子先生の声が聞こえてきた。

「はい、そのまま、動かないでねー」

里依紗の右下の歯が撮影された。レントゲン室のドアが開き、理央が入ってきて、「あっちに戻ってね」と里依紗を促す。里依紗はふたたび歯科ユニットに座った。

理央がレントゲン写真を持って、里依紗の座る歯科ユニットにやって来た。

裕子先生は、できあがったレントゲン写真をユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光に里依紗の右下の歯が3本映っている。

レントゲンの結果は、右下の7番は視診と触診で判断したとおり、虫歯はエナメル質の小さな穴の中で大きく深く広がり、象牙質の大半を侵し、深在性の虫歯を示していた。その一部は歯髄に届いており、急性歯髄炎を写し出していた。が、炎症は歯髄の一部にとどまっており、裕子先生はこの分だと断髄法を用いてある程度は歯髄を救えると、診断した。里依紗はまだ14歳であり、7番は生えていくらか経っていない幼若永久歯なのだ。レントゲンを見ても根は発達中で、歯髄腔も大きい。根を十分に育てるためにも断髄法がよりよい選択だと判断したのだ。

「里依紗ちゃんが痛がってる一番奥の7番だけど……、そうねー、ちょっと神経が炎症を起こしてるけど、たぶん一部だけで済んでると思うわ。……でね、今日はこの歯を削って、神経が炎症を起こしてる部分だけを取っちゃって、あとお薬を詰めて残りの神経を保護するわね。里依紗ちゃんの7番の歯は根がまだ成長する途中だし、できるだけ神経を保護してちゃんと歯が完成するように治療するわね」

“えっ、神経取っちゃうの！？ わたし……” いまさらながら、虫歯をほおっておいたことが悔やまれる。里依紗は半泣きになっている。

「心配しないで。大丈夫だから」「そうよ。裕子先生、痛くないように治

療してくれるよ。だから、里依紗ちゃんは安心して治療を受ければいいのよ」「里依紗ちゃん、先生のいうとおりよ。私もついててあげるから」裕子先生、理央、テニス部の顧問の仲先生が、里依紗を笑顔で励ます。里依紗は目に涙をためていたが、指で涙を拭くと、こっくりと頷く。仲先生がハンドタオルで里依紗の涙を拭いてやり、そのハンドタオルを里依紗に渡す。

「里依紗ちゃん、治療の途中で口を拭くようなことがあるといけないから、先生のこのハンドタオルを使って」

「せんせい……、ありがとうございます」

「よかったね、里依紗ちゃん」仲先生からハンドタオルを渡された里依紗を見て、理央がいう。

その間も裕子先生は熱心にレントゲン写真を見ていた。

レントゲン写真によると、隣の右下の6番も詰め物の下から虫歯が広がっているのがよくわかる。特に遠心面と7番との隣接面がひどい。下の歯髄と虫歯を示す透明の黒い影が完全につながっている。まだ痛みは出ていないようだが、痛み出すのは時間の問題に思われる。6番は残念ながら抜髄の対象になるだろう。どうやらこの歯から7番へと虫歯が広がっていったようだ。あらためてレントゲンを見ると、右下の7番は咬合面の小窩裂溝のみならず、近心面寄りとも6番との隣接面も結構虫歯が進行している。

「里依紗ちゃん、結構6番もひどいわ。まだ痛み出してはいないのよね？」裕子先生が里依紗を見ていうと、里依紗は小さく頷いた。「これもすぐ治療した方がいいんだけど……。今日の7番の治療はかなりがんばってもらわないといけないから……。里依紗ちゃんの体力が続くなら、6番も治療するわね。いい？」

“2本も治療するの！？ ……はあ” ため息が出て、また涙目になる。

「じゃあ、いす倒すねー」

歯科ユニットが倒れていく。里依紗の口元に裕子先生の顔がかぶさるように迫ってくる。理央が無影灯のライトを点けた。“まぶしい……”

里依紗の口に焦点をあわせる。

「麻醉するねー」と裕子先生は理央から麻醉カートリッジを装着した注射器を受け取り、「お口大きく開けよー」と里依紗を促す。

「里依紗ちゃん、アーンしよ」と理央も里依紗に開口を促す。

“コワイよ～、コワイよ～。はじまっちゃう……” 里依紗はこわごわ口を開けた。

「最初、ちょっとチクッとするからね～」

裕子先生は、小さく口を開けた里依紗の唇の右端をデンタルミラーで広げ、麻醉注射を口の中に挿入する。注射針がキラリと光った。鋭く尖った針が里依紗の右の歯茎に吸い込まれるように刺さる。

「んんっ」

「大丈夫よー。ちょっとがまんしてねー」

“んっ、痛いっ！！” 里依紗はチクッとする注射針の痛みが続いて、麻醉の薬液が注入されるにつれて、歯茎にズーンとした重い痛みと圧迫感を感じていた。

「もう少しよー」

やがて麻醉液がすべて注入され、注射針が抜かれる。里依紗が裕子先生をチラリと横目で見ると、理央がふたたび麻醉注射を裕子先生に渡している。

“えっ、まだ注射するの！？” 涙が出そうになる。

「もう1本麻醉するねー」

またもや里依紗の右下の歯茎に注射針が刺さる。

「はぁーい、全部はいったよー。一度お口ゆすごうか」

ユニットが起こされる。里依紗はクチュクチュと口をゆすぐ。徐々に麻醉が効いてきたのか、右側の頬が痺れていくのがわかる。

「麻醉が効くまで、少し待つわね」里依紗が口をゆすぎ終わると、裕子先生はユニットを倒しながらいった。理央がライトを消す。里依紗がユニットに寝たまま横目でまわりを見ると、仲先生が少し離れたところで

丸椅子に座っている。仲先生は“大丈夫よ。がんばるのよ”と目で励ましてくれる。“せんせい…………”

「効いたかな」5分ほどがたち、ライトが点灯され、裕子先生が里依紗に口を開けるように指示する。里依紗の右下7番をデンタルミラーの柄でコンコンと叩き、「響く？」と聞いた。里依紗はプルプルと首を振る。
「効いたようね」

「大きくお口開けようねー」

裕子先生は、里依紗が小さく開けた口の中にピンセットでつまんだふくみ綿を挿入する。そして右下7番の歯茎の頬側と舌側にふくみ綿をふくませ、治療のスペースを確保する。続いて理央がバキュームとスリーウェイシリンジを里依紗の口腔内に挿入する。

コオオオー、コオー。

里依紗が口にバキュームを入れられたまま、裕子先生を見るとテーブルの上のバーチャージャーからバーを選んでいる。ダイヤモンドポイントだ。選んだバーをハンドピースの装着されたエアータービンにセットする。用意のできたエアータービンを右手に持ち、左手にデンタルミラーを構えて、裕子先生が促す。

「じゃあ、削っていくわね。痛かったら左手をあげて教えてね」

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」バキュームとスリーウェイシリンジを里依紗の口の中に入れている理央がにこやかに優しいことばをかける。

“コワイよ～、コワイ…………。どうか痛くありませんように！！”里依紗はもはや半べそである。これから始まる治療に対する怖さで硬直して半泣きの状態になっている。それを見た裕子先生は、

「だいじょうぶよ。力抜いて、リラックスしよ」といい、理央も「里依紗ちゃん、鼻で大きく息吸おうか」と里依紗に深呼吸を促した。

里依紗はいわれたとおり、少し大きく息を吸った。

スー、ハアー。

すると、少し気持ちが落ち着いた。 “……ちょっと、気持ちが楽になった……”

目を閉じ、思い切って大きく口を開けた。裕子先生が麻酔注射と同じようにデンタルミラーで右唇を広げる。エアータービンが里依紗の口の中に入ってくる。里依紗のう蝕した右下7番にドリルがあてられる。裕子先生がユニットのペダルを踏む。ドリルが回転を始め、里依紗の虫歯を削りはじめる。

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュ、ジュポポポー。

「里依紗ちゃん、その調子よー。大きく開けててねー」

理央のスリーウェイシリンジの注水のもとに、裕子先生がドリルで里依紗の虫歯を削り、理央がバキュームで唾液や削りかすを吸引する。

しかし削り始めて1分半ほどがたった頃、ドリルの先端にあるバーが遊離エナメル質を削り取り、軟化象牙質の底部に近づいてきたとき、里依紗は鋭い痛みを感じ、顔をしかめ身を振り、膝を曲げ足をパタパタし出す。目に涙が浮かぶ。

「大丈夫よー、がんばってー」

けれどいくら励まされても痛いものは痛い。左手をあげる。里依紗はもはや半泣きで治療されている。

「もう少し痛くない痛くない！ もうすぐ終わるからね～我慢しようね～」

「がんばって～もう少しだからね～」裕子先生と理央は、里依紗の虫歯を治療する手を休めない。

「ふん、ふん、ふうん、ふん、あつ、あつ」

キーン、キュウーン、キュイ、キュイ。

キュイーン、キュイイーン、キイイユイーン、キイイユイーン。

コオオオー、コオー。ジュツ、ジュツ、ジュポポポー。

キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイイイーン。

里依紗はスコート姿のまま治療されている。里依紗が眉間にしわを作り、顔をしかめて虫歯を削る痛みをがまんしている。目にはいっぱい涙が溜まっている。身を振り脚を少し曲げるだけで、プリーツの短いスコートは捲り上がり、白のアンダースコートが丸見えになる。里依紗の足の指は曲がり、ユニットに強く押しつけられている。里依紗はキューンって削られてる間中、膝がピクン！ピクン！と動いている。

丸椅子に座って里依紗の治療が終わるのを待っている仲先生は、
“里依紗ちゃん、よっぱど虫歯を削るのが痛いよねー。凄い痛そうな顔してる……。それにあんな格好で治療されてるなんて……。なんだか私まで歯が痛くなってきたそう……” アンダースコートが丸見えになり、痛みながら虫歯を治療されている里依紗の様子を見て思った。

“ぐすん、エッエッ、痛いつ！！ えーん、ヒックヒック、スコート姿で治療されるって、恥ずかしい……。痛っ！！ 痛いつ痛いよ～、エッエッ”

“エッエッ、痛いよ～、コワイよ～、エッエッ”

里依紗の目から涙がぼろぼろ～とこぼれた。里依紗はもはや大泣きである。

「はあああーん、あん、うわあああーん、わん」

「はい、もう少しよー、がんばってー」

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

コオー、コオオオー。

里依紗は口を開けて、裕子先生に虫歯を削られながら、
“くすん、えっえっ、虫歯の治療って死ぬくらい痛い。ヒックヒック、みんなってこんなに痛いのガマンしてるのかな？ ぐすん、えっえっ、歯医者さんに進んで行く人って偉いなあ～。 あ～ん、あん”

“歯医者さんで涙だしたりベソかいたりするのって凄く恥ずかしい……。中学生なのに、虫歯の治療で泣いちゃうなんて……。恥ずかしい……。ぐすん、ヒックヒック”と大泣きしていた。

「痛いー！！ 痛いー！！」

里依紗は膝を曲げ、脚はX形に交差し、口も小さく閉じそうになっている。里依紗のがまんが限界と見た裕子先生は、タービンを止めた。

キュウウー——ン。

「里依紗ちゃん、だいぶ痛い？ がまんできない？」

「……痛い……です」里依紗は小さな声でいい、目に涙をためて半べそでコクンと頷く。

「もう1本、麻酔しよっか」

里依紗はさっきの麻酔注射の痛みを思い出し、凄く動揺して「大丈夫……いいです……」といったが、

「なにいつてんの。削るのがまんできないんでしょ」と裕子先生に軽くあしらわれる。

里依紗は麻酔注射の痛さもイヤだったが、これ以上削る痛みには耐えられそうにもないので、しかたなく頷く。

「そうよね……。理央ちゃん、シンマお願い」

「はい、先生」と理央は麻酔カートリッジを注射器にセットし裕子先生に渡す。里依紗の右下の歯茎に注射針が刺さり、麻酔液が注入される。裕子先生に強引に麻酔された里依紗は「うう～ん、くすん、くすん」とうめきながら泣いていた。

里依紗は麻酔液が歯茎に注入される圧迫するようなズーンとした痛みをなんとかこらえる。いったんユニットが起こされ、口をゆすぐことを指示された。麻酔が効くまでしばらく待つ。“これで終わりかなあ？ 終わりにならないかなあ～”と目尻に涙をためながら裕子先生を見ると、ドリルを交換している。“はあ～ まだだ……”ため息が出る。

裕子先生はエアータービンのバーを、タングステンを含んだカーバイドバーに替えた。

さらに里依紗の虫歯を切削する治療は続いた。キュー〜ンと治療が進むにつれ、里依紗は足がピクン！ピクン！とたえず動いている。里依紗の治療の間中、スコートが捲れている。裕子先生は次にバーをスチールバーに交換して、髓腔の開拡、軟化象牙質の除去を続ける。里依紗の右下7番は根未完成歯であり、歯髓腔や根管が太いため、かなり太めに開拡することをこころがけて切削する。理央の操作するスリーウェイシリンジの注水下で慎重に削っていく。裕子先生は、里依紗の虫歯を削りながら思った。“これは思ったよりもう窩が深いわねー。ラバーダムをしよう……”

キィィユイーン、キィィユイーン。

コォー、コォォォー。

ようやく切削治療が終わった。

「里依紗ちゃん、お口ゆすご」

ユニットが起き上がり、里依紗はまず仲先生が渡してくれたハンドタオルで涙を拭いた。それからクチュクチュと口をゆすぐ。麻酔のため、口と頬が痺れてうまくゆすげない。痺れるというより感覚がなくなる感じがして、とんでもない所に水を吐き出しそうになる。

口をゆすぎ終わり、里依紗が正面に向くと、

「治療続けるわねー」と裕子先生がいう。

“まだ終わりじゃないんだ……” 里依紗は落胆した。また涙が溢れそうになる。ハンドタオルでぐっと涙を拭う。

「理央ちゃん、防湿するわ」

「先生、わかりました」

裕子先生は理央に指示してラバーダムを受け取る。緑色のゴムのようなものが用意される。

“なに、これっ！？” 里依紗は不安が募り、目を見張った。

「心配しなくていいのよ、里依紗ちゃん。これで治療する歯を覆って、バイキンから守るのよ」と裕子先生は理央とともに小さな孔を開けたラバーダムを里依紗の右下7番に被せ、クランプで固定する。シートを広

げて、フレームで押さえた。里依紗の口腔がラバーダムで覆われた。

「じっとしていてね」

裕子先生は露髄しないように、慎重に里依紗の右下7番の軟化象牙質をスプーンエキスカバーダーで掻き出す。歯髄に細菌感染を起こさないためだ。掻き出した虫歯に侵された象牙質を汚物入れに捨てる。ピンセットで小綿球をつまみ、滅菌生理食塩水に浸し、天蓋部分を消毒する。

「次は、さっきいったように神経の炎症を起こしている部分だけを取っちゃうわね。はい、アーン」

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

裕子先生がエアータービンに替え、今度はラウンドバーを装着した電気エンジンタービンを里依紗の口腔内に挿入する。歯髄の炎症を起こしている部分だけを削り取るためだ。理央の操作するバキュームも、さっきから里依紗の口の中に入ったままだ。

キーン、キーン。

ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン、キーン。

コォー、コォォォー。ジュポポポォー。

「んっ、んんっ」

「もうちょっとがまんしようねー」

「大丈夫よー」

ラウンドバーは徐々に深さを増し、歯髄腔へ穿通した。裕子先生は、里依紗の右下7番の髄角、天蓋、壊死組織を確実に除去した。

キーン、ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン。

里依紗の口からラウンドバーをつけた電気エンジンタービンが出される。ようやく電気エンジンタービンによる切削治療が終わった。

「理央ちゃん、ファイルお願い」

「はい、先生」

理央から裕子先生にファイルが渡される。裕子先生はさっき撮影したレントゲン写真を参考にして、ファイルにストッパーをつけて根管内に挿入した。

「里依紗ちゃん、もう一度レントゲン撮るわね」といいながら、裕子先生はユニットを起こしてくれる。

「じゃあ、こっちに来てくれる」

理央が里依紗をふたたびレントゲン室に誘導する。レントゲン室にはいると、さっきと同じようにアームのついたX線カメラ装置が里依紗の右頬に向けてセットされた。ラバーダムをつけたままなので口は閉じられない。口腔内にフィルムが挿入され、右頬側に固定される。理央がレントゲン室から出ていくと、すぐにスピーカーを通じて裕子先生の声が聞こえてきた。

「はい、じっとしててね」

ファイルが入ったままの里依紗の右下の歯が撮影された。レントゲン室のドアが開き、理央が入ってきた。里依紗の口から撮影したレントゲンを取り出すと、「治療台に戻ってね」と里依紗を促す。

里依紗は歯科ユニットに戻り、こしかけた。

里依紗が歯科ユニットに戻ってしばらくすると、できあがったレントゲン写真を持って理央が戻ってきた。裕子先生はレントゲン写真を受け取ると、ユニットの投影機にかけた。里依紗の右下の歯が写ったレントゲン写真が先ほどのものとあわせて二つ並んでいる。今撮影したレントゲン写真は、里依紗の歯にクランプと歯の中に挿入されているファイルが白く鮮明に写し出されている。里依紗はこの光景を見て少し不思議に思った。“私の同じ歯が、二つ写ってる……”

裕子先生はレントゲン写真を見ながら根管長を測定した。そしてH-ファイルで調整し、レントゲン写真上の根尖より3～4mm程度短く設定して根管拡大に備える。

「里依紗ちゃん、がんばってねー。もう少しだから」

と裕子先生は今度はクレンザーを手にした。感染により炎症を起こした病的な歯髄を取り除き、健康な歯髄を残すためである。断髄によって切断面に象牙芽細胞に第二象牙質を形成させて閉鎖し、根尖部に生活力のある歯髄組織を残すためだ。クレンザーは里依紗の右下7番の歯の根管内に残った虫歯に侵された壊死組織、感染歯質を絡め取り、除去していく。

グリグリ、グリグリ。

「ふうん、ふんふん、んんあ」

「はあい、大丈夫、だいじょぶよー。もう少しがまんしようねー」

「ふん、ふん」

「痛くないよー。すぐ済むからねー」

裕子先生は、クレンザーで里依紗の歯の根管内の虫歯に侵された歯髄を絡め取ってはガーゼで拭き取り、さらに絡め取る。近心根、遠心根の順に根管治療を進めていく。

「理央ちゃん、キャナルシリンジにネオクリーナーを入れたものをお願い」

「はい、先生」

理央は次亜塩素酸ナトリウム溶液であるネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジを裕子先生に手渡した。裕子先生はルートキャナルシリンジを受け取ると、里依紗の歯の根管内に慎重に注入し、根管の中を次亜塩素酸ナトリウム溶液で満たした。次にさきほど用意したストッパーをつけた太いHーファイルを里依紗の歯の根管内に挿入した。ファイルで根管壁の全周にわたりファイリングをして、感染歯質を完全に除去するためである。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。

里依紗は根管をいじられる不快感を感じ、思わず声をあげる。

「んんっ、んあ、ふうん、ふん」

「里依紗ちゃん、がんばってー、もうちょっとだよー」

続いて裕子先生は、理央にネオクリーナーとオキシドールを入れたル

ートキャナルシリンジを用意するように指示する。ルートキャナルシリンジを受け取った裕子先生は、次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用いて交互に洗浄を行って、里依紗の歯の根管内の汚染物質を溶解して除去した。

「はあ、はあ、んんあ」

「はい、はい、がまんしてー」

「理央ちゃん、生理食塩水」

さらに裕子先生は、里依紗の歯を生理食塩水で洗浄をし、エンドラチューブ（点滴針）で吸引を繰り返して、引き続き里依紗の歯の根管内の清掃を繰り返した。

「理央ちゃん、綿栓を巻いたブローチをお願い」

「はい、先生」

理央は滅菌した綿栓を太めにブローチに巻きつけたものを裕子先生に手渡す。裕子先生は拡大形成と科学的清掃が終了した里依紗の歯の根管に綿栓が巻かれたブローチを挿入して、根管を乾燥させる。

「ふうん、んんっ」

「もう少しだよー。がまんしようねー」

「理央ちゃん、ビタペックス」

「はい、先生」

理央はビタペックスシリンジ付与のストッパーをさきほどのHーフファイルと同じく根尖より3～4mm程度短く設定して、裕子先生に渡した。

裕子先生は里依紗の右下7番に水酸化カルシウム・ヨードホルム製剤であるビタペックスを挿入し、ゆっくりと根管内に送り込み充填した。

「ううーん、ふうん、んんっ、んあ」

“くるしいよう……” 里依紗は治療されている歯の中に異物が入ってくる感じがし、さらに長時間ラバーダムによる治療を受けていることで、口を閉じられないでいる。そのため息苦しさを感じ始めていた。

「がんばってー、里依紗ちゃん。ホントあともう少しだからー」 里依紗

の様子に気づいた理央が励ました。

シリンジタイプのビタペックスを注入したあと裕子先生は、滅菌小綿球をピンセットでつまんで根管内に挿入して軽く圧接し、水分を吸収した。次に裕子先生は里依紗の根管に新しい小綿球を置いた。それから加熱したストッパーの先でシャーレからテンポラリーストッピングをくっつけ拾い上げると、バーナーで数秒間加熱し、里依紗の根管にストッピングを填入して圧接した。

「里依紗ちゃん、もう最後だからねー。がんばろうねー」

裕子先生は、理央からグラスアイオノマーセメントを受け取ると、ストッパーで里依紗の右下7番の歯を仮封した。

「里依紗ちゃん、今日の治療は長くなっちゃったし、里依紗ちゃんもだいぶ疲れてるみたいだね。治療始める前にいった6番は、今日は治療しないわ」

“ホント！？ よかった！ ……でも、いずれ治療しないといけないのよね……” 今日の治療が終わりということを聞いて里依紗はうれしかったが、まだまだ治療しなければならない歯がたくさんあるのを思いだし、憂鬱になる。

「じゃあ、お口ゆすいでね」

ラバーダムが里依紗の口から外され、歯科ユニットが起こされる。ふと時計を見ると、午前11時30分を過ぎていた。口をゆすぐ里依紗は、麻酔でしびれたままの頬と唇で水が漏れそうになり、洗口台にうまく水が吐き出せない。それでもクチュクチュと口をゆすぎながら、里依紗は、“結局1時間位の治療されてたんだ……。ほんと痛かった……。くすん。逃げ出したかったよ～、くすん。泣いちゃって、恥ずかしい……”と涙ぼろぼろだった。

「はい、今日はこれでおしまい！！ 里依紗ちゃん、よくがんばったねー」

「今日治療した歯はお薬が詰めてあるから、痛みが治まったからって、

歯医者さん行くのよそうなんて思っちゃダメよ。そうねー、あしたにでも行った方がいいわ」

「今日の治療内容は、詳しくメモをとって診断書を書くから、次に行く歯医者さんに渡してね……。あっ、でも、里依紗ちゃん、かかりつけの歯医者さん、ないんだね」

「あの……、せんせい……」

「なあに？ 里依紗ちゃん」

「せんせいって、どこで歯医者さん、やってるの？」

「うん？ ああ、私はみどりヶ丘デンタルクリニックっていうところに勤めてるの。ここにいる理央ちゃんもいっしょ。……あっ、そっか里依紗ちゃん、みどりヶ丘中学よね。私の勤めてる歯科医院のすぐそばよね」そうなのだ。みどりヶ丘デンタルクリニックを真ん中とすると、クリニックからほぼ500mずつ左右にみどりヶ丘中学と桜葉高校が建っている。

「……せんせい……、わたし知らない歯医者さん行くのコレ……。せんせいのところへ行っていていいですか？」

「先生、私からもお願いします。里依紗ちゃんもこういってますし、続けて診ていただけないでしょうか？」仲先生もいった。

「……えっ、ええ、里依紗ちゃんさえよければ、それはかまわないですけど……」

「よかったね。里依紗ちゃん」仲先生も自分のことのように喜んでくれる。

「ありがとうございます」里依紗は小さくお礼をいった。

「じゃあ、早速だけど……、あした来られる？ 学校何時に終わるの？」

「はい。3時です」

「学校終わってからすぐ来られる？ それともクラブ終わってからがいい？」

「先生、里依紗ちゃんはテニス部のホープのひとりですけど、今は虫歯

を治療することが最優先です。顧問として、学校が終わったらすぐに治療に行かせます。いいわね、里依紗ちゃん」仲先生がいう。

“もしかして、仲先生、クラブが終わってからにしてくださいって、いつてくれるかも……”と思っていた里依紗は、淡い期待がかなえられず、少しがっかりして返事が小さくなってしまう。「はい……」

「それじゃ、3時半でいいかな。予約はとっておくわ」

「……よろしく……、お願いします」里依紗は小さくお辞儀をした。

理央が里依紗の胸元から水色の歯科エプロンを外してくれる。里依紗は歯科ユニットから立ち上がり、仲先生に連れられて、診察室のドアの方へいく。仲先生に抱えられている里依紗の背中では、過酷な治療で憔悴している。ドアのところまで行くと、里依紗と仲先生は「ありがとうございました」ともう一度頭を下げる。

「お大事に」

診察室の外へ出ていくふたりに声をかける裕子先生と理央だった……。

キャンパス見学会

携帯電話が、大塚愛の『ビー玉』のメロディ♪を奏でる。“愛子からだ！”

桜葉高校の2年生の村川沙紀は、あすの皓歯大学歯学部附属歯科衛生士専門学校のキャンパス見学会に備えて、学校案内をもう一度読み返していたところだった。いっしょにあしたのキャンパス見学会に行く親友の多部愛子から待ち合わせ時間の連絡を待っていたのだが、どうやら携帯にその連絡がきたようだ。

ピッ。

「もしもし……、あつ、うん。愛子、あした何時に行く？……うん、わかった。駅の改札の前で8時に待ち合わせだね……。うん、待ってるからね……。うん、えっ……。そっちこそ、寝坊して遅れないでね……。うん、じゃあね、あしたね。バイバイ……」

沙紀はセミロングのきれいな髪とぱっちりした瞳を持つかわいい女の子である。沙紀は甘い物が大好きだった。そのため小さい頃から虫歯が多く、歯痛や虫歯は沙紀の悩みのたねだった。学校で歯科検診があるたびに虫歯を指摘され、小学校1年生、いや幼稚園の年少さん以来、ほぼ毎年歯医者に通っている。今年も6月の学校歯科検診で虫歯を指摘されたので、遅くとも夏休みには歯医者で虫歯の治療を受けに行き、治療報告書を書いてもらって学校に提出しなければならない。

そんな幾度となく受けた虫歯治療ではとても痛い思いをして、散々な目にあってきた。それでこの自分のつらい歯科治療の経験を生かせないかと、歯科衛生士の途に進学したいと思い始めていた。

そのことを担任の福田早矢先生に相談すると、毎年7月に行われる皓歯大学歯学部附属歯科衛生士専門学校のオープンキャンパスのことを教えてもらった。それで実際の授業とか、実習を見学に行くことに決めたのだ。

「ふーん、卒業後は、皓歯大学の歯学部口腔衛生保健学科の3年次に編入することもできるんだ。でも、それって最初から歯学部口腔衛生保健

学科を受験した方がいいんじゃない？ あっ、でも試験難しいっか」

沙紀の周りには、スナック菓子、キャンディ、チョコレート、それにジュースのペットボトルとジュースを注いだグラスが置いてある。さっきからスナック菓子とキャンディを交互に口に入れ、ジュースを飲みながら、熱心に学校案内のパンフレットを見ているのだ。

ガリッ。

「あいたたた」キャンディを噛んだ拍子に左の奥歯に痛みが走った。「うんっ？」

口の中にいま噛んだキャンディのほかに何か異物がある。それに、なんだか左下の奥歯に違和感がある。“どうしたんだろ。……まさか銀歯が取れちゃったんじゃない？”

舌の上にあるキャンディのかけらやら、異物を、口から出してみると、細かく砕かれたキャンディの破片のほかに、大きな十字型の銀の固まりとそれにくっついた縁が茶色になっている歯の切片が出てきた。

「！？」

おそるおそる舌で左下の奥歯を触てみると、明らかにでこぼこしている。そばのスクールバッグから手鏡を取り出し、口を開け、思い切って見てみる。処置歯だらけの沙紀の口腔が手鏡に写し出される。

「あーっ！ どうしよう、銀歯取れちゃってる」

左下6番に詰めてあった大きめのインレーは跡形もなく取れ、大きな穴が開いている。こころなしか穴の中は茶色く変色しているようだ。

“詰め物の下で虫歯になってたのかな。そういえば、春先から染みたり、チクチクしたりしてた……。どうしよ〜。最悪！！ また歯医者さん行かなきゃなんないじゃない” 沙紀は二次虫歯の経験も何度かある。さっきまでの明日のオープンキャンパスを楽しむ気持ちもどこへやら、沙紀は、気持ちが沈んできた。“はあ、あしたのオープンキャンパスが終わったら、歯医者さん行かないといけないかなあ……。ヤダなあ”

沙紀は、意気消沈して床についた。

翌朝。沙紀が目覚めると、左の奥歯の違和感は少し残ったまま。

“タベ、銀歯とれちゃったからなあ〜” と思いながら、ていねいに歯磨きする。口の中にミントの香りがひろがり、さわやかさで満たされる。

“うん、大丈夫よね。気のせい、気のせい”

歯を磨き終わり、部屋に戻った。パジャマを脱ぐと、白のブラをつけた。パンツも登校用に履いている白だ。それから桜葉高校の校章のエンブレム入りの白のブラウス、胸元の青と緑のリボンや紺のプリーツスカート、紺のソックスの制服を身に纏う。

沙紀は朝食を取り、「いってきまーす」と家から駅へ向かう。今日は学校ではなく、直接となり町の皓大歯学部附属歯科衛生士専門学校に行く。

沙紀は皓大歯学部附属歯科衛生士専門学校のキャンパスに来ていた。歯科衛生士に興味のあるクラスメイトたちもいっしょである。

朝からは、オープンキャンパスにあたってのオリエンテーリング、それから授業の見学。講義は難しかったが楽しそうであり、沙紀は自分が学生になった気分でなんだかワクワクした。昨日の夜の沈んだ気持ちがうそのようだ。午後からは、実習を見学することになっている。左の奥歯はときおりチクチクしていたが、そのうち気にならなくなってきた。

“やっぱり、気のせいだったんだ。銀歯とれちゃったけど、中で虫歯になってたわけじゃないんだ”

もってきたお弁当でお昼をとった。左の奥に食べ物が行かないように食べたので、口の中がモゾモゾして食べにくい。お弁当を食べた後、お菓子をクラスメイトたちと交換する。親友の多部愛子がくれたチョコレートを食べる。愛子は「あー、チョコレートっておいしい！ しあわせ！」と楽しそうに大好きなお菓子をバリバリ食べている。それを見ながら、沙紀は“うらやましいなあ〜、愛子、歯が丈夫で……” と思っていた。愛子はどちらかというと虫歯が少なく、治療を受けた歯も上下左右の6番と下左右の7番だけである。

沙紀は口に入れたチョコレートが左の奥にいかないように気をつけた

が、チョコレートの溶けた甘い液体が穴のあいた左下の奥歯に浸透する。歯に染みる。

「うっ！」思わず声が出る。

「沙紀、どうしたの？」心配そうに愛子が聞いてくれる。

「ううん、なんでもない」無理に笑顔を作って答える。けれども、このときから、チクチクがズキズキにかわってきた。

食後、洗面所を借りて歯磨きをする。沙紀はふだんは2分ほどで歯磨きを済ませるのだが、今日は歯科衛生士専門学校に來ていること、詰め物がとれて奥歯の穴に食べ物が詰まること、さらにはその歯が痛み出していることもあり、比較的ていねいに時間をかけて磨く。ミントの香りで少しマシになる。愛子はクチュクチュとうがいをしてだけ。“何で歯磨きしないのに、愛子、虫歯にならないんだろ……”

「はい、みなさん。これから実習を見学してもらいます。ふだんは学生3人1組で口腔診査、スケーリングの実習を行っていますが、今日はみなさんにユニットに座ってもらって、実際に体験してもらいます。みなさんのお口の状態をチェックして、カルテに書き取った上で、学生がみなさんにスケーリングを行います」

今日のオープンキャンパスの案内役で皓大歯学部附属歯科衛生士専門学校講師である歯科衛生士の光岡奈緒が、説明をする。ズラリと歯科ユニットが並ぶ光景は圧巻であり、沙紀も愛子も目を見張っている。沙紀と愛子は、入り口から6番目のユニットにいた。学生の森田さおりと西原亜依、悠城紗世がこのユニットの3人組だ。

「それでは、みなさん順番にユニットに座り、学生による口腔診査、ついでスケーリングの実習を受けて下さい」光岡がいった。その説明のあいだに沙紀の奥歯は、ふたたびズキズキと痛み出し、説明があたまに入らない。ふと見ると、愛子が歯科エプロンをつけられ、口腔診査の実習を受けている。学生の森田が愛子の口腔内にデンタルミラーと探針を入れ、西原がライトを操作し、悠城が歯式をつけるためカルテを手にした。

「多部さんの口腔診査します。左上からいきます。準備はいい？」

「はい」

「多部さん、虫歯があるわよ」森田が愛子の口腔をざっと見ていった。

「えっ、ほんとですか！？」愛子が驚いたようにいう。今年の学校歯科検診では虫歯なしと診断されたから安心していたのだ。「6月にあった学校の歯科検診では、虫歯なかったのにい……」

「学校ではちゃんとしたライトとかが準備できない場合があって、見落とされることがあるのよ。だから歯医者さんで定期検診を受けとくと安心よ」と森田はいい、歯式を呼び上げ始めた。「では、歯式をつけてください。7番C2、6番〇、5番斜線、4番C1、3番から右の5番まで斜線、6番〇、7番C2。左下へいって、7番〇、6番〇、5番から右の4番まで斜線、5番C2、6番〇、7番〇。以上です」

ユニットに座り、実習を受けている愛子を見て、沙紀は“しっかり見学しなきゃ”と思うのだが、歯が痛くて集中できない。

「多部さん、虫歯4本あるわ。ちゃんと歯医者さんで虫歯治してね」

「えっ！？ そんなにい！？」愛子は痛い歯医者の治療を思い出したのか、一瞬いやそうな顔をしたが、すぐに「はい。治療に行きます」といって歯科ユニットから降りた。

「はい、次の方。村川沙紀さん、座ってね」学生の森田が促す。

「あっ、は、はい」沙紀はあわてて返事をして、スクールバッグからハンドタオルを取り出しユニットに座るが、強く襲ってくる歯の痛みに、ユニットに座ると同時に泣き出してしまった。

「ふえ、ふえ、くすん、くすん」

「！？どうしたの？ 沙紀！」愛子が心配そうに聞く。

「ふん、ふん、えっ、えっ」

「どこか具合でも悪いの？」学生の西原、悠城も聞く。だが、沙紀は黙って泣くばかり。“歯科衛生士専門学校に来て、歯が痛いなんて、恥ずかしくていえない……” そう思っていた。

「せんせーい。光岡せんせい」学生の森田が専門学校講師の光岡を呼ぶ。

光岡も呼ばれる前から、このユニットの騒ぎを見てやって来ていた。

「どうしたの？」光岡も沙紀に聞く。と同時に、教室に向かって、「はい、はい。みなさんは口腔診査とスケーリングの実習を続けてくださーい」といった。

光岡はもう一度沙紀に振り向くと、「村川さん、先生に何で泣いているのか教えて。泣いても恥ずかしいことなんてないのよ」とやさしい表情と声で聞いた。沙紀は涙に濡れた目で光岡を見ると、光岡のやさしいまなざしに安心したのか、小さな声で「私……、歯が……、歯が痛いんです。……タペ詰め物がとれちゃって……」と恥ずかしそうにいった。

「あらあら、それは大変ね。幸いここは実習室でユニットもあるし、応急処置をしましょう。ちょっと、診せてくれる？ はいアーン」と光岡が沙紀に口を開けるように指示する。沙紀は愛子や学生の森田、西原、悠城の前で口を開けるのが恥ずかしかったが、この痛みを何とかしてもらえるならと、小さく口を開けた。

光岡が沙紀の口の中をのぞきこむ。すかさず森田が沙紀の口にライトの焦点をあわせ、沙紀の口腔内を照らし出す。

「あー。これは痛いわね。詰め物の下から二次虫歯になっちゃってたのね。すぐに先生を呼んでくるから、待っててね」と光岡が歯科医師を呼びに行く。

沙紀は“どうしよう。痛いことされるのかな……”と不安が胸にわきあがってくる。

「村川さん、すぐ先生が診てくれるから心配しないで。私たちも光岡先生といっしょに処置のサポートをするから、ねっ」と森田、西原、悠城が口々にいう。

「沙紀、しっかり」愛子も励ましてくれる。

“ありがと、愛子。ありがとうございます、みなさん” 沙紀はこころの中で感謝し、涙目のまま誰ともなく小さく頭を下げた。

しばらくすると、光岡が皓大歯学部附属病院小児歯科外来の担当歯科

医で、歯科衛生士専門学校講師を兼ねる村上未希先生を連れてきた。未希先生は、今日のオープンキャンパスの責任者の一人だった。沙紀も今日の最初にあったオリエンテーリングで、未希先生の紹介があったのを思い出した。

「どうしたの？ 歯が痛いんだって？ ちょっと診せてくれるかな」未希先生はユニットのそばにくるなり、沙紀に口を開けるようにいった。沙紀はそーと口を開ける。未希先生は沙紀の左下6番を診ると、

「うーん。ちょっと炎症を起こしてるかなー。とりあえず、そうーねえ、麻酔をして削って、痛みを止めましょう」と沙紀にいい、「光岡さん、準備と診療補助、お願いできる？」と光岡に指示を出す。

「はい」と光岡はその場を離れて、実習室を出ていく。

未希先生は沙紀に向き直ると、「今日はとりあえず応急処置をするので、このあと必ずかかりつけの歯医者さんに行ってね。いい？」と念を押した。

沙紀はこくりと頷く。

光岡が戻ってきて、未希先生に準備ができたことを話すと、未希先生は、

「じゃあ、向こうに診察室があるから、そっちへ行きましょう。そこで治療するわね」といって、沙紀をユニットから立たせ、診察室の方に連れて行く。

「はあーい、みんなは実習続けてー。せんせいは今から村上先生の治療のサポートに行きますから、みんなは自主的に実習を続けること。いいわね？」

「はあーい」

沙紀が口腔診査とスケーリングの実習を受ける予定だったユニットの学生である森田、西原、悠城は、少し残念そうだ。実際の治療を見るのは大変勉強になるからだ。愛子は心配そうな顔をしている。

「村川さん、心配しなくていいよ。未希先生はとってもやさしいから」

「沙紀、がんばって」とみんなで沙紀を見送った。森田たちは気を取り

直して、続くスケーリングの実習に集中しだったので、愛子も実習を真剣にながめだした。

沙紀は、実習室の隣にある診察室に連れてこられた。時計は午後1時30分過ぎを示していた。

光岡奈緒が準備を完了して、パステルピンクの歯科ユニットのそばにいる。歯科ユニットは動線が開かれ、沙紀を待ちかまえていた。何度も歯科治療を受けてきた沙紀だが、いつ見ても歯科ユニットは好きにならない。

「さあ、ここの治療台へ座ってね」と村上未希先生と奈緒がユニットを指差す。

「はい……」

沙紀は不安な気持ちでいっぱいだったが、歯の痛みにも耐え切れそうになかったので、恐る恐る腰掛けた。すかさず奈緒が水色の歯科エプロンを沙紀の胸元につけた。

“ああ、これされるともう逃げられないって感じる……”

「はい、すぐ済むからねー」奈緒が笑顔で励ます。

「いす倒すよー」

歯科医用のいすに座った未希先生がペダルを操作し、治療ユニットがゆっくりと倒れていく。沙紀の顔がみるみる未希先生の手元に近づいていく。

“ああ～治療台倒れる時って嫌だなあ～。なんかもう覚悟しなさいって感じるう～……”

未希先生は、ユニットからのびたアームについているテーブルを引き寄せた。テーブルの上の銀色に光る数々の治療器具や沙紀がもっとも嫌いな歯を削るドリルが、目に飛び込んできた。“コワイ……、ヤダなあ～。ドリル、3本もついてる……”沙紀は怖くなり、持っていたハンドタオルをギュッと握りしめる。

无影灯が奈緒によって点灯され、沙紀の口に焦点があわせられた。

未希先生は、テーブルの上のトレイからデンタルミラーと探針を取り上げ、沙紀の口に迫りながらいった。

「沙紀ちゃん。あっ、村川さん、あなたのこと沙紀ちゃんって呼んでいいかな？」

「はい」

「ありがと。じゃあ、沙紀ちゃん、最初に歯全体を診たいので、お口開けてくれるかな？」

「村川さん、私もあなたのこと、沙紀ちゃんと呼ぶわね。はい、大きくお口開けよア〜ン」奈緒が沙紀に口を開けるように促す。

沙紀は虫歯だらけの口の中を見せるのが恥ずかしかったが、“はやくこの歯の痛みから解放されたい”と、目を閉じて口を開けた。ライトが沙紀の口の中を照らす。未希先生と奈緒の目に沙紀の歯の状態がさらし出された。沙紀の口の中はインレーやクラウンなどの詰め物が多くギラギラ光っている。奥歯はほとんどの歯が治療されている。未希先生のデンタルミラーと探針が吸い込まれるように沙紀の口の中に入った。

「光岡さん、カルテお願いね」

「はい、先生」ワゴンから沙紀のカルテを取り上げ、記入の用意をして奈緒は未希先生に返事をした。

「左上からいきます。7番○、6番○、5番斜線、4番○、3番斜線、2番まゝ……」未希先生は、左上2番と1番の間を探針でカリカリと探る。

「ううっ」沙紀は不快感を感じ、思わず声を上げる。「うーん、1番との境目にレジンが詰めてあるけど、レジンの縁が変色してるわね。また虫歯になっちゃってるわ。2番C2、1番もC2、右にいて1番○、2番3番斜線、4番○、5番……、うーん、二次虫歯みたいね……、沙紀ちゃん、この歯染みたりしてなかった？」デンタルミラーで診ると、この歯はインレーと歯質の縁のあたりが薄茶色に変色している。未希先生がデンタルミラーと探針を沙紀の口に入れたまま聞く。

「ひひへ」本当は最近甘い物や冷たい物が染みているのだが、沙紀は

いいえ”と小さな嘘をついた。口に治療器具がはいったままなので、返事が変になる。

「そう？」と未希先生は疑わしそうな目をして、探針をシリンジに持ち替え、右上5番にエアーをシュッとかける。

「つつう」エアーが染み、沙紀は声を上げる。

「ダメよー、うそついちゃ。染みてるじゃない。この歯もすぐ治療しないダメよお。まあ、いいわ……。ではあらためて、5番C2、6番○、7番斜線。次、左下にいて……。7番○、6番……」未希先生はデンタルミラーで丹念に左下の6番を診る。この痛み出している詰め物のとれた歯は、とれた詰め物の下で軟化象牙質が大きく深く広がっていた。「さっきもいったけど、だいぶ深く進行してそうね……。うーん、C3ね。5番○、4番から右の4番まで斜線、5番○、6番○、7番○。以上です。光岡さん、未処置歯何本？」

未希先生が沙紀の歯式を呼び上げる声と奈緒がペンを走らせる音が止まった。

奈緒が「……いち、に、さん……。先生、全部で4本です」

未希先生はデンタルミラーと探針をテーブルの上のトレイに置きながら、

「沙紀ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？ 虫歯や治療してる歯も多いし、それに……」とふたたび探針を手にとると、沙紀の前歯の間をひっかけ、沙紀の目の前に示した。「ほら、歯垢がついてるわ。磨き残し多いわねー」

未希先生のもつ探針には白いモヤモヤとした歯垢がついていた。

”恥ずかしい……”沙紀は思った。

「これからはちゃんと歯磨きすること。今日の応急措置が終わったら歯医者さん通ってくれると思うけど、そこでブラッシング指導も受けてね。いい？」

沙紀は頷く。

「まあ、虫歯になっちゃったものは仕方ないから、ちゃんと治療してね。」

とりあえず今日は左下の6番の痛みを取らないとね」と未希先生はいいながら、歯科ユニットを起こす。「痛み出してる歯のレントゲンを撮るわね」

「はい、こっちへきてね」奈緒に案内され、レントゲン室に入る。

「ここに座ってくれる？」すすめられるまま、いすに腰掛ける。目の前には歯科用X線装置があった。アームのついたちょっとしたビデオカメラのようなX線装置が沙紀の左頬に向けてセットされる。

「お口開けてアーン」奈緒が沙紀に指示する。沙紀が口を開けると、奈緒が口腔内にフィルムを挿入して左頬側に固定する。それからX線のヘッドを動かし、フィルムの中心にX線を照射できるように調整した。

「じっとしててねー。動いちゃダメよー」といって、奈緒がレントゲン室から出る。

スピーカーを通じて未希先生の声がしてきた。

「すぐ済むからねー。じっとしててね」

沙紀の左下の歯が撮影された。レントゲン室のドアがふたたび開けられ、奈緒が入ってきて、

「治療台に戻ってくれる？」と沙紀に歯科ユニットに戻るように指示する。沙紀はいわれたとおり、ユニットに戻ると、ゆっくりとこしかけた。

奈緒がレントゲン写真を持ってやって来る。

未希先生は、できあがったレントゲン写真をユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光に沙紀の左下の歯が3本映っている。7番と5番は歯冠部が大きく白く映っている。そう詰め物のあとだ。さらに7番は歯冠部のみならず根も白く映っている。沙紀のこの左下7番の歯は抜髄され、根管治療をされて根管充填を受けている。さて肝心の左下6番だが、根からのびる歯髄と虫歯の穴がつながっているように見える。

「うーん、そうねー……、たぶん神経全部が炎症を起こしてはいないと思うけど……」と未希先生はレントゲン写真から沙紀の方に向き

直ると、「沙紀ちゃん、削ってみて神経が保存できないようだ」と神経取っちゃうことになるけど……、たぶんこの歯はそこまではいいないと思うわ。虫歯で神経が刺激されて充血しているか、炎症を起こしてるにしてもごく一部の炎症だと思うの。だから今日は削ってお薬を詰めて、充血と炎症を抑えることにするわね」

未希先生は、視診と触診、それにレントゲン写真を見て、沙紀の左下6番の軟化象牙質を全部除去すると露髄するおそれがあると判断した。それで、軟化象牙質の一部を残して手早く消毒し、歯髄の鎮痛と消炎をはかることを今日の治療の方針としたのだ。

「じゃあ、治療していくわねー」未希先生の声とともにユニットが倒れていく。奈緒が無影灯のライトを点け、沙紀の口に焦点をあわせる。

「光岡さん、シンマ」

「はい」奈緒は未希先生に麻酔カートリッジを装着した注射器を手渡した。未希先生は、

「お口開けて、アーン」と沙紀に開口を促す。

“お願い！　すぐ終わりますように”沙紀は今まで受けた虫歯治療の痛さを思い出して治療を受けることがいやだった。が、この状況から逃げ出すことはできない。ハンドタオルを握りしめ、覚悟を決めてあきらめにも似た気持ちで口を開けた。

「最初、チクッとするよー」

すぐに麻酔注射器が沙紀の口に挿入され、注射針が沙紀の左下の歯茎に刺さる。

未希先生はぐっと注射器を押す。麻酔カートリッジの中から注射器を通じ、麻酔の薬液が沙紀の歯茎の中にゆっくりと注入される。

沙紀は最初にチクッとした針の痛みを感じ、続いて麻酔液が入ってくるにつれ、ズーンとした重い圧迫する痛みを感じていた。

「ふうん」

「もう少しよー。もう少しで全部はいるからねー、がまんしてねー」

“んんっ、がまん、がまん！”沙紀は自分に言い聞かせ、涙目でがまん

する。ようやく麻酔液が歯茎にはいった。“ふう～、がんばれた……”

閉じていた目を少し開け、チラッと未希先生を見ると、また奈緒から麻酔注射を受け取っている。“えっ、まだ麻酔注射するのぉ！！ はぁ、やだなぁ” 目が点になる。

「もう1本打つところね」と未希先生がふたたび沙紀の左下の歯茎に注射針を突き刺す。“ふんふん、せんせい、痛いよ～” 涙目で未希先生にうったえる。が、未希先生も奈緒も「はぁーい、大丈夫よー、だいじょうぶ。がまんしようね」と止めてくれない。

なんとか2本目の麻酔液も沙紀の歯茎に注入された。

「麻酔が効くまで、ちょっと待つわね」ライトが消され、ユニットが起き上がる。「お口ゆすいでいいわよ」

沙紀はクチュクチュと口をゆすぐが、麻酔が効いてきたためか、左の唇と頬が痺れてきてうまくゆすげない。ようようゆすぎ終わると、ユニットが倒され、水平診療の体勢になる。

「効いたかなー」

5分ほどが過ぎ、未希先生が沙紀に口を開けるように指示し、ライトが点けられる。未希先生はデンタルミラーをさかさまに持ち、沙紀の口腔内に入れた。デンタルミラーの柄で左下の6番をコンコンと叩く。「響く？」

沙紀はプルプルと首を横に振った。

「効いたようね。じゃあ、虫歯を削っていくわね。もし痛かったら、左手あげて教えて」

『虫歯を削る』という未希先生のことばに、沙紀は今まで受けてきた数々の虫歯治療の痛みをまた思い出す。“きっと痛いんだろうなぁ……、はぁ～” とため息をつく。そのあいだにも未希先生は、テーブルの上のバーチャージャーからハンドピースに装着するためのバー選びに余念がない。

「沙紀ちゃん、治療のスペースつくるから、お口開けて」

未希先生がデンタルミラーとふくみ綿をつまんだピンセットを持ち、

沙紀に口を開けるように促す。いやだと思いながらも沙紀が小さく口を開けると、未希先生は「もう少し大きく開けて」とデンタルミラーで左唇をひっぱる。

“ヤダ、恥ずかしい～……。私、きっと変な顔になってる”

未希先生は沙紀の左の歯茎の頬側と舌側にふくみ綿を挟ませ、治療のスペースを確保した。続いて未希先生は、エアータービンや電気エンジンタービンがついているテーブルを沙紀の近くに引き寄せる。治療台に寝かせられた沙紀の顔のすぐ近くにドリルをのせた台がセットされる。“どうしよ、コワイよお～。泣きたくなっちゃう……”

「沙紀ちゃん、お口開けてアーン」

未希先生はエアータービンとデンタルミラーを構えている。沙紀は、“はぁ～、始まっちゃう。痛いのかな、コワイよ～” と思ったが、タービンを構える未希先生とバキュームとスリーウェイシリンジを構える奈緒に挟まれていては、逃れることもできない。

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」

奈緒が沙紀に不安を与えまいとにこやかにいう。

“お願い、痛くありませんように！！　すぐ済みますように！！” 沙紀はすでに怖さで硬直して半泣きになっている。

「だいじょうぶよー、もっとリラックスして、力抜いてね～」

沙紀は仕方なく目を閉じ、こわごとと口を開ける。すかさず、奈緒のバキュームとスリーウェイシリンジが沙紀の口の中に入る。

コォー、コォォォー。

「大丈夫だからねー。すぐ済むよー」

未希先生の持つエアータービンが沙紀の口腔に入り、う蝕した左下6番に当てられる。未希先生がユニットのペダルを踏むと、エアータービンが高速回転し、コントラアングル型のハンドピースに装着されたダイヤモンドポイントが回転する。ドリルが沙紀の虫歯を削りだした。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイーーン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュ、ジュポポポオー。

ダイヤモンドポイントを付したエアータービンが、奈緒のスリーウェイシリンジの注水の下で切削を続ける。未希先生が沙紀の虫歯の遊離エナメル質を削っていく。虫歯の切削片、水、沙紀の唾液を奈緒のバキュームが吸引していく。

キューーン、キーン、キュ、キューイ、キューイーン。

コオー、コオオオー。ジュッ、ジュッ。

削り始めて2分ほどが経過し、徐々にドリルが深さを増してくると、沙紀は染みるような痛さを感じ始めていた。

“はぁぁ～、あのキュー～ンって音と、けずられる痛さ……。んんっ、痛いっ！！ 痛いよ！！” 沙紀は、膝がカクンと曲がってしまう。紺のプリーツスカートが膝からすべり落ちる。沙紀の太股が露わになり、かわいい白パンツがチラリと見える。

「沙紀ちゃん、膝曲げないでくれる。パンツ見えちゃってるよ」奈緒が注意する。

“やだぁ～。歯医者さんの治療台って下半身が無防備になっちゃうから、やなんだ～！！” 沙紀は足を元のように延ばした。しかし、次々襲ってくる切削治療の痛みは、沙紀の顔をしかめさせ、眉間にしわを作らせる。キュー～ンって削られてる間中、膝がピクン！ピクン！と動く。沙紀の足の指は曲がり、ユニットに強く押しつけられている。ふたたび沙紀の膝が曲がり始める。沙紀は痛みをがまんするため、ついには足をパタパタしだした。

キューーン、キューイーン、キィィューイーン。

「がんばって～もう少しだからね～」

“なんで、わたしだけ……。痛っ！！ なんで、虫歯になっちゃうんだろ。痛っ！！ ちゃんと歯磨きしてるのに……。痛っ！！ 愛子なんか私より甘い物好きだし、いっぱいお菓子食べてるし、歯磨きしないのに……。なんで、なんで私だけ……。痛っ！！” 愛子はさっきの口腔診査の実習で虫歯が見つかったが、沙紀は歯が痛くて実習に集

中できなかったため、愛子の虫歯に気づいていない。

「ふえんふえひ、ひはいへふっ！！ ひはいっ！！ ひはいっ！！ ひゅひゅひへー！！ ひゃへへー！！ ほへはい！！」

「うん、ちょっと痛いわねー。でももう少しがまんしようねー」

キィィユィーン、キィィユィーン。

“はあん、はん、ホント歯医者さんの治療って怖くて痛くて、イヤだあ～、なんで麻酔したのにドリルでキィィユィーンってのが、凄い痛いのか？ あん、あん、ぐすん” 沙紀は半べそをかきだす。

「痛いー！」

キュウウウーーン。

タービンが止まった。

「沙紀ちゃん、だいぶ痛い？ がまんできない？」 末希先生がタービンを手にしたまま聞いた。奈緒のバキュームとスリーウェイシリンジはまだ沙紀の口に入ったまま。

「……痛い……です」 沙紀は目に涙をため小さな声でいった。

「光岡さん、もう1本麻酔するわ」と末希先生がいうと、沙紀はさっきの麻酔注射の痛みがよみがえり、凄く動揺して「大丈夫……いいです……」といったが、「なにいつてんの。削るの痛くてがまんできないんでしょ」と末希先生は、奈緒に麻酔注射の準備を進めるように指示する。

「はい、先生」

奈緒はバキュームとスリーウェイシリンジを沙紀の口から出し、元の位置に戻した。そしてワゴンの上で注射器に麻酔カートリッジを装着して、末希先生に渡す。

「もう一度麻酔するよー。アーン」

末希先生は沙紀の気持ちと裏腹に強引に麻酔をする。デンタルミラーで沙紀の左唇を広げ、麻酔注射を沙紀の口腔内に入れる。注射針が左の歯茎に刺さる。ゆっくりと麻酔液が注入されていく。薬液が歯茎を圧迫するように注入されていく。

「ううっ。ふん、ふん、くすん」沙紀はうめきながら泣いてた。

「もう少しだよー、がんばってー」

やがて麻酔の薬液はすべて沙紀の歯茎に注入された。麻酔が効くまでしばらく待つ……。

未希先生は麻酔が効いたのを確かめると、「はい、もう一度アーンしよ
うねー」と沙紀に開口を促し、切削治療が再開される。

キュ、キュ、キュイイイーーン。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイ
イーン。

コオー、コオオオー。ジュ、ジュ、ジュポポポー。

キュイイーン、キュイイーン。

もう1本麻酔をしたにもかかわらず、また虫歯を削る痛みが沙紀を襲
う。

“痛いっ、凄い痛いっ！！” 沙紀は涙がぼろぼろ～とこぼれた。もう半
泣き状態で治療されている。

奈緒が沙紀の表情を見て、「がんばって～もう少しだからね～」と励ま
した。が、沙紀は“そんなこといったって……、痛いものは痛い！！”
と必死に耐えている。

キュウウウーーン。

ひときわ高い音を立ててタービンが止まる。

「お口ゆすいでいいわよー」

沙紀はユニットが起こされてもすぐに口をゆすがない。削る痛みでジ
ンジンとしびれる左頬をハンドタオルでしばらく押さえている。ひと呼
吸おいてから、おもむろに口をゆすぐ。

コップを口に持っていくとき、“終わりかなあ？”と未希先生を見る
とドリルを交換している。“はあ～、まだ終わりじゃないんだ～……”
ため息が出る。このとき未希先生はハンドピースのバーをダイヤモンド
ポイントからタングステンカーバイドバーに交換していたのだ。

そのころスケーリングの実習が一段落し、実習の見学に没頭していた多部愛子は村川沙紀のことが気になりはじめた。

“沙紀、どうなんだろうなあー、治療痛いのかなあ〜、大丈夫かなあ〜” ノートにメモをとる手がとまる。その愛子のしぐさに気づいた森田さおりは、西原亜依と悠城紗世の3人で頷いた上で、愛子にいった。

「多部さん、気になるんでしょ？ まだ授業中だけど実習も一段落したことだし、多部さんはオープンキャンパスの見学生なんだし、村川さんのところへ行ってあげて。心配でしょ」森田が愛子にやさしくいった。

「ありがとうございます！ 少しだけ沙紀の様子を見てすぐ戻ってきます！」と愛子は早歩きで診察室の方に向かう。

「そんなに早く戻ってこなくて大丈夫よ。村川さんを励ましてあげて！」森田が過ぎ去る愛子に声をかける。

「ありがとうございます！」振り向きながら、愛子がいった。

愛子が診察室のドアの前につくと、沙紀は虫歯を削られている最中だった。キューーン、キューーンと愛子にもおなじみのエアタービンの音が診察室から漏れてくる。

“やだ、痛そう……”音を聞くだけで、愛子も歯が痛くなってきたそうだった。

大きなガラス窓のブラインドは上がっていて、村上未希先生と歯科衛生士の光岡奈緒に治療されている沙紀の様子がよく見える。沙紀の足はくの字に曲がり、たえずパタパタと動かしている。紺のプリーツスカートは捲れ、白いパンツがチラリチラリと見える。沙紀は涙目で凄い痛そうな顔をして切削治療に耐えていた。

“あんなにパンツ見えちゃって……。沙紀、凄い痛そうな顔している……。とっても痛いんだろうなあ〜……。私もさっき虫歯見つかったし、治療しなきゃなあ〜、はあ〜やだなあ〜”

その様子を見て、診察室に入ることをためらった愛子は“……沙紀、がんばって！”と心で祈るしかなかった。

キュー〜ンと治療が進むにつれ、沙紀は足がピクン！ピクン！とたえず動いている。また沙紀の制服のスカートが捲れている。その後、あと一度今度はスチールバーにドリルを交換して切削治療を続け、ようやく虫歯の開拓が終わった。ユニットが起こされ、未希先生に指示された沙紀は口をゆすぐ。口をゆすぎ終わりふたたび水平位になる。開拓された沙紀の患歯を診た未希先生は、

「うーん、ちょっと虫歯が深いかも……」といった。

「光岡さん、念のためラバーダム防湿するわね」

「はい、先生」

未希先生は奈緒にラバーダム防湿の指示をする。削って形成した虫歯の穴を無菌状態にして処置をするためだ。緑色のゴムのようなものを奈緒から受け取る。

“あっ、これ、前にもしたことある！”

沙紀は、中学3年の時に左下7番の虫歯を放置していてひどく痛み出し、あわててかかりつけの歯医者に行くと、『うーん、これは神経を抜く治療をしなければならぬわね』と歯医者にいわれ、そのときにラバーダムをつけられて治療を受けたことを思い出した。

「沙紀ちゃん、これしたことある？」未希先生が口を開けた沙紀にラバーダムを装着しながら聞く。

“はい”と沙紀は心の中で返事をして、コクンと頷く。

「そう、だったら知ってると思うけど、これは治療する歯を覆って、バイキンから守るものなのよ。だから、ちょっとの間がまんしてね」と未希先生は奈緒とともに小さな孔を開けたラバーダムを沙紀の左下6番に被せ、クランプで固定する。沙紀の口腔にシートを広げ、フレームで押さえる。沙紀の口腔が緑色のラバーダムで覆われる。

未希先生は、今度は電気エンジンタービンを手にして、ラウンドバーを装着している。

“えっ、まだ削るの！？”

ラバーダムを装着され口を開けたまま、横目で未希先生を見た沙紀は思ったが、この状態では声を出して聞くこともできない。やがてラウンドバーをつけた電気エンジンタービンが口の中に挿入され、左下6番の虫歯に侵された象牙質を削り出す。

キーン、キーンーン。

ウィーン、ウィーン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュッ。

ウィィィーン。

電気エンジンタービンが止まり、沙紀の口から出された。沙紀は“やっと、終わり？ いす起こして、お口ゆすがしてくれるのかな……”と思ったが、奈緒のバキュームが口から出される気配はない。口の中で相変わらずバキュームがコオーと音を立てている。薄目を開けて未希先生を見ると、ラウンドバーを交換している。

“はあ～、まだ終わりじゃないんだ……。くすん” 目尻に大粒の涙が溜まるが、ラバーダムを口腔に広げられたままの沙紀は口を閉じることもしない。

「はい、もうすぐ終わるからねー。そのままじっとしててねー」と未希先生は交換し終えた電気エンジンタービンを沙紀の口の中に入れ、ふたたび左下の6番の歯に挿入した。

キーン、キーンーン。

ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン、キーン。

コオー、コオオオー。ジュポポポー。

次に未希先生は電気エンジンタービンを元の位置に戻すと、トレイからスプーンエキスカバーダーを手にとった。沙紀の左下6番の虫歯に侵されて軟化した象牙質を露髄しないように慎重に除去する。歯質を掻

き取られる不快感を感じ、沙紀は顔をしかめる。

「ふうん、ふん、ふん」

「もう少しで済むからねー。がんばろうねー」沙紀の虫歯に集中して軟化象牙質を除去している未希先生に代わって、奈緒が声をかける。

“最初に診断したとおりだわ。やっぱり、このまま軟化象牙質を徹底的に取っちゃうと、露髄しちゃうわ……。よしっ”未希先生は当初の方針通り一部の軟化象牙質を残し、すばやく消毒することにした。それで、

「光岡さん、キャナルシリンジにネオクリーナーとオキシドールを、それぞれお願い」

と奈緒に指示した。未希先生は3～10%次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと3%過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用いて交互洗浄を行って、虫歯の穴に生じた切削片を洗い流すことにしたのだ。

「はい、先生」

奈緒はルートキャナルシリンジを用意し、未希先生に渡した。それを受け取った未希先生は、沙紀の左下6番の虫歯の穴にネオクリーナーの入ったルートキャナルシリンジを入れ、ゆっくりと注入する。洗浄したあとは脱脂綿でネオクリーナーを拭き取る。次に中和剤としてオキシドールの入ったルートキャナルシリンジを虫歯の穴に挿入し、ゆっくりと慎重に注入して洗浄する。綿で拭き取る。これを何度か繰り返す。

「ううっ、ふうん」

「がんばってねー、もう少しで終わるよー」

沙紀の左下6番はこうして清掃された。

未希先生は、続いて虫歯の穴の消毒と歯髄の鎮痛、消炎に取りかかる。

「じっとしていてねー」

虫歯の穴の中の清掃液を小綿球で軽く拭き取り、スリーウェイシリンジで軽くエアーをふきかけ、虫歯の穴の中を乾燥させる。

シューッ、シューッ。

「はあん、はん」

「はい、はい、大丈夫よー。がまんしてねー」

「光岡さん、う蝕検知液」

未希先生はう蝕検知液と希ヨードチンキで軟化象牙質の確認を行ったあと、虫歯の消毒作用と鎮痛消炎作用を合わせ持つ歯髄鎮痛薬フェノールカンフルを小綿球に少量付して、ピンセットで虫歯の穴の底に置いた。

“ううっ、染みるーっ！！”

薬剤が削った虫歯に染み、沙紀は声をあげる。

「ううっ、ふうん、ふん」

「もう少しよー、がんばってー。がまんしょうねー」奈緒が沙紀を励ます。

「光岡さん、カルビタール」

「はい」

奈緒はワゴンのトレイに用意してあるカルビタールを未希先生に渡す。未希先生はピンセットで小綿球をカルビタールに浸し、沙紀の左下6番の虫歯の穴へ塗薬する。鎮静作用を持つヨードホルムを配合した水酸化カルシウム製剤であるカルビタールにより、薄くなり歯髄がすぐ近接してしまっている象牙質に、第二象牙質を形成させて歯髄を保護するためだ。

「光岡さん、ネオダインお願い」

「はい、先生」

「ううーん、ふんふん」

“くるしい……” 長い時間ラバーダムで口を閉じられない沙紀は、鼻呼吸をしているとはいえ、息苦しさを感じていた。

「沙紀ちゃん、がんばってー。もうすぐ終わるよー」

今度は、奈緒はネオダインを持ち、未希先生に渡した。未希先生は奈緒からネオダインを受け取ると、ストッパーで沙紀の虫歯の削った穴に塗薬する。酸化亜鉛ユージノールセメントであるネオダインもまた歯髄を保護してくれる。

“これで、炎症が収まるといいんだけど……。保護できるものなら、

できるだけ歯髄は保護してあげないと。沙紀ちゃんはまだ高校2年生なんだし……” 未希先生は沙紀の虫歯治療を続けながら思っていた。

最後に、グラスアイオノマーセメントで仮封をして、ようやく沙紀の治療が終わった。

「はい、これで今日は終わりよ。お口ゆすいで」

ユニットが起こされる。沙紀は治療の痛みで涙ぼろぼろ～だった。“はあ～、ホント痛かった……。逃げ出したかったよお～。泣いちゃって恥……” ハンドタオルで目尻の涙を拭き、ふと足元を見ると、スカートはぐちゃぐちゃだった。“こんなに暴れてたんだ……。恥ずかしい” 思わず、頬が赤く染まる。沙紀がふと時計に目をやると、時刻は午後2時30分をさしている。結局、治療には1時間くらいかかった。

沙紀の左頬は麻酔で痺れたまま感覚がない。口をゆすが、ゆすいだ水を吐き出そうとすると、洗口台ではなくとんでもないところへいきそうになる。ようようゆすぎ終わると、未希先生が、

「今日の治療内容は、カルテからメモした内容で診断書を書くから、かかりつけの歯医者さんに渡してね。いい」といった。

「沙紀ちゃん、かかりつけの歯医者さん、ある？」

「はい、いつも治療していただいているのは、みどりヶ丘デンタルクリニックの真山裕子先生です」

「そう。真山先生なら何度か〇〇地区歯科医師会の会合でお会いしたことがあるわ。真山先生なら治療も上手と聞いているし、安心ね」

「未希せんせい……、光岡せんせい……、ご迷惑をかけました。ありがとうございました」

沙紀は水色の歯科エプロンをつけたまま、ユニットからお礼をいい、頭を下げた。

「あら、いいのよ、そんな……。それより、今日のオープンキャンパス、どうだった？ 楽しかった？ あっ、沙紀ちゃんには散々だったか……」

「いいえ、とっても参考になりました。それに……」

「それに、なあに？」

「……それに先生たちに治療してもらって、ますます歯科衛生士になりたいくなりました。だって、私が虫歯が痛くて苦しんでいたら、みなさんホントに心配してくれて暖かく励ましてくれるし、先生はすぐに診てくれるし……」

「そう、それはよかった。……でも、沙紀ちゃん、歯科衛生士になるうとするなら、自分の歯ももっと大切にしなくちゃダメよ。虫歯になってもきちんと治療すること、それから次からは虫歯にならないようにきちんと歯磨きして予防すること、いい？」

「はい、せんせい……。私、これからは歯科衛生士を目指して、自分の歯にも気をつけます。でないと未来の私が担当する患者さんに対して、私の歯が虫歯だらけだと恥ずかしいから……」

「そう、その意気よ、沙紀ちゃん」 未希先生が笑顔で励ましてくれる。

「受験で相談したいことがあったら、いつでも来てね」 奈緒が歯科エプロンをはずしながら、にっこりと微笑む。

「はい、ありがとうございます」

沙紀は歯科ユニットから降り、奈緒が整えてくれた上履きを履いた。未希先生が診断書を渡してくれる。診察室のドアの向こうでは、実習を終えた多部愛子が立って、心配そうにながめている。

沙紀は、もう一度村上未希先生と衛生士の光岡奈緒にペコリとお辞儀をすると、「あいこ～」と小さく手を振る。愛子も小さく手を振り返している。沙紀は待っていてくれた愛子の方へ少し早足で歩いていった……。

泣くのは嫌、でも治療はもっと嫌

「うう～ん」

「はっ」

早智は、目が覚めた。うなされていたようで、パジャマの中は寝汗でビッシヨリだ。まだ違和感があったが、どうやら奥歯の痛みは治まったようだ。勉強机には、開いたままの英語の教科書とノート、早智の常用薬のバッファリンの箱と水の入ったコップが置いたまま……。枕元の時計は午前9時を指している。

“それにしても、痛かったあ～……。大丈夫みたい。収まってくれてよかった～……。”と早智は思っていた。“お姉ちゃんたち、なんでよりもよって歯医者さんや歯科衛生士さんになっちゃったんだろう……。はあ～、いやだなあ～。私の歯がボロボロなの、バレちゃわないかなあ～。……バレたらきっと歯医者に行かされる……。そんなのやだっ！　どうしょう……。歯医者さん、怖いよお……。はあ”

麻生早智は17歳。桜葉高校の2年生である。長女の早咲と二女の早耶、2人の姉がいる。早智は三女で三姉妹だ。三人とも卵形の顔を持ち、目がぱっちりとしてかわいい、近所で評判の美人姉妹だ。

6歳上の早耶は歯科衛生士の、10歳上の早咲は歯科医師の、それぞれ国家試験に合格して、早咲は一昨年の春から、早耶は昨年の春からみどりヶ丘デンタルクリニックに勤めている。姉2人は家を出て、マンションで共同生活を送っている。

昨日、2人の姉は久しぶりに早智の家、すなわち実家に泊まった。早智、パパ、ママと2人の姉の5人で楽しく食事を囲んだのだが、その食事の途中、早智は左の奥歯に痛みが走った。たいして堅いものを噛んだわけでもないのに、その歯は少し欠けてしまい、そのときの衝撃で痛くなったのだ。舌に歯のかけらがさわる違和感がある。だが、姉たちの手前そういったそぶりも見せず隠し通し、勉強があるとの口実を出して、そそくさと2階の自分の部屋に入ってしまった。

部屋に入り、机の前のいすに座ると、口の中からそっと歯のかけらを出す。縁が茶色く変色している。“なんで……、いままで左の方は大丈夫だったのに……。左側も虫歯が進行しちゃったのかなあ……”

食事の席では、2人の姉が『昔に比べて虫歯の多い子は減ったといわれるけど、いまは夏休みなのでやっぱり歯医者さんは混んでいる』とか、『それでも中にはたくさんの歯に虫歯のある子がいる』とか、『早智は治療勧告書もらってないよね』とか、姉たちの現在の職業にまつわる話題がひんぱんに出てきて、そのたび長い間歯医者に行っていない早智は胸がキュンとうずいた。“……そのためかもしれない、こんな夢を見たのは……”

最近の早智は、歯が痛くてよく眠れない。痛み止めを飲んで寝るのが日課みたいになっている。

早智が見ていたのはこんな夢だった……。

早智は幼稚園の年少さんの頃、乳歯が全部虫歯になり、はじめて歯科治療を受けた。そのとき、母に連れて行かれた歯医者ですごく痛い治療を受けた思い出があった。

「早智ちゃん、痛くないからねー。おっきい虫歯さんだからねえ、ジェット機さんでキレイにしようねー。はい、大きくお口開けよう。アーン」と歯科医がドリルを構えている。

きゅいいいん。

その間、早智は「痛いよおお。」とか「やだやだ」とか、足をパタパタして虫歯を削る痛みから逃れようとしたが、歯科衛生士に抑えられているため、逃れようがない。

キュイイインが止んで、舌で歯を触っていた早智が、
「先生……。奥歯がなくなっちゃったよ」と歯科医に聞くと、
「虫歯さんが大きかったからたくさん削らなきゃいけないんだよ」と歯科医はいい、「さあ、もうちょっとがまんしようねー」とバーを交換して、またドリルを構える。

早智はシクシクと泣き出した。すると、診療の補助についている歯科衛生士が、

「泣いてもだめよー。反対側の奥歯も虫歯さんだったでしょ？　きれいにしようね」とにこにこしながら、早智を諭した。

早智にとって初めての虫歯治療はとても痛く、泣きながら長い時間治療をされた。

小学校に上がってからも早智は歯科検診でたびたび虫歯が見つかった。そのため母が歯医者に連れて行こうとすると、「やだっ！！　歯医者さんやだっ！！　ジェット機さん、痛いからヤダっ！！」とだだをこねて歯医者に行くのを抵抗した。だがいくら抵抗しても小学生の力では抵抗しきれない。母に無理矢理歯医者に連れて行かれた。連れて行かれるたびに痛い治療を受け、ますます歯医者嫌いになっていった。それでも、泣きながらなんとかがまんして歯科治療を受けていたのだが、次の出来事が、早智を決定的な歯医者嫌いにしてしまった。

それは小学校6年生の時に歯科検診で虫歯を指摘されたときからはじまる。もう小学校も高学年だったのでひとりで歯医者に行ってきたいと母にいわれ、それでしかたなく母親のつき添いなしに歯医者に行った。早智の虫歯は神経まで進行しており、歯医者は神経の治療のためネットで早智を治療台に縛りつけた。そのときネットの被せ方が雑で、制服のスカートが捲れて全開となってしまった。

縛られて「パンツ見えてる。恥ずかしいからスカート戻して」と早智が言っているのに、歯医者は「治療がイヤだからってわがまま言うんじゃない」とスゴく早智を怒鳴った……。

その歯医者は治療の光景が外から丸見えで、早智はスカートが全開でお気に入りの白パンツが丸見えなのをスゴく恥ずかしく思った。その上、神経を削られるのが“超超超痛い！！……”と涙目になり、半べそでがまんしていた。しかもちょっと削ってしばらく休みの繰り返しで、一時間位恥ずかしい格好で治療台に縛られていた。

歯医者は、早智が治療の痛さに耐えかねてちょっとでも泣くと、「誰が悪いかわかるか？　なんで痛い治療されるかわかるか？　全部お前がちゃんと歯磨きしないからだ！　今日は泣いたからって治療止めないからな！」とまた怒鳴り、スゴイ恐怖感を早智に植え付けた。それ以来、早智は歯医者恐怖症となってしまう、虫歯が痛くてもがまんして、決して歯医者に行こうとはしなかった。

思い出したくもない、つらかった治療の夢のあとに続いて、こんな夢を見てしまった。

「早智、お口開けなさい！」ふだんやさしい長女の早咲が怖い顔をしていう。いつのまにか早智は歯科ユニットにいた。見ると、ベルトで治療台に固定されている。

「えっ、やだっ！！」

「ヤダじゃありません。ちゃんと治療しなきゃ、歯がなくなるよ！」いつも笑顔がやさしい二女の早耶も今日はきびしい顔で早智に迫り、「早智がいやっていっても今日は許しません！！」といった。

「えっ～、そんな～。お姉ちゃん、お願い、許してえー。毎日歯磨きするからー」

と懇願する早智の口を、早耶は無理矢理開き、開口器をつける。ライトが点けられる。その横で、早咲はタービンにドリルを装着し、早智の口に挿入した。早智の恐怖感は頂点に達した。いつのまにか早耶もバキュームとシリンジを早智の口の中に入れていた。コォー、コォォォーとバキュームの音をする。

「やら！！　やら！！」

「ダメ！　虫歯つくっちゃった早智が悪いんでしょ！！」早耶が早智を叱る。

「あーっ。これはヒドイねー。早智、削るの痛いだろうけど、がまんしなさい」

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

「あん、あん、ひはいっ！！ ひはいっ！！ うわああーん」

ドリルの音が止まった。

「早智、削るの嫌？」早咲が聞いた。早智は、口の中に早耶のバキュームとシリンジをつっこまれたまま半ベそで頷いた。

早咲と早耶は、「どうする？」「どうしよう？」と顔を見合わせたあと、早咲は「早耶、見たところ、早智の虫歯はヒドイので、削る治療をしても歯がもたないかもしれないわ。いっそのこと抜いてしましましょう。じゃあ、お口を開けて。アーン」と抜歯鉗子をもって早智に迫ってきた。

「やら！！ やら！！ コワイ！！ コワイ！！ ひゃひゅへー！！」

ここで目が覚めたのだ……。

“はぁ～、怖かった……”

早智は、幼い頃と、小学校6年生のときの虫歯治療がトラウマとなり、歯医者恐怖症だった。小学校6年生のときの歯科治療を最後にバップアリンなどの痛み止めを常用し、虫歯が痛くてもがまんして、5年あまり歯医者に行っていない。歯科検診の結果などは親に見せずに隠して、捨ててしまっている。奥歯はほとんど虫歯に侵され、大きな穴が開いている歯もある。前歯も変色しているところがあり、さらに一部が欠けてしまっていた。親をはじめ人前では大きな口を開けられない。笑顔も歯なるべく見せないようにしているため、小さくなってしまっている。

“今日は日曜日か～……。はぁ～、お姉ちゃんたち、今日もうちに居るのかなぁ……。はやく月曜日にならないかなぁ～” 早智は、早智にやさしくしてくれる姉2人が大好きだったが、2人が歯科関係の学校に進学しひとり暮らしをはじめて以来、2人をちょっと避け気味である。姉たちに早智がもう長い間、歯医者に行っていないことがばれてしまわ

ないかとびくびくしているからだ。

のろのろと着替えをする。タンスからタオルを出す。パジャマを脱ぎ、寝汗で濡れたからだをタオルで拭いた。パンツとお揃いのお気に入りのピンクのブラをつけ、Tシャツを着てジーンズ生地スカートをはく。

そっと、机の引き出しを開けてみる。今年の『歯の衛生週間』にあった、歯科検診の結果である治療勧告書が入っている。『虫歯治療のお勧め』と書かれた紙は、早智の歯の状態を示している。虫歯を表すカリエスのCの記号がほとんどの歯についている。治療勧告書の最後には『今すぐ歯科医院で治療を受けてください』と『夏休み明けに治療証明書を提出してください』との文字が踊っていた。“はぁ〜”出るのはため息ばかりである。

……『はぁーい、みなさん、ちょっと静かに！ 虫歯がある人は夏休みが終わるまでに、必ず歯医者さんで虫歯の治療を受けて下さい。いいですね。治療証明書を出さなかった人は、2学期に保健の先生が保健室に呼び出して、親御さんに電話をして治療指導をしますから。わかりましたね』……。

担任の福田早矢先生がホームルームで治療勧告書を配ったあとのことばを思いだし、いっそう憂鬱になる。

“……そういえば、今年から夏休み終わるまでに治療しないと、2学期に保健の先生に呼び出され、親に電話されるって、福田先生いったなぁ〜。どうしよう……”

2階から降りていくと、2人の姉はもう出かけていた。リビングの時計は、午前9時30分を指している。パパは新聞を読んでいた、早智に「おはよう」と声をかけた。

「おはよう、パパ」

キッチンにいるママの方を見て、「おはよう、ママ」とあいさつをする

と、ママが、

「おはようじゃなくて、おそようよ。いつまで寝てるの？ お姉ちゃんたち、もう出かけたわよ」と早智にいった。

「ふーん。どこへいったの？」

“ひょっとして、マンションに帰ったのかな……” 小さな期待を持って、ママのことばを待つ。

「2人で、仕事関係の本を探すっていったわ。夕方までかかるみたいよ。さっ、はやく顔を洗って、朝ごはん食べてしまってください」

「はあーい」

早智は、“なーんだ。まだ帰らないのか” とがっかりしたが、夕方まで顔をあわせなくて済むと聞いて内心ホッとしていた。このまま2人が実家からマンションに戻ってくれないかなあ、とも思っていた。

その夜食事が終わり、早智はまた勉強という口実でそそくさと自分の部屋に戻った。夢中で勉強に集中していると、机の上の時計は午後10時を指していた。のどの渇きを覚え、1階の台所へと向かう。冷蔵庫からポカリのペットボトルを出し、コップに注いだ。慎重に一口飲む。早智の歯はポカリでさえも染みるようになっている。ましてや炭酸入りのコーラやサイダーなどはもってのほかだ。早智はホントはコーラなどの炭酸飲料が大好きなのだが、いまは炭酸飲料を飲むと、虫菌に染みて痛み出すので、もう何ヶ月も飲んでいない。最近は食べ物がよく噛めず、食事が苦痛だった。適当なところで飲み込んでいる。今日の夕食も、姉たちに歯のことがバレないかと冷や冷やものだった。

コップに注いだポカリを持ち、部屋へ戻ろうとすると、リビングでくつろいでいる姉たちに声を掛けられた。パパとママはもう休んでいるようだ。

「早智ちゃん、ちょっとこっちに来ない？」

「そうよ、勉強大変だろうけど、息抜きも必要よ」

2人はニコニコしながらいう。早智はむげに断れず、しかたなしにリ

ビングに入った。2人の姉に向かい合ってソファに腰掛けた。

「どう、勉強は大変？」

「お姉ちゃん、そりゃそうに決まってるじゃない。なにせ、桜葉高校っていったら、女子高の名門よ。早智は私たちよりずっと優秀なんだから。お母さん、早智が学年で10番以内だっていったわよ」

「そうかー。すごいねー、早智ちゃんは」

「そんなことないよ」

姉たちがほめるので、早智はちょっと照れくさかった。しばらく3人はたあいもない会話を続けていたが、何を思ったのか、長女の早咲が突然、

「ところで早智ちゃん、……早智ちゃん、歯の具合がよくないんじゃない？」と聞いてきた。二女の早耶も

「早智、正直にいつて。お姉ちゃんも私も、早智、歯が痛いんじゃないかと思ってるの」とやさしく聞く。

“バレてるう……” 早智はうつむいてしまう。

「やっぱり……。食事のとき、早智がどうも噛みにくそうにしていたものだから……。さっきお姉ちゃんと話していて、思ったの。……私が高校3年のとき……、早智は小学校6年で、確かそのときは夏休みに歯医者さんに治療受けに行ったよね？」と早耶がいった。

「私が、皓歯大の4年のときかぁー。ちょうど専門課程に進学するときで忙しくなっちゃって、早智ちゃんのこと、あんまりみてあげられなかったからねえー」

「早智ちゃん、そのとき以来、歯医者さんに行っていないんじゃないの？」早咲が聞く。

早智は観念して、こくりと頷く。そしてポツリと、

「……だって、歯医者さん、怖いだもん……」と目尻に涙を浮かべていった。早智がずっと歯医者に行っていないのがばれてしまった。早智は、小さい頃と小学校6年生のときに受けた虫歯治療について、小さな声でつまずきながら2人に話した……。

「そうだったの……」

「そんなことがあったの」

姉たちにはじめて話した。もちろん、パパやママにも話したことはない。

「早智、だったら、お姉ちゃんたちの勤める歯医者さんにおいで」早耶がやさしくいう。

「お姉ちゃんたちが、早智ちゃんの歯を診てあげるわ」早咲も微笑みながら、「だから、心配しなくていいのよ」といった。

次の日、月曜日の朝。

顔を洗い、歯を磨き、といっても早智は歯ブラシをあてるのも痛い歯がありデンタルリンスで済ませるだけなのだが……、キッチンに行く。パパはもう会社に出かけたようだ。2人の姉も食事を終え、出勤しようとしていた。

「早智、お母さんには話したよ」

「早智ちゃんの治療、お姉ちゃんたちのクリニックの午後の一番目、1時30分に予約を入れといたわ」

「12時50分頃、桜葉高校の校門のところに迎えに行くから……。そこで待っててね」

「はい……。さきおねえちゃん、さやおねえちゃん……」

「じゃあ、早智あとでね。お母さん、いってきます」

「あっ、それから『治療勧告書』も持ってきてね。治療完了したら、証明書書いてあげるから。じゃあ、いってきます、お母さん」

「はい、いってらっしゃい」

姉2人を見送ったあと、ママは早智に、

「早智、ダメじゃないの、虫歯ほおっておいちゃ」と注意をする。

「ごめんなさい、ママ……。でも、私、治療怖いんだもん」

「そうだってね。早咲、早耶に聞いたわ。でも、よかったわね、お姉ち

やん2人が歯医者さんと歯科衛生士さんで……。早智が歯医者さん怖くっても、お姉ちゃんたちに診てもらえるなら、安心でしょ？」

「ん、う、うん」

早智は、“いくらお姉ちゃんでも、やっぱりコワイものはコワイ……。はあ～、ずいぶん長いこと虫歯ほったらかしにしてたからなあ……。はあ～、治療痛いんだろうなあ～”と恐怖心が先に立ち、憂鬱な気分だった。今から6時間程のちには、歯科ユニットに座り、痛い治療を受けなければならない……。

朝食を終え、いったん2階の自分の部屋に戻った。早智は部屋でTシャツとジーンズを脱ぎ、ブラとパンツだけになる。登校するので、下着は白のものをつけている。桜葉高校の校章のエンブレム入りの白のブラウス、胸元の青と緑のリボンや紺のプリーツスカート、紺のソックスの制服を身に纏った。栗色のセミロングの髪はゆるくポニーテールにまとめた。ラクロス部の朝練に行くため、ふたたび2階の自分の部屋からリビングに降りてくる。早智は、ママが作ってくれたサンドイッチのお弁当を持って、午前10時の練習に間に合うように出かけた。

「ママ、いってきます」

「いってらっしゃい。早智、ちゃんと歯医者さん行くのよ。お姉ちゃんたちに治療してもらうのよ」

「……わっ、わかってるわ、ママ……」

「治療勧告書と保険証持った？」

スクールバッグから治療勧告書と保険証を取り出し、ママに見せると、早智は桜葉高校に登校していった。

「はあ、はあ」早智は、ラクロス部の部員たちとランニングをしている。

「はあーい、ラスト一周、がんばって！」

部の顧問で英語の木南絵梨先生がランニングしている部員たちを励ます。

「はあ、はあ」……。

ラクロス部の練習が終わり、早智はジャージから制服に着替えた。親友の豊岡有香、下垣友以乃、浜田咲世子の4人で、早智の教室でお弁当を食べている。

有香が咲世子に、

「ねえ、ねえ、咲世子、歯医者さんいった？」と話しかけている。

「えっ、うん、いったよ。先週で終わった」

「そっかあ。で、どうだった？」

「2本治療したよ。1本は虫歯が深かったみたいで、麻酔して削ったよ。そういう、有香はどうなのよ」

「うん。私も虫歯2本、治療したよ」

「もう、終わったの？」

「うん。きのう終わった」

「痛かった？」

「うん。小さな虫歯だったから、麻酔なしで削られたんだ。すぐに詰めてもらって終わりだったけど、削ってる間は痛くて半べそだった。それに歯医者さん行くのって、中学2年生のとき以来だったから、ちょっと緊張しちゃった。咲世子は痛くなかった？」

「ううん。虫歯が深かったから、麻酔したけど削るとき痛かったよ。私も涙出ちゃった」

「そうだよー。削るのって痛いよねー」

「友以乃はどうだったの？」

お弁当を口にほおばったところの友以乃は、急に話が回ってきてちょっと目を白黒させながら、ごはんを飲み込んで、

「私、今歯医者さんで治療の最中」と答えた。

「何本、治してるの？」

「3本」

「そんなにあったの!？」

「うん。私も削るのヤダけど、虫歯ほおっておいて痛み出すのもヤダか

ら、しょうがなく通ってる」

「そうだよねー。ほおったままで、痛むのもいやだしねー」

“みんな、歯医者さん怖くないのかなあ。いいなあ〜。……わたし、虫歯いっぱいあって、虫歯っただけで恥ずかしいって思っちゃうのに、さらに歯医者さんを嫌がっているなんて、ちょっと恥ずかしい……”
早智は有香たち3人の友だちの会話を聞くともなく耳にして、思っていた。

有香が早智の方に向き、突然話を振ってきた。

「早智は虫歯あったの？」

有香、友以乃、咲世子と早智はクラスが別だから、早智が歯科検診の結果、治療勧告書もらったことは、有香、友以乃、咲世子の3人とも知らない。

早智はギクツとしながら、うそをついた。今日姉に歯医者に連れて行かれることも黙っていた。

「うん。ううん、なかったよ」

「そっか、よかったね」有香、友以乃、咲世子がいう。それで歯医者の話題は終わった……。

4人でお弁当を食べ終え、ペチャクチャおしゃべりをしていると、いつしか時間は午後0時30分を過ぎている。

“ああ〜、近づいて来ちゃった……ヤダなあ”

「ねえ、早智、カラオケ行かない？」

「そうそう、練習終わったんだし、行こうよ」

「私、大塚愛の新曲覚えたんだー」

有香、友以乃、咲世子が誘う。

「ごめん。私、用事あるんだー」

「えー。行こうよー」「何の用事だよー」「いいじゃん。行こうよー」

「ほんと、ごめん」

“お姉ちゃんたち待ってるから、やっぱ行かなきゃ” 早智は、いぶかる

有香、友以乃、咲世子にあやまりながら、教室から出て昇降口へ向かった。

桜葉高校の正門の前に一台のパステルグリーンの軽自動車が止まっている。中には早智の姉の早咲と早耶の姉妹が乗っており、早智が校門から出てくるのを待っている。軽自動車のダッシュボードの時計は午後0時35分を指している。

「ねえ、姉さん」

「なあに、早耶？」

「早智、ちゃんと治療受けてくれるかなあ〜。私、早智が歯医者さんが怖いって聞いて、今日の治療すっぽかすんじゃないかなと思ってんだ」

「そうねえー。私の経験からいっても、歯科恐怖症の患者さんは治療をサボることも多いわね」

「姉さん、私、通用門の方にまわってみようと思うんだ。ひょっとすると、早智そっちから帰っちゃうんじゃないかと思ってんだ」

「わかったわ、早耶。じゃあ、早耶は通用門に行って。私はここで待ってるわ。お互い早智ちゃんを見つけたら、携帯電話にワン切りを入れて連絡を取ることにしましょう」

「うん、わかった」

早耶は、軽自動車の助手席を出て、通用門へと向かった。

昇降口へ向かって歩いていた早智は、小学校6年の時に受けた痛くて怖かった虫歯治療が頭の中に鮮明に甦ってきて、治療を受けることがだんだんと怖くなってきた。恐怖感が湧き起こってくる。

“………どんなことされるんだろ。やっぱり、コワイ……。歯医者さん、行きたくないよお〜。………お姉ちゃんたちにはわるいけど、帰っちゃおう” そう決めると昇降口から通用門の方へ逃げるように歩いていた。姉たちには会わずに家に帰ろうと思った。

ところが、通用門では早耶が待っていた。

「はっ！？」

早耶に気づいた早智は、きびすをかえして学校の方へ逃げようとしたが、早耶に左腕を捕まれてしまった。

「早智、治療、サボっちゃダメよ。ちゃんと治療、受けなさい」といいながら、早耶は携帯電話でワン切りを早咲に送った。

「お姉ちゃん、私、コワイ！！ だから、許してー」

「ダメよ、治療受けなきゃ。でないと、歯がなくなっちゃうよ」

「でも……、コワイの。今度、治療受けに行くから。お願い、今日はこのまま帰らせてー」

もみ合っているうちに、早咲が軽自動車を校門から通用門に回してきた。早咲も軽自動車から降りてきて、早耶に加勢する。

「早智ちゃん、私が怖くないように治療するから。だから、いっしょに行こっ」

「ヤダっヤダっヤダっ！！」

「わがままいわないの！！ 早智、もう高校生なんでしょ！！」

「だって、だって。コワイものは怖いんだもん！！ 歯医者さんコワイ！！ やっやっ！！」

早智は必死で抵抗したが、姉2人に引っぱられては抵抗できない。早咲と早耶は、いやがる早智を押し込むように軽自動車の後部シートに乗せる。結局、早智はみどりヶ丘デンタルクリニックに無理矢理連れていかれた。

みどりヶ丘デンタルクリニックは、比較的大きな歯科医院である。早智が通う桜葉高校の近くで開業している。歯科医が院長の高井美穂子、真山裕子、そして早智の姉の麻生早咲の3人、歯科衛生士がチーフの浅野久美子、新垣彩華、斉藤薫、早智の姉の麻生早耶、今年の春に勤めだしたばかりの市川理央の5人、他に受付を兼ねた歯科助手が2人とスタッフは10人である。

診療器械の歯科ユニットは8台あり、レントゲン室は3つある。

評判もよく、近くにあるみどりヶ丘中学校と桜葉高校の女生徒たちもこの患者としてかかっている者も多い。

軽自動車の中は、無言だった。ようやく観念したのか、早智はだまって後部シートに座っている。

やがて、軽自動車はみどりヶ丘デンタルクリニックの玄関についた。桜葉高校からはごく近いのですぐに着く。駐車場にちらほらと車が止まっている。午後から治療を受ける患者たちの車だろう。

早咲は玄関で早耶と早智を降ろして、従業員用の駐車場に軽自動車を置きに行った。

「さっ、早智、入りましょ」

「うん……」

早智は憂鬱そうな表情で、早耶に腕を添えられながら、みどりヶ丘デンタルクリニックの自動ドアのマットを踏んで中に入る。

待合室には、待っている人が何人かいるが、午後の診察はまだ始まっていないので、早智の苦手な歯を削るキューーン、キューーンという音は聞こえていない。だが、歯医者特有の消毒液の匂いは強く漂っている。

早耶に付き添われて、受付へ行く。歯科助手の女性がにこやかに迎えてくれる。

「あの、これ……、お願いします」

「はい、麻生早智さんですね。予約、お姉さまから聞いています。はい、保険証と治療勧告書、お預かりしますね」

歯科助手の女性は、「こちらを書いていただけますか」と問診票を早智に渡ししながら、「書けたら、受付に出してくださいね」といった。

「はい」

「じゃあ準備があるから、私、診察室に行くね。あとでね」

「……うん、お姉ちゃん」

早耶は早智の治療の準備のために、診察室の中に入っていった。早智

はソファーにこしかけ、問診票を記入する。『染みる歯がある』には○をつけたが、『わるい歯は全部治す』に○をつけかけて躊躇し、『痛い歯、染みる歯だけ治す』に○をつけたが、姉2人がこの歯科医院に勤めているかと思うと、やっぱり『わるい歯は全部治す』に○をつけた。書き上げて受付に出した。

受付の上にある時計は、午後1時20分を指していた。

“はぁ～、どうしよ、どうしよ。もうすぐ治療はじまっちゃう。コワイよ～” 早智は胸がドキドキしてきて、また治療を受けずに家に帰りたくなってきた。

そのとき、診察室のドアが開き、

「麻生さぁーん、麻生早智ちゃぁーん。診察室にお入りください」と早智に呼び出しがかかった。

“えーっ。まだ、1時30分になってないよ～。なんで～！？ 早いんじゃない、ヤダよお～。まだ心の準備ができてないのよお～……。どうしようお～コワイよお～”

早智は治療に対する恐怖心で、ひざがガクガクしてきて立ち上がれない。早耶が診察室から出てきて、早智のところへやって来た。

「早智、どうしたの？ はやく診察室へ入ろう」

早智は、いやっいやっとう首を横に振り、ソファーから立とうとしない。

「大丈夫だよ。痛くないから、ねっ。だから、はやく行こう」と早耶が早智の手を引っぱって立たそうとするが、いやいやとだだをこねる。早智はすでに涙目だ。すると、浅野久美子、新垣彩華、斉藤薫の3人の歯科衛生士が来て、「早智ちゃん、大丈夫だよ。すぐ済むから。痛くないよ」と口々にいって、ソファーから立たせ、腕を引っぱり、からだを抱えるようにして無理矢理診察室へと連れて行く。

「やっ！！ やっ！！ 助けてえー！！ 治療受けたくない！！ おうち帰る！！ いやぁ～」

早智が浅野、新垣、斉藤の3人に連れられて診察室の中へと入ってく

る。診察室の中は淡いパステルピンクの歯科ユニットで統一されている。早耶が早智の治療予定の歯科ユニットに誘導しようと、アームのついたテーブルを大きく開けて、動線を確保する。

「いやっ！！ やっ！！ ヤダっ！！ ヤダっ！！」

早智は必死で抵抗するが、大人3人にかかってはかなわない。歯科ユニットに座らされる。

「早智、歯科エプロンつけるよー」早耶が早智の胸元に水色の歯科エプロンをつけた。

「はん、はん、いやっ！！ いやっ！！ コワイよ、コワイよ、くすん、ああーん」早智はエプロンをつけられただけで、すでに半べそだが泣くのはがまんしている。その恐怖で硬直して半泣きの早智を見て早耶が、
「早智、大丈夫だって。だって、早咲お姉ちゃんが診てくれるんだよー。早智、深呼吸しよ。はい、スーハー、ねっ」と早智を励ます。

早智は姉の早耶にいわれて、涙目で深呼吸をした。

スーハー。

すこし気分が落ち着く。周りをかこんでいた浅野たちはその様子を見て、それぞれの持ち場に戻っていった。

「どう、少し落ち着いた？」早耶が聞く。

早智は「うん」と小さく頷いた。ちょっと恥ずかしい。

「じゃあ、先生、早咲お姉ちゃんを呼んでくるわね。あっ、それからこれ」と早耶が早智のスクールバックから出したハンドタオルを早智に手渡し、早咲を呼びに行く。

早智は、ハンドタオルを握りしめながら、座っている歯科ユニットを見るともなく見回した。正面に无影灯。まだライトは点いていないが、一つ目でギョロッと睨んでいるかのようだ。その下のアームからのびたテーブルには濃青色、濃緑色、濃茶色、半透明色の薬剤の小瓶、ハンドピース用のダイヤモンドポイントやカーバイドバーが入ったバーチャージャーが並び、銀色のトレイにはデンタルミラー、探針、エキスカーバーダー、ピンセットの基本4点セットの入ったトレイがのっている。さ

らに、そのテーブルには早智がもっとも嫌いなドリルの類、すなわちホースからのびたエアタービン、電気エンジンタービン、スリーウェイシリンジなどが銀色に光り輝き並んでいる。コントラアングル型やストレート型などいかにも痛そうな色と形だ。右側には歯科衛生士用のスリーウェイシリンジや洗口台、口をすすぐためのコップなどが並んでいる。ユニットのそばのワゴンには麻酔カートリッジと注射器、数々の薬剤、トレイにのった様々な治療器具があり、さらに早智のものであろうカルテ、治療勧告書、問診票がのっていた。どれもこれも怖そうで、痛そうだった。

“やっぱり、コワイよ～。ぐすん……”

早智は、痛そうな治療器械や治療器具を目にしてみます不安が募ってきた。

そのとき、スリッパの音が2つして、歯科医用のいすに早智の姉の早咲がすわった。早耶も所定の位置についている。

「早智ちゃん、お待たせー。大丈夫だよ、お姉ちゃんに任せて」にこやかに、早咲が早智にいい、「まず、早智ちゃんのお口の中を診せてね。怖くないからねー」と早速、デンタルミラーと探針をもって迫ってきた。早耶によってライトが点灯される。

「早智、大きくアーンしよ」早耶も早智にいう。

早智は怖々、口を開ける。恐怖心が先に立っているのです、どうしても開けた口は小さくなってしまふ。

「もう少し大きく開けようねー」と口腔内に早咲の持つデンタルミラーと探針が入る。早耶が、早智の口にライトの焦点をあわせる。

「まあ、これは……」「あつ、……ほんと、ひどい……」早咲、早耶が、早智の口腔内を覗き込んで、思わず絶句する。「早智ちゃん、痛かったでしょう」

半べそで早智がこくりと頷く。“あん、あん、恥ずかしいよう～”

「うーん、早耶、しっかりカルテつけてね」

「ええ、姉さん」

「じゃあ、左上からいくわ。7番C2、6番○、5番斜線、4番○、3番……2番との間に虫歯ができてるわ。C1ね。2ばん……、早智ちゃんこの歯染みたりしない？」早咲が聞く。早智は口にデンタルミラーと探針を入れられたまま、首を横に小さく振る。

早咲は探針をトレイに置き、シリンジを持つと、早智の左上2番にシュッとエアーをかける。

「ううっ」早智の歯は染み、思わず顔をしかめる。

「ダメよー、早智ちゃん。嘘ついちゃー。2番はC2。1番は……、2番との間のレジンの詰めてある舌側から虫歯ね。C2です。右へいって1番、これもレジンが2番との間に詰めてあるけど変色してるわー。C2ね。2番もC2。うーん、前歯の治してあるところも二次虫歯になってるわ……」早咲は早智の歯の診察の途中に、早智の歯がこんなになってしまっていたことにため息が出て、小声になってしまう。

「気を取り直していきます。3番4番斜線、5番……6番側から虫歯になってるわ、C2。6ばん……」探針で早智の右上6番をカッカッとつつく。

「ふんふん」早智は痛みを感じて声を出す。「うーん、これもインレーと歯の境目から二次虫歯になってるわ」

早咲はまたシリンジを持つと、早智の右上6番にエアーをかけた。早智の歯は強烈に染みる。

「はあー、ああん、んっ」

「だいぶ進行してるみたいねー。6番は……、そうねー、C3かな。あとでレントゲン撮って正確に診断するわ。7番○。次左下へいって、7番……」探針で探られる。

「ふうん、ふん」

「これも進行しちゃってるわー。少し深いかなー、C2ね。6番、これもインレーの横あたりから二次虫歯ね。C2。5番、インレーが取れちゃったのね。……早智ちゃん、詰め物が取れたらすぐに治さないとダメじゃない。C2。4番○、3番から右2番まで斜線。あー、これも歯

の間から虫歯になってるわ。3番C1、4番C2。5番○、6番、ここもインレーと歯の間から二次虫歯ね。C2。7ば……、あー、これはちょっと……」

早智の右下7番は大きな穴が開いている。う窩は薄茶色になっており、早咲がデンタルミラーで診て探針で探ると、象牙質はほとんど軟化象牙質となり湿潤性を帯びており、一部の軟化象牙質の被覆がとれて露髄している。「ああ……、慢性潰瘍性歯髄炎ね……。色が悪いわ。少し臭いもあるわ。ひよっとすると、歯髄壊疽かも……。この分だと感染根管となっている可能性が高いわね……。根の状態が悪ければ、抜歯かも……。早智ちゃん、なんでこんなになるまで」

「7番C4。以上です」

「早耶、早智ちゃんの虫歯、何本あった？」

「いち、に、さん……、処置歯が5本、それから未処置歯が……、C1が2本に、C2が11本、C3が1本、C4が1本だわ。計15本ね。うち二次虫歯が、8本よ。姉さん」

「うーん、これじゃかなりの期間治療しなくちゃならないわ……。治療計画をしっかりと立てないと……」

早智の歯の状態を早耶がカルテに記録し終えたのを見ると、いつもやさしい姉である早咲は、少しきびしい顔をして早智にこういった。

「早智ちゃん、どうしてこんなになるまでほおっておいたの？」

早智は姉のことばに、また涙目になる。だが早智は怖さをがまんし、さっきからなんとか泣くのをこらえている。

「ううっ」

「早智、ダメよ、虫歯ほおっしておいちゃー。虫歯は自然に治らないんだから」早耶は早智を諭しながら、「でもなっちゃったものはしかたないから、ちゃんと治療しよ、ねっ」と励ましてくれる。

「うん……」早智はこくりと頷く。

「さっきもいったとおり、正確に診断するためレントゲンを撮るわね。」

まずお口全体のパノラマX線を撮って、それから右上と右下の奥歯のX線を撮るわ。早耶、お願い」

「わかりました、姉さん」早耶は、姉のことばとカルテをつけていた際に診た早智の歯の状態から、早咲が今日の治療を右下の7番、右上の5番、6番を治療する方針だと察した。

「はい。じゃあ、早智、レントゲンを撮るから、こっちに来てね」と早耶は、早智を3つ並んだレントゲン室の真ん中の部屋へと案内していく。8台ある歯科ユニットのうち、4台に患者が寝かされ治療を受けている。中には桜葉高校やみどりヶ丘中学校の制服を着た女生徒の姿も見える。早智のいちばん苦手なキューインという歯を削る音が聞こえてきて、思わずドキッとする。不安そうで怯えたような早智の表情を見た早耶は、振り返ってにっこりと微笑み、

「だいじょうぶよ」と早智を励ます。

早智は歯科エプロンをつけたまま、スリッパを履き、早耶についてゆく。早耶が部屋のドアを開け、

「どうぞ」と早智を誘導する。

早智は中の椅子に座った。

「早智、それじゃあ、これを噛んで」と早耶はマウスピースのようなものを早智に噛ませ、部屋のドアを閉めた。しばらくすると、「はい、早智ちゃん、リラックスしてね」マイクを通して、早咲の声が聞こえる。

早智の顔のまわりをパノラマレントゲンのユニットが通過する。

「次は隣のレントゲン室に入ってくれる？」早耶がドアを開けて、早智に声をかける。

早耶に案内され、右隣のレントゲン室に入る。

「ここに座ってくれる？」すすめられるまま、いすに腰掛ける。今度は、アームのついたちょっとしたビデオカメラのような歯科用X線装置があった。早智の右頬に向けてセットされる。

「下の歯から撮るわ。お口開けて……、ア～ン」早耶が早智に指示す

る。早智が口を開けると、早耶が口腔内にフィルムを挿入して右頬側の下の歯に固定する。それからX線のヘッドを動かし、フィルムの中心にX線を照射できるように調整した。

「じっとしててねー。動いちゃダメよー」といって、早耶がレントゲン室から出る。

スピーカーを通じてふたたび早咲の声がしてきた。

「早智ちゃん、すぐ済むからねー。じっとしててね」

早智の右下の歯が撮影された。

「もう1枚ね」レントゲン室のドアが開いた。

早耶が入ってきて、

「今度は上の歯ね」といい、今度は早智の右上の歯に口腔用フィルムをセットする。さきほどと同じようにX線のヘッドを動かしてフィルムの中心にX線が照射されるように調整する。右上の歯が撮影される。

「早智、お疲れさま。治療台に戻って」早耶は早智に歯科ユニットに戻るように指示する。早智はいわれたとおり、治療用の歯科ユニットに戻り、ゆっくりとこしかけた。

しばらくすると、早耶が大きめのレントゲン写真1枚と小さめのレントゲン写真2枚を手にとちらへやってくる。レントゲン写真を受け取った早咲は、それをユニットの投影機にかけた。蛍光灯の青白い光がレントゲン写真を背後から照らし、早智の口腔内が映し出された。上には早智の口腔全体のレントゲンが、下には早智の右上の5番6番7番の歯のレントゲン写真と、右下の5番6番7番の歯のレントゲン写真がなかよく並んでいる。

パノラマレントゲン写真の方は早智のすべての歯が写っているが、そのほとんどの歯に虫歯を示す黒い影や、インレーなどの詰め物が白く写っている。右上の局所レントゲン写真は、6番のインレーの下に黒い影があり、その6番の虫歯は6番の近心面から隣接面を通して5番の遠心面に広がっていることを写していた。だが、6番の虫歯は歯髄に到達は

していないようだ。さらに7番はインレーが白く大きく写っている。

「うーん、そうね……。右上の5番と6番は、ギリギリで神経までは
いってないようね。でも削ってみないとわからないわ……。早智ちゃん、
できるだけ神経は残したいけど、もし神経まで虫歯が進んでいたら、
そのときは抜髄するわね」

いっぽう右下のレントゲン写真は、5番が根まで充填された白い詰め
物の写っている状態で、6番は遠心面のインレーと歯の境目からインレ
ーの下にかけて大きく虫歯が広がる様子を示す黒い影がある。7番は6
番との隣接面からも虫歯が黒く写っているが、それよりも咬合面が崩壊
し大きな穴が写し出され完全に神経とつながっている。さっき視診と触
診で診たように神経はほぼすべてが虫歯菌に侵されているようだ。

「それから、右下の一番奥なんだけど……。これは残念だけど、神経
をとらないといけないわ。早智ちゃん、もっと早く来てくれてれば
……。」早咲は、“よかったのに”を飲み込んだ。さっきはきびしい
ことをいったが、早智は歯医者恐怖症なのだ。

神経を取ると聞いて、早智は小学校6年生の時の痛かった治療を思い
出し、またじわっと目に涙が滲む。“そんな、またあんな痛い思いする
なんて……。いやっ！！”

しかし長姉の早咲は、そんな様子の早智に気づかず、熱心にレントゲ
ン写真を見たまま、

「早智ちゃん、今日はまず右上の5番と6番から治療するわね。それか
ら右下の7番を治療しましょう」という。

“ぐすっ、3本も治療するの……” 早智は半べそをかいていた。

「大丈夫よ、早智！ お姉ちゃんたちがついてるじゃない。だから、治
療がんばろ！ ねっ！」次姉の早耶が笑顔で早智を励ます。

「早耶、シンマをお願い」

「はい、姉さん」

早耶は注射器に麻酔のカートリッジを装着した。早耶の手から、姉の

早咲に浸潤麻酔の注射器が渡される。その瞬間、細く尖った注射針がキラリと光った。

「早智ちゃん、アーン」

それを目にした早智は、目を見開き、恐怖におののいた。

「だいじょうぶだよー、早智。最初チクッとするだけであとは痛くないよー」

早耶が優しい目をして、早智を見る。その目に励まされ、早智は不安な気持ちを抑えて、口を開けた。麻酔注射を持った早咲の手が近づき、やがて早智の口に吸い込まれる。早智の右上の歯茎に針が刺さる。チクッとした痛みが早智を襲う。カートリッジの麻酔薬が早智の歯茎に注入され浸潤していく。徐々にズーンとした重い痛みが右上の歯茎に広がる。

「んっ、ううっ、むう」

「大丈夫よー。ゆっくりと麻酔が効いてくるからね。もう1本打つわ」再び早耶の手から早咲に麻酔注射が渡される。早智の右上の歯茎にもう一度注射針が刺さり、カートリッジの薬剤がふたたび注入される。

「はい。これで麻酔は終わり。早智ちゃん、口ゆすいで」「麻酔効くまで少し待たね」

ライトが消され、ユニットが起こされていく。早智は歯茎から右頬全体が徐々に痺れてくるのを感じていた。コップを持ちクチュ、クチュと口をゆすぐ。麻酔が効いてきたせいか口の端から水が漏れる。

“やだ、恥ずかしい。うまくゆすげない”

早咲は、早智に背を向け、早智のカルテを記入している。早耶は、早智の治療の次の準備をしている。

「もういいかな」5分足らずがたち、早咲は早智に向き直った。「いす倒すね」

ユニットが倒れ、ライトが点灯される。

「はい、アーンしようねえ」と早咲は早智の口を開けさせる。早咲はデンタルミラーの柄で早智の歯をコンコンと叩き、「響く？」と聞く。早智がぷるぷると首を横に振ると、早咲はピンセットでロール型のふくみ綿

をつまんで、早智の右の頬側にふくませる。治療に必要なスペースを確保し、簡易防湿を施すためだ。

次に早咲は、バーチャージャーの中からハンドピースの先端につけるバーを選んでいる。それを見ていた早智は、
“怖い……”と涙目になる。

「早智、バキュームとシリンジ入れるねー。お口アーンして」

早耶は早智の左側からゴム手袋の手でバキュームとスリーウェイシリンジを持って、早智の口に挿入する。

早咲はタービンのハンドピースに選んだラウンドバーを装着した。早咲は、ゴムの手袋をした右手にタービンを握り、左手にはデンタルミラーを持った。早智の口に近づけてくる。

「はい、大きくアーンしてね」早咲がいう。

「痛くないからねえ～大きくアーンしようね～」早耶が早智を励ます。

「痛かったら、左手を挙げて教えてね。すぐに治療やめるから」

「じゃあ、始めるわね」と早咲はペダルを踏み、エアータービンのスイッチを入れた。キューーンと甲高い空気駆動の金属音を響かせながら、すでに早耶によってバキュームとスリーウェイシリンジを入れられている早智の口に迫ってきて、口腔内に入ってこようとしている。

キューーン。

その音を耳にしたとたん、早智は目を見張り、怖さのあまり震えている。

「大丈夫よー、麻酔したから痛くないよー」

「すぐ済むからねー」

キュー～ン。

「いやっ、やっ！ ドリルコワイ！！ おねえちゃん、許してえー」

早智はヘッドレストの上でいやいやをするように頭を振り、エアータービンを口腔内に入れられるのを嫌がった。

「大丈夫だから。ねっ、だから治療しよ。すぐ済んじゃうから」

「やっ！ やっ！ コワイ！ コワイ！」

「ほんとに、大丈夫だってば。早智は怖がりねー」

早咲と早耶が早智を諭し、笑顔でなだめる。

怖がる早智をようようなだめ、早咲と早耶は治療に取りかかる。

“怖いよお～、コワイ！ コワイ！ お願い、痛くありませんように”
姉2人になだめられたが、やっぱり目に涙をためて、早智は目を閉じ、
口を開ける。早智の口にダービンとバキューム、スリーウェイシリンジ
が入る。すぐにタービンが早智の右上6番のう蝕した歯を削り始める。

キュイーン、キュイイイイーン、チュイイーン。

コォー、ジュポポポポー。

キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。

奥歯にカチャツとした感覚があった。

早咲は、タービンを戻すと、ピンセットを持ち、早智の口に入れる。
カチャカチャと音がして、分銅型のインレーが取り出された。インレー
のとれた歯は、前に削った穴が薄茶色に変色しており、深在性の急性う
蝕を示していた。

「少し削ったら、とれたわ。インレーの下で虫歯になってたから、ほと
んど詰め物の役目をはたしていなかったのねー。早智ちゃん、口ゆすい
でいいよ」ユニットが起こされる。

“よかった、痛くなかった……。これで終わらないかなあ”と早智は
思った。クチュクチュと口をゆすぐ。

再びユニットが倒れ、早智の口に早咲の手元が近づく。

「はぁーい。アーンして」

早智が口を開けると、早咲はピンセットでロール型のふくみ綿をあた
らしいものへと交換した。次にデンタルミラーとエクスカーベーターを
入れた。そして、インレーをはずした歯の穴のあいたところへエクス
カーベーターを入れ、虫歯でやわらかくなった軟化象牙質を掻き出した。

「んうっ」早智は不快感を感じて声を出した。口を閉じそうになる。

「ダメよ、早智ちゃん、口閉じちゃー。もう少し大きく開けて」

早咲は軟化象牙質のついたエキスカバーターをガーゼで拭き取った。ガーゼは汚物入れに捨てられる。何度かそれが繰り返えられる。早咲はエキスカバーターをトレイに置いた。

今度は、早咲はハンドピースを手に持ち先端のバーを交換している。選び出したのは先端の尖っているダイヤモンドポイントだ。

“えっ、なんで先替えるの！？ やだ、さっきのより尖ってるう……”
早智はエアータービンの先端を見て、怯えた目をしている。

「すぐ済むよー。はあーい、アーン」「だいじょうぶ、痛くないよー」

早耶の持つバキュームとスリーウェイシリンジが早智の口の中にはいる。早咲はデンタルミラーで早智の口を広げ、エアータービンのドリルを早智の虫歯にあてがった。

キュイーン、キュキュキュキュ、キュイイイイーン。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイーン、チュイーン、チュイイーン。

今度は本格的に虫歯を削り取る治療が始まった。早智はまた口を閉じそうになる。早咲が早智に注意しながら、デンタルミラーで口を広げる。

「早智ちゃん、もう少しお口を開けて。顔も私の方に向けて」

早智は、怖々ながら、せいいっぱい口を開け、顔を長姉の早咲に向けた。

早智のう蝕した右上6番の歯が、姉の早咲の手によって、ダイヤモンドポイントを装着したドリルで削られてゆく。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュイ、キュイ、キューン、キューン。

コオー、コオオオー。ジュポ、ジュ、ジュッ。

シュー、シュー。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

だが、削り始めて1分もたたないうちに、切削の強い痛みが早智を襲った。早智は脚をX形に、ひざをくの字に曲げ、がまんしたが、続く削る治療の痛みにながまんできず、足をパタパタしだした。

「うーん、ふんふん、ふーん、ふん、ひはい！！ ひはい！！ ほへへひゃん、ひゃへへ、ひゅひゅひへー！！」

早智は、早咲と早耶に痛みをうったえるが、姉2人は早智の治療を止めようとはしない。

キュウーン、キュイ、キュイ、キュキュ。

キィーーン、キュウィーン、キュイーン、キュイーーン。

早智は、治療を始めるとき、『痛かったら、左手をあげてお姉ちゃんに教えるのよ』と姉2人にいわれたのを思いだした。“そうだ！！ 左手あげればいいんだ”ところが、どうしたことか左手をあげても治療を止めてくれない。

「早智ちゃん、もうすぐ済むからねー。もうちょつとがまんしようねー」
「痛くない、痛くない。大丈夫だよー。がまん、がまん。あと少しで終わるよー」

“お姉ちゃん、ほんとにもう止めて！！ 痛い！！ 痛いよお～！！
もう許してえー！！ もう虫歯ほったらかしにしないから……、お願い許してえー！！”

早智は、左手を上げて「痛いイダーイ！！」と姉たち2人にいうが、早咲も早耶も

「もう少し痛くない痛くない！もうすぐ終わるからね～我慢しようね～」といっこうに治療の手を休めず、早智の虫歯を散々削り続ける。

虫歯治療の痛さに身を振りながら早智は、もう高校生なんだから歯の治療が怖くて泣くのは恥ずかしいと思って、膝や身体をピクン、ピクンと動かしても、なんとか泣くのはがまんしていた。もっとも目には大粒の涙がたまっていたが……。

バキュームとスリーウェイシリンジを操作しながらそれを見ていた早耶は、早智に、「大丈夫？ がまん出来なかったら、泣いてもイイよ」と

やさしくいつてくれた。その瞬間、早智は「うわぁ～ん。お姉ちゃんコワいよ～」と大泣きしてしまった。

しかし、早智が泣いても痛い治療はまだまだ続く。

キューン、キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイイイーーン。

キュイ、キュイ、キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーーン。

コオオオー、コオー。ジュボポポー。

「虫歯をずっとほっておいたから削るのが痛いよ。もっと早くに治療したら痛くないのに」早咲がタービンの手を止めず、早智の虫歯を削りながら、諭した。

“エッ、エッ、イダァーイ、イダァイヨォ～！！ くすん、エッ、エッ。ぐすん、でも早咲お姉ちゃんのいうとおりで。私が歯医者さんコワくて、ずーっと虫歯ほったらかしにしてたから、痛いんだ。エッ、エッ”

「ふえーん、えん、えん、ふあーん、ふわぁぁあーん」

早智は泣きながら早咲のことばに同感していた。

まだまだ切削治療は続く。

キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイーーン。

コオー、コオオオー。ジュッ、ジュッ。

キュ、キュ、キィィイーーン。キュイ、キュイ。

虫歯を削る痛さに耐えかね、早智はふたたび左手を上げて、「痛いイダァーイ！！」とエアータービンを操作する早咲にうったえるが、早咲も早耶も、

「早智ちゃんがんばって、いたくない、いたくない、もうすぐおわるよ」

「もう少し痛くない痛くない！ もうすぐ終わるからね～我慢しようね～」といっこうに削るのを止めてくれない。

「ふえーん、えん、えん、ふあーん、ふわぁぁあーん」

早智の膝がピクン！ピクン！！、足がピクン！ピクン！と動き出し、足をパタパタしだした。制服のプリーツスカートが捲れ、全開となっている。早智のかわいい白パンツが丸見えになる。

早耶はそれを見て、バキュームとスリーウェイシリンジを操作しながら、

「早智、パンツみえちゃてるよ、はずかしいなあ治療中は、おとなしくね」と早智に注意した。

キュウウウーーン。

タービンが止まった。

「早智ちゃん、だいぶ痛い？」

早咲が聞くと、早智はヒック、ヒック、ぐすん、ぐすんとしゃくり上げ、涙目でコクンと頷く。

「もう1本、麻酔をするわ。早耶、お願い」

「はい、姉さん」

早智は麻酔と聞いて、“えっ！？”という顔をし、“また麻酔注射するの！？”といやな気持ちになったが、そんな早智の気持ちにおかまもなく、麻酔注射の準備が進められていく。

早耶がトレイの麻酔カートリッジを注射器にセットして、早咲に手渡した。早咲は、「はい、大きくアーンしようね」と早智の口を開けさせた。注射針が早智の歯茎に刺される。

「ふんっ、ううっ、むう」

早智の歯茎に麻酔の薬液がゆっくりと注入され、やがてカートリッジの麻酔液がすべて早智の歯茎に入った。

「早智ちゃん、麻酔が効くまで待とうね」といったん短い休憩が入った。

“…………痛い、麻酔って…………、痛い、削るのって…………、もう虫歯の治療はいやっ！！　これで終わらないかな、ホントもういやっ！！”

「はい、もう一度削るからねー」

再びライトの強い光が早智の口を照らす。みたび早咲はハンドピースの先端を別のバーに取り替えている。今度はタングステンを含んだカーバイドバーを選んでいる。早智には、さっきのものよりさらに先端が尖っているように見える。

「今度は大丈夫、痛くないよ。はい、アーン」「お口大きく開けようね。アーン」早咲と早耶が促す。

早智は、“いやだなあ〜”と思いながら、半べそでもう一度口を開く。早咲が手に持ったタービンと、早耶のバキューム、スリーウェイシリンジが早智の口に入り、再び音を立て始める。

キュイ、キュイ、キュイーン。

コオー、コオオオー。

削る痛みが、ひっきりなしに早智を襲う。早智はなんとか気を紛らわそうとした。

“くすん……。いいなあ〜、有香、友以乃と咲世子は……。虫歯の治療済んで……。痛っ！！ いまごろ3人でカラオケ楽しんでるんだろうなあ……。痛っ！！ 私も行きたかったなあ、はやく治療終わらないかなあ〜、痛っ！！ さきおねえちゃん、さやおねえちゃん、痛いつ！！ 痛いつ！！ 治療痛いよ！！ 痛いつ痛いつ痛いっ！！ 毎日歯磨きするからっ！！ もう許してえー！！ 痛あーい！！ ふうーん、ふんふん、ぐすん”

けれどもあまりの痛みにながまんしきれず、早智はふたたび紺のハイソックスをはいた足をパタパタしだした。

早咲は、今度は軟化象牙質を削るため、タービンの先端をラウンドバーに替えた。

キーン、キーーーン。

ウィーン、ウィーン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュツ。

ウィィィーン。

“6番から広がって、5番も遠心面から虫歯がだいぶ広がってるわ……。ここも削らなきゃね……” 早咲はタービンを操作しながら思った。

キューーン、キューーン、キーン。

右上6番を削って軟化象牙質を取っていると露髄した。“露髄した……。少し出血してるわ……。でも歯髄は充血や炎症を起こしてないわね。……今日は次に右下7番も治療する予定だし、ラバーダム防湿しよう”

キュウウーーン。

「早耶、ラバーダムするわ」

「はい。露髄しちゃったわね、姉さん」

早咲は早耶に指示してラバーダムを受け取る。緑色のゴムのようなものが用意される。

“なに、これっ！？ なにっ！？” 早智は不安が募り、目を見張った。

「心配しなくていいのよ、早智ちゃん。これでね、治療する歯を覆って、細菌感染を防ぐのよ」と早咲は早耶とともに小さな孔を開けたラバーダムを早智の右上5番6番に被せ、クランプで固定する。ラバーダムシートを広げて、早智の口腔の周り左右唇の下をフレームで押さえる。早智の口腔がラバーダムで覆われた。左の唇からラバーダムの下に排唾管が挿入され、溢れてくる早智の唾液を吸引する。

「じっとしていてね」

早咲はもう一度スプーンエキスカバーターを手にした。これ以上早智の歯が露髄しないように、慎重に早智の右上6番の軟化象牙質をスプーンエキスカバーダーで掻き出した。歯髄に細菌感染を起こさせないためだ。掻き出した虫歯に侵された象牙質をガーゼで拭き取り、汚物入れに捨てる。ピンセットで小綿球をつまみ、滅菌生理食塩水に浸し、天蓋部分を消毒する。

6番のう窩が開拓が終わったところで、いったん6番の治療を中断し、6番から虫歯が広がった5番の切削治療に取りかかる。早咲が早智の右上5番の虫歯を、カーバイドバーを装着したタービンで削る。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

コオオオー、コオー。ジュ、ジュ、ジュポポポー。

早耶がバキュームとスリーウェイシリンジを使って、早咲によって削られた早智の虫歯の切削片を除去していく。露髄した右上6番を汚染しないためだ。右上5番は虫歯が広がっているが深くはない。すぐに軟化象牙質を取りきることができた。“思ったほどひどくはないわ……。よかった”

早智の右上5番6番の窩洞形成が終わった。露髄した右上6番をもう一度ていねいに消毒するため、早咲は

「早耶、キャナルシリンジにネオクリナーとオキシドールを入れたものをそれぞれ用意して」

と早耶に指示した。

「はい、姉さん」

早耶は3～10%次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと3%過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用意して、早咲に渡す。

早咲は、早智の右上6番の虫歯の穴に、まず3～10%次亜塩素酸ナトリウム溶液であるネオクリナーの入ったルートキャナルシリンジを入れ、ゆっくりと注入する。洗浄したあとは拭掃用綿球でネオクリナーを拭き取る。続いて中和剤として3%過酸化水素水であるオキシドールの入ったルートキャナルシリンジを虫歯の穴に挿入し、ゆっくりと慎重に注入して洗浄する。拭掃用綿球で拭き取る。これを何度か繰り返して交互洗浄を行って、露髄した早智の虫歯の穴を消毒する。

「ふうん、ふんふん」

「もう少しよー、がんばってー」

早咲は滅菌綿球で6番の露髄部に圧をかけないように配慮しながら窩洞を乾燥させた。5番は滅菌生理食塩水で消毒を行った。5番の窩洞をスリーウェイシリンジで軽くエアーをふきかけ乾燥させる。

シューツ、シューツ。

「はあん、はんはん」

「はい、はい、早智ちゃん、もう少しだから大丈夫よー。がまんしてー」

早智の右上5番6番はこうして消毒乾燥された。

早咲は、早智の虫歯の穴の露髄部を直接覆罩し、歯髄の鎮痛、消炎を行うための薬剤の用意を早耶に指示した。

「早耶、カルビタールを」

「はい」早耶は、早速カルビタールの準備に取りかかる。

「早智ちゃん、じっとしていてねー」

早耶は用意したカルビタールを早咲に渡した。早咲はカルビタールをストッパーで、早智の右上6番の虫歯の穴の露髄したところへ塗薬する。ヨードホルムを配合した水酸化カルシウム製剤であるカルビタールは、露髄した部分に第二象牙質を形成させ、それにより歯髄を保護する。

次に早咲は

「早耶、ネオダインをくれる？」と指示する。

「はい、姉さん」

「早智、もう少しがんばるのよー。もうすぐ終わるからねー」

早智を励ましながら、今度は、早耶は酸化亜鉛ユージオールセメントであるネオダインを早咲に渡した。早咲は早耶から受け取ったネオダインを、ストッパーで削った早智の虫歯の穴に裏装した。ネオダインもまた歯髄を保護してくれる効果がある。

“これで、炎症が収まるといいんだけど……。早智ちゃんはまだ高校2年生なんだし……。できるだけ抜髄はしたくないし”

早智の虫歯治療を続ける長姉の早咲と次姉の早耶は、早智の口腔内を見つめ、互いに目配せをしながら思っていた。

グラスアイオノマーセメントで仮封をして、ようやく早智の右上5番と6番の治療が終わる。ラバーダムがいったん外された。

「早智ちゃん、お口ゆすごうかー」ユニットが起こされる。

いすが起こされても、早智はしばらくハンドタオルで口と頬を押さえたままじっとしている。のろのろとハンドタオルで涙を拭い、早智は口

をゆすぐ。“もう、いやっ！！ 痛いのは！ お姉ちゃん、これで終わりにしてくれないかなあ”

早智が口をゆすぎ終えコップを洗口台に戻すと、そんな早智の願いもむなしく、ふたたびユニットが倒される。早智は小さくため息をつく。
“はあ〜”

「さあ、あともう少しがんばろうね」「今日はあと1本の治療だから、もうあとほんの少しの我慢だよ、早智」姉たち2人は、にこにこしながら励ますが、早智はいままでの治療の疲れとこれから受ける痛い治療を思っ
て元気がない。

「そんな顔しないで。大丈夫だから」
と早耶はテキパキと治療の準備をする。

「早智、今日はあと1本、右下の一番奥7番の虫歯の治療だよ。もう少し
がんばろうね」

「早智ちゃん、この歯はもう神経が死んじゃってるから麻酔せずに削っ
ても痛くないから、麻酔しないで治療していくわね」

早咲は、ハンドピースにバーチャージャーから選んだダイヤモンドポ
イントを装着しながら、早智にいった。

“えっ、そんな！！ コワイ、コワイよ” 早智はまた目に涙がじわっと
滲んでくる。

「そんな顔して……。大丈夫よ、早智。早咲姉さんのいうとおりよ。
歯の神経死んじゃったら、歯は痛みを感じなくなるのよ。だから、心配
しないで！」 早耶が励ます。

早智は涙のたまった目で首を横に振る。いまにも涙がこぼれ落ちそう
だ。

「早智ちゃん、麻酔しないと治療いや？」 早咲が聞くと、早智はコクン
と頷いた。“ホントは麻酔もコワイの、でも麻酔なしで痛いのはもっと
嫌！！”

「わかったわ、早智ちゃん。早耶、もう一度シンマするわ」「はい」

早智は右下の歯茎に麻酔注射を2本打たれた。麻酔が効くまでしばらく待つ。

それから早咲と早耶は、もう一度早智の口腔にラバーダムを装着する。ラバーダムは、次に治療する右下7番の部分に小さな孔が開いており、歯をその孔から出す。早智の歯はクランプで固定された。フレームによって両頬側と顎側が押さえられて、ラバーダム防湿が完了する。ふたたび左唇から排唾管が挿入され、溢れる早智の唾液を吸引する。

早咲が、もう一度早智のレントゲン写真を確認し、探針とデンタルミラーで右下7番の患歯を診る。

“この歯、ひどい虫歯だけど、そんなに根の状態は悪くないかも……。
この分なら抜かずに、感染根管の根管治療だけで治療できるかも……
”姉2人は、早智の患歯を診ながら思っていた。

ライトが早智の口を的確に照射するように、早耶が無影灯を動かし焦点をあわせる。次に早耶は早智の口にバキュームとスリーウェイシリンジを入れた。早智の唇がデンタルミラーでひっぱられ、口腔内に早咲の持つエアータービンが挿入され、早智のう蝕した右下7番の患歯にあてられる。すぐにタービンが空気駆動を始める。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイーン。

キュイ、キュイ、キィ、キーン、キュイーン。

コオー、コオオオー、コオオオー、コオー。

ジュッ、ジュッ、ジュポポポポー。

虫歯で崩壊したエナメル質が削り取られていく……。

早咲がハンドピースを元の位置に戻し、今度は低速タービンを持ち、バーチャージャーからラウンドバーを選び、先端に装着する。ふたたび早智の虫歯にタービンがあてがわれる。

キーン、キーンーン。

ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン、キーン。

コォー、コォォォー。ジュポポポー。

「ふうんっ、んんっ」

「大丈夫！ もうちょっとがまんしようねー」

「大丈夫よー。痛くないよー」

ラウンドバーは徐々に深さを増し、早智の右下7番の虫歯の軟化象牙質を除去し、大半が崩壊している天蓋が除去される。歯髄腔へ穿通した。虫歯の髄室が開拓される。虫歯菌によって侵された病的な歯髄が露わになる。早咲は、早智の右下7番の壊死組織を確実に除去していく。髄腔内の髄角も取り去る。

キーン、ウィーン、ウィーン。

キーン、キーン。

早智はあいかわらず不安そうな涙目をしていたが、痛みを感じないのか、おとなしく治療を受けている。

「そうよ。その調子よ、早智」

と早耶がバキュームとスリーウェイシリンジを操作しながら励ます。

早智の口からラウンドバーをつけた低速タービンが出され、ようやく低速タービンによる切削治療が終わった。早智の右下7番は大きな口を開け、根へと通じる歯髄が見えている。赤黒くあるいはどす黒く変色して、早智の歯髄は潰瘍性歯髄炎の炎症をとおりこし、歯髄壊死あるいは歯髄壊疽を起こしているようだ。壊死組織は湿潤を示している。そのほか食物片や崩壊した軟化象牙質片なども詰まっている。

“う～ん、これはひどいわね～。根管の象牙質も細菌感染してる可能性が高いわ……”

まず根管内の食物片や象牙質片をスプーンエキスカバーダーで掻き出す。次にクレンザーで抜髄を行うため、早咲は

「早耶、クレンザーをちょうだい」

と早耶に指示する。

「はい、姉さん」

「早智ちゃん、がんばってねー。もう少しで済むから」

と早咲は今度はクレンザーを手にした。感染により炎症を起こした病的な歯髄を取り除くためである。クレンザーが早智の右下7番の歯の根管に残っている虫歯に侵された壊死組織、感染歯質を絡め取り、除去していく。

グリグリ、グリグリ。

「あうっ、あつ、あ」

「ふうん、ふんふん、んんあ」

「はあい、はい、だいじょぶよー。もう少しがまんしようねー」

「ふん、ふん、あう」

「痛くない、痛くないよー。すぐ済むからねー」

早咲は、クレンザーで早智の歯の根管内の虫歯に侵された歯髄を絡め取ってはガーゼで拭き取り、さらに絡め取る。近心根、遠心根の順に根管治療を進めていく。

「早耶、ルートキャナルシリンジにネオクリーナーを入れて」

「はい」

早耶はさきほどと同じようにふたたび3～10%次亜塩素酸ナトリウム溶液であるネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジを用意し、早咲に手渡す。早咲はルートキャナルシリンジを受け取ると、早智の歯の根管内に慎重に注入し、根管の中を次亜塩素酸ナトリウム溶液で満たした。次にリーマーとK型ファイル、H型ファイルを使い、早智の歯の根管内に挿入して、根管壁の全周にわたりリーミングとファイリングを行う。感染歯質を完全に除去するためである。リーマーやファイルに早智の根管の切削片が付着する。まだ褐色に着色している。

“まだまだ、茶色に汚染されているわ。はやく白い切削片に変わらないかしら” 早咲はファイルを操作しながら、願った。

グリグリ、グリグリ。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。

早咲は早智の根管を容赦なく治療する。早智は不快感を感じて、声をあげる。

「ああん、んあ、ふうん、んんっ」

「早智、がんばってー、もう少しがまん、がまん。もうちょつとだよー」
早耶が励ます。

続いて早咲は、早耶が準備したネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジとオキシドールを入れたルートキャナルシリンジを交互に手にした。次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを使って交互に洗浄を行って、早智の歯の根管内の汚染物質を溶解して化学的に清掃する。

「はあ、はあ、んんっ、んんあ、はあ」

「はあーい、もう少しがまんしてね。がんばろー」早咲がルートキャナルシリンジを操作しながら、早智に声をかける。

「早耶、生理食塩水をちょうだい」

「はい、姉さん」と早耶から生理食塩水を渡された早咲は、早智の根管を洗浄しては点滴針で吸引を繰り返す。丹念に早智の歯の根管内を清掃して、感染した根管象牙質を徹底的に除去する。

「早耶、ブローチ綿花」

「姉さん、はい」

姉妹の呼吸のあったところをみせ、すでに用意してあった滅菌した綿栓を太めにブローチに巻きつけたものを、早耶は早咲に渡した。早咲はブローチ綿花を清掃液に浸し、早智の根管に挿入し、根管壁を清拭する。

さらに早咲は、ていねいに拡大形成と化学的清掃を処置された早智の歯の根管に、もう一度ブローチ綿花を挿入して根管を清潔に乾燥させる。

「ふん、ふん、ふうん、んあ、んんっ」

“く、くるしい……、おねえちゃん、くるしいよう。まだ終わらないの？”早智はうったえかけるような涙目で、姉2人を見るが、

「がんばってー、もう少しだよー」といわれ、いっこうにつらい治療が

終わる気配がない。

「早耶、ペーパーポイントをお願い」

早咲はブローチにペーパーポイントをつけ、フェノールカンフルの薬剤を塗布した。消毒薬であるフェノールカンフルが染みこませているペーパーポイントを早智の根管に挿入して貼薬し、さらに徹底的に根管内を消毒するためだ。

早智の根管の近心根、遠心根の順にフェノールカンフルが塗られたペーパーポイントが挿入された。

「ふん、んんっ」

「はい、大丈夫だよー」

次に早咲はピンセットで小綿球をつまんで、ペーパーポイントが入っている根管の上に置く。いよいよ仮封の段階まで来た。

「ううーん、ふうん、んんっ、んあ」

“お、おねえちゃん、くるしいよう……” 早智は治療されている歯の中に異物が入ってくる感じがした。さらに長時間ラバーダムによって口を閉じられない状態であるため、息苦しさを感している。

「早智、もう少しで済むからねー」 早智の様子に気づいた早耶が声をかける。

早咲は、シャーレから、加熱したストッパーの先でテンポラリーストッピングをくっつけ拾い上げた。続いてバーナーでテンポラリーストッピングを数秒間加熱する。それから早智の根管にストッピングを填入して圧接した。

「早智ちゃん、もう最後だよ。がまんしてねー」

次に早咲は、早耶から酸化亜鉛ユージノールセメントであるネオダインを受け取ると、ストッパーで早智の右下7番の歯に詰める。最後にグラスアイオノマーセメントを詰めて、二重に仮封した。ラバーダムが外され、排唾管も元に戻る。

「はい！ 今日これでおしまい！ 早智ちゃん、よくがんばったわねー。お疲れさま」

早咲が笑顔で声をかけながら、ユニットを起こしてくれた。

ようやく今日の治療が終わった。早智の顔は汗と唾液と涙にまみれ、ぐちゃぐちゃだ。早耶がタオルで早智の顔を拭いてくれる。早智はハンドタオルでしばらく口を押さえている。“痛かった……”

「早智、よくがんばったね、えらかったね」

「そうよ、早智ちゃん。早智ちゃんの虫歯はだいぶ深かったから、長い時間削らなきゃならなかったけど、よくがまんしたねー。えらいよー」

早智は姉2人のことばを聞き、麻酔で痺れたままの唇で、口をゆすぎながら、“ちゃんと歯磨きしてたら、こんな痛くて怖い思いしなかったのに……”と後悔していた。

「早智ちゃん、今日治療した歯は3本だけど、右上の2本のうち1本は削っている途中に神経が出ちゃったから、神経を保護するお薬を塗ってるの。それからいま治療した右下は虫歯が根まで進んでたから、死んじゃってた神経を取って、中にお薬を詰めたの。今日帰ってから、ひょっとすると痛み出すかもしれないから、念のために痛み止めのお薬と炎症を抑えるお薬を処方して置くわね。痛みがでたら痛み止めを飲んでね。それから炎症を抑える薬は、次の治療まで毎食後1錠ずつ飲むのよ。歯の治療、特に根の治療は体力が必要だから、栄養と休養を十分とって、よく眠ること。勉強やクラブが忙しいだろうけど、8時間はからだを横にしなきゃダメよ。わかった？」

早智はコクンと頷く。

「それから……、まだまだ、たくさん虫歯があるわねー。毎回1～2本ずつ治療していくわね。次回は、今日治療した右下の掃除から始めるわ。えーっと、次は……、早智ちゃん、金曜日の午前10時ね。必ず来るのよ、いい？」

早智は、次も今日みたいに痛い治療が続くかと思うと憂鬱だったが、仕方なしに首を縦に振り頷いた。

「早智、ホントにちゃんと通院して治療しなきゃダメだよ。でないと今日治療した右下は、抜かなくちゃならなくなるかもしれないよ」

“えっ！？ 抜くのは嫌！！ でも今日みたいに痛い治療もいやだなあ～。はぁ～” 憂鬱な気持ちになる。

「早智、エプロン外すねー」

早耶が早智の胸元の水色の歯科エプロンを外してくれる。早耶が整えてくれたスリッパを履き、スクールバッグを持ってよろよろと立ち上がった。

「早智、ちゃんと通ってね。さっき姉さんがいったこと、お母さんに電話しとくから」

「早智ちゃん、金曜日待ってるからね。ちゃんと来るのよ」

「お大事にね」

「うん」

早智は、姉2人に小さく返事をして会釈し、診察室のドアを開けて待合室に出ていった。

カチャッ。

早智が待合室に出てきた。早智は、目に涙を溜めて頬が赤く泣き腫れており、痛そうに頬を手で押さえている。疲れた仕草でソファーにこしかける。

くすん、くすん。

早智はハンドタオルで涙を拭きながら、すすり泣いている。その姿は、早智の今日の治療がいかに過酷なものであったかを物語っている。待合室で待っている他の患者は、これから自らに施されるであろう治療を想像して、同情と怖さの入り交じった目で早智の姿を見ている。

小学校2～3年くらいの女の子であろうか、早智を見て母親に聞いている。

「ねえ、ママ。あのお姉ちゃん、泣いてるよ」

その女の子の母親は、

「あのお姉ちゃんはねえ、瀬奈ちゃん。虫歯が痛くて歯医者さんに来たんだけど、その虫歯の治療が痛くて泣いてるのよ。瀬奈ちゃんも、わが

ままいわないうで、虫歯をちゃんと治さないと、あのお姉ちゃんみたいに泣くことになるのよ。わかった？」と小さな声で女の子に諭すようにいった。女の子は、母親におどされてちょっと怖いような顔をしている。次に治療の順番が来るからだ。

“ぐすん、そんなこといわなくたって……。恥ずかしい……” 早智は、恥ずかしさと悔しさが交ぜになった感情で、その母親の心ない言葉にじっと耐えていた。

「麻生さあーん、麻生早智ちゃあーん」

受付から早智を呼ぶ声がする。

早智が受付に行くと、さっき歯科ユニットで早咲にいわれた処方箋が渡された。

「この処方箋を調剤薬局に渡して、処方してもらってください」

受付の女性がいう。

「先生から説明があったと思いますけど、炎症止めの薬は必ず毎食後1錠飲んでくださいね。あと痛むときは、痛み止めの薬を飲んでください。それから痛み止めは1回飲んだら、次に飲む場合、6時間は間をあけてくださいね」

「はい」……

会計を済ませて、みどりヶ丘デンタルクリニックの外へ出た。ようやく今日の虫歯治療から解放された。しかし、早智には長年放置したままの虫歯が全部で15本もある。これからまだまだ続く虫歯治療のことを思うと、ただただ、気持ちが沈み、憂鬱になってくる。早智の目にジワッと涙が滲み、大きな涙の粒が浮かんでくる。

“泣くのは嫌！！ でも治療はもっと嫌！！ 毎日歯磨きするからっー！！ おねえちゃん、もう許してえー！！”

4日後。

早咲と早耶は、今日も早智の虫歯を治療している。

キューーン、キューーン、キュ、キュ、キューイイイーン。

コォー、コォォォー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポォー。

「ふん、ふん、んんっ、あっあっ、ふうん、んっ」

「イダァーイ、イダァーイ！！」

「イダァイヨォ〜、イダァイヨォ〜！！」

「はぁーい、早智ちゃん、もうちょっとがんばろうねー」

「早智、痛くない、痛くない、もうすぐ終わるよー。がんばろうねー」

早咲と早耶が励ますが、早智は続く切削の痛みにもた泣き出してしまった。

キューイ、キューイ、キューーーン。

「ふええええーん、えん、えん、ひはいつ！！ ひはいつ！！」

「早智、大丈夫だよー。もうちょっとがまんしようねー」

ふたたび早耶が励ますが、早智は泣きっぱなし……。 "うわぁぁーん、わん、わん、エッ、エッ。……ちゃんと歯磨きしてたら、こんな痛くて怖い思いしなかったのに……。ぐすん、くすん。私、歯医者さん行くたび泣いてる。高校生なのに……。ハズかしい……。ヒック、ヒック"

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	こんの ま い																
	氏名	近 野 舞 依																
	生年月日	1992 年 3 月 3 日生 (13歳)										性別	男・女					
	住所	電話番号																
	学校名	純姫女子学園中等部										学年	2 年		保護者名	近野 仁美		
	初診日	2005 年 4 月 27 日																
	終了日	年 月 日																
	再診予定																	
[主訴]その他摘要		学校歯科検診で多数のう蝕が見つかり、受診する。歯科恐怖症の患児。皓歯大学歯学部附属病院リラックス歯科外来を紹介。																

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	C2	/	C1	/	C1	C1	C1	C2	C1	C2	C2	C3	C2	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C3	C4"	C2	C2	C1	/	/	/	/	/	C1	C2	C2"	C2	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	P2	上外	2005/4/27		
5	C	上外	2005/5/16	2005/5/30	治癒
7	Pul	上外	2005/5/23		
6	Pul	上外	2005/5/30		
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

菌科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/4/27	6┐	二次う蝕切削。ヨードグリセリンにて消毒。仮封。
2005/4/28	6┐	本人は歯科治療に恐怖感があり、治療に慣れさせるため、 本日は本格的な治療は行っていない。明日治療再開予定。 本人、浸潤麻酔をいやがり、治療できず。 歯科恐怖症の原因となった治療について聞き出す。 皓歯大学歯学部附属病院のリラックス歯科外来を紹介。
2005/5/11		歯科恐怖症について原因となった治療のことを聞く。 全歯にわたる検診。レントゲン写真、口腔内写真撮影。 薬の適合検査、血圧測定。カウンセリング。 今後の治療方針、治療計画について説明。
2005/5/16	5┐	血圧、脈拍測定。異常なし。笑気麻酔。表面麻酔後、 浸潤麻酔を行おうとしたが、本人いやがり治療できず。 小児歯科外来の治療を見学。少し恥ずかしい様子。 これで歯科治療に慣れるといいのだが……。
2005/5/18	5┐	血圧、脈拍測定。異常なし。笑気麻酔および浸潤麻酔。 う蝕罹患象牙質切削後、ヨードグリセリンにて消毒。 歯髄に近接していたので、歯髄覆罩剤で仮封。 歯髄保護の状態がよく炎症なければ、次回印象取得予定。
2005/5/23	5┐	血圧、脈拍異常なし。笑気麻酔。仮封除去後印象取得。 ヨードグリセリンにて消毒後、歯髄覆罩剤で再度仮封。 次回インレーにて修復予定。
	7┐	浸潤麻酔後う蝕罹患象牙質切削。切削痛をうったえる。 再度笑気麻酔後、う窩を開拡し天蓋を一部除去した歯髄に 直接浸潤麻酔。暴れてしまったため、やむなくベルト拘束。 その後、再度う蝕罹患歯質切削後歯冠部抜髄。根管治療。 ヨードグリセリンにて消毒後、根管治療薬貼付。仮封。
2005/5/25	7┐	次回根管抜髄。根管治療予定。鎮痛剤および消炎剤処方。 前回治療後発熱。検温、血圧、脈拍測定。異常なし。 笑気麻酔および浸潤麻酔後、う蝕罹患歯質切削により、 再度う窩開拡。根管部抜髄。 ヨードグリセリンおよびホルマリントリクレゾールにて消毒。 根管治療薬貼付後、仮封。鎮痛剤および炎症消去剤処方。 次回、再度根管治療予定。
2005/5/27		本人、受診せず。5/30朝、自宅に電話。
2005/5/30		母親によると、かぜによる体調不良。 5/27に受診しなかったのは、歯科恐怖症によるもの。 リラックスして治療を受けもらえるように気遣う。
	5┐	血圧、脈拍異常なし。インレー修復。咬合調整。
	7┐	ヨードグリセリンおよびホルマリントリクレゾールで消毒。 根管治療薬貼付後、再仮封。次回根管治療予定。
	└6	笑気麻酔、浸潤麻酔後、う蝕罹患歯質および象牙質切削。 ペリオドン貼付後、仮封。鎮痛剤および炎症消去剤処方。 次回、抜髄および根管治療予定。
2005/6/3	7┐	血圧、脈拍異常なし。笑気麻酔。浸潤麻酔後、仮封除去。 仮封除去後、根管治療。根管口のロート状拡大。 根管長測定後、生理的食塩水、キャナルクリンで清掃。 根管治療薬貼付後、仮封。次回再根管治療予定。
	└6	浸潤麻酔後、仮封除去。う蝕罹患象牙質切削。 エンジンリーマにて歯冠部および根管部歯髄抜髄。 う窩開拡および根管口のロート状拡大。 ヨードグリセリンおよびホルマリントリクレゾールで消毒。

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	こみね いくこ														
	氏名	小 峰 育 子														
	生年月日	1991 年 9 月 22 日生 (13歳)										性別	男・女			
	住所	電話番号														
	学校名	みどりヶ丘中学校							学年	2 年		保護者名				
	初診日	2005 年 9 月 14 日														
	終了日	年 月 日														
	再診予定															
	[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。その後、夏休み終了までに歯科受診をせず、治療途中で放置したままの右下奥歯のう蝕が痛み出し、母親に連れられて来院。														

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	C2	○	C2	/	/	/	C2	C2	/	/	C1	/	○	C2		
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	C2	C3"	/	○	/	/	/	/	/	/	/	/	C1	C2	C2	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	Pul	上外	2005/9/14		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	おおうら れいな														
	氏名	大 浦 玲 奈														
	生年月日	1988 年 7 月 28 日生 (17歳)										性別	男・女			
	住所	電話番号														
	学校名	桜葉高校					学年	2 年		保護者名						
	初診日	2005 年 9 月 14 日														
	終了日	年 月 日														
	再診予定															
[主訴]その他摘要		学校歯科検診でう蝕が見つかる。その後、夏休みが終わるまでに歯科受診せず、学校から母親に電話され、母親に連れられて来院。														

術前 齒式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	C2	○	/	○	/	C2''	C2''	○	/	/	/	○	○	○		
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
E				D	C	B	A	A	B	C	D	E				
術後 齒式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	○	○	C1	/	/	/	/	/	/	/	/	C2	C3''	○		
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
E				D	C	B	A	A	B	C	D	E				
術後 齒式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
— — 6	Pul	上外	2005/9/14		
— —		上外			
— —		上外			
— —		上外			
— —		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	しみず りいさ														
	氏名	清 水 里依紗														
	生年月日	1991 年 10 月 18 日生 (13歳)										性別	男・女			
	住所	電話番号														
	学校名	みどりヶ丘中学校					学年	2 年		保護者名						
	初診日	2005 年 7 月 3 日														
	終了日	年 月 日														
	再診予定															
[主訴]その他摘要		テニスの朝練中、右下奥歯のう蝕が痛み出し、失神。救急車にて来院。														

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	／	○	C2	／	／	C1	C2	／	／	／	C2	／	／	○	C2	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C3	C2	／	C2	／	／	／	／	／	／	／	／	○	C2	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	単Pul	上外	2005/7/3		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	むらかわ さき														
	氏名	村 川 沙 紀														
	生年月日	1988 年 10 月 4 日生 (16歳)										性別	男・女			
	住所	電話番号														
	学校名	桜葉高校					学年	2 年		保護者名						
	初診日	2005 年 7 月 13 日														
	終了日	年 月 日														
	再診予定															
[主訴]その他摘要		オープンキャンパス見学中に、前夜インレーが離脱した左下奥歯の二次う蝕が痛み出し、本校校内診療室に来院。														

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		/	○	C2"	○	/	/	○	C2"	C2"	/	○	/	○	○	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/	○	C3"	○	
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
— — 6	単Pul	上外	2005/7/13		
— —		上外			
— —		上外			
— —		上外			
— —		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]

歯科診療録(児童・生徒用)

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	あそう さ ち														
	氏名	麻 生 早 智														
	生年月日	1988 年 6 月 17 日生 (17歳)										性別	男・女			
	住所	電話番号														
	学校名	桜葉高校					学年	2 年		保護者名						
	初診日	2005 年 8 月 1 日														
	終了日	年 月 日														
	再診予定															
	[主訴]その他摘要	学校歯科検診でう蝕が見つかる。多数歯にわたってう蝕があり、染みたり、痛んだりしている。姉に連れられて来院。														

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		○	C3"	C2	/	/	C2"	C2"	C2"	C1	○	/	○	C2		
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C4	C2"	○	C2	C1	/	/	/	/	○	C2"	C2"	C2		
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右 下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	上 左 下		
				E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6,5	C	上外	2005/8/1		
7	壊Pul	上外	2005/8/1		
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録(児童・生徒用)統一様式

[illegible]